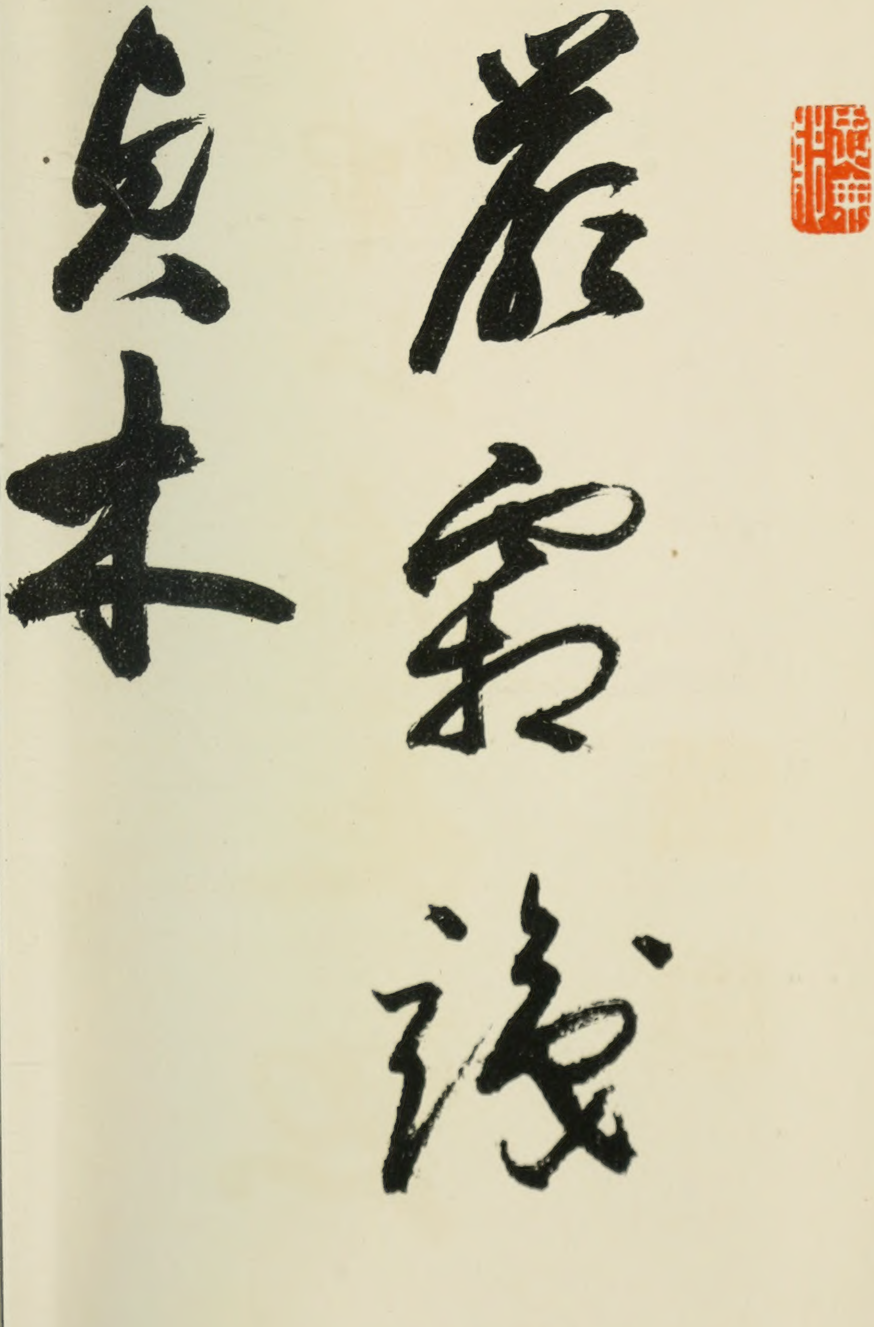
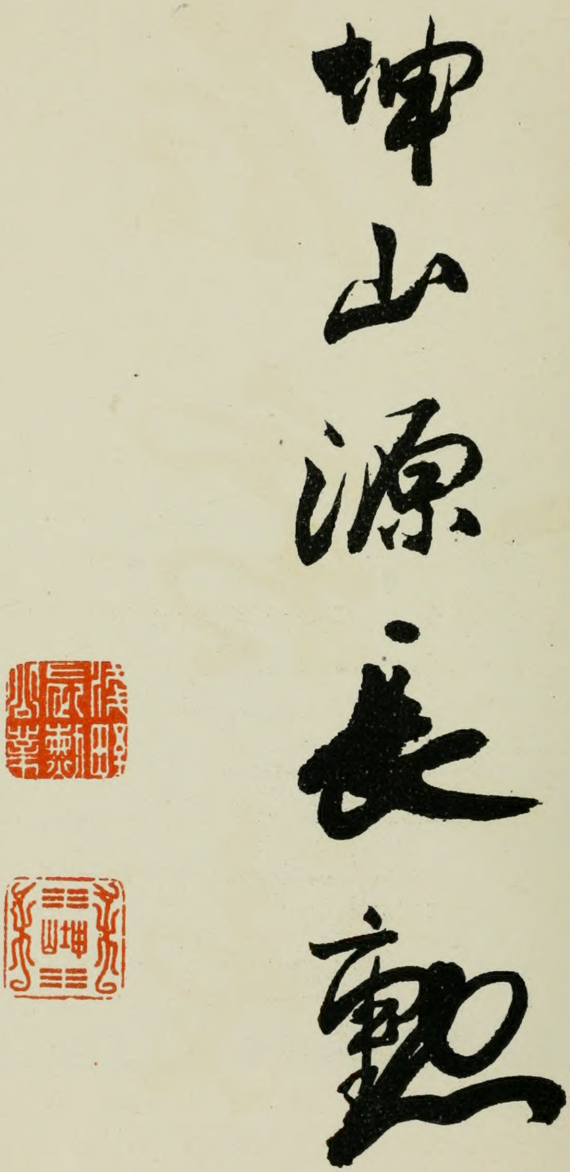




松平春嶽全集

徳川義親書

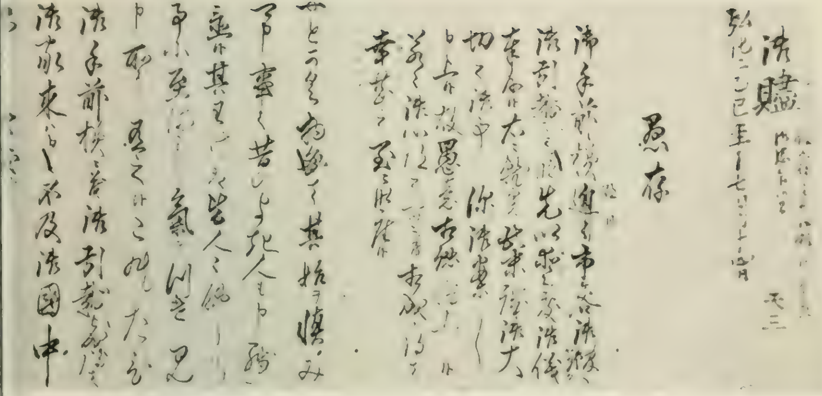


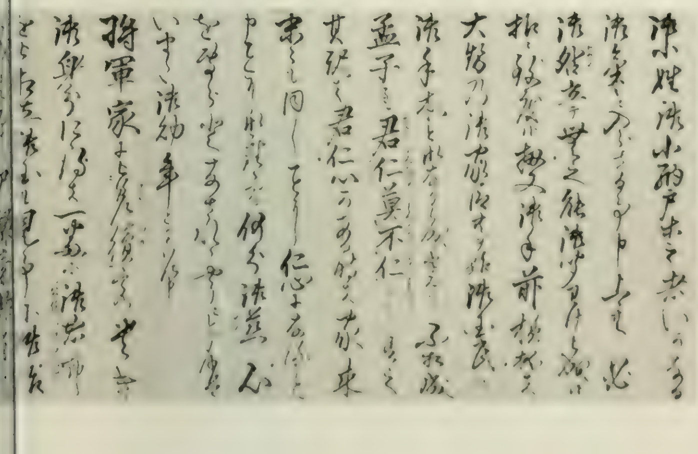

坤山源長



侯爵松平家所藏

慶永公御肖像（波々伯部金洲筆）





慶永公より鑑丸様（[illegible]）書簡（[illegible]）
（春嶽公記念文庫所蔵　解説は解題[illegible]）

亀様ニ御仁心ニ被為在候御行
候ハ此件ニ被為在候 御讃ニ 御
手習抔 此節ハ入らぬ事ニ
当月ニ付 何程ニ而ハ出府候て
余程御大切ニ御座候ニ付
右故御出家ニ被為在候
御養父母様ニも 御方々様ニも
御尊前ニ通ニ 御大切ニ被遊候ニ
在之候
御養父様ニハ 御案事 御
成られ 内ニ 御頼候得共
列ニ御居中 様ニ 少し 御笑
成ハ振ニ申候而 此方ハ 御 満
不為ハ 御在世ニ 御中ニ 成候
目 振ニ 御 様
成ハ 振ニ在候ハ 又御家老ニ 様
重ニ 御役人
此世
在之 兎角 御為ニ
御末ニ

信ニ云 佐如ニ人ニ
御存ニ
将軍家ゟ 御高位 御高禄ヲ
御拝領被成候も 只御為ニ
御安楽ニ被成 振ニ
思召 御本家 御機嫌ニ
不為 此中 御心 御為遣
思召 御 御為
御以 御讃 御 御出精
成 御 御 御勤 七
御励ニ成 御 御 御
不顧 御 御 御

謹言

松平義敬（花押）

徳川総丸様

凡例

一この冊には、既刊第二冊に引きつゞき、公の日錄合同船入相秘記六冊の中、その殘りの第五第六兩卷二冊と、政事日錄一冊、政暇日錄十一冊の中第十冊までの全部と第十一冊の前半とを收載せり。

一合同船入相秘記、政事日錄、政暇日錄いづれも、公の自筆に係る。今之を謄寫して、この冊の底本となし、用字その他、總べて原本の舊に依れり。たゞ、政暇日錄日常の記事中、事の簡にして句の單なる例へは何稽古、何時歸宅の類にして、而かも各別行をなせるものは、之を連續一行となせり。印刷上の都合によれるなり。

一政暇日錄には幕府の觸書、諸家往復の書狀、其の他家老提出の用狀の類、多くは其の原本のまゝ、之を其の日の條下に疊重貼付せられたり。今印刷に當り、敢て次序を改めず、唯文書の右肩に（　）を以て其の種類を註し、且つ――線――線を以て、文書並に事項相互間の區別を明かにして、閱讀の便となせり。其の他全文の句讀、鼇頭の註記も亦編者の加ふるところ、及び卷末の索引是

一　また編者の作成に係る、すべて既刊の冊に同じ。

一　巻頭の題字は、昭和十一年晩冬舊廣島藩主淺野長勳公が特にこの全集のために揮毫賜賚に係り、而して翌早春遽薨去、圖らずも公の絶筆となりたるものなり。今この由をここに記して永く之を記念せんとす。

一　この冊の背文字は、公の男子爵慶民様、見返しの繪畫は公の女公爵夫人二條千代子様の各染筆に係れること既刊の冊に同じく、而して扉の文字は公の末男侯爵徳川義親様の揮毫なり。

一　原稿の謄寫は糟谷季之助氏之を擔當し、印刷に關しては三秀舎員倉澤由男氏之を斡旋せり。其の他編次校訂、すべて既刊の冊に同じきを以て略す。

昭和十七年八月

蘆田伊人識

松平春嶽全集第三卷總目次

松平春嶽全集第三巻細目

細目

細目

細目

細目

在國 政暇日記（圖版）……[illegible]

政暇日記……六四三

細目終

收載圖版及書目解題

○慶永公より御弟鎰丸樣への御聽

この御聽の書翰は、慶永公が弘化二年七月十四日、卽ち御弟鎰丸樣が尾張德川家の御養子として、江戶市ヶ谷の御館へ御引き移りの前日執筆せられたるものにして、政暇日錄が其の御引越の當日卽ち七月十五日より起筆せられたるに對し、頗る關係の淺からざることを思ひ、特にこの冊の卷頭に揭載せり。

田安系譜によれば、鎰丸樣は齊匡卿の御末男として天保七年六月十五日御誕生、御生母は木村氏れい子、慶永公と御同樣なり。弘化二年三月二十五日尾張大納言齊莊公へ御養子のことと仰せ出され、四月二十三日御式擧行、卽日田安家に御披きありて、六月二十一日齊莊公の御逝去により七月十五日御引き移りとなりたるものなり。八月二十六日遺領御拜領、十二月十五日元服、慶臧と御改名、從三位權中將にならせられて、嘉永元年十二月四日權中納言、翌二年五月七日御逝去なり。

この御聽の原本は、今德川侯爵家に傳らすといへども、其の寫本は當時巳に

江戸の坊間に傳はり、弘化三年頃の編纂と思はるゝ「福井侯行實」といへる小冊子に其の全文が載せられ、其の後福井侯行實は「松のさかへ」といへる嘉言善行を集輯せる五卷の書中にも採收せられたり。而して「松のさかへ」は明治四十四年國書刊行會の史籍雜纂の中に收められ活字本となりて初めて刊行せられたり。

この冊に揭載せるものは、春嶽公記念文庫の所藏にして慶永公の自筆に係り、恐く鎰丸様に贈與せられたるものの控書きならん。（奉書半切五尺二寸卽ち左の如し。

（封裏書）

「御鑑　鎰丸様尾州御館へ御引越之節
御忠告御書
弘化二乙巳年七月十四日」

愚存

御手前様、明日市ヶ谷御館へ御引越之段、先以愛度御儀奉存候。右ニ就ても、此末誠ニ御大切之御事と、深ク御案し申上候故、愚意相認指上候。若々御心

得之一ツニ而相成候得ハ、幸甚之至ニ御座候。
とかく物毎ハ、其始ヲ愼み可申事与、昔のよき人も申殘し置候。其ゟけれ、皆人
々、聊乃事ニ至迄も、氣ヲ川き見申所ゟ有之候。これたも御手前樣ニ而御引
越被成候得ハ、御家來ハ申ニ不及、御國中末々迄も、此度此
殿樣ハ御仁心（アハレミ）被爲在候哉。御行儀ハ如何被爲在候哉。御讀書御手習抔も御
精入られ候事哉と、皆目を付ケ伺居候事に御座候得ハ、餘程御大切之御事与奉
存候。

右故御養家へ御出なされ候るハ、
御養父母樣を初、御方々樣へも、御實方之通りに御大切ニ被成候やうに存上候。
又御實々ハ、
御養父樣ニハ、最早御かく經被成候やう、内々承知仕候得ハ、別る御忌中抔ニハ、
少しも御ちハき又ハ大きなる御聲ニる、御笑被成候樣之事有之候るハ、御濟不
被成、御在世ニ御事へ被成候ゟ同し樣ニ思召、よく／＼御愼被成候樣ニ存上候。
又御家老ヲ始、重キ御役人之申上候事を、よく御聞分被成、其上御敬（ウヤマ）ひ被成候や
うに存上候。兎かく御爲を申上候得ハ、御氣ニ入らぬ事多き物ニ候間、御小姓

御小納戸等之者、いふなる御氣ニ入らさる事申上候共、必御咎（トガメ）立て無之、能御聞わけ被成候樣ニ致度候。扨又御手前樣抔ニ、大勢ゐる御家臣共ヲ始、御國民ゐ御手本と御なり被成候半ゐを不相成、孟子ニも、君仁莫不仁（きみじんなればじんならざることなし）と有之、其譯を君仁心のある時を、家來末々も同しことす仁心まなるものと申ます御座候間、何分御慈心を專らせなされ候やうニと存上候。いまた御幼年とを年中、將軍家ま被差續（サシツヾカ）候て乃貴き御身分にい得を、一番ま御忠節（公儀ヘノ御コヽロザシ）を被相立、御國土民事ま御治被成候半るを、尸位素餐（シイソロク）（クライニスハリテオルバカリ　チギヤウヲムダニトル）と申て、俗ま云位ぬす人と申ものま御座候。されを、

將軍家ゟ御高位御高祿ヲ御拜領被成候も、只御身分之御安樂ニ被成候樣ニとの事ニゐを無之、御國民御撫育（フイク）（ナデソダテル）被成候やうまとゐ御事なれを、必御心得違無之よく〳〵御愼被成、御幼年とゐ、只今ゟ此御志御大事ニ候間、猶以御讀書御手習も御出精被成、追々御武道之御稽古、御勵ミ被成候樣奉懇願（コンガン）候。誠不顧憚、愚意申述候迄ニ御座候。

諫書

松平越前守

慶永（花押）

七月十四日

德川鎰丸樣

○合同舶入相秘記　二冊

この書のことは、既刊第二冊に解題せるが如く、六卷六冊の中、前冊には四卷までの四冊を收め、この冊には殘りの五・六の二卷二冊を收めたり。而して、この兩冊とも題簽には合同舶入相秘記とありて內題は之を異にせり。今目次其の他には、すべて題簽に從へり。又、本書の異本によれば其の第六卷の終に、公が幕府に提出せられたる御直書の外風說書の類、數種を附收せるが、これ等の御直書類は、皆前冊の建白書類中に收載せられ、且つ、この冊の底本となせる公の自筆本には、之を附せざるを以て、この冊も亦之を省略せり。

○政事日錄　一冊

この書は、公の御弟鎰丸樣が、尾張家へ御養子として、弘化二年七月十五日江

戸市ヶ谷の御館に御引き移りの日より筆を起され、同二十二日御實兄大納言徳川斉荘公の薨去を以て擱筆せられたり。蓋、政暇日錄最初の稿本なるが、乃ち收めて政暇日錄の前に置き、參考に供す。この書、茶表紙、黒十一行の罫紙を用ひ、公の自筆に係り、春嶽公記念文庫の藏本なり。

○政暇日記　十一册

この書は、慶永公が弘化二年七月より四年二月に至る約一ヶ年八ヶ月間の在府・在國中の日錄にして、政暇とは、公が國政燮理の餘暇を以て筆錄せられたるが故の義なるべし。日々起床就寢の時刻より、側近諸員の出入、式日に於ける登城參詣、並に諸家の訪問、諸役諸職の轉補黜陟及び側用人等の奉答進言より幕府の觸達・用狀の類に至るまで凡そ其の日に係れるものは悉く其の日の條下に之を收載して頗る詳細なり。高野半右衛門・成島桓之助・松波備次郎・中村政右衛門・高島甚五左衛門・市橋萬右衛門等の講書練武、中根靱負・淺井八百里・鈴木主稅等の啓沃補導のことより、田安齊匡卿への御孝養の厚き、尾張鋒丸樣への御友愛の深きことなど、又は將軍家より就國暇の上使、奉書の到着、並に拜

領鶴の料理等その規式の嚴肅なる、其の他、御金藏より拜借金の次第、暴風雨被害の早急御處置のことなど注目すべき記事の少なからざるは、蓋し後の備忘として特に詳記せられたるなるべし、

この書十一冊裝釘用紙共に不同なるのみならず其の題簽も亦異同あり、卽ち左の如し。

一	假留政暇日錄	自弘化二年七月十五日 至同八月二十八日	茶表紙 黑罫紙
二	假留政暇日錄	自弘化二年八月二十九日 至同十月二十九日	半紙假表紙 半紙
三	在府假留政暇日錄	自弘化二年十一月朔日 至同十一月廿五日	同 同
四	政暇日記	自弘化三年正月一日 至同二月十八日	同 同
五	政暇日記	自弘化三年二月十九日 至同四月廿六日	同 同
六	在國政暇日錄	自弘化三年五月十二日 至同閏五月七日	茶表紙 黑罫紙
七	在國政暇日錄	自弘化三年閏五月八日 至閏五月二十八日	同 同
八	在國政暇日記	自弘化三年閏五月廿九日 至同年六月十六日	同 同
九	在邦政暇日記	自弘化三年六月十六日 至同月晦日	半紙假表紙 半紙

冊	書名	年代			合本
十	在邦政暇日記	自弘化三年七月朔日 至同八月十八日	同	同	合本
	政暇日記	自弘化三年九月朔日 至同月晦日	同	同	
十一	政暇日記	自弘化三年十月朔日 至同月十七日	同	同	合本
	在邦政暇日記	自弘化三年十一月一日 至同月十六日	同	同	
	愼獨齋政暇日記	自弘化三年十二月一日 至同十七日	同	同	
	在邦政暇日錄	自弘化四年正月一日 至同晦日	同	同	
	政暇日錄	自弘化四年二月一日 至同月六日	同	同	

而して、この冊には第十一冊の中弘化三年十月までの分を收載せり。

解題 終

合同戰艦碇泊金川洋面機密記卷之五

醜虜碇泊正爲厄士氣凌彼可

棄醜

廟廷一心關安危即今李世豈

無策

合同戰艦碇泊金川洋面機密記卷之五 印

醜虜碇泊正爲厄、　士氣凌彼可奪魄、

廟廷一心關安危、　卽今季世豈無策、

印　印

二月二十一日

嘉永七年甲寅春二月廿一日、卽西洋中興紀元一千八百五十四年第三月第十九日、北亞米利幹共和政治州獨立建國以來七十九年

慶永公再び品川御持場を巡視せらる

六ツ時過目覺ニ而、五ツ時供揃ニ而、品川持場へ巡見として罷越。我等之裝束、供之者裝束、都而五日之通り、乘馬村雲

道筋

道筋左之通り

表門ゟ土手通り數寄屋橋御門、八官町通り土橋二羽町溝口主膳正屋敷脇前、柳生但馬守屋敷前脇右へ、宇田川町新道通り、神明町、七軒町、增上寺表門前、片門前町、將監橋松平薩摩守屋敷脇裏、松平裕之進屋敷脇田町壹丁目ゟ、本通り御殿山警衛場。

歸り道筋

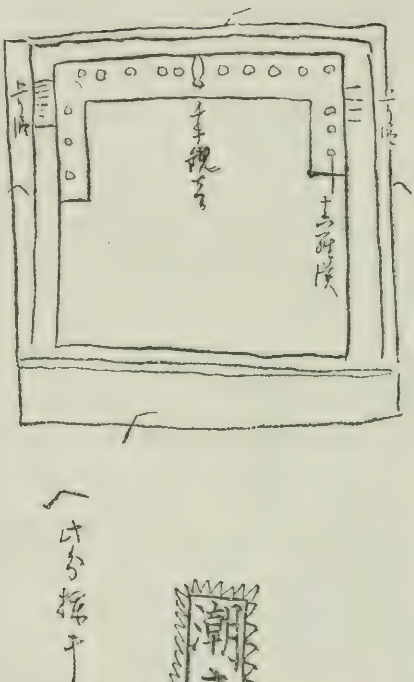
御殿山より二本榎通り、細川越中守中屋敷、伊皿子町聖坂右へ、三田三丁目左へ、赤羽根橋、飯倉丁二丁目、御掃除屋敷切通し青松寺前、愛宕下ゟ新橋南部美濃守屋敷前脇通り、松平肥前守屋敷前脇日比谷御門、松平相模守屋敷脇前大名小路、細川越中守屋敷脇裏、道三橋西門。

出淵傳之

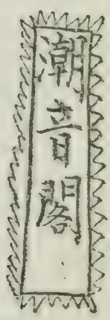
例之通り、品川宿境迄目付出淵傳之丞出迎。夫より宿通り左へ、此所三郎兵衛、

丞山縣三郎兵衛等の出迎
炮臺を巡閲す
東海寺を巡覽
潮音閣

山城、靭負、十之丞、平學、六大夫、十郎兵衛出迎、下馬いさし幕内へ入る。五日ミ節ミ通り。毛受傳三郎始メ罷出、夫ゟ傳三郎致案内、十一ヶ所炮臺悉く巡閲、先日出來ミ護胸壁も一見相濟、御殿山へ登る。夫ゟ東海寺内江下ル。山門へ上る、圖左ミ通り。



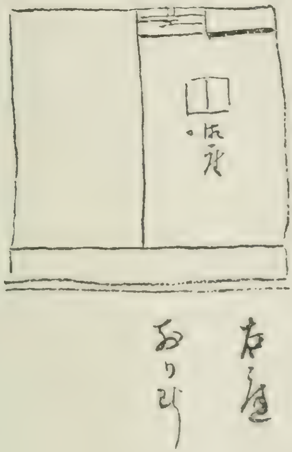
眺望を境内而已こる他所不見。此山門を所謂潮音閣、日光宮公辨法親王眞筆、元祿度火災こ係り、直こ　公儀普請こる成功。



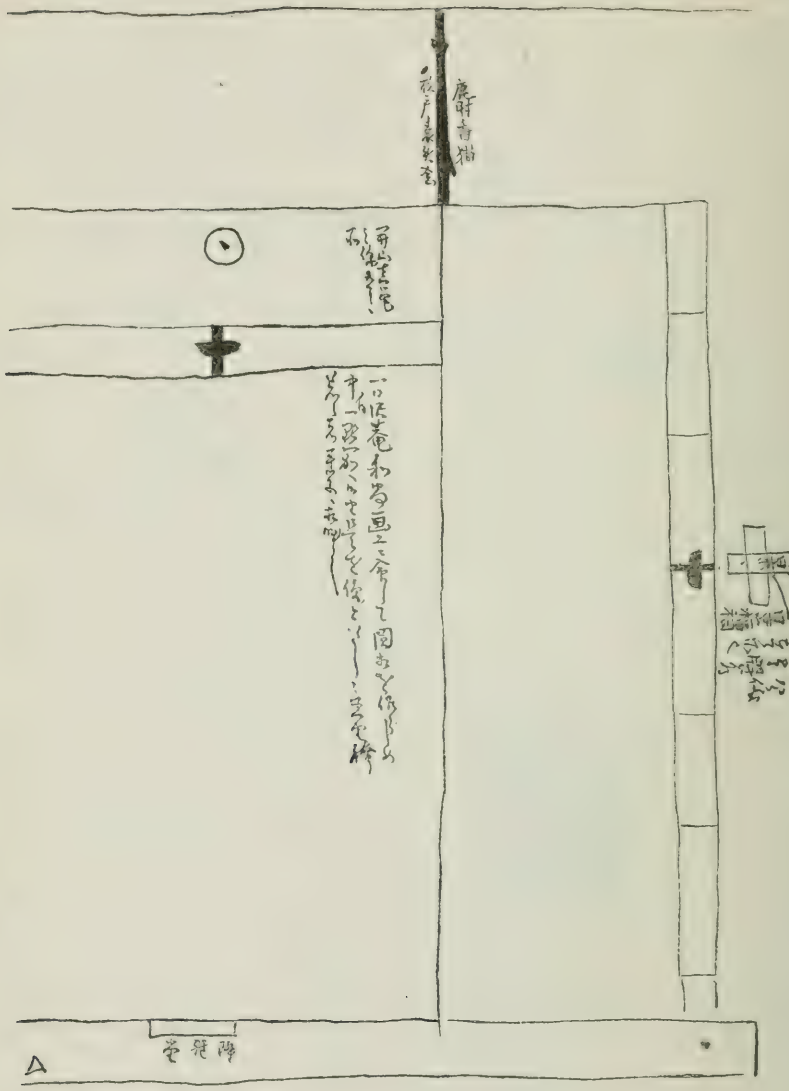
家光手植の杉

夫ゟ本堂へ向ひ、左こ杉林あり這そやし杉ゟ柵をふる。三代

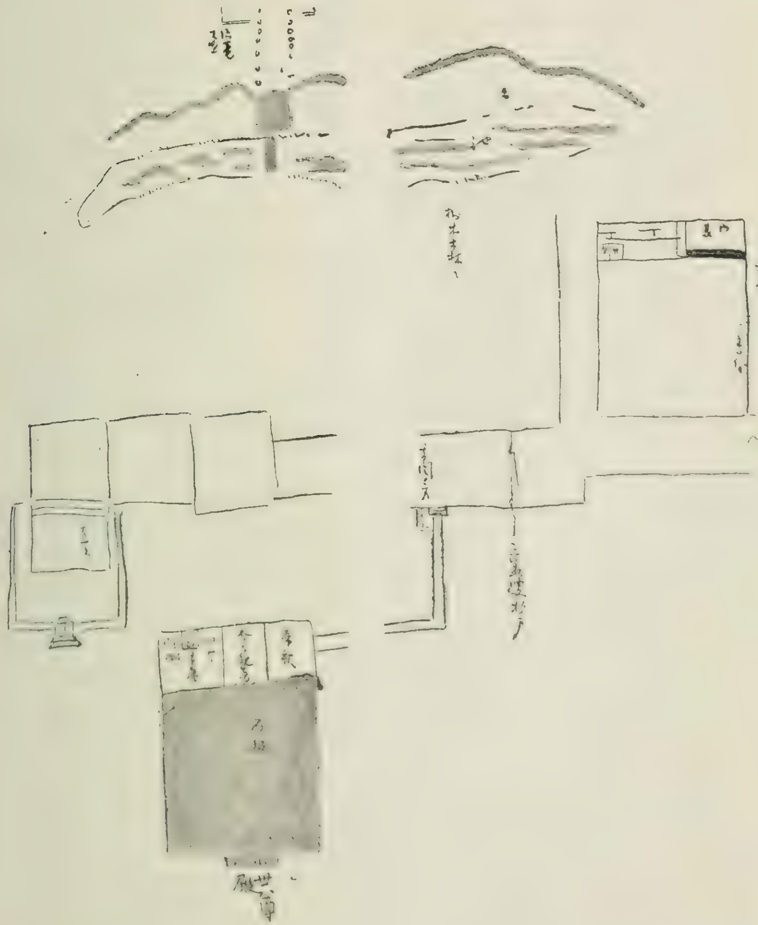
將軍家御手植之由。夫ゟ本坊致一覽、先玄關へ入る。袴着之者平本平學へ先立案內、御成之間次ノ間へ通る。茶多葉粉盆、干菓子差出。此東海寺、間每之畫工ハ探幽之趣、此間竹ニ鶴、夫ゟ御成之間へ參ル。床加茂之競馬張付、違棚小襖畫失念、相濟本堂邊一覽



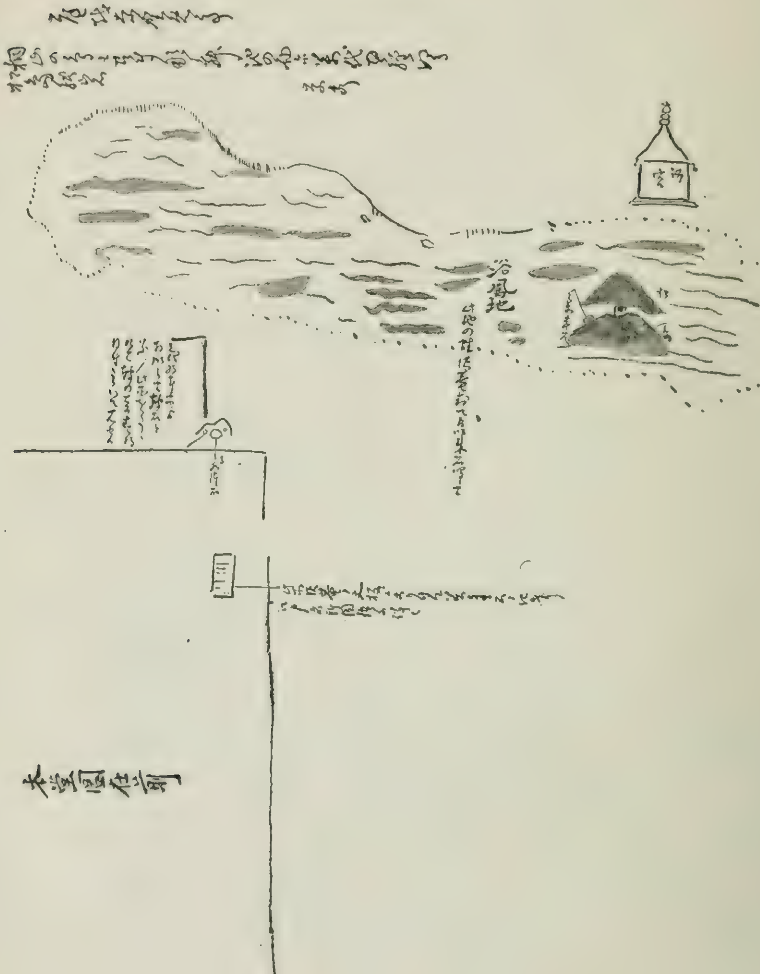
夫ゟ本堂へ向ひ左之方小間一覽、床　內裏、左小襖大佛三十三間堂、右小襖二條御城、何レも探幽筆之由。



東海寺本堂の圖



東海寺本堂より眺望の圖



天龍寺に小休

夫ゟ寺中ノ橋を渡り、天龍寺へ小休。方丈目見有之、兵粮給へ候、諸事左之通り。

本堂ゟ庭を見る圖左之通り

乘馬にて渡場邊視察

午飯相濟、供勢相殘、尤道具も不參、乘馬ニて渡場邊迄罷越（中ノ和中徹ゟ十八丁程有之夫ゟ引返し）

供之者左之通り

手馬　家老　猪山城
同　側用人　中根靱負
櫻山　用人　酒井十之丞
松島　側締役　平本平學
岸波　側向頭取　本多十郎兵衛
千歲　供頭　近藤左大夫
最上　小姓頭取　堀蓮之助
深見　近習番頭取　青木七郎右衛門
松風　小姓　大谷孫大夫
五戸　同　小栗五郎大夫

磐井　近習番　猪子善十郎
鳥谷ケ崎　馬方　町田左工馬

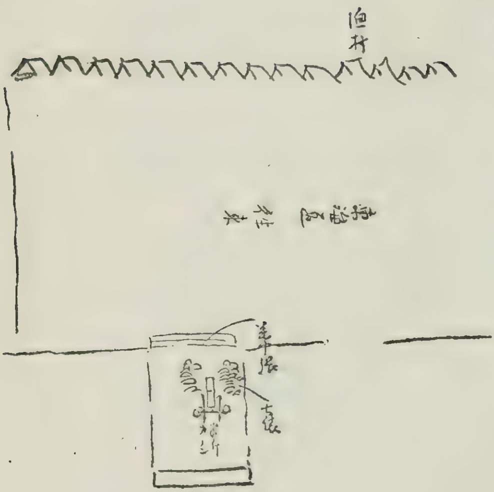
我等を合セ〆十三人

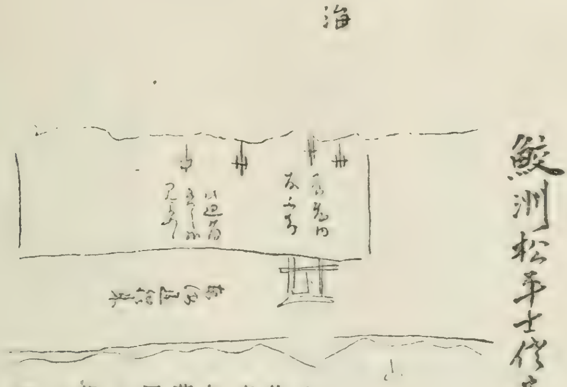
召馬　村雲

夫ゟ引戻し、往來裏通り再天龍寺へ罷越尤乘切何レも野羽織股引半天

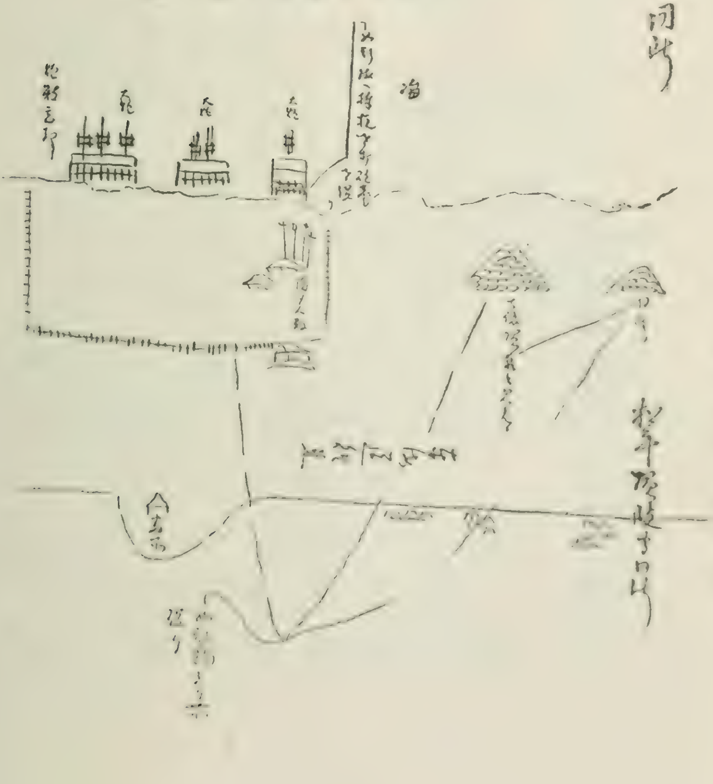
間部下總守固メ場圖如左

越前鯖江藩固メ場の圖





土佐高知藩固メ場の圖



仙臺公山崎固メ場ノ圖

諸士に菓子を賜ふ

巡見裝束ニ衣替、出張の家老始ゟ物頭迄呼出、菓子一箱ツヽ遣ス。　夫ゟ、天龍寺脇通り東海寺横手まて乘馬、歸途道筋の通り、黃昏歸館（今日御殿山出張面々へ汁遣ス）

二月二十二日

〇廿二日　西曆三月廿日

鈴木主税提出の極密書

今夜鈴木主税ゟ指出ス

極密

石炭食糧薪水の件

一五ヶ年の間、長崎ニおゐて石炭食糧薪水等望の品ハあたへ候由。　又五ヶ年後ニ至り、港を開キ交易等致候事ハ、それハ其時の模樣ニより相定メ候段彼へ申聞候處、彼承知いたし候樣子ニ御座候。　又願の內港を吟味致置度候ハヽ、其儀は勝手次第、伊豆なり越後なり吟味致候儀相ゆるし候由。

開港場の件

代金の件

一彼申候ニハ、石炭被下切ニるは御貰ひ申かたく候間、何そ替を指上度と申候ニ付、左候ハヽ他の物を入用無之候間、金銀錢を指上候樣申聞候由。

右の儀は、此度應接方の極意と奉存候。　先只今の處ハ右の次第ニる相濟候樣子ニ御座候。

十九日朝認

米國我を恫愒す

應接方の組頭等下田に出張

一今十九日、應接場ニおゐて應接有之候。

一彼兼而申候ニハ、相分り候事なれハ、一日も早く相分り候様致度と申候、左候へハ一艘歸帆爲致度と申候。　左もなく候へハ、追々國元ゟ軍艦指向候筈ニ候間、其先ニ申越度与申候由。

右之義ハ實事ニ候哉、おとしニ候哉、相分り不申候。

一十九日應接有之候處、落合不宜、二時計りもかゝり相濟候。　右ニ付明廿一日、應接方ニ而組頭黒川、外ニ御徒目付、浦賀與力、伊豆之下田へ出張致候筈。彼よりハフカナン軍艦二艘ニ而下田へ罷越候筈。　夫故下田ニ而も當月一杯ハかゝり候沙汰ニ御座候。　委細之儀ハ明日迄ニハ相分り候と奉存候間、明日も御人御遣し被下候様致度奉存候。

一此間之献上物品、先便申上候より大分間違有之候ニ付、追而相正し申度候間、左様御承知可被下候。

一十九日異人ゟ御饗應ハ、餘程御丁寧之御様子ニ御座候。

廿日認

川越侯よりの報告
城ヶ崎沖合の異國船

誠丸ゟ爲知左之通り
昨廿日辰ノ中刻、異國船壹艘城ヶ崎沖合ニ相見へ候ニ付、注進有之候旨、浦賀奉行より達有之候。尤達以前、同樣異船相見へ候趣申出候ニ付、早速物見船指出候段、大津陣屋詰家來之者ゟ申越候。此段致御屆候。以上

二月廿一日　松平誠丸

異國船は運送船か

今朝致御屆候城ヶ崎沖合ニ相見候異國船壹艘、追々乘入猿嶋手前へ碇を卸候ニ付、番船指出候樣昨廿日浦賀奉行ゟ達有之候。且又、右異船之儀ハ、亞墨利加類船有之、餘り大船ニも無之、大炮も四挺程有之、多分運送之船ニも可有之哉之旨、大津陣屋詰家來之者ゟ申越候。此段致御屆候。以上

二月廿一日　松平誠丸

佐久間象山の來訪
中根雪江面談

今朝眞田信濃守家來佐久間修理罷出、靱負へ致面談度段申立候ニ付、靱負逢候所、左之通り申述之
主人信濃守(眞田幸貫)應接場爲御固メ、本牧横濱被仰付、則人數も指出置候。私も出張

象山の伊豆下田要害論

罷在、彼方ニ而風説同様の趣承候處、異國船二艘下田港迄罷越候哉の義ニ御座候。　定而交易場ヵ、石炭渡場兩様の內と奉存候。　下田の義ハ、日本極々の切所ニて、萬一彼か有と相成候而は、實ニ不相濟と切歯横胸の事ニ付、福富表ゟ早速罷歸、其段愚衷の趣主人へも申達、役人共へも種々申達候へ共、更ニ取用無之處、先修理存丈ケは何方へ申候而も、宜旨許有之候ニ付、早速昨日堀織部御目付兼る懇意之由方へ罷越候處、修理存込候義は誠ニ尤至極の儀ニは有之候得共、何分變

廟議候義は至重の事ニ而、六ヶ敷との織部返答の由。　夫ゟ藤田誠之進へ罷越申候處、誠之進ニは聞受も宜、尤の存ニ付、前中納言殿へ申達候半との事、誠ニ實ニ寢食を不安、昨夜も終夜默座いたし居候ニ付、又々今日御屋形へ罷出愚衷申上度段申立、左の通り

下田沖の義は極々の切所ニ而、彼所へ交易場か、又石炭御渡場等有之候而は不相濟地勢の趣。　其趣意ハ、下田港の儀ハ前後左右皆山ニ而迚も岡ゟ臺銃（搬）般送六ヶ敷土地柄の由。　夫ゆへ一旦彼か有と相成候ハヽ、陸ゟの攻撃ハ難相叶、又海上ゟ攻撃いたし候ハんと存候而も、大艦無之、加之下田港の義ハ、彼

下田はアフリカの喜望峰の如し

橫濱を以て石炭置場となすべし

野村淵藏の報告

亞弗利加英夷所領喜望峰の如く、七十五里遠州灘を走セて、一旦下田港へ罷越不申候半ゐそ、日本船迷惑いさし候趣。是迄も下田港まて、日本各國船運上を取候由。然ルニ夷奴ゝ所領ニ相成候て、矢張運上をとり候へハ、爲夫ニ、日本船甚迷惑、旁以

幕朝御爲ニ不可然、又江戸へ參らんとそれ婆、一日を費さすして迅速ニ走込申候半、江戸の人も眼前ニ船見へ不申候ゆへ、自ら怠慢ニ流れ申、へくハ必然ゝ勢と奉存候。夫よりハ當時應接場ニ相成居候橫濱、屆竟ゝ土地ニて、そこを石炭置場ニなりとも、何なりとも被仰付候ハヽ可宜、其見込ハ江戸の人眼前ニ外患を見候事ゆへ、片時も油斷不致義、左それも士氣振々、彼越王勾踐ノ嘗膽同樣まて、夷船を以テ膽といさし度、橫濱ニ候ハヽ陸海ともま攻擊相叶、彼ニゐも油斷不相成、同し事乍、下田ニてハ却ゐ怠慢ニ流れ可申とゝ事。依之、何卒御家柄与申、權家ニ御續柄も被爲在候事ゆへ、御周旋被下候樣ことの事ニ。靭負其段申達之。

右ニ付伊勢守へゝ返書草稿認ム。

野村淵藏夕方罷出、中根靭負ニ逢申述候處如左、

極々内々今朝其筋へ聞調へ、眞實之事承込候故奉申上候、尤此義漏泄仕候而ハ、漏泄仕候人ニ相違無事
公儀へ相知レ申候間、乍恐其心得ニて奉願候事。

米國松前を要求す

一十九日之應接ハ、極々六ヶ敷事ニて、松前を被下候、石炭御渡場ニ被仰付被下候樣夷人ゟ相願候處、林・井戸兩人、夫ハ不相成と申候由。其節彼ゟ左樣ニ候ハヽ、無止事候間、兵端相開可申と申候に言葉詰り候而、尚又江戸表へ伺ニいたし候間、來ル廿六日迄延引之儀申聞候處、夷人も致承知候。左候ハヽ廿六日迄ニ江戸へ伺ひ、廿六日可及應接段彼ゟ申立候由。
伊豆國下田之儀ハ如何ニ候哉、江戸表伺中延氣旁罷越候而も宜抔申候由
夫ゆへ蒸氣船軍船二艘ニて下田へ罷越候事。

井戸林兩人江戸に出發

井戸對馬守、林大學頭兩人、去ル廿日江戸表ゟ爲伺、加奈川表出立いたし候事。

狛山城の報告

水兵上陸の事情

山城申聞候ハ、先日夷奴一人川越表迄罷越候ハ、彼理アーダームス不知ノカナン船中之人ニて、繪圖書之趣、右ニ付フガナン指圖いたし候而、云々ニ爲致候由。
夫故、追々夷奴一人（舟中第一之早足の由）江戸表へ罷越候と、直ニ浦賀奉行ゟ彼理舟ニ有之事及掛合候處、ヘルリ又アヽダームス兩人甚相驚き候而、書付を我役人へ遣

狛山城の咄

井戸對馬守家來墨夷の目鏡を奪はんとす

藤田與一

し、夷人へ爲見候處、面色如土相成候て立戻り候由。右夷奴、もとの「フカナン」舟中へ歸度と頻ニ申立候由。ヘルリ又アータームス二人日本へ無禮之事相怒、嚴科ニ可處心得之處、內實ハフカナン指圖いたし候事故、舟中內亂有之候由。且又下田港迄罷越候舟へ者、フカナン附添參り候趣。仝ク、ヘルリ、アータームス二人之取計ニも可有之旨、フカナンハ別る勇猛ニて、事を好ミ居候由。戰爭好居、夫故ヘルリ、アータームス抔之意ニハ相違候由。極密當路之向ゟ承候段申聞候。

又先日井戸對馬(覺弘)守家來不心得之人有之候由。舟中まて夷人目鏡の結構なるを爲見候處、貰度旨頻ニ手眞似まて申候由。夫故夷奴、これハ私の命ニあへてもさし上られ不申と申候由。何分ニも貰度、替りを遣し可申抔申、夷奴之役前此眼鏡無之候半るを難相成との事、無理ま夷奴を蹴飛し取上ケ候所へ、夷人甚嘆息哀慟之趣、其所へ我役人參り、承調候處、右之譯ニ付對馬家來早速取〆、眼鏡ハ夷人へ歸候由。其不法なる者ハ、直ニ江戶表へ被歸候由。是も又山城相咄之。

藤田與一兵衛咄之趣。先日イザリの子とも、鰻屋へ參り鰻を買候處、若き者

兵衛イザリの咄

申候ハ、手前ゟイザリの子ニてハなき哉、饅を買杯ハ過分し事と申之。子とも申候ハ、銭を不拂して買候ハ不宜候へとも、直を出し求候へハ、我等ニても客ニ候間、馳走可致旨。夫か申合ニ相成候處、イサリ車し内方飛出、子ともを救ハんとして、若き者ニとつてかゝる、若き者大勢立集り候處、イサリ車の下ニヒカリ候者有之、段々見候處、鉄炮玉薬等有之候由。早速取上ヶ、イサリを召捕へ候て町奉行所へ差出し候由。

鈴木主税の談

鈴木主税罷出候ニ付、先日勢州へ罷越承候所ゟ今日の御模様与余り相違ニ付、誠ニ慨嘆ハ申迄も無之候へとも、さりとハ致方無之、乍去先瀾藏申口ニてゐるに、段々夷人し願通りニ相運ヒ、御許容無之候へハ、可及争端と申立候ゆへ、ソレかおそろしさに、又御許容有之候るて、際限も無之、而已ならすも、餘りニ眼前し利を而已貪り候て、
皇朝し御威光ハ地下ニ失墜し筋ニ相當り、恐入絶言語候事ニ候。何分ニも今度アメリカへ御許容有之、
御國威相耀き候へハ「ロシヤ」「インキレス」「フランス」等も罷越間敷、何分
幕廷し御内定爲伺、明朝誠之進迄罷越候様申付。

二月二十三日御内書の御禮に登城

老中等の評議

井戸對馬守の話

堀田備中守の話

神國武德の爲には敢て米國と戰はん

○二月廿三日　西曆三月廿一日

今日御代替初る御内書頂戴之御禮として、五ッ半時登城、風聞承候處、高橋榮德申候ハ、昨日ハ御老中方御退出も夜ニ入井戸對馬守、林大學頭兩人も罷出居、前中納言殿も勿論御登　城、溜詰も御用召ニて急登　城相成、溜詰へも井林兩子罷出巨細申上候由。老中方も二度被出、御相談之趣。

又井戸對馬守、何方やら殿中被通候折、先一ヶ條極々六ヶ敷事御聞濟ニ相成候事故、急度爲及退帆候と被申候、欣喜候由。御城拜見、又江戸見物抔ニいふ樣申候ても押へ候事出來候と、是も又對馬守申候由。

堀田備中守へ逢候處、何分只今兵端相開候而、不相濟候と頻ニ被申候ニ付、我等申候ハ、一應之貴慮ハ尤之樣ニ聞へ候へ共、神國之武德失墜いたし候而も兵端不相開候か宜候哉、於小子も、何ニも爭端之開ヶ候を相好ミ候筋ニ毛頭更ニ無之候へ共、何分彼申立、夫を御許容無之候ハゝ、畏しニも兵端相開キ候と申ニ、我方畏懼いたし候而、段々蠶食せられ候計ニて

つまりハ彼ら奴と可相成、已ニ方今其勢相成居候事、於小生ハ日夜不安、夢

溜詰の召集と會津桑名

寐御案し申上候事まて、我方當時砲術之利器無之候とも
日本闔國之勢まて及戰爭候ハヽ、必然勝利と奉存候。我等ゟ武德之障害を
甚御案し申上候事と申候處、備中守ゟ尤と計り被申候て、他之挨拶無之、
榮德申候ハ、昨日溜詰御一統（酒井雅樂頭松平民部大輔ハ格故不被爲召）被召候處、越中守（桑名）樣ハ不被召、
其趣意ハ先日ゟ溜詰御一同登　城之節老中方越中守殿へ御咄合之折柄、昨秋
ハ上書の御返答詰り（家來内々ニしらへ候趣）候ゆへ、乍憚
公邊甚御不首尾まて不被召候由。會津樣下總樣と嚴く被仰立候事故、御沙汰
宜趣。

高遠侯の戲觸文

内藤駿河守（高遠）内々爲見セル書付

仁勢守殿御渡

此度、亞墨利加船近海へ渡來碇泊いさし居候處、追々花盛りノ時節ニも相成可申、氣屈之上彼方瓢簞を開キ可申も難計、其節ハ此方ニても保養等專一ニ心掛、精々振（賑）々敷樣可被致候。

右之趣無急度向々へ可被觸候事。

或人評云、此文甚戲謔而不足道焉、雖然以戲言視之可謂拙劣也、抑横井先生草稿思出、於戲言、以此視此文、則作者之思、而在作者之胸臆焉、然則作者發哀慟、恐作此文畢皆深

淵、俗客又不可窺之云爾、

長谷部鎌三郎罷出靱負へ申聞候趣ニ、私事先日浦賀奉行始出張いたし居候加奈川迄罷越、井戸林抔夷人へ應接之模樣を見候處、乍恐十分ニ御國威有之候樣ニハ不被存、井戸林抔ハ少しも腹なく、小供貨物を申候樣ニ有之、只管ニ彼之機嫌をとり候鹽梅、彼ニハ笑候事も有之候へ共、奥齒ニ物の挾候樣ニて、深蘊之意味有之樣被察候由。

長谷部鎌三郎の話
井戸林等應接の批評

昨日野村淵藏靱負へ申述候內、認殘したに記之。

野村淵藏報告の續き

我より石炭を遣し候趣申候處、彼申候ハ、只頂戴ニゐて、御受出來兼申候、何分替り差上度旨。　我方左樣ニ候ハヽ、昨年ヘルリ口上書ニも有之通り、カリホルニーニヤ每年巨億之金被出候由、外ニ入用も無之候間、金被差上候樣申諭候處、彼甚替面色默止いたし居候由。

石炭の代としてカリホルニヤの金を要求す

今朝鈴木主稅誠之進方へ參り、誠之進口氣左之通り、

鈴木主稅藤田東湖を訪ふ

極機密

東湖水戸齊昭御內書の草稿を示す

誠ニ極々困厄之御時節ニ差迫り恐入候旨、巳十九日於橫濱應接之折、石炭被下之儀於長崎受取候樣申候處、長崎ハ不相好候間、松前まて御渡被下候樣願

石炭渡場は長崎たるべし

水戸齊昭の強硬論

井戸林に切腹を命じ筒井川路に代らしむべし

候由。　松前之儀ハ大名之國ニ候而へ、今方難差定と申候處、彼申候ハ左様ニ候ハヽ、好ミハ不仕候へとも兵端相開き可申旨。　其再ニて應接掛り二人、兵端相開候義ハ勝手次第と附放し候ハヽ、却而可然と、言葉甚詰り江戸表へ伺可申候間、來ル廿六日迄ニ延引いたし置、委細は廿六日談可申旨申候由。　伊豆國下田之儀ハ、石炭渡場ニいさし候而は如何、其間ニ下田迄參り見物いゝし候へと被申候由。　扨廿日歸府ところ段々御評議ニ相成候處、前中納言殿一人不承知ニて甚怒激を相被發、何分井戸・林兩人とも不相濟候間、人を取替候るなりとも、下田之義は勿論、松前ハ渡場難相成由。　何邊長崎迄請取ニ罷出候旨說得有之候方宜、夫れまて兵端相開候ハヽ、心力を盡し及防戰可申と被仰候由。　又昨朝御内々阿閣迄被仰越候御趣意は、何分松前ハ不相成、下田之儀も同様まて、長崎ニ而請取候樣申諭し候も、舊面皮之應接方兩人ニ而不參候事故、是ハ罪を井戸林まかぶせ候而、切腹ニ而も被仰付候而、罪人へハ御申譯ニ被成置、幸ニ長崎まて夷情も承知いさし居、且功者之事故筒井肥前守、川路左衛門尉を出し、前之應接を致洗却一新爲取懸候樣被成度旨。　未さふ勢閣候御返答無之旨。

一公邊ニ而も勢侯抔ハ、此度ㇾ屈辱を蒙り候義ハ致方も無之候事故、越ノ勾踐會稽山ニて臥薪嘗膽ㇾ勢ニ不相成候半而ハ難相成旨申居られ候由。誠之進考ニハ、何卒臥薪嘗膽ㇾ事ハ願ハ敷事ニ候へ共、今夫を申出し候而ハ、臥薪嘗膽を頻ニ申唱へ、當前ㇾ患難を防くため十分ニ屈辱を甘し受候樣可相成との掛念ニ付、今ハ申出す時節ニ無之旨。

右水前公御内書草稿、主税へ誠之進内々爲見候由。

筒井川路の意見

風說ニ而ハ、筒井川路もアメリカへㇾ御所置を甚相嘆キ、於長崎ㇾ取扱とハ懸隔ㇾ事故、今ロシヤ人と應接ニ及ひ候とも、御國法申諭候事、江戸表ㇾと違候故面皮無之と申居候由。

下田は實は阿部閣老等の意見

應接方井戸林兩人、其時ㇾ出來分別ニて、下田ㇾ義ハ申候由ニ候へ共、內實ハ勢州初メ兩人へ被仰聞候節、致方無之候ハヽ、下田位ハ許し候而も如何与、何となく被仰含候由。 故今應接方失言とハ申事ニ候へ共、意味深長ㇾ事柄も有之候故、應接方兩人を老中ニても咎められ不候由。

風說ニ而ハ、勢州始下田ㇾ事不相成と申候處、對馬守申候ハ、左樣ニ候ハヽ應接ㇾ義御免被下、彼理と指達可申旨申候由。 夫故先ニ下田と相成候ニ而ハ無之

哉。

且又主稅ハ誠之進ゟ咄之趣前文よ落し候、
下田ニ於て相渡候ハ、塗物類、端物類、當年限り被下、刀二本、鎗も貳本被下、鉄炮ハ三拾
目十匁二拾匁トカ被下、刀鑓鉄炮ハ應接方ゟ内々之贈物ニ相成候由、困當無之候事。

二月二十四日野村淵藏より鈴木主稅に來書

○二十四日　遠西三月廿二日

野村淵藏ゟ鈴木主稅迄來書

尙々本文之趣、御徒目付ゟ出書之由承知仕候ニ付申上候。

前略一昨夜　廟堂之御策、伊豆之下田ニおゐて、塗物之類、端物之類、鉄炮、刀鎗被下候積ニ相成候由。右鉄炮刀鎗之儀ハ、御役人ゟ私ニ被遣候積之由。右御評議相定り候る、昨日神奈川之方へ相廻り候沙汰承り申候。何そ晝時頃ニハ御小屋ニ罷出、委細申上候間左樣御承知可被下候。謹言

二月廿四日

夕方罷出候處、別ニ相替候義も無之。

狛山城

狛山城申候ハ、何分アメリカ船長滯帆ニ相成候ニ付、交易ニても何ニても相許し、早速退帆ニ相成候樣取斗可申旨、以御用御取次被仰出候由。風說と申事。

阿部閣老に呈書

淵藏口氣誠之進口振とも不輕義ニ付、先勢州へ手紙差遣し、其上ニ而工夫可致旨、今朝靭負罷出花井迄手紙指出、

春暖相成候候ニ候得共、先々愈御清安被成御勤務珍重奉存候。然者風說ニ承候へ者、伊豆下田港へアメリカ船二隻、石炭御渡場爲見分罷越候由、左樣相成候而者、十分彼の勢ハ益猖獗ニ募り、實ニ

皇國存亡之分判、御當家御興廢之秋と切齒苦慮不啻奉存候。機密之儀相伺候ハ、必竟出位之多罪ニ候へ共、日夜御案し申上候餘、御內々御垂諭被下候ハヽ、聊安心之途も可有之、就夫、又々申上度事も御座候間、何卒被仰聞被下度存候。御返答書御六ヶ敷候ハヽ、靭負可差出云々。後略

會津藩より報告

松平肥後守ゟ御屆

去ル十九日、大嶋ゟ利嶋之方へ當り、異國船二艘、同廿日朝、同嶋ゟ辰巳之方へ當り、異國船四艘見請候段、注進有之候旨、浦賀奉行ゟ達候段、家來之者より申越候。此段御屆申達候。以上

二月廿四日　　松平肥後守

書落し廿二日部ニ入る

以手紙奉申上候。然ハ、昨廿日申下刻、相州城ケ嶋ゟ三里程先松葉ケ嶋与申所へ、猶又異國船貳艘渡來いたし候旨、彦根樣御飛脚西村新助殿今暁八ツ半時過、問屋場へ罷越被申聞、直樣御屋敷へ御注進ニ被相越候趣、問屋役人ゟ申來候旨、御心得迄ニ此段申上候。　以上

二月十一日朝

品川
飯田庄大夫代
久太郎

松平越前守御陣所
岩屋源兵衛樣
池村半兵衛樣

神奈川御徒目付よりの報告

實說
覺

一來ル廿二日頃、異船八艘之内貳艘豆州下田へ退帆いたし、同處ニ而場所見立候上、又々横濱へ歸帆之上、八艘共下田へ退帆之趣ニ候へ共、日限之儀ハ相分り不申。

下田に上陸許可の風說

但風說ニ而ハ、船中ニ長く罷在、病人等も多く出來候ニ付、上陸爲致呉候樣之願ニ候得共、横濱邊ニ而上陸等致させ候而ハ、散亂等致候得ハ、御〆りニも不相成候故、豆州下田ニ而御〆り宜場所へ上陸爲致、異人共从方場所見分之趣

林等の江戸へ出發

異船の動靜

上陸水兵ハこと

ニ御座候。

一同今廿一日、林大學頭殿、町奉行井戸對馬守殿曉八時供揃ニ而江戸表へ出立被致候。

一同昨廿日戌の上刻、浦賀表ゟ與力早船ニ而神奈川宿へ罷越、異船壹艘豆州下田沖ニ帆影見屆注進有之趣ニ御座候。

但近頃何方ミ船共不相知候へ共、異船沖合ニ相見へ候風說有之候得共、不成慥由。定而右異船ニ而も無之哉とミ風說有之候。

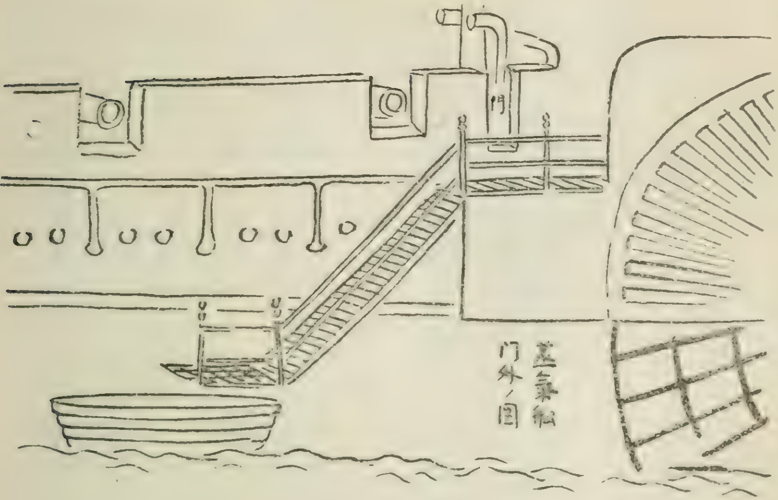
一同去ル十九日、應接ミ模樣ミ義ハ一向相分り不申候。

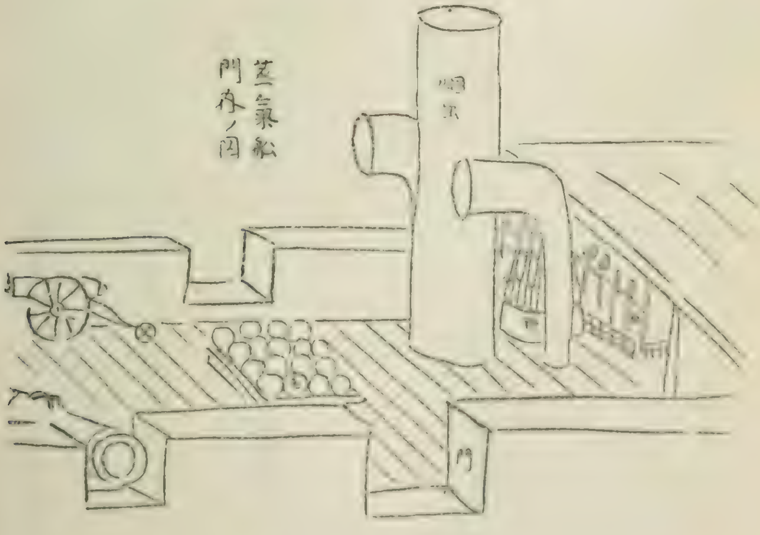
但應接中、異人兩人近村邊へ上陸致候へ共、直樣役人駈付引戾候風說有之候。

一廿四五日ニハ退帆いたし候哉ミ趣ハ無之、神奈川宿ニ而も、豆州下田へ退帆ミ風說ハ有之候得共、異國へ退帆ミ義も長引候趣風說いたし候。

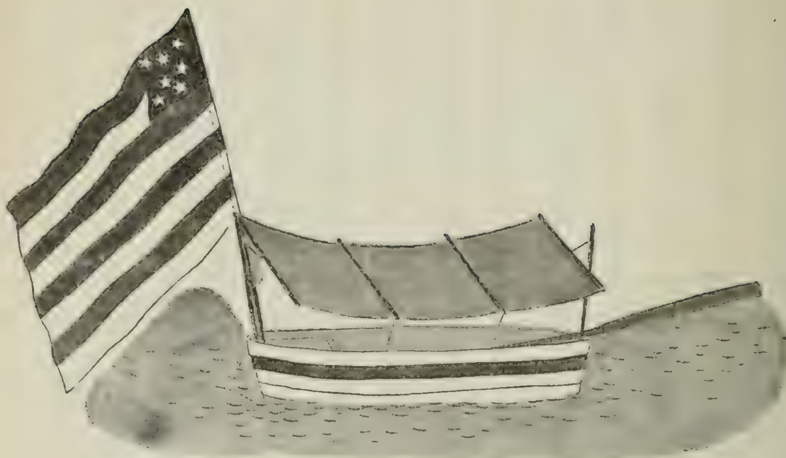
一去ル十六日、異人上陸致候一件ニ付、翌十七日御懸合ミ風聞ニ候。　正月十四日浦賀を乘越內海へ入候軍艦壹艘、異將「ソクナン」と申者、內々ハ指圖ミ由ニ而、右樣ミ取計ニ及ひ候趣ミ風聞ニ御座候。　全く惣大將へハ右不存由ニ御さ候。　夫故少々內亂いたし候趣ニ御座候

佐々木權六見取圖を上呈す





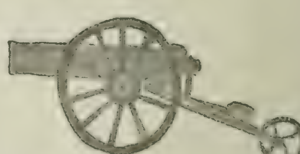












二月二十五日 主税東湖を訪ふ

阿部閣老よりの回答

〆

右ハ神奈川御徒目付ゟ出ス

今夕も鈴木主税罷出候事。□□日異船へ乘込候節目撃之繪圖認候よしニ而佐々木權六主税へ托し献上

○廿五日　遠西三月廿三日

主税誠之進ゟ罷越候事ハ、別段何も相替候義無之、種々咄有之候へ共、此程中日と替候事無之候故、別段不記（與一兵衛口氣ニ相替候事無之）

藤田與一兵衛ゟ來書まて、靱負殿ノ口へ罷出候處、與一兵衛申候ハ、此程薩前守様ゟ伊勢守様へ御書被進、委細御承知被成候。御返書ニも御書取等被成候間、私ゟ申上候様ニとの事ニ候。其趣意左ニ記之、

今度亞墨利加船御所置ハ、誠ニ以、公儀に於るも、御老中方始一同殘念ニ被存候事まて、無御據御場合ニ相迫り申候事ニ候、素水戸前中納言様御始、御一同之御評議ニ有之候。彼ゟ、被下候石炭御渡場之事、松前ニて御渡被下候様相願候所、夫ハ不相成勿論、伊豆國下田之義も願書中ニ有之候由、左様ニ候ハヽ、致方無之候間、兵端相開キ可申旨申候。夫程ニ存込候義ニも候ハヽ、何分ニ

も江戸表へ相伺ニ可參と申候處、夷人共申立候ハ、此義ハ昨年渡來致退帆ニ及ひ候節ゟ、來年可罷越との約定も有之、右等ニ手間取候義ハ合點不參との事。應接方申候ハ、如何にも尤ニハ候へ共、我方ニ於るて兼る長崎ゟ差定候事故、ヶ樣ニ相成候と申候。初メ彼ゟ松前之事申候故、我應接方斷り候處、松前之義ハ兼る內々交易有之候事故申候故、左樣なる事ハ無之、今國王も松前まて許容いたし度候へとも、大名之國故、掛念(合)不申候へハ、相分り不申と申候。彼又云、左樣ニ候ハヽ、松前へ是より罷越、松前侯家來ゟ掛合可致旨申候由。故應接方申候ニ、松前ゟも矢張江戸伺ニ相成候事ニ候。彼又云、左樣ニ候ハヽ、來年可罷越候間、夫迄ニ篤ゟ評議有之、返答有之候樣ニとの事。琉球之義も何ろ相願候故、是ハ手遠之場所故、掛合少し延引可致候間斷候由申聞候處、夷人共快よく致承知候由。下り通辭へ申候ハ、琉球之義ハ、內々ニてハ相濟居候へ共、表向相成候得て、心持宜故申試候迄と申候由。昔之御威勢ニ候ハヽ、献貢物も御斷被成、又是より少々之被下物位ニて相濟候へとも、何分當分之勢、交易を唱候者も有之、又申立候ものも有之、御役人ヲ始、諸大名一同、各々之事ニ相成居、殊ニ未さ武備完全不致義故、無據御殘念なから

右之御所置ニ相成候と申事。何レ諸大名始一同爲致固精候末、御武備完全之上ヘ、御取計方も有之候由。今一兩度之應接ニ而、程なく退帆可致旨此段越前守様へ申上候様ニとの事。

伊澤美作守内
浦賀與力
高林丈左衛門

松平越前守様御内（寺[illegible]）
大道七右衛門様

勝木十藏様
内用

以手紙啓上仕候。此程中ゟ神奈川湊へ異船八艘滯船罷在候處、猶又一昨夕一艘入津、都合九艘之内貳艘、今廿二日天氣模様ニ寄、下田表へ罷越、彼地見物いたし候趣、昨日異人ゟ應接懸り之者へ相届候趣まて、今朝神奈川表ゟ注進有之、右ハ御案内ニも御座あるへく候得共、猶又爲御知申上置候。早々以上

二月廿二日

鳥取藩よりの返事

因州へ留守居ゟ問合候處答來る書付

浦賀表用達よりの報告

一浦賀表用達舊井儀兵衛ゟ申者ゟ左之通り申越候。

飛脚を以御屆申上候。今申下刻、亞米利加船壹艘當所沖合に艑參候。右船も神奈川横濱へ乘込候事ゟ被存候。猶又跡船壹艘大嶋沖に相見候由。是も乘込可申ゟ被察候。此段御注進申上候。尙相替候義追々可申上候。以上

二月廿日申下刻出　舊井儀兵衛

鳥取藩の屆出

松平伊賀守樣へ左之御屆

今廿一日辰ノ刻過、異船壹艘松輪崎之内沖合ニ艑込候樣相見へ申候旨、本牧詰家來之者ゟ申越候。此段御屆申達候。以上

二月廿一日　松平相模守

昨日申達置候亞墨利加船壹艘、同未ノ中刻本牧沖を艑通、先船八艘之場所に碇泊致候旨、持場家來之者ゟ注進申越候。此段御屆申達候。以上

二月廿二日　松平相模守

但し昨廿一日、神奈川驛ニゐ伊澤美作守樣ゟ依御呼出同所出張之者罷出候處、左之趣御達し御座候

米國の兵粮船

今申ノ上刻、亞墨利加兵粮船壹艘、神奈川沖先船八艘之場所へ碇泊致し候旨、組之者ゟ見屆注進申出候。依之爲御心得申達候。

二月二十六日

〇二十六日　西洋三月廿四日

昨日神奈川出役徒目付ゟ指出、今日目付ゟ出ス。

上陸水兵のこと

一去ル十六日、異人壹人川崎迄上陸致候節、外ニ貳人横濱ニ上陸致居、其内本牧之方へ罷越、因州樣御固メ場所之内、御家老鵜殿藤助宿陣所へ立入候樣子ニ付、伊而(丹る)見甚大夫と申者見屆、早速連戻り役人へ相渡、横濱へ相送候風說ニ御座候。

異國船の動靜

一異國船神奈川沖ニ八艘碇泊致居候處江、豆州下田沖ニ相見候異船、去廿一日晝時過、當宿沖江乘入候而都合九艘ニ相成候。　内貳艘ハ豆州下田へ、地所爲見立去ル廿二日朝五ツ時頃出帆致、未タ歸帆無之候。　又々外ニ壹艘下田沖へ見へ候風說致候へ共、此義ハ實說ニ而ハ無之候。

林井戸浦賀奉行邸に寄合

一昨廿三日、林大學頭殿、井戸對馬守殿、晝九時過到著有之、浦賀奉行井澤美作守殿於假御役所、夕七ツ時頃ゟ御寄合有之、夜五ツ時退出ニ相成、今日も又々御寄合有之趣ニ御座候。　且又明後廿六日應接之趣、其節異人へ被下物被遣、異人受取候ハヽ平穩之趣、若異人受取不申節ハ模樣相替候旨風說致候。

同日

覺

一豆州大嶋ゟ利嶋之方へ貳艘
一同大嶋ゟ辰巳ノ方ヘ向ケ四艘
右之通り異船帆形相見候得共、何國ゟ申儀ハ相分り不申、未タ御達しハ無御座候得共、實説之趣ニ御座候。

同日

一兩日以來、伊豆之大嶋ゟ辰巳ニ當り異國船四艘、大嶋挨寄ニ貳艘相見得候へ共、何レ之舟とも相分り不申候由。

南品川宿
年寄
山本忠次郎

異船中に日本人の漂流者あり

一此間渡來之異船八艘之内、四ケ年以前漂流致候駿州之者拾六人、内壹人病死、殘り十五人乘入、先達而與力異船へ乘込候節、右之者壹人罷出手紙壹通指出候處、異人見告與ハヽ連行候由。實説之由ニ承り候旨申聞候。
二月廿五日

川越藩よりの通報

昨日誠丸ゟ知せ
神奈川沖ニ碇泊罷在候亞墨利加船九艘之内貳、去ル廿二日出帆致候處、南風ニ付猿嶋邊へ碇泊致、一昨廿三日帆を卸浦賀沖合迄罷越候處、南風烈敷夏嶋

邊迄乘戻り、昨朝同所出帆、迅速ニ豆州之方へ向走り候旨、大津陣屋詰家來之者ゟ申越候。此段致御屆候。以上

二月廿五日　松平誠丸

神奈川沖滯留異船之內蒸氣船壹艘、明廿六日明六時頃出船、亞墨利加本國へ歸帆致候旨、使節ゟ申出候。且又、同日橫濱應接場江異人へ上陸之上應接有之、被下物有之候ニ付、都る去ル十九日之通り相心得候樣、神奈川出張之浦賀奉行ゟ達有之候旨、同所出張家來之者ゟ申越候。此段致御屆候。以上

二月廿五日　松平誠丸

右畢

古乃ころの花乃志ら雪つもるより
いさくつのれる我思ひかも

華盛頓使節帶一帮戰船碇泊東武海上秘記卷之六

祖先盛業若朝曦寬永曾
書戮呂虎鎖國千年仰功
烈況今里埜秋屎顚時

【印】

華盛頓使節帶一帮戰船碇泊東武海上秘記卷之六

祖先盛業若朝曦、寛永曾書戮呂夷、銷國千年仰功烈、況今墨狄朶頤時

右賦詩代序

春二月下澣潜思閣主人春岳書於南窓下

源章慶永　字公寧

二月二十七日

嘉永七年蒼龍集甲寅春二月二十七日、卽西洋中興紀元一千八百五十四年第二月第二十五日、北亞美利加共和政治州獨立建國以來七十九年

川越藩よりの通知 應接無事終了

誠丸ゟ爲知左之通り

昨廿六日巳中刻頃、横濱應接場江亞墨利加人上陸、應接有之、申中刻頃應接無滯相濟、本船江致歸船候旨、神奈川出張之家來之者ゟ申越候。此段致御屆候。

以上

二月廿七日　　松平誠丸

老中よりの達

警衛人數の引揚命令

松平伊賀守ゟ留守居呼出、左之書付被相渡

亞墨利加船渡來ニ付、御警衛被仰付、數日人數被指出置候處、彌平穩之趣ニ候間、最早人數引揚候樣可被致候。尤時宜ニ寄り、猶又出張被仰付候儀も可有之候。

（補ふ）松平越前守

同大目付より觸

松平伊賀守ゟ被相渡候書付、大目付井戸對馬守ゟ觸達來ル、如左

亞墨利加船彌平穩之趣ニ候間、海岸通り屋敷々々相固候面々、最早不及其儀候。尤時宜ニ寄、猶又相固候心得ニ可罷在候。

右之通り海岸通り屋敷有之面々へ可被相達候。

二月

○二十八日　西洋三月廿六日

二月二十八日 慶永公登城

今朝六ツ半時供揃ニて登　城

内藤駿河守ゟ借用寫し置

異人所見の相撲の勝負

雲龍
- 龍ケ峯
- 大蛇潟
- 三ツケ濱

荒熊
- 彌高山
- 武者ケ崎
- 大見崎

新川
- 三ツ湊
- 西國

小柳
- 黒崎
- 松ケ枝
- 立田野

黒岩
- 沖ノ濱
- 箕嶋
- 湊岩

無勝負
旭日野
島田川　一力
立岩

糸ケ鼻　鏡岩
寶川

右二月廿六日横濱ニおゐて異人一覽之勝負ニ御座候事

前田久盛ゟ指出

某家家來の聞書

二月八日　去權家之家來蒙内命、神奈川へ罷越候衆ゟ注進之内傳寫書

一七日、香山下掛合として異船江行、大略異人之存念相尋候處、何レも大官衆江御面會ニて可申上与委細不申聞候由。

一八日應接御場所拜見、アータムス、レイー外畫人壹人上陸、香山中島龍越、明九日之應接延引明後十日ニ相成、尤雨天日送之由。　上陸之節、將軍家を御祝シ可申為ゑ、小船ニる鉄炮廿發、御出役之御方を祝シ可申ため十七發、又彼將、船を下リ候節祝炮、本船ニる十七發、何レも岸近まて發炮いたし候由申出候。　〇相談候由一艘ネウヨルク江遣し、別三艘東之方カリホルニヤ

異船中の日本人藝州人との說

應接場の大さ

舊例を擧

江遣し候積。是又澤山軍艦をヨコシ候手筈ニ致置候間、夫を差留ニ遣候と之。〇今日香山異船中ニ居候日本人ニ出會。是ハ藝州之人ニる、去ル戌年漂流いたし候由。〇アータムス」ノ子拾八歳ニる、此度同道ニて來ル。江戸を見物致候由。〇今夜船中ニて樂有之、手ニ取るやうニ聞ゆる。横濱御建物七間ニ六間一棟、夫ゟ段々小サク、三間ニ四間一棟、都合五棟。座敷之內ニ別ニ六疊敷を拵、張付天井等出來。是ハ彼將官を招キ、內話いたさし候處之と云。右ハ大略ニ御座候。

二月十二日寫

去ル廿六日、浦賀屋形浦對面所江アメリカ船將官アータムス上陸爲致、御菓子幷御酒被下。此度渡來直ニ內海江乘入船懸り候て、御國禁ニ付、浦賀湊江乘戻り候樣申談候處、遠路罷越居、空敷日を送り候ハ難儀ニ付、御返答次第、一刻も早く退帆仕度、日合相懸り候ハヽ、直ニ江戸表江罷越、右之趣申上度旨申候由。依之外國人猥ニ上陸を禁候義、殊更江戸表抔ちてハ以之外ち制候處、斯、數千里之風波を凌罷越候義ハ、容易之事ニ無之、是ハ記錄をも調候處、王城之地へ罷越候事、疵と書留有之、必此度初る之儀ニ無之、

げて江戸灣乘入の正當なるを陳述す

舊例ハ取計候段申立候ニ付、琉球朝鮮蘭人之外　王城江罷出候例無之趣申諭候處、
（家康公秀忠公）駿府ニ被爲在候砌、外國之使者兩度迄罷出、既ニ御目見も仕居哉ニ相違無御座候間、得与御舊記御取調可被下候。右之次第ニ而江戸表江乘入候而も、差遣無之心得之旨申立候由。右對面所江も上下十七人上陸仕（慶永六、今度上陸之節ハ、隊伍も不調、全ク軽蔑無畏懼様子と風説承事）アータムスニて心能く酒を頂戴、隨分宜機嫌ニ相成、殊之外難有、必野心御座候而渡來致候ニて無之候間、萬一陸方鉄炮打懸ヶ候共、船々方敵對致候存念ニて無御座候。下官十六人數献戴候ニ付、給仕之者、餘り過し狼藉致候而も如何と銚子を扣置候處、手間取レ候と待兼、勝手之方へ罷越、和語まてさけ〳〵と所望いたし候間、十分ニ銚子を替遣し候處、大醉ニ相成、罷歸り候節、何レも歩行成り兼、七拾間程濱邊迄、十六人共四ッ這ニ罷成候而、漸々船へ乘候由御座候。右て荒々に申上候。以上

二月

異人饗應の御料理

神奈川横濱ニ於て異國人江御料理被下、凡四拾人前

吸物
- 巻佐より
- 志めぢ茸
- 木ノ芽

差身
- ぼら
- めた
- 小川巻うど
- 若しそ
- 柱人参わさびいり酒

口取物
- 蒲鉾玉子
- 合さより
- くわい
- 河茸

右之外種々仕立候得共、御差圖無之ニ付、右之外差出不申候。　於浦賀五拾四人前

九年母

有平糖

養老酒

請負料理人
百川内
安五郎

林　　　藏

右異國人江被下候御料理ㇾ義、奉伺之、申付日本橋邊功者ㇾ分十人余、浦賀神奈川邊迄相廻り仕立いさし、本町河岸百川内安五郎と申者請負取极候旨。且去ル十日ㇾ相濟候得共、此後御用筋も可有之哉ニ付、右料理人共他行不致候様申渡有之候由。

料理請負人百川の安五郎

横濱異人上陸仕着座ㇾ名前

上陸異人の名列

一ヒルモールマツテウセヘルリ　　海軍惣督

慶永云、「ヒルモール」ニテハナク、「ヒルモーレ」也。第一ヒルモーレれ合同州ノ「フリシテンド」（大統領）ノ姓ニシテ、ヘルリノ事ニアツカラズ。「フリシテンド」姓ハ「ヒル・モーレ名ハ「ミルラルド」也。「マツテウセ」ニアラス「マツテウ、セ」也。敢テ童蒙ニ諭告ストイフ。

一アーダムス　　應接掛り

一レスン　　將官ㇾ者

一エルレリツ　　同

一シール　　同

一ハイ子　　醫師

一ラリヤムス　日本通辭
一ボフテメン　和蘭通辭
右ホヲハッテン（永案ホウハツタンノ間違カ）乗組之者
一フガナン　第二將官之者
一モレー　同
一スベインテン　同
一ショラミス　同
一ソイトリレイン　醫師
右シッセンベン（永案ルニ、ミスシスツヒー誤リカ）乗組之者
一ホーソス　第三將官之者
一ハーボドボート　同
一レスストク　同
一メイストン
右ワンデリヤ　乗組之者
一ラフスン　第四將官之者

一テルリン　醫師
一マーノウ　將官之者
右レキスンタン　乗組之者
一コールスバラン　第五將官之者
一ハルレス　同
一ゴムセ　同
右サラドカヽ　乗組之者
一ロセール　第六將官之者
一ハウストン　同
右ショハツテン　乗組之者
一ホース　第七將官之者
一アトチホール　同
一ベツテンズー　同
一フンウン　同
右セチクインナ（永案ルニ、シユスケハンナノ間違カ）　乗組之者

一ツイ子　第八　將官ゝ者

一ブレツベル　同

一ケリヤム　醫師

一アラスン　將官ゝ者

右マスト子ン　乗組ゝ者

一外ニ小遣　五人

一將官附鋒（永案ルニ銃ノ間違カ）卒　五人

內紺將官旗持兼　壹人

一赤旗持　三人

一赤白布交セツ旗持　壹人

一コンマンダント　五人

一ラツシール　六人

一ハルダート（永案ルニソルタートノ間違と存候）　百三十六人

內コルボラール（此名いまさ不知もゝ也　セ子ラールの事か）　十二人

サイセンド　同断

一マトロス、クロンボウノ類之　百五十一人
一音樂方　三十一人
一船　バッテーラ二十八艘、十二ポンドカノン二十挺
惣人數四百四十六人
外ニ船殘し者二百人
一船名レキスンタン　大炮二十六門
一蒸氣船
二セチクインナ此案別になり　〇〇〇〇六門
三ホウハッテン　〇〇〇〇八門
四マストテン　同　二十二門
五シッセンペン此案前ニ見るべし　同　〇〇八〇
六ワンデリヤ　同　廿六〇
七サラトカ　同　廿
八ショウハッテン　同
〆　大炮百廿四挺

貴所都督之奉行職
高位之君江
我君帝王ニコラーヤ名爵第一世ニ、魯西亞を總る掌握志あるコンパニヤ軍府ゝ官より、大なる魯西亞皇帝洋海軍都督總を卒ゝ首長として
大日本國殿下に呈せむ。 爲評儀(議)ゝ上書翰を認、謹敬之禮を思ひ、尙評(議脱カ)ゝ上書翰を
大日本國殿下に呈む。 是我魯西亞帝國ゝ一端にある諸侯ゝ中、第一ゝ文官職を勤むる人を以て、國人ニ聽き尋子、我國字を和蘭語ニ由、譯せるを此入用なるをおもひ、此をして意志ゝ詳ょ通セしむる爲、和蘭ゝ文字を以記し、書翰積累なりといへとも、支那人ょ命し、國字を漢字ょ飜譯せしめ、是を共ょ、シントヘテルフルガゝ(魯西亞都府)よおゐて記せし書翰を以呈せしなれハ、是等ハ既ょ、接談の上評儀し給ひしならむ。 然者、公侯の諸役ヲ到る迄、疑念せる事なく、我ヲ謁見を許し、適意ゝ所ょ同道して、大切なる事を
日本と魯西亞とゝ境界定めしならハ、何そ遠引地といふゐけんや。 是則

日本高位の君と交らむ事を、魯西亞皇帝の深思慮する所也。依而、日本高位の君と儀して、諸事壁と打合、願意の達せむ事を希ふ。若無餘儀事にりて、事の成す(さ)る時ハ、一旦乘り來る所の海船を發し、退て後復謁見の旅見を整、境界儀談の然るへきを俟て到るべし。其時ハ事を嚴にして、命令のあるを會議をせん爲、屢來まて訂正すへきを要す。如何となれハ、儀談に由て早く其事を仕遂度故也。併無據儀あらハ、顯名の都に誘道せられ人事を請ふ。左すれハ、其所に滞留すへき也。其上の評儀事業ハ、江戸におゐてなるへし。此等の儀、御取扱にて、奎整ひ揃ふへきなれとも、出帆の時宜もあれハ、此節の如く、三四月も長崎港に滞留し、御答を俟やうにてハ、徒らに數月を費すのみ。我是等此□(イ原円)を以□(イ唐)せす、勇氣を張て早々評儀あるへきを仰くへし。此の如くにして若驚意此事ならハ、速に我か來着の科にあらさる滴へし。此儀然るへからほと思へとも、事の通せさる時ハ、即時に江戸に到りて議談すへし。我再來着然る上ハ此事に關係する手段を以、□(イ儀)海し、其地に於て謁見せむ。我再來着なす(さ)ハ、評儀願ふまし。是におゐて我願意を惠み許す事なくして、手切之嚴命あるにおよんてハ、遠地に行て願ふへく、考ふるに、貴所博識の人に、我等に

會議せる事なく(ま)(ら)ハ深く感服せむ。願くハ遺を所ゐく、宜御答ミゐる事を待のみ。

ソレカット軍艦の名ハルラタ舶名長崎港よ在て千八百五十三年第九月廿一日

我嘉永六年癸丑九月朔日

都督奉行職

ウエイメー姓フーチヤチン名

蘭學醫杉田正(成)卿長崎表ゟ江戸江文通寫

小生舊臘八日着崎、直ニ書狀も差上可申筈ミ處、着之夜ゟ飜譯相下り、日々川路君旅館江箕作翁同道ニる參り居、魯西亞往返之書翰十九通、昨今迄ニ相譯申候。異船江十二月正月二日四日都合三度乘込、船備銃子等細密よ相調申候。此者、御老中江可差出ミ旨川路君ゟ御申候事ニ候。備銃ハ大概和蘭よ齊く、少々異なる所も有之候。乘込ニて使銃幷大炮操練影繪、亦々出帆ミ模樣も見分仕候。右等之事、幷此地ミ調ニ相掛り、昨年ゟ日々、川路君ミ旅館江參り候居、早天ゟ夜分迄相掛り候間、久々御無音仕候。其内當月八日ニ、異船

も出帆仕候間、先ハ大慶、其内ニも出帆之期、遣之文を致、筒井川路両君へ奉る。書札之内ニ左之文言あり、

筒井様川路様ハ政府ゟ任ス處、其權全からず、故ニ此度之航海ハ無益なり、且船艦之事ニ就て、上陸を免されざる事なれバ、速ニ長崎を出帆せ、當年中ニは北海江航する故ニ、序ニ再ひ日本へ來る筈し。君等安福江戸江急き給ひ、願之趣成就する様、御取斗なし玉へ、

といへる書翰を殘し置あり。今迄心配致しある事も水の泡、實ニ苦々敷事なり。其地往返之間、色々入組之儀も有之候へとも、内容之上萬々可申上候。

右之書翰も、箕作小生兩人ニる相譯し、昨日御老中江之早飛脚ニる參り候。御一同之發駕、十五日十六日と申事也。小生ハ一同ゟ五六日先江佐賀江參り候様、川路君之御咄ニ御座候。明後日ハ、蘭館唐館及ひ鍋嶋御持新臺場見分ニ罷越居候御沙汰ニ御座候。乘組ニる、御國之益之思ふ事ハ、一見置候。(一)

猶歸府之上御咄可申上候。頓首

正月十日

(一)以上露國使節プチャーチンの書翰及び杉田成卿文通寫の二通、共に大日本古

文書の幕末外交關係文書（一の一〇三號、四の三三號）中に之を收載せり。今兩者を比較するに、互に字句に異同あり。然れども入相秘記所收の文、必ずしも文意通ぜざるにあらざれば、寧ろ古文書所收のものの一異本として敢て之を改めず、姑く其の舊を存じて以て他日の參考に供せり。但、後者文通寫の一篇、大日本古文書は之を伊豫大洲の落士武田斐三郎成章の書翰となす、信ずべきなり。入相秘記の杉田成卿となせるは恐くは誤ならんか。

編者識

（合同舶入相秘記六終）

仮留

政事日録

一冊

自弘化二年乙巳七月十五日

十五代目

越前守慶永（花押）

一冊

御留
政事日録

自弘化二年乙巳七月十五日

十五代目
越前守慶永述



政事日録

十五代目 越前守源英承

自弘化二年乙巳七月十五日

至

七月十五日 朝細雨後曇

目覚六ツ半時例之通り髪ゆふことなく但盆

中故読書相休

四ツ半時より表寺町へ供揃四半時過因幡へ出

席

是日故守月腹の庵守鎰丸殿市ヶ谷館

へ罷越り切之一ツ橋民部卿殿ニも因幡へも被

政事日録

慎獨

十五代目越前守源慶永

自弘化二年乙巳七月十五日
至

七月十五日
鎰丸樣市谷尾張家へ御引移り

七月十五日朝微雨後曇

目覺六ツ半時、例ゝ通り替ること無之。但盆中故讀書相休。
四ツ半時ゟ壹寸前ニる供揃、四ツ半時ニる田安へ出殿。
是日、此方同腹の舎弟鎰丸殿市ヶ谷館へ引移り切之。一ツ橋民部卿殿ニも
田安へ被越。右衛門督殿ニハ川狩ヲ被罷越。此川狩ハ於此方も信用難相成ゝ、其譯ハ弟が引移と云ゝむゆ。さと川狩と申樣義有之ゆゑそ不宜、下々ニしても、兄弟が引移と云ゝ、坂川ゝ参る物一人も無之、小姓部屋抔ニるハ不承服ゝ由承之。三汁五菜ゝ膳出
ル。三度目菓子吸物も到來。鎰丸殿引移刻限八ツ時頃ニ被參。物見ニる
引移ゝ供立ヲ見物す、先以

猿屋町會所金

老公彌御機嫌よく奉恐悦候。老公へ献上物そんじ物團扇五本、右衛門督殿こそんじ物團扇三本、お井へ二本、千重姫殿、純姫殿、筆姫殿ニ一本ッヽ進呈ニ、又川狩ミ土産として、従右衛門督殿西瓜ニ、都鳥おなか二籠、粕づけ一曲到來也。其節猿屋町會所金ミ義ニ付、竹中織部へ（側掛り）挨拶す。一位様へも肴物こる御禮申上候。

田安ゟ歸館、四ッ時へ壹寸前直ニ寢ル

七月十六日

十六日曇

今朝目覺六ッ半時、例ミ通り其外替ルこと無之。但途中故讀書相休、

四ッ半時へ二寸五歩こる供揃、四ッ半時ゟ神田橋へ出殿。

松榮院様を訪はせらる

松榮院殿益御機嫌能愛度奉存候。御住居こる御二度（一汁三菜）目弁御菓子も戴、

此方ゟ進呈ハ西瓜二、そんじ物團扇也。

神田橋ゟ歸館、八ッ半時へ壹寸前。

具足にて乘馬

具足こて乘馬試ル。（白瀧軍中ニも相用候て宜、荒波具足ニ驚）大井會禰次郎（光岩）森田傳右衛門（則保）相馬

具足也。

次乘馬申付ル。天方孫八（友益）松平源太郎（正恭）見物申付ル。

七月十七日
高野進講書

出入請帳の檢査

天方孫八明年就國の準備

定府勤番の武藝御覽

西岸公の御調査

十七日大風雨寒

今朝六ッ半時ゟ目覺、例之通り替ルこと無之。今朝ゟ高野半右衛門進罷出讀書始ル。

四ッ半時少し過、目付土屋十郎右衛門純貴ヲ呼出し、上屋敷幷神田橋、靈岸嶋之門之出入請帳を爲見候樣ニ申聞之。以後も晦日〳〵ゟ爲見候樣申之。尤側向之者抔へも秘し置申候間、左樣承知可有之候。四月ゟ去月之迄も爲見候樣、これハいつニるもよろしく候段申之、直ニ退去。

孫八罷出候ニ付、此方申候ハ、來午年歸國之セつハ中仙道通り參り候段申之。孫八申候ハ、八大夫之義中村八大夫留守居十九日ニ取扱候樣御家老申之。尤御前御用之。定府勤番武藝御覽、來月廿日頃十日頃迄ニも立附出し候樣、孫八申聞。

西岸院殿(忠直)之儀、先日ゟ御內調有之候ニ付、御用人ニるも大分カザヲカギ可申鹽梅ニ御座候間、明日罷出候ハヽ、御意被遊候樣ニ奉願度、かやうニ御意被遊可然奉存候と申て、其申ぶりを認さし出申候。又孫八申候ハ、先日阿部伊勢樣正弘之方へ出候御草稿御うつし、拜借相願度、寫置度段申之ニ付、後刻孫八へ書付相渡之。孫八晝時頃直ニ返納也。

松波正誠近思錄を講ず

七月十八日

西岸公の配流御免を阿部老中に依頼せらる

八ッ時ゟ松波彌次郎[正誠]近思錄申之。七ッ時頃、半兵衛[元明光峯]罷出、弓[illegible]稽古。五ッ時ゟ寢ル。

十八日微雨夕晴

目覺六ッ半時、替ルこと無之。半右衛門罷出候。

四ッ時過頃、用人罷出候ニ付、人拂ニて申聞ル、其文段ハ

忠直樣御配流御免之儀何卒相願度、近來之宿願ニ付、五月廿四日阿部伊勢とのへ參候節、伊勢殿へ志願之趣談試候所、聞受も宜大慶ニ存居候所、其後謹華殿奥へ、帶刀罷出候砌、伊勢守殿ニも御逢有之被申候ニ、忠直樣御嚴咎御宥免之儀、御志願之趣御尤ニ存候。依之御書付を以御達有之候ハヽ、御評議も可有之旨と被申。先以忝存候得共、表向願達と相成候節ハ、手元ハ勿論、此表斗ニる決談も難致、國元家老共初、用人共へも申談、存寄り承り、且又、三河守[齊民]殿へしめへ談不申候半るハ、表向歎願難出來事故、伊勢殿ゟ内談之とめ、別紙之通り[別紙と云ハ阿部殿へ出候草稿之事之]書取指越、厚く取調被呉候樣賴置候。尤指當候事ニも無之、來ル酉年貳百年回之儀ニ候得ハ、其節御宥免之運ニ相成候所存ニ候。是迄之所ハ、伊勢守殿へ内談之事。此上ハ表向相願候樣ニ被申候も難斗候

間、先便國元家老へも申遣候間、何も熟考いたし、家記を初、厚逐穿鑿、此方宿願ゝ助勢をいたし候様致度候。

但右宿願ゝ儀、當時内調中ニ候得そ、其心得ニる評判高ニ不相成候様致度候。

嶋田清左衛門
皆川多左衛門
松平源太郎
水野主計
に

右ゝ人々へ申聞、直ニ退去。

上屋十郎右衛門門出入請帳を提出す

同刻上屋十郎右衛門罷出、昨日被仰聞候御門出入請帳ゝ儀、帯刀方へも相談いたし候所、随分宜故、御覧ニ入候るも可然、此次ゝ詰ゝ御目付ゝセつそ、又再御意有之候様相願度と申、袖中へ入レ候を出し、門出入請帳此方請取、後日相返候旨申述之、直ニ退去。

松平三河守様へ御悔みの使

今朝鈴木仁大夫、三河殿民齊悔ゝ使相勤之。其口上ハ

松平三河守様へ

打續御不幸、嘸御愁傷可被成御察思召候。御膝中御障りも不被成御座候哉、被成御承知度思召候。依之御茶一折爲御見舞、御側使者を以被進之候。

松平越前守様御内
鈴木仁大夫

成島良讓書經講釋

成嶋桓之助殿（殿と書す事ハ、右筆部屋ニおゐて御手本をとして聞へ候、此方抔ハ、殿と書クニ不及候得共、桓之助義ハ師弟故殿と認ル）被遣候て、書經講釋被致候筈之所、八ツ半頃迄も沙汰無之ニ付、夫々吟味致候所、今割場ニて致忘却、迎人出し不申候故、不被越（吉村茂左衛門と申小頭有之、供行致候由、稍遅候、小遣有之、此小遣致忘却、小頭へ一不申遣候由ニ候）ニ付、右故割場ニて致忘却候段、縷々桓之助殿之方へも八百里方申越之、桓之助殿方別啓ニ、随分左様なる義、まゝ有之候間、嚴御叱ニ不被處候樣申參ル。乍然、對成嶋家へ候義故、小頭を三日押込、小遣も同し事ニ押込申付度段、奉行より八百里方申越之。

八ツ半時ゟ居合稽古、松波彌次郎罷出。五ツ半時前寢ル。

七月十九日　唐鑑を讀まる

十九日曇

今朝目覺替ること無之。半右衞門罷出ル、讀唐鑑。

札所趣法

四ツ時頃、中村八大夫へ申渡す

の件にて中村八大夫を賞す

九鬼隆都來訪

成島良讓書經を講す

成島良讓元勤固辭のこと

其方儀
一昨年來
札所趣法一件
公邊向始取調出精ニ付遣之

中村八大夫

帶刀御褒詞被成下、頂戴物被仰付、難有仕合奉存候段、申述之退去。

品物上下一具（其席ニる奥ノ番相渡之）

四ツ半時頃、九鬼式部少輔隆都殿被越、面會。鹽合ニる吸物出。是時挨拶して退去。交肴一折到來之。

八ツ時過成嶋先生（桓之助良讓）書經講義有之。福山（阿部伊勢守殿正弘）畫師認候畫（山水相覽富嶽洞景）先生へ呈進。緩話ニる退去。終る天方孫八へ面會ニる内談す。

先日方、每度掛合有之候成嶋先生御役附之義ニて、孫八へ被逢被申候者、先日龍邸君へ被仰上振、被仰下委細承知仕候。如何ニても元勤之義、いャ〱ニ御座候。其譯ハ、私病身ニて中々御前之勤勞も難仕、其上紅葉山御寶藏之澤山之書物御預と相成候へハ、難澁之義、其上元勤ニ相成候てハ、御小姓御小納戸と同やうに、他付合御さしとめと相成候てハ、儒者ハ博學ひ候をよしと仕候物を、とめられ候而ハ難澁、其御方様へも難罷出、別る難儀ニ御座候間、固辭仕候。私も大分進候得共、中々承引無之候。桓之助殿被申候

ハ、先日林家殿林大學頭之事ゟ私親類へ移りニ而、元勤數願書出ニ候而も如何ト申極ニ而
も有之、私存候ハ何そ阿部樣ゟ御移りニ而ハ無之ヵと存候、其節ハ元勤ニ而心得ニ
段申之候由、桓之助殿被咄。御家ゟも、厚御聲掛り御世話被下候段そ、誠ニ難有本存
候由、孫八迄申之。猶又宜ク右桓之助殿申口、孫八罷出候ハゞ此方へも咄之。

馬術稽古

尾張德川齊莊公御大病

尾張大納言殿（齊莊）、不輕容躰之旨、用人津田縫殿方ゟ申來ル。

尾張殿不輕容躰ニ付、從　公儀爲　御尋、御使御側衆被越。右同斷ニ付尾張殿へ干鱈一箱從　公儀御拜領。

夕刻水戸中納言殿齊昭ゟ書翰到來、

朶雲披閲、不順之氣候、秋收如何、先以起居萬福欣賀之至ニ候。扨ハ爲當節御尋問不致、殊ニ佳品御投惠、毎度御厚意不堪感謝候。右御報迄餘ハ期他日候。不一

初秋十又九　齊昭

越州殿
御報

次白、隨時御自愛專一之御事と存候。此品不腆ニ候へ共、御一笑迄呈申候。呵々

副白、御在藩中定而御殊政可有之、文武共格別御引立之事と存候。倚又、點虜猖狂御心算如何、彼是御示諭、得詳悉度存候也。

明日尾張樣へ爲見舞、五ツ半時之供揃ニて相越候段、用人ゟ相伺。五ツ時過寢

ル。

廿日降雨後曇

今朝目覺六ツ半時、例之通り其外替ること無之。

五ツ半時ゟ供揃ニて、尾張殿へ病氣見舞として市ヶ谷屋形へ參ル。津田縫殿ニ致面會、口上申述（御内實ハ六日御逝去也）

御所勞之所、不輕御容躰之趣致承知、驚入候。依之御見舞申入候。前大納言様御始へも宜シウ。

尾張大納言殿（齊莊）

歸宅四ツ半時五歩廻り

天方孫八（益友）罷出、廿二日飛脚相立候段申達之。八ツ時頃ゟ、松波彌次郎罷出、近思錄致す。八ツ半時頃ゟ劔術稽古。

鈴木主税（側向頭取）罷出申達候ハ、先日桓之助殿不罷出候節、小頭吉村茂左衛門、此間留守ニて前日ツケを出し候を、小遣承知いたし、小頭へ申通おとし候ニ付、不都合ニ相成候。茂左衛門義ハ、實々承知不仕候間、今日ゟ御免、小遣ハ明後日ゟ御免ニ致候段申之。

一松平源太郎申達候ハ、九鬼式部少輔殿（逢都）江左之通りの御進物相伺、

白鳥子紙箱入百枚

雲丹壹壺五合

為御挨拶留守居以中村八大夫被遣之

但七月廿一日被遣之

これそ御手元ゟ被遣、表ゟも交肴被遣ニ取斗申候段、以主税申達之。

五ツ時過寢ル。

七月二十一日

廿一日終日降雨冷氣

今朝目覺六ツ半時、例之通其外替ることと無之。但高野半右衛門持病氣ニ付、今日一日引込候ニ付、綱目獨誦す。四ツ半時頃、天方孫八罷出申達候ハ、

西岸公赦免のこと

西岸院様之儀ニ付、十八日ニ御用人江御意有之、右之事ニ付御用人ニゐても少々異存も有之候ニ付、一同申談し、書取いたし、私へも相談有之候。其節彼是評義仕候るそ不宜、至極尤之御氣付、上へも御上ケ被成候様、若御前へ指上候ハヽ、一通り尤之事之、跡ゟ分明ニ御下ケ札被遊、御見セ被遊候やう相願候。此段御心得迄ま申上候と言ゟ退去。

松平源太郎罷出、彌明日飛脚相立候段申之。

但、尾張様御發し　御遲く相成候へハ、明後日ニ飛脚相延し候積。

膳番罷出、先日九鬼式部少輔殿ゟ交肴目録參候得共、不臘故、今日表向生肴到來。

コチ二鯛一ゑひ一

八ッ時松波彌次郎罷出、近思錄致す。八ッ半時、中村政右衛門罷出鎗術稽古。

小遣押込のこと

鈴木主税出申候ゟ、此間御咎之小遣、明日ニ而差免候所、明後日ニ而さしゆるし候様申達す。五ッ時寢ル。

七月二十二日

廿二日晴

今朝目覺六ッ半時、例之通り其外替ルこと無之。高野半右衛門罷出候。

今晩常振飛脚指立。

尾張徳川齊荘公御逝去

尾張大納言殿昨夜亥ノ中刻御逝去ニ付、今日ゟ普請ハ三日、鳴物ハ七日停止之旨被仰出之。御沙汰書ニ有之

公方様家慶公實御弟之御續故、定式御半減之右大將様家祥公御父方御伯父之御續故、定式御半減之御忌服被爲請候段、御沙汰書ニ有之。

青山下野守殿御渡候御書付寫三通相達候間、被得其意、答之儀ハ深谷遠江守方へ可被申聞候。

七月廿二日　大目付

松平越前守殿
留守居

袖ら大目付へ

尾張大納言殿逝去ニ付、公方様　右大將様窺何　御機嫌、明廿三日
御本丸西丸へ惣出仕之事。

一病氣幼少隱居之面々ハ、老中和泉守宅へ使者可差越候事。

一在國在邑之面々ハ、老中和泉守に飛札可指越候事。

但在國在邑之嫡子隱居も右同斷

一普請を今日ゟ三日、鳴物ハ七日停止之事。

右之通可被相觸候。

七月廿二日

袖ら大目付へ

例年此節差上候在所之產物〇以下欠く後の政暇日錄七月廿二日の條を參看すへし。

（政事日錄終）

假留

政暇日錄

自弘化二年乙巳七月十五日
至同八月廿八日

十五代
越前守慶永

七月十五日

鎰丸樣市ヶ谷尾張家に御引き移り

臺場構築大砲鑄造に關する批評

「愼獨」

七月十五日曇朝微雨

目覺、其外替ルこと無之。讀書、盆中故相休、四ッ半時へ壹寸前ニ而供揃、四ッ半時ヨ田安樣へ參ル。此日、我弟鎰丸君、市ヶ谷尾州へ引越しニ付、見立ヲ參ル。是日右衞門督殿川狩ヨ被越。

○一位樣（齊匡 慶永が實父）益御機嫌能奉恐悅候。三汁五菜ニ御料理頂戴。八ッ時ヲ市ヶ谷へ引越。田安御物見ニる鎰君引越の行列見物。御三度目御菓子杯も頂戴致し申候。御同日、一ッ橋民部卿樣ニも御入有之候。右衞門督殿、川狩乃土產として、西瓜三其外色々被贈。（一位樣へそんし物、民部卿樣へ半切、右衞門殿へそんし物、ませへそんし物。）田安ゟ歸宅四ッ時へ壹寸前、直ニ寢ル。（床番 堀連之助）

（附箋）

「此評ハ貴家御覽の爲斗りヨ認けるなり」（朱書）

公邊の役人ハ先見なきと、其人を不知と、疑心ニ深きヨハ毎度困る之。昨年も京坂御警衞と、我年來工夫せる大艦製造致度故、大坂へ御名代として被遣

七月十五日　快晴

日光其外晴ルヽこと無之　御出立中故不休

四ツ半時ヽ参寺致ス候所　四ツ時ヨリ四ツ頃迄ヽ

参ル皆日影御成君御ト公儀尾張ヽ引越し

御見在り参ル　是日右衛門組屋川越よ以

○一佐揃（済同断／医骨之）　益御機嫌能本丸様之御召菜

之御料理御載相載　八ツ時より御出立ヽ引渡

四ツ半御用見ニ而御供君引越の所引取御出立

日御菓子相も御出来ヽ引取ヨリ御内日八ツ時

武部ニ而揃ニ而出入ニ而右衛門組屋敷川

度、今退隱の身なれハ、何勤もなく、朽果ハ殘念の由、堀田迄一書認、昨年出したるを、役々へ見せされハ、叛逆ニ無相違とて、去る天保甲辰の節の如く、御調ニも相成さる由。夫といふも畢竟ハ公邊に無武威故、めつたに恐るゝもの之。於品川出來さる御臺場も、其節惡しきにハあらされとも、御臺場ハ足なき故、外所の用ニハ立されハ、大艦に可被成由勢州へも度々いひしが、御臺場となれり。御臺場も能出來されとも、御役人へ行し金も多有之由ニ聞及へり。又右御臺場へ被居置大炮ハ、櫻馬場ニて出來さる所、能出來ても役人の心に不叶時ハ、又直させ、職人の迷惑に相成樣の事にて、藥さへ出る時ハ、出來の惡しきも能きになりて御居置に相成候よし。右打試ニも、少しく創出さる抔申立る時ハ、タガテニて寄せ、上べを飾りて其分に致し置候よし。仝く飾り砲之。御膝元の肝要の御臺場さへ如右なれハ、況是迄捨置るゝ京坂御臺場抔、於公邊ニ出來せる共、非常の節用に立間敷と思へハ、我等御名代として彼地へ行て指揮致し度といふ事之。〇又於佃島製し候御艦も、六萬兩余懸りたるよし。尤我一手ニて製せハ、三萬ニても出來ぬへきに、何事も公邊ニてかゝる時ハ雜費多く相成候半歟。雜費所々ニ成行之。

十六日

七月十六日

今朝目覺例之通り六ッ半時、其外替ルヿ無之。讀書、箱中故相休。
四ッ半時へ二寸丘歩ニる供揃、四ッ半時ゟ神田橋へ出殿。
（松榮院樣益御機嫌よく目出さ、奉存候。御住居ニ而御□寛而、御菓子を頂□う之。進呈西瓜三、そんし物之。
歸宅八ッ半時へ壹寸前。

具足にて乘馬

是日具足ニる乘馬白瀧荒波大井會禰次郎宮尾相馬。森田傳右衛門ゟ宮尾ニる乘馬、兩人共具足なり。次乘馬有之、天方孫八、松平源太郎見物申付。夜分政務のそなしを、水風とする。五ッ時過寢る。

十七日寒く大風雨

七月十七日

門出入帳

今朝例之通六ッ半時ニ目覺、其外替ルヿ無之。四ッ半時少し過目付土屋十郎右衛門ゟ逢、上屋敷門出入帳を爲召候樣申聞之。晦日〳〵と申候。此外申聞るヿ無之。孫八罷出、人拂、來午年歸國之セつ中仙道へ參り候段申聞。八大夫中村之事、十九日ニ取扱候樣孫八申之。尤御前御用之。定府勤番武藝御覽、

定府勤番の武藝を觀らる

來月廿日頃。來月十日頃迄ニ立附出し候樣、孫八申聞之。豐後國之養ニ付、用

西岸公流罪赦免のこと
近思錄の講義
弓術
通鑑綱目
七月十八日
西岸公赦免のこと
土屋十郎右衞門、門出入請帳を提出す

人へ明日申聞候樣孫八申之。一封ヽ書付指出之。用人へヽ演說書 豐後樣ヽ願書寫拜借相願、後刻孫八へ相渡之。孫八晝時頃返納。晝膳終て、稻ノ丸ヽ紋仕分候書付共差出す。八ツ時ゟ松濤近思錄申上之。七ツ時頃半兵衞罷出、マキハラ稽古。五ツ時ゟ寢ル。

附錄、今朝半右衞門罷出、綱目讀ム。

十八日朝微雨夕晴

目覺、其外替ルヿ無之。半右衞門も罷出候。

四ツ時過頃、用人罷出候ニ付、豐後樣ヽ義人拂ニて申聞ル。其文段ニ曰、

忠直樣、御配流御免ヽ義、何卒相願度、近來ヽ宿願ニ付、五月廿四日阿部殿へ參候節、伊勢守殿へ志願ヽ趣談試候處、聞受も宜、大慶ニ存居候所、其後謹姬との奥へ帶刀罷出候砌、伊勢守殿ニも御逢有之、被申候ニ、 忠直樣御嚴咎御宥免ヽ義、御志願ヽ趣御尤ニ存候。（○以下欠、前掲政事日錄本日の條を參考すべし）

同刻目付土屋十郎右衞門罷出、門出入請帳差出。帶刀へも相談いたし候所、宜故、尊覽ニ奉入候。此次ヽ請ヽ目付ヽ節ニハ、別段申聞吳候樣申之。

今朝鈴木仁大夫、三河殿へ悔使者勤之、其口上ニ曰、松平三河守樣へ、打續御不幸嘸御愁傷可被成御察思召候。御朦中、御障も不被成御座候哉。御（○以下欠）

成島桓之助不參のこと

今日成嶋桓之助殿講讀ニ被罷出候筈し所、八ツ半時頃ニも沙汰無之ニ付、夫々爲吟味候所、全刻場ニて忘却致、迎人出シ不申候故、不被越。右故桓之助殿し方へも、八百里方委しく其譯合ヲ書面ニ而申遣候。又桓之助殿方も、隨分左樣々る義有之候間、御叱ニ不被處候樣申參ル。乍然、對彼家候義故、奉行迄申遣し、其小頭ヲ押込申付候由之。八ツ半時ヲ太力奥居合ヲ稽古す。七ツ半時前眠ル

眠當作寢

七月十九日

十九日　曇

唐鑑

今朝日覺例之通り、其外替ルヿ無之。半右衛門罷出、唐鑑致す。四ツ時頃中村八大夫御用有之、手扣左し通、

中村八大夫に物を賜ふ

其方儀
一昨年來
札所趣法一件
公邊向始取調出精ニ付遣之
品物御召御上下一具但奥ノ番相渡ン

中村八大夫

帶刀御褒詞被成下、頂戴物被仰付、難有仕合奉存候段申上之退去。其レヨリ四ツ半時頃、九鬼式部少輔隆都殿被越、面會す。鹽合ニ而吸物出。是時ゆるりと申

成島桓之助來講同元勤のこと

尾張齊莊公病氣の通知

水戸齊昭公より來書

七月二十日

尾州公の病氣を訪はる

退去。八ッ時過成嶋先生書經講義有之。福山繪師認ル繪二枚呈進 引續馬術終て、孫八暫居殘候樣此方申聞。沐浴相濟て、天孫ニ面談、孫八曰、成嶋先生元勤ゝ儀、固く辭し、私も進候得共、中々承引無之、過日林家ゟ成嶋氏親戚ゝ者ゟ、元勤歎願書抔有之候るも如何と云樣な移りも有之候段、桓之助殿相咄之。被命候とも御辭退申上候積とろや。何分こなさ樣御世話ハ、きつう被悦候由之。七ッ時頃尾州殿不輕容躰ゝ段、津田縫殿細井藤助ゟ申參ル。今日尾張干さす拜領之。又夕刻水戸樣ゟ手紙到來、其文段ニ曰、

朵雲披閲、不順ゝ氣候秋收如何、先以起居萬福欣賀之至ニ候。扨て、爲當節御尋問示敎、殊ニ佳品御投惠、毎度御厚意不堪感謝候。右御報迄、餘て期他日候。不一

初秋十又九

次白、隨時御自愛專一ゝ御事と存候。此品不腆にハ候へ共、御一笑進呈申候。呵々

明日尾張殿へ爲見舞、五ッ半時ゝ供揃ニる相越。五ッ時過寢ル。

廿日降雨後曇

今朝日覺、其外替ルヿ無之。今朝尾州殿病氣見舞として、市ヶ谷屋形へ參ル。津田縫殿ヿ面會。

大納言殿御所勞ゝ所、不輕御容躰之趣、致承知驚入候。依之御見舞申入ル。前大納

言殿御始へも宜シウと申。

鈴木主税

歸宅致し孫八罷出、廿二日飛脚相立候段申之。書翰術、彌次郎も致す。
主税申之、小頭吉村茂左衛門此間留守ニる、小遣申通し忘却致候趣。依之茂左
衛門ハ今日ゟ御免、小遣ハ明後日と致候段申之。

九鬼殿に物を遣はる

源太郎申之。九鬼殿へ鳥子紙百、雲丹一壺手元ニこれハ御手元に御座候故、表ゟ
も交肴被遣ま取扱候旨、以主税申之。五ツ時過眠ル。

七月二十一日

廿一日終日降雨冷氣

綱目を獨誦又習字

今朝六ツ半時目覺、替ルヿ無之。但高野半右衛門持病ニ付、今日一日引込候ニ
付、綱目獨誦す。臨池も致す。淨書致す。

西岸公赦免の件につき評議

四ツ半時孫八罷出、申候ハ、西岸院様ゝ義ニる、先日御用人ゟ被仰述候所、御用人
ニるハ、少し存し有之候ニ付、一同申談、書取致候段私へも相談有之候。其節私、
闘評仕候るハ不宜、至極尤ゝ段申之。帶刀へも、源太郎ゟ爲見候様子。帶刀に
ハかゝり私ヲ呼申聞候ハ、源太郎ゟ西様ゝ義ニる書取出し、若々君上夫ニ就る、御
異存有之候るハ不宜候と申ニ付、孫八最前ゝ通申述候段咄ゝ。用人ゝ出し候
節一通り尤也、去ろしなろら、跡ゟ有るやうま下ヶ札して爲見可申与、御意有之

候様相願度段申て退去。

源太郎罷出、彌明日飛脚相立候段申。 用人出し候書取趣意申述候得共、書取ゝ折認候間、只今于今不記候。

鈴木仁大夫罷出申述候ゑ、先日九鬼式部少輔殿ゟ交肴參候得共、不臘故、今日參候段申之。 尾張殿御發し遲引ニ相成候へは、明後日

一、コチ二、鯛ゑび二 投惠。 此方ゟも鳥雲交肴遣。

近思錄鎗術

八ッ半時松波罷出、近思錄致す。 八ッ半時中村政右衛門罷出、鎗術致す。

青松院様より御手紙

六ッ時前、鈴木主税罷出申候ゑ、此間御尤ゝ人小遣、明日ニ而差免候所、明後日ニ而さしゆるし候様申達す。 筌井ゟ手紙一封哥嶋方迄參る。

別紙申入候、昨日御請ユ尾州様御發し今日ゟ申上候。 今日え 西城様御本丸へ被爲成、右ゝ御都合ニも御座候哉、今日ユて明日出候と申事ニ而御座候まゝ、此段宜入御聽被下候様御賴申上ゟし〳〵

筌 井

哥嶋殿

五ッ時ニ寢ル。

七月廿二日

廿一(二)日晴

今朝目覺共外替ルこと無之。 半右衛門罷出候。 田安ゟ、廿四日廿六日兩日御

田安より招かる

差支無之候ハヽ、御出被成候やう、近習番頭取遣御附迄申參ル。此方并孫八始存候ゑ、若哉尾張殿今日御發しニも相成候へゑ、廿四日之所ゑ表向とゑ午中、御當座之御事故、御斷可然、廿六日之所ゑ、八ツ時ゟ參り、直ニ退去可致、御機嫌伺之御廉ニる御出被成候やう、廿六日夜之義申。右ニ候ハヽ、松榮院樣御忌とけニも相成候ハヽ、夜分迄も御越し候て可然、御氣とけ前奈らゑ、最前申上候通りト評議し、此譯を井之方迄、此方ゟ申遣之。但六大夫ゟも、廿四日之御斷斗申遣之。廿六日之譯合ゑ、明朝田第へ參り掛合積。

尾張齊莊公御逝去

今晩常振飛脚差立。

尾張大納言殿昨夜亥ノ中刻御逝去ニ付、今日ゟ普請ハ三日、鳴物ゑ七日停止之旨被仰出。

右ニ付　公方樣右大將樣定式御半減服十日九十日之御忌服被請候段、御沙汰書ニ有之。

(觸達)

袖ゟ　大目付へ

青山下野守殿御渡候、御書付寫三通相達候間、被得其意、答之儀ゑ深谷遠江守方江可被申聞候。以上

七月廿二日　　　　　大目付

御　名　殿（松平越前守）留守居

袖うら
大目付江

尾張大納言殿逝去ニ付、　公方様　右大將様爲伺　御機嫌、明廿三日　御本丸西丸江惣出仕之事。

一病氣幼少隱居之面々ハ、月番之老中和泉守宅江使者可差越候事。

一在國在邑之面々ハ、老中和泉守江飛札可差越候事。

但在國在邑之嫡子隱居茂右同斷

一普請ハ、今日より三日、鳴物ハ七日停止之事。

右之通可被相觸候。

七月廿二日

袖うら
大目付江

尾張大納言逝去ニ付、昨廿一日より　公方様　右大將様定式御半減之　御忌服被爲　請候事。

七月廿二日

和らゟ
大目付に

例年此節差上候在所之産物、其外御機嫌伺等獻上物、御精進物之分ゟ、御忌中無構可差上候。

一例年此節差上候在所之魚類ハ、御忌明獻上候樣可致候。尤時節ニより不揃候品ゟ追る引替不及獻上候。

右之通、寄々可被達候。

七月

此外停止觸出

尾張大納言樣御病氣之處、御養生不被爲叶、昨廿一日夜御逝去被遊候。依之、今廿二日ゟ來ル廿八日迄七日之間、鳴物高聲御停止ニ候。致掛り候普請之儀ハ、廿五日ゟ御免被成候。且又

松榮院樣　御忌掛りニ付、來ル晦日迄鳴物高聲可致遠慮旨ニ候間、可被得其意候。

以上

七月廿二日　御目付

各中

追る組支配有之面々ハ、右之趣可被申渡候。

八ッ時ゟ會讀致す。五ッ時寢ル。

七月二十三日
御登城

廿三日曇

今朝目覺、共外替ルこと無之。五ッ時打二寸廻りニて供揃、五ッ半時御本丸へ登　城、寄ゝ段御目付松本十郎兵衞罷出、大廊下ゝ人へ申之。右故櫻ゝ間へ着座。ソレヨリ御機嫌伺ゝ次第左ゝ通り、

水戸中將殿

尾張殿逝去ニ付、爲伺御機嫌御登城、老中西御縁ニおいて謁之。

松平加賀守

右同斷ニ付、黑鷲ニおいて御謁、

加賀守殿御機嫌伺ゝ御口上振、御機嫌伺奉リマスト

夫ゟ櫻の間御謁

忌　松平三河守　兄

登城　松平越前守

煩　松平大和守

忌　松平阿波守　兄

忌　松平因幡守　伯父 秦ゟ

慶、口上振、御機嫌伺奉りマス。老中青山、被爲替候御儀これなく出仕之段
及言上候。

大廊下詰

御奏者番何ツレも一統奉伺御機嫌マス。老中、被爲替候御儀これなく、大廣間
大廣間柳之間
金地院護持院迄
上席ニる此上之御儀老中出仕之段及言上候。

老中
阿部伊勢守殿
不快 牧野備前守殿
青山下野守殿

奏者番
伊藤修理大夫

大目付
稻生出羽守

深谷遠江守（煩）

堀　伊賀守

目付

松本十郎兵衛

奏者番

松平若狹守

新庄主殿頭

大目付

土岐丹波守

目付

永井眞之丞

戸田能登守（助）

これら西丸登城御差圖（御差圖とも奏者番詰の事）

（松榮院様を訪はる）

退城ら神田橋御住居へ爲御悔參ル。歸館八ツ時。松平源太郎罷出、今日の御城の模様承之。

（近思錄）

松波彌次郎近思錄致す。

（觸達）

青山下野守殿御渡候御書付寫貳通、相達候間被得其意、答之儀ハ深谷遠江守方へ可
被申聞候。以上

七月廿三日　　大目付

松平越前守殿

留守居

大目付江

公方様　右大將様御朦中爲伺御機嫌

七月廿四日　惣出仕

廿五日
- 溜詰
- 堀田備中守
- 御譜代衆
- 此外万以上之
- 面々ハ以使者相伺

廿六日
- 高家
- 詰衆
- 御奏者番
- 芙蓉間御役人
- 同斷

廿七日

諸番頭
諸物預
布衣以上御役人
同断

廿九日

高家
詰衆
御奏者番
芙蓉間御役人
同断

右之通

御本丸西丸可有出仕候

但使者之分ハ、月番之老中和泉守宅江可差出候。

右之通可被相觸候。

七月

大目付江

公方様　右大將様江御機嫌中爲伺御機嫌

在府之萬石以上

右之面々ゟ、御菓子類、又ハ御精進物一度ツヽ可有献上候。

酒井若狹守
松平伊賀守

右之通可被相達候。

七月

明日惣出仕ニ付、登城可致段、松平源太郎申之。致すと答ふ。五ツ時寢ル。

七月二十四日

廿四日曇

今朝目覺六ツ時二寸五歩、餘ハ不替。

昨日之通り登城、寄セ段本多隼人介申之。

御忠紀伊殿
水戸殿

西御緣

松平加賀守

黒鷲

御機嫌伺奉ﾏｽ
忌松平三河守
登城松平越前守
煩松平大和守
忌松平阿波守
同斷松平因幡守

櫻之間詰

御機嫌伺奉りﾏｽ
老、御機嫌御障りも不被爲在、出仕之段及言上候。
大廣間ゟ
護持院迄

昨日之通り

尾張殿逝去ニ付御朦中御機嫌伺

詰附左之通り

櫻之間

御出席
阿部伊勢守様

青山下野守殿

御奏者番
安藤對馬守殿

大目付
土岐丹波守殿

深谷遠江守殿

堀　伊賀守殿

御目付
本多隼之助殿

ソレヨリ西城へ登城、凡る御本城と通り

謁附

西丸

松平和泉守

三宅土佐守殿

添
土屋采女正殿

大目付
稲生出羽守殿

御目付
水野甲子次郎殿

退城歸宅後、狛帯刀ニ面會拜借之見のべし事。

嶋田清左衞門罷出候、市ヶ谷へ依之挨拶振、

鎰丸様御棺拜の日時の件

手紙

嶋田清左衞門様　　津田縫殿

以手紙致啓達候。過刻ハ御出御大儀奉存候。其節及御面談申候御棺拜之儀、鎰丸様にも申上御家老共にも申聞候處、格別御親敷被爲在候事ニ付、御勝手次第御出御座候様奉存候。尤廿六日廿七日之内此御方おいて何茂御指支無御座候間、御日限御取極御申越御座候様奉存候。其内御刻限之儀ハ、四ツ半時比ニふさに御參着相成候得ハ、別ゐ御都合宜御座候間、其御含御取斗御座候様仕度奉存候。右之段得御意度如斯御座候。以上

七月廿四日

返翰

御手紙拜見仕候。過刻罷出御禮申上候。御棺拜之義、鎰丸様に被仰上、御家老中へも御談御座候處、格別御親敷御事ニ付、御勝手次第御出御座候様、尤廿六日廿七日兩日之内、其御屋形ニおゐて何も御指支不被爲在候間、御刻限之義ハ、四半時頃　御屋形へ御參着ニ相成候へハ、別ゐ御都合宜御旨被仰下、則申聞候處、早速御領掌御座

ハ段忝被奉存ハ。何分明朝御挨拶旁同役共之内罷出、御日限等之儀委細可申上ハ。

右貴報為可得貴意如斯御座ハ。以上

七月廿四日

追る本文之趣、段々御配慮被成下、忝仕合奉存ハ。以上

帰宅掛、献上之落雁一見致す。

夕刻孫八罷出申候ゑ、田安へ御出之儀、明後日御差支も無之候ハヽ、御出被成候様。

御住居御忌解之儀ニ付、田安へ源左右衛門を遣す。主税罷出、市ヶ谷へ此通り

御仕向ケ、

尾州家への御仕向け

一御棺前へ　思召ニて　御花一おけ

御朦中

一前大納言様へ　御菓子代弐百疋

一御簾中様へ　巻松風　一そこ

一鐙丸様へ　焼まんちう一そこ

御初七日

一御棺前へ　御杉折 御ちや 御くわし

一御文斗
御簾中様へ　思召ニて　御小重の内
三日
一御花　一おけ
四日御發棺
一御貳方様へ　御重一組
御三七日
一御水菓子一鉢
御初月忌ニ付
一御野菜ぬふとしう一たい御備へ
御四十九日
一鉢をり　まうめん
五ツ時寢ル。
七月二十五日　廿五日晴
今朝目覺、共外替ルこと無之。半右衞門罷出候。水野主計罷出、市ケ谷へ御使

相勤候段申達。御棺拜被仰出、爲御禮參ル。

明日田安へ八ツ時ゟ供揃、市ヶ谷へハ五ツ半時打二寸五歩まて供揃、四ツ時ニ出殿之段申達之。

松波氏近思錄申上之。劔術稽古。馬術稽古。五ツ時寢ル。

落雁を兩丸へ献上　七月二十六日

今朝落雁献上兩丸へ。

廿六日小雨

今朝目覺、六ツ半時、其外替る事無之。半右衞門罷出候。松平源太郎罷出申候ハ、昨夜江口長阿彌ゟ、御留守居まて手紙ニて申來候ハ、今日四ツ時ゟ御供揃ニて、此御方へ水戸様被爲入候間、四ツ時ゟ御供揃ニるハ御一所ニ相成、彼是御混雜ニ御座候間、御緩々ニる御出宅被成候様申來候ニ付、四ツ時打二寸五歩ニる御供揃差出、四ツ半時ゟ御出宅被成候やう。其通り可申之。

尾州家に御弔問

四ツ時二寸五歩廻りニる供揃、四ツ半時ゟ出殿、彼の御方ニるハ手續左之通り、御小書院へ通り、御用人ニ逢度段申之、則津田縫殿罷出候ニ付、口上申伸ル。

先日ハ、大納言様御病氣之所、御養生御叶なく、御逝去、嘸御愁傷可被成、御察申候。右ニ付、爲御悔致伺公候。

幷ニ鎰丸殿御始、御障りも無之候哉承度、此間御棺拜之義ニ付、家來差出、早速御許容被下忝宜ク。　引續、津田縫殿ニ、先日ゟ段々心配いたし大慶候。　津田縫殿申候得、段々御懇命ニ而難有仕合ニ候。　此節之儀故、御茶御多葉粉盃不差上、御好ミニも候ハヽ可指上候と申之。　此方申候得、多葉粉好まんと申之。　先々御休息所へ被爲入候樣ニと申之縫殿退去。　江口長阿彌菊之間へ（此所休息所）參ル。

（御棺拜のため長袴に御着替）

長阿彌ニ申候得、今日御棺拜長袴ニ致候間、着替可申、供之者へ左樣可申付候。供之者ゟ承取、直ニ長袴ニ着替す。　長屋紋右衞門罷出、御支度御宜申て案內す。

（御棺拜の次第）

奧御座之間之廻ゟ、縫殿案內す。　少々脇へより、御法號ハと云へは、未た御國ゟ不相廻候段申ニ付、御假法號ニても承知致度と申、縫殿申ニ得、賢良院樣と申上候。　引續、御燒香如何いたし候哉与申セは、御支度仕候段申之。　ソレヨリ案內ニて御棺拜致す。　御香手向（香名時雨）退去、元之菊之間へ參り、御膳（御精進物）御菓子出ル、鎰丸殿ゟ之御使、御小納戸頭取兒玉左內罷出申達候、口上振

（鎰丸樣より御使）

今日は御棺拜ニ而御出被成、先日ゟ段々御丁寧之儀は、鎰丸樣御喜思召候。　依之御粗末之御菓子被進候。

此方返答

先日ゟ段々家來ヲ以テ、御棺拜之義申上候所、早速御許容ニ而、忝〻存候。今日者御棺拜而已ニ罷出候所、段々御丁寧之御取扱、其上御菓子被下、誠ニ大慶候。[illegible]様へ宜御頼申入候。

引續御簾中様之御使、御廣敷御用人加藤善三郎罷出候。篤丸様之通り御往返不相替候。津田縫殿へ猶以御禮申上、退殿致し候。

齊莊公の御法號

尾張大納言齊莊卿御法號

賢良院殿徽譽惟德道隆大居士

歸殿ニ而湯ヲツカヒ、再八ツ時之供揃、八ツ半時二寸前ニ而出宅、水野主計罷出、松棠公御忌解之段申ニ付、田安へ夜分まて參り候ても不苦。

奉願候覺

今日者　尊館へ罷出難有仕合奉存候。然者　松棠院様御養、從　公儀御忌解被仰出候故、夜分迄も罷居り、緩々御話申上、別而難有奉存候。右ニ就而者、餘り自由ヶ間敷儀ニ而御座候得共、明日先代越前守齊善(ナリサハ)忌月ニ御座候間、今晩六ツ半時過頃ゟ、六ツ半時前ニも御暇被下候ハヽ、別而難有、家來共ハ　田安様之事なり、緩々仕、イツもの通り歸宅致候様申聞候得共、私心底ニ於て、對養家候而も、例ゟハ早く歸宅仕候而齋戒仕、明日靈前へ參詣仕候へ者、誠ニ難

有奉存候間、何卒左様被仰出候様奉願上候。不一

七月廿六日　　　　松平越前守

一位様へ小半紙献上、民部殿へも御出被成候。此外田安之事ハ不記候。田安ゟ帰宅五ッ時打一寸五歩廻り。直ニ眠ル。

（觸達）

七月廿六日

青山下野守殿御渡ニ御書付寫、大目付深谷遠江守殿ゟ来ル

袖うら
大目付江

右大将様御忌今日より被為　解候様、公方様より被仰進候ニ付、先達而相觸候右大将様御朦中御機嫌伺之義、且未献上物不仕分ハ、最早不及其儀候。

一右ニ付明廿七日溜詰堀田備中守、高家鷹之間詰御奏者番、布衣以上之御役人西丸に可有出仕候。

右之通向々に可被相觸候。

七月廿六日

七月二十七日天龍寺へ御參詣

廿七日降

日覺例之通り不相替。半右衛門不罷出。五ッ半時之供揃ニ而天徳寺へ參詣、歸殿四ッ半時壹寸廻り。孫八罷出、此方へ申達す、左之通り

小關五三郎養子願

大番組小關五三郎願、養家之弟幸吉當巳十三歲、此者五三郎養子ニ被下度願。　任願。
　但、口上書、右幸吉儀て、養父市郎大夫實子、先年虚弱ニ付當五三郎養子ニ致候處、此
　節幸吉丈夫達
右書院番頭松平源太郎取次

松榮院様御忌解の觸

口達

松榮院様　御忌掛リニ付、來ル晦日迄鳴物高聲可致遠慮旨先達而相觸置候得共、昨
廿六日御忌解被　仰出候ニ付、來ル廿九日ゟ不及遠慮旨ニ候間、可被得其意候。　以
上
　七月廿七日　　御目付
追而組支配有之面々ハ右之趣可被申渡候

近思錄と弓術

二日田安へ參候様申來候得共、所以有之候故斷ル段、生母之方迄申遣之。（別帳ニ委細記之）
八ツ時松波氏罷出、近思錄申上之。　半右衛門罷出。　マキハラ稽古致す。　五ツ
時寢ル。

（觸達）
青山下野守殿御渡候御書付寫一通、大目付深谷遠江守殿ゟ來ル。

袖裏 大目付に

明廿八日御表出御無之、月次出仕之面々四時揃こ候事。

一西丸に茂例月之通出仕有之候事。

但右大將樣御忌被爲解候得共、當日之御祝儀ハ不申上候事。

七月廿七日

廿八日大風大雨 弘化二乙巳年正月ゟ七月迄ハ今日之大風雨始る之

今朝目覺六ツ時打二寸五歩廻り也。五ツ時二寸廻りこる供揃、五ツ半時こ出殿、今日合羽着用。

出仕之次第

西御椽　水　戸　殿
櫻之間　越　　州
大廊下　、、、、、
、、、、、
、、、、、
、、、、、

當日こ付罷出マシタ。老出仕之段及言上候

七月廿八日

櫻之間

御出席

松平加賀守
松平越前守
松平大和守
松平攝津守
松平修理大夫
松平陸奧守
松平大學頭
松平播磨守
松平大膳大夫
松平因幡守
南部甲斐守
松平兵部大輔
松平左兵衞督

伊勢守殿
備前守殿

下野守殿
御奏者番
土屋采女正
大目付
土岐丹波守
稲生出羽守
深谷遠江守
御目付
小出織部

退城ゟ神田橋へ參ル。御歸館八ッ時へ掛り。孫八罷出、ヶ樣ニ申達す。

廿一日晩立飛脚、常振ニ今日到著、先靜安ミ由。大悅之。

八ッ時松波彌次郎近思錄致す。七ッ時頃ゟ居合稽古。

五ッ時ヨ寢ル。

(觸達)

七月廿八日

阿部伊勢守殿御渡ル御書付寫一通、大目付堀伊賀守殿ゟ來ル。

袖うら
大目付に

新板書籍の件

新板書物之儀ニ付、去ル寅年相觸候内、天文暦算蘭書飜譯世界繪圖蘭方醫書等之類、藏板致し度存候輩ハ、向後天文暦算世界繪圖等ハ、天文方之内に草稿差出、蘭書飜譯蘭方醫書之分ハ、天文方山路彌左衛門方に草稿差出、任差圖、彫刻出來之上一部宛、同所に相納候樣向々に相觸可被置候。

七月

見立の件

惣而朝之内　御出殿之節ハ、同役共相揃、　御見立可仕哉。
但五半時前　御出殿ニハ式日之外　御見立ニハ及間敷哉

（下札）
五時御供揃ニ而　御逢對御三家樣御初其外御勤之文字有之節ハ、　御見立御出可然事。
御中屋敷其外　御延氣之　御出殿ニハ、五半時之御供揃ニ而茂、御出ニ及間敷事

晝過御出殿　御歸殿之節ハ、詰合居候ハヽ　御送迎可仕哉。
但九ツ時打候ハヽ　御送迎ニハ及間敷哉。

（下札）
九時過ニ而茂御詰合ニ候ハヽ、　御送迎共被成候而可然事。

文化十二亥年七月廿五日

式日の御祝儀の件

一朔望廿八日五節句八朔御登　城被爲　入掛、是迄於御座間御家老當日之御祝儀被爲　請候得共、以後不被爲　請候段、被　仰出之。

但御家老ゟ内達之趣ゟ有之、澁谷權左衛門相伺、右之通ニ相成、當月廿八日ゟ不被爲請候事。

同月廿八日

一是迄朔望廿八日　御登　城御出殿之節、御家老於　御座之間當日御祝儀申上候得共　御出殿前御世話敷ゟ被爲　在候ニ付、大谷丹下内達も有之、右之趣權左衛門無急度相伺候處、當月廿八日より以後、御用人詰ニ致し候樣被　仰出。右ニ付御禮之儀以後、朔望廿八日差出ニ不及旨、奥之番に申達之。

七月二十九日

廿九日快晴

公用狀閲見

今朝目覺六ツ半時、例之通り、其外替ルこと無之。半右衛門罷出候。四ツ半時ま土屋十郎左衛門ヲ呼、目付公用狀を見ル、替ルと無之。引續狛宰臣帶刀罷出、用狀を見ル、替ルこと無之。

眞下宗三

水野荒次郎妻女無之ニ付、水野五郎八妹妻女ニ致度願、任差圖。

宗兵衛弟眞下宗三、本多内藏助手醫師奥村氏へ養子願。

（用狀）

細井玄養

瑞源寺假御位牌所出來

小川治兵衛

七月十一日

岩佐玄伯養子
細井玄養

其方儀
親專轉家督百石無相違被下置、表御醫師被仰付候。

同日

小本作野右衛門

瑞源寺昨秋燒失之處、假　御位牌所御出來ニ付、御遷座爲御供養、各之内　御代拜を以金貳百疋被供候。前々之通可被取扱候。

同月十六日

小川治兵衛

御自分儀、御内用向有之ニ付、京坂江被指出候。

同月十八日

佐々木小左衛門　河村左大丈　御泉水御屋敷の地所

佐々木小左衛門

別紙之通可被申渡候

別紙

一統格
御勝手役見習

河村左大夫

御借財仕譯方請込兼被　仰付。且又御内用向有之ニ付、
京坂に罷出候様被　仰付候。
右之通可被申渡候。

同月廿日

高田作之亟

先年貞照院様御住所、御泉水屋敷地之内ニ御取建之節、地面御手狹ニ付、澁谷權左衛門屋敷地之内拾九坪半地面御借被成候處、當時御不用ニも候ハヽ、此度御返地ニ被成下、不苦儀ニも候ハヽ、右坪數同所之内ニて、振替御返地ニ被成下候樣、權左衛門相願候。依之願之通被　仰付候。其段權左衛門に可被申聞候。

右同斷　（佐々木小左衛門／田邊左大夫）

賴之通被　仰付、其段申渡候間、申談可被取扱候。

〆

波々伯部源之丞の件

御書付

　波々伯部熊藏一家之内波々伯部俊助に申聞覺

波々伯部熊藏養方之從祖父源之丞義、先年令出奔、其後立歸候ニ付、願之上　御國爲立退候處、此度亦復立歸候ニ付、召連來爲相愼指置候處、病症ニ而心底難見屆趣有之ニ付、親類共願之上、揚り屋に被入候始末、心得違不屆至極ニ付、　御國十三里四方追放被　仰付候。　右取扱其方に被　仰付候間、熊藏宅に罷越申渡可取扱候。

月

波々伯部源之丞の件

御書付

　波々伯部熊藏に申渡覺

其方養方之從祖父源之丞儀、先年令出奔、其後立歸候ニ付、願之上御國爲立退候處、此

度亦復立歸候ニ付、相願召連來、爲相愼差置候處、病症ニ而心底難見屆趣有之ニ付、親類共願之上、揚り屋に被入候始末、心得違不屆至極ニ付、御國十三里四方追放被　仰付。其段同姓波々伯部俊助に取扱被　仰付候。且又其方儀取扱方も可有之處、不參屆趣相聞、不調法之事ニ候。依之遠慮被　仰付候。急度相愼可罷在候。以上

月

覺

來ル九月四日　巍光院様三回御忌御相當ニ付、御當日朝於運正寺御法事御執行被　仰出、左之通被　供前々之趣を以取扱候様、御用人月番に可被　仰付哉。

御香奠　金貳百疋

貞照院様
御香奠　金百疋

銀　五枚　御法事料

右之通可被供哉

〆

波々部源之丞の件

別紙令啓達候。波々伯部熊藏養方之從祖父源之丞儀、先年令出奔、其後　御國内に立入候ニ付、願之上爲相愼置候得共、兼て心底難見屆儀有之ニ付、源之丞伯父牧野幹吾親故主殿勤中相願、　御國爲立退、京都表ニ罷在候處此度亦復御城下近邊に立入

候ニ付、召連来熊藏方ニ急度爲相愼差置度旨、熊藏願口上書差出、去ル十七日右十郎助取次相達候ニ付、願之通即刻申渡候處、右躰不所存者、其上病症有之、如何様之儀相働可申哉も難斗ニ付、大工町揚り屋に被入被下候様親類共申談、同姓渋々伯耆儀助願口上書指出、翌十八日大宮万之丞取次相達候ニ付、預り置、御目付共江及評議候處、右源之丞儀ハ不所存者、其上病症ニ相違も無之趣ニ候得て、熊藏方ニて、八左衛門御告中之事ニ而、締り方等爲参届間敷哉ニ付、御憐愍之上、暫之處願之通揚屋に被入置、追而　御國追放　被仰付可然旨申達候ニ付、猶又令評議、去ル十八日願之通揚り屋に入置候様、万之丞に申渡候。

右之段、可被達御聽候。依之、別紙　御書付之通被　仰付可然と申談候。　御自分存寄無之候ハヽ、御序被相伺可被申越候。恐々謹言

追而御目付共差出候書付指越候。且又本文伺之通被　仰出候ハヽ、熊藏遠慮御免日限之儀て、御目付共申達候節可取扱と存候。　此段爲御心得申達候。　以上

松平源太郎罷出、隆芳院様御忌日ニ付、明日御參詣可被成候處、八朔ニ付、明日參詣可致旨伺、其通りと。　成嶋先生罷出、書經講義有之。　柔術稽古。　馬術稽古。

成島書經講義

(用狀)

五月廿九日

御登城之節雨天ニ候へて、御合羽被爲　召候處、於席々諸士御禮被爲　請候ニ付、御敷出ニ而、御合羽被爲　召候處、其間ハ御供方、着笠雖相用、雖濡ニも可有之と御厭被遊、御玄關上板之間ニ而被爲　召候事も有之候得共、何角と不宜候ニ付、以後從　御

雨合羽御着用に付御用意

居間被爲　召候樣、下より爲相願候るて如何可有之哉と、同役共ゟ御側御用人迄申談候處、　上より直ニ被爲　召候ゐていかゝ候得共、下より相願申候ハゝ、兎も角もと申聞候ニ付、御目付へ其段申聞候處、尚又夫々可申聞旨申達、其後御目付罷出、下を御脈被遊候義、誠ニ以恐入奉存候。何卒御都合次第被遊候樣仕度、何れも相願候趣御座候旨申達候間、以後ハ從　御居間被爲　召候事。

（觸達）

青山下野守殿御渡候御書付寫一通、大目付深谷遠江守殿ゟ來ル。

袖裏
大目付江

御忌明ニ付、出仕可有之處、來月朔日御表出御御禮被爲　請候間、　御忌明ニ付ゐ之出仕ニて不及候事。

七月廿九日

以手紙令啓達候。大納言殿遺躰於國許葬送被致候付、來月八日發棺、木曾路通行被致候。就夫出棺之節、御附人、且於尾州法事之節御使者、御香典御差越之儀等、兼ゐ被及御斷候通、嚴儉約申付、猶更御斷被申候。此段越前守殿へ宜相達旨ニ付如斯候。

以上

七月廿九日

田安家不參の理由

田安ゟ二日罷出候樣、先日申參候得共、有故て斷。右筆組頭藤井十蔵、本目平五郎ゟ源五右衞門手紙ニて、差支之節承度段申參候ニ付、源五右衞門明朝罷出、政事向之義ニ付無據斷ル候段申上之。

五ツ時ゟ寢ル。

七月三十日

晦日曇

天德寺御參詣

目覺六ツ半時例之通、其外不相替。五ツ半時之御供揃ニ而、天德寺隆芳院樣御靈前へ參詣。歸宅四ツ半時へ懸り。天方孫八風邪ニ付、今日ゟ引込。八ツ時ゟ松波彌次郎罷出、近思錄致す。八ツ半時ゟ劔術稽古。

近思錄と劔術

（用狀）

清容院麗珠院の御法事

清容院樣御忌日、七月六日之處、御故障之義ニ付、以來三日に被成御建替候。且御三十五日來月七日御相當ニ付、前夕ゟ御當日朝迄、於西久保天德寺御法事被成御執行候。且又御四十九日同廿一日御相當ニ付、前夕ゟ御當日朝迄、於同寺御法事被成御執行候。將又麗珠院樣御忌日七月十三日之處、是又御故障之義ニ付、五日ニ被成御建替候。扨又御三十五日來月九日御相當ニ付、前夕ゟ御當日朝迄、於小石川白山澤土寺、御法事被成御執行候。御四十九日同廿三日御相當ニ付、前夕ゟ御當日朝迄、於同寺御法事被成御執行候。爲御知。

本多正寛夫人卒去

本多豐前守殿之奥方樣、久〻御病氣之處、御養生不被成御叶、今辰下刻被成御死去候。
右之三河守樣御養方御妹之御續ニ付、定式之御忌服被成御請候段、兩御用番迄御屆
被仰達候。爲御知。

米相場

町家米相場五斗四舛、御屋五斗七舛。
五ッ時寢ル

八月朔日

八月朔日曇

今朝目覺七ッ半時、其外替ルヿ無之。六ッ時打二寸廻り供揃、六ッ半時ヨ出宅。

登城

登城。

出仕御斷

忌 松平三河守
煩 松平大和守
煩 松平攝津守
煩 松平修理大夫
煩 松平大學頭
煩 松平播磨守

領　松平大膳大夫
領　松平因幡守
　　堀　大和守
領　南部甲斐守

紀伊殿始例之如く大刀馬代ヲ以披露御目見松越前守之牧野河内守
西丸へ登城

奏者　安藤對馬守
同斷　土屋采女正
大目付　深谷遠江守
目付　戸川中務少輔
同斷　戸田能登守

コレゟ神田橋へ參ル。歸宅例之如く式事有之。

(用狀)

口達

本多豐前守殿御裏方樣、御病氣之處、御養生不被成御叶、御卒去被成候。依之今日中

鳴物高聲可致遠慮候。尤致掛り候普請之儀ハ、不苦旨ニ候間、可被得其意候。以上

八月朔日　　　　御目付

追而組支配有之面々ハ、右之趣可被申渡候。

歸宅九ッ時打一寸廻り。八ッ時より松波彌次郎罷出、近思錄申之。七ッ時より鎗術致す。今日ゟ淺井八百里出勤。五ッ時前より寢ル。

二日曇或ハ雨

今朝目覺六ッ半時、其外替ルヿ無之。半右衛門罷出候。皆川求馬（多左衛門養子）罷出、今日天德寺　天梁院様御忌日ニ付御代拜相勤申候段、假御座間申述之。

（用狀）

以廻狀致啓上候。然ハ今日御城中之口へ、御當番御目付中様ゟ御呼出ニ付、拙者共罷出候處、御徒目付柳本文藏を以、別紙書付壹通被相渡。御同席中様に致通達候様申聞候ニ付、右寫壹通差廻申候。仍之廻狀數通相認持廻り申付候。以上

八月朔日　　　　松平陸奥守内
　　　　　　　　大浪太兵衛
　　　　　　　　細川越中守内
　　　　　　　　後藤善左衛門

御名様
　御留守居中様

松平因幡守様
　御留守居中様
松平内藏頭様
　御留守居中様
津輕越中守様
　御留守居中様

御目付方支配向之者、用頼其外ニ而被相贈候贈物、是迄拙者共方江御差越之上、夫々に相渡候處、以來ハ拙者共に御差越ニ不及、前々仕來之通、御銘々御都合宜敷方江御贈有之候様存候。仍之申達候。以上

　　御徒目付組頭
　　　横山爲次郎
　　　依田源十郎
　　　高倉助五郎

八月

細川越中守様
　御留守居衆
松平陸奥守様
　御留守居衆

追啓、大廊下詰之御類役衆へも、御通達可有之候。以上

今日ハ工夫事有之候故、近思錄並弓不致。五ツ半時ニ寢ル。

八月三日

三日曇

今朝目覺六ツ半時、例ゝ通、其外替ルヿ無之。半右衞門も罷出候。返書認。〇八ツ時ゟ松波氏罷出、近思錄致す。八ツ半時ゟ居合致す。馬術稽古。五ツ時寢ル。

近思錄、居合馬術

八月四日

四日晴

今朝目覺六ツ半時、例ゝ通り、其外替ルヿ無之。半右衞門も罷出候。松平源太郎罷出、ケ樣ニ取扱候段申之。

（觸建）

一阿部伊勢守殿御渡御書付寫壹通、大目付土岐丹波守殿ゟ御觸達來ル。

銀並に銀箔に關すること

袖うら

大目付に

灰吹銀其外潰銀類、銀座幷下買ゝ者に賣渡、銀道具下銀入用ゝ者ゟ、銀座ニ而買請、他所ニ而賣買致間敷旨、先達相觸候處、猥ニ賣買致者有之趣相聞不屆候。先達而相觸候通、急度相守、銀座幷下買ゝ外、他所ニ而賣買致間敷候。

一銀箔ゝ義、銀座ゟ鑑札幷箔下か祢相渡、於京都職人共打立、世上へ賣出候處、他國ニ而紛敗、下か祢を以銀箔打立候もの有之由相聞候。右者京都箔方職人ゝ外、於他所銀

箔打立候義ハ難成事ニ付、一切致間敷候。
右之通先年相觸候處、其後諸株仲間等差止候付而ハ、何賣買ニても勝手次第之儀と
心得違、近年猶又猥ニ相成、銀箔隠打いたし候哉ニ相聞不届候。以来急度相守、箔吹
銀其外潰銀之類、座銀之外堅賣買不致、銀箔之義も、京都定職之外他所ニ而打立候義、
一切致間敷候。右之趣於相背ハ、吟味之上急度咎可申付もの也。
右之通可被相觸候。
七月

（用狀）

八月二日

蠟燭二百挺
雲丹壹　壺

右今度御支配所に御出立ニ付被遣之

小野朝右衛門殿

同　三日

間奉書紙　五　帖
月成奉書紙壹　束
打曇鳥子紙貳拾枚

右御所望ニ付被遣之

九鬼南嶽様

鰕献上
成島良譲の書經講義
西岸公の件にて猶帯刀下國
八月五日
故尾張齊莊公御發棺に付尾州家に問合

同四日

間奉書紙五束
銀拾枚

右爲御答禮被遣之

大德院

皆川多左衛門罷出、明後日鰕御献上目録見セル。明日四ツ時頃、御支度出來申候ニ付、御覽ニ被爲入候やう。此方申候ゟ、尾張殿御發駕の節、御使者用人の段申之。多左衛門調候る申上候段申之。成嶋先生被罷出、書經講義有之。市橋萬右衛門休、具足著用緋おどし。五ツ時寢ル。帯刀罷出御用有之、御國へ遣す、西岸殿一件書付相渡。十郎右衛門罷出、御門出入帳見セ申候。

五日曇

今朝目覺六ツ半時、其外替ルこと無之。半右衛門罷出候。皆川多左衛門罷出申候ゟ、昨日尾張様へ御用人御使者の儀、差支無之候哉、尾州様へ問合申候。如左

津田鑒殿様　皆川多左衛門

以手紙致啓上候。就テハ大納言様御遣鶴來ル八日御國許に御發棺被爲

在候段、兼て爲御知御座候。　其節御附使者物頭役之者被差出候先格ニ御座候處、越前守兼而御親敷被爲　在候　御方様之御儀ニ御座候間、尚御見立用人共之内被指出度ニ付、御指支之儀ハ無御座候哉、相伺申度、御繁用中御面倒ニ奉存候得共、當否被仰下候様仕度、此段宜得貴意旨ニ付如此御座候。　以上

八月五日

追而御見送用人被指出候而茂、御指支之儀無御座候ハヽ、其節御同席衆御詰所江罷通、御指圖之上、御發棺御通筋に相詰可申心得ニ御座候。　猶又御制限之儀も被仰下候様奉願候。　且服柄之儀、白衣長袴着用之心得ニ御座候。　是亦宜御指圖被成下候様相願候。　以上

明日鰕ひ献上ニ付、爲見分長口之間へ參ル。

淺井八百里罷出申候て、明日鰕御献上ニ付、御城爲拜見左ノ面々參ル。

一　鈴木主税、　二　海福猪兵衛、　三　上月熊之助、　四　高田新七郎、　五　眞田源五郎、

右之通之。　又尾張様ゟケ様申來ル

尾州家より回答

以手紙令啓達候。　大納言殿遺骸當月八日發棺、木曾路通行被致筈候處、同十日發棺東海道本坂通通行被致筈相成候。　此段越前守殿に宜相達旨ニ付、如此候。　以上

八月五日

御手紙致拜見候。然者御遣躰御國許へ御發棺之節、御附使者物頭衆御差出之御先格之由候へ共、兼ゟ御親敷御儀ニ付、爲御見立御用人中御差出被成度、差支之儀も無之哉御問合之趣致承知、於此方何等差支之儀無之候。仍御報如此候。以上

八月五日

猶々御見立御用人中御差出差支も無之候ハヽ、御同朋詰所へ被罷出、御發棺御道筋へ御出之御心得之由ニ付、御發棺刻限之義相違候樣致承知候。

右ニ來ル十日卯上刻御發棺之筈候。御着服之義も、白衣長袴着用之御心得之由、是又御承知有之度旨。右ハ殿中白帷子麻上下着用之事候間、右同樣着用ニゐ可然存候。以上

八ッ時ゟ灸事致す。貞照院殿ゟ鯛一枚到來。六ッ時前仁大夫持出 彌次郎劔術休。

今晩常振飛脚立ツ。五ッ時寢ル。

六日曇

今朝目覺六ッ半時、例之通其外替ること無之。半右衛門罷出候。

天方孫八今日出勤。

孫八口 棧切留ニ付、諒水□始。御願言口傳。石川與兵衛之義ニ付、馬喰丁之義都合宜段申之。

（幕府伺書）

中屋敷堀浚の伺

松平越前守中屋敷、別紙繪圖面之通、南西北入堀埋ル付、淺中付度奉存候。且
又東之方ニ是迄土橋有之候處、此度刎橋ニ仕度奉存候。此段相伺申候。以
上

八月　　　　　　　　　　　　御名内
　　　　　　　　　　　　　山崎良助

八ツ時前、松波氏近思錄致す。八ツ半時鎗術稽古。
七ツ時馬術稽古、次乘馬有之。駒野呼。五ツ時寢ル。

八月七日

　七日朝曇夕大雨後快晴
今朝目覺六ツ半時、替ること無し。半右衞門罷出候。水戸樣へ之返復書認。

本松寺祠堂金

孫八罷出申候ゟ、廿七日本松寺祠堂金之事。阿部樣へ帶刀罷出ル事。與兵衞
馬喰之事之。
田安へ挨拶。直書奉書一位殿　白鳥子紙右衞門殿　但九日勤申ル事。
用人共ゟ書付之事
銀札　御名　殿　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　袖ちら
同　　大目付衆　　　　　　　　　　　　　　　　　　百人組之頭
百人組四組與力同心共諸家より下乘所用賴之儀、去々卯年伺之上改革致、其砌夫々
及御通達置ル通、誰々ゟ名差不相顯、用向之儀一統ニ而相心得、右ニ付家々方之贈物

義、一統に配當致候處、右ニてモ諸家差支之儀も有之候趣ニ付、此度大岡主膳正殿に相伺候處、人數之儀モ、卯年被仰渡候通、高並ニ居置、向後家々より名差ニ而賴込候儀モ、勝手次第之旨、尤右之通相成候迚、改革之廉々相弛候筋ニ無之ハ勿論之儀ニ付、不取締之儀無之樣被仰渡候間、此段及御通達候。尤此外之儀モ、都て去々卯年及御通達置候通致度、尤此以後組之者共不正之筋有之候ハヽ、急度申付候筈、申渡置候。依之賴有之向に御通達被置候樣致度、此段及御達候。以上

巳八月　　　　百人組之頭

川越樣神田祭御見物のこと

皆川多左衞門罷出申候モ、左之通り

大道寺樣　　　　伊藤
中村樣　　　　小笠原

奉言上候、日々不勝之天氣ニ御座候處、益御安泰被成御座珍重御義奉存候。當年モ神田明神祭禮ニ御座候。大和守樣暫右祭禮御見物も不被成候ニ付、其御許樣上御屋敷ヘ御出、御見物被成度思召候。尤御客樣等御斷申ニモ可有御座候得共、如何樣之御場所ニ而も宜御座候間、此段宜御取計被下候樣仕度、御手前樣方迄、私共方申上候樣被仰付候ニ付申上候間宜奉願上候。右申上度早々如斯御座候。以上

八月七日

追啓、申上候御見物所御指支ニ茂被爲在候ハヽ、御長屋ニても宜御座候間、右之御含ニて、宜御取計可被成下候。以上

大道寺七右衞門樣　　瀧山彦大郎
中村八大夫樣　　木崎權之助

以手紙啓上仕候。兎角不順季候御座候得共、彌御安泰被成御勤仕珎重御儀ニ存候。
然者、先日得貴意候通、中澤主税助御役替仕候ニ付、右跡御頼番ヘ直江戸小市右衛門
相心得候樣仕度候。宜敷御取計可被下候。此段得貴意度如斯御座候。以上

八月六日

尚以別紙、小市右衞門宿所書御廻し申候。早々以上

麻布市兵衛町横町　江戸小市右衛門

輪讀

輪讀致す。匡章ノ所を越前守申述之。

緋縅具足着用

ひをどし具足着用。此方も田安ニてて彌着用

弓術休。松榮殿方くり到來。孫八主税ニ遣之。成嶋先生三河緋到來。

五ッ時半寢ル。

八月八日

八日晴

今朝目覺六ッ時、其外替ること無之。半右罷出。水戸樣へ之御返答書認。

孫八罷出申候ゑ、帶刀儀今日阿部樣へ罷出候樣申參候ニ付、八ッ時頃ゟ罷越。

西岸公の件

西岸樣之義も申上之

成先生講義。具足着用。孫八罷出、阿部樣ニゐ都合宜段申之、西樣之義、御聞受

田安家に赴かる

八月九日

田安家にて具足着用

宜、青殿（老中青山忠良）首ヲかさねられ候ところ申之。田安へ四ッ時頃ゟ供揃ニる罷越。五ッ時寝ル。

九日曇

今朝目覚例ゟ通り、其外替ること無し。半右衛門罷出候。四ッ時ゟ供揃ニて田安へ参ル。田安様益御機嫌能奉恐悦候。一位様へ（鎧ニ）具足着用ニて入尊覧。民部殿ニも御出被成。

（別紙）

一位様江　奉書紙（直書）　交肴

右衛門督様江　五色鳥子紙　雲丹一壺

白七子紬弐疋　銀三枚	渡邊能登守殿
白七子紬弐疋　銀三枚	堀田土佐守殿
奉書紬弐疋　金七百疋	御側懸り　竹中織部殿
奉書紬弐疋　金五百疋	同　櫻井源大夫殿
奉書紬弐疋つゝ　金五百疋	御勝手掛り御用人　片岡己之助殿
	淺井健次郎殿

（奉書紬壹疋つゝ
（金三百疋つゝ
（奉書紬壹疋つゝ
（金三百疋つゝ
（上月成奉書紙弐束つゝ
（金三百疋つゝ
（上月成奉書紙壹束つゝ
（金三百疋つゝ
（上月成奉書紙壹束つゝ
（金三百疋つゝ
一金弐百疋

書[illegible]行
御[illegible]行[illegible]　三人
御勘定吟味役　弐人
御右筆組頭　弐人
御勘定所[illegible]　三人
御金奉行　三人
御掛屋
住友吉次郎手代　壹人

天方孫八を以テ御使、田安へ罷出候。

歸宅四ッ時。直ニ寢ル。

十日

今朝目覺例之通、其外替こと無之、半右衛門罷出候。

（別紙）

一位樣右衛門殿御越ニ付爲見分參ル

孫八　多左衛門　清左衛門　主計　主稅　六大夫

八百甲　仁大夫　新七郎　傳右衛門　次郎大夫　藤内

表　源太左衛門　靑一右衛門　加藤佐七郎　齋藤市右衛門

預　一郎左衛門　小林又兵衛

徒付詰　八雄三郎

料　渡邊利右衛門　村井七郎兵衛

雲州様斷手紙

寸書致拜呈候。不正之候先以彌御清安奉壽候。然者兼ゟ御約諾申置候通り、明日參邸可仕候處、俄ニ差支之儀出來申候間、乍殘懷御斷申上候。先て爲其早々頓首

仲秋十日

再白隨時御豫防奉專禱候。不一

紀伊齊順公夫人御逝去

紀伊殿簾中逝去。

釋奠の觸

（觸達）

當月十八日釋奠被　仰出候付、右前日萬石以上名代以使者獻備有之。諸家使者揃刻限之儀、十七日五時、四品以上松平遠江守、拾萬石以上使者參著、其以下て四時參著之事ニ候間、相達候。且故障屆並問合之儀も有之候て、林大學頭宅に申出候樣可被致候。右之趣被得其意、答之儀て、堀伊賀守方に可被申聞候。以上

八月九日　大目付

御名殿

留守居

尾張様御發棺

松波罷出、近思錄申上之。劍術稽古。馬術修行。今朝尾張様御發棺ニ付、御見

立として用人差出之。

（觸達）

八月十日

牧野備前守殿御渡候御書付寫壹通、大目付堀伊賀守殿方来

紀伊侯夫人逝去のこと

袖うら
大目付に

紀伊大納言殿御簾中逝去ニ付、鳴物今日より三日停止、普請ハ不苦候。

右之通可被相觸候。

八月十日

紀伊大納言様御簾中様、御病氣之處御養生不被爲叶、御逝去被遊候。依之今十日方十二日迄三日之間、鳴物高聲御停止ニ候。致掛り候普請之儀ハ不苦旨ニ候間、可被得其意候。以上

八月十日　　御目付

各中

追る組支配有之面々ハ、右之趣可被申渡候。

五ツ時寢ル。

八月十一日

十一日曇

目覺例之通。半右衛門罷出候。

源隆院様のこと調査

御家譜之內源隆院樣之御儀、一橋へ問合候處、委申參候ニ付、爲御謝禮被遣ニ取斗候段、松平源太郎罷出申上之。

八月十一日

月成奉書紙壹束　平山市郎兵衛殿

金三百疋ヲ　取調之衆江

重昌樣一橋御屋形ニ被爲入候節、御祝儀之御廉々問合候付被遣之。

孫八罷出、此間之御拜借一件、染村ゟ姉ケ小路殿へ委しく物語致候由。　小路殿聞受も宜く由。

尾張齊莊公の諡號

尾大納言樣御諡號

源懿公（周公且諡法ニ溫柔賢善曰懿）

鎗術稽古。　松波近思錄申上之。

鈴木主税

雲州ゟ書翰到來、靈岸邸鈎場松山之下、普請向ひ之方取拂候段、昨日主税申之。

五ツ半時過寢ル。

八月十二日

十二日晴

今朝目覺六ツ半時、其外替ることと無之。四日晩立飛脚六日振之所、大井川ニ而二日到留、今日到着。半右衛門罷出孫八罷出、八郎兵衛方之用狀申達す。日付用狀見せる。（宮本常太郎之事 宗耕古文書）會讀。染村方鯛二枚、あひなめ一、鮑二。弓術。五ツ半時過寢ル。

八月十三日

家督及入院の禮を受けらる

十三日晴

今朝目覺六ツ半時、其外替ること無之。半右衛門罷出候。五ツ半時揃ニ而、家督之御禮幷入院之御禮有之。

松之間着座

右家督之御禮申上、鳥目を以用人披露、長鮑直遣之。　江川常三郎

但家老出席御長鮑表御小姓役之　關鎌太郎

右入院之御禮申上、用人披露家老取合、　南泉寺

但南泉寺之義ハ、先達而入院之節差上物いたしけるニ付、今日進物無之　大隅藏

進物、進物番役之。權太權太夫

引續家老用致す。荒木氏阿部氏之事。
松原彦大郎病身ニ付、表小姓退役願。
松波氏罷出近思錄申上之。居合修行。謹殿ゟ菓到來。馬術。
五ツ半時寢ル。

八月十四日

十四日晴

今朝目覺例之通、半右衛門罷出候。孫八罷出申候ニ付、密太郎初、御□被仕候付出來申候。今朝河合與左衛門ゟ罷出ル様申參ルニ付、罷出申候所、先日之儀、松様ニも厚御悦被成、可被御覽被成段申之。松様御こゝい故相止。帶刀、武術御覽之せつ、拜見相願。皆川與左衛門罷出、明日例刻登城相伺。成嶋先生講義。柔術稽古。五ツ時寢ル。

（用狀）

別紙令啓達候。御書院番組安陪清兵衛悴百次郎儀、不埒至極之趣相聞候ニ付、御咎之儀御目付共書付を以相達候。依之令評議、別紙　御書付之通被　仰付可然と申談候。御自分存寄無之候ハヽ、御序被相伺可被申越候。恐々謹言

追ゐ御目付共差出候書付差越候。且又、右書付之内輕き者共儀て、此表限ニゐ取扱筈ニ候得共、本文一條之儀故、爲御心得差越候。將又何之通被　仰出候ハヽ、清

兵衛遠慮御免日限之儀ハ、御目付共申達候節可取扱ト存候。此儀爲御心得申置候。

以上

御書付

安陪清兵衛に申渡覺

其方悴百次郎儀、不埒至極之趣相聞候ニ付蟄居被　仰付候。且又其方儀も、常不締り方不參屆趣相聞、不調法之事ニ候。依之遠慮被　仰付候。父子共急度相愼可被罷在候。以上

月

覺

密太郎弟
荒木榮藏

兄密太郎儀、不埒至極之趣相聞候ニ付、御暇被下候處、格別之御憐愍を以、名跡御立被下、御徒ニ被　召出、御宛行御扶持方五人扶持被下置、押込可被　仰付哉。

〆

御書付

荒木密太郎に申渡覺

共方儀不埒至極之趣、相聞候ニ付、御暇被下候。　以上

月

別紙令啓達候。　無役御留守番組荒木密太郎儀、不埒至極之趣相聞候ニ付、御咎之儀御目付共書付を以相達候。　依之令評議、別紙御書付之通被　仰付候上、弟榮藏に別紙之通被　仰付可然と申談候。　御自分存寄無之候ハヽ、御序被相伺可被申越候。

恐々謹言

追而御目付共差出候書付差越候。　且又右書付之内、家來共御咎之儀ハ、此表限ニ而取扱筈ニ候得共、本文一條之事故、差越事ニ候。　將又酒井外記方家來之儀も有之ニ付、御用狀外記方名元相除申候。　右等之趣爲御心得申達候。　以上

八月十五日

十五日曇

今朝七ッ半時目覺、六ッ時過ゟ供揃ニて登城。　今巳ノ上刻、御白書院へ出御。

、、、、、

、、、、、

、、、、、

松平攝津守ニ面會。

成嶋先生ゟ對面。　雲州へ廿二日參候樣、差支無之段申之。

近思錄

神田橋へ參ル、歸宅九ッ半時。八ッ時松波彌次郎罷出、近思錄申上之。劍術稽古。

一位尊君ゟ拜戴種々。

龍邸謹殿ゟ菓到來。五ッ時寢ル。

八月十六日

十六日曇

御拜借の儀

今朝日覺、其(外脱カ)替ること無之。半右衛門不快、獨讀ム。孫八罷出、今朝與左衛門殿ゟ呼出ニ付、罷出候所、御拜借之儀、昨日染村御使ニ罷出候。姉ヶ小路殿へ承候所、委細被存込、引受心配いさす段申聞之。染村罷歸申達。

役替

役替左之通り

弘化二年八月十六日御目付ゟ差出候寫

覺

一統格
御勘定所勤　藤澤彦次郎

右彦次郎儀御帳付見習可被仰付哉

但是迄被下候失却金弐兩其儘可被下置哉

近思錄
八月十七日
神君の遺訓拜誦
御拜借(一)こと
近思錄講了

右之者御勘定所勤可被　仰付哉

小筭
御住居御附御用人手附書物役　山崎尚助

右之者御住居御附御用人手附、書物役當分假可被仰付哉

御廣敷御出居番
御住居御書使並
御藥取兼　上田喜助

右之者御廣敷御出居番、並御住居御藥取兼可被　仰付哉

錠前番　海崎七藏

〆

松波彌次郎罷出、近思錄申上之。

鎗術稽古。五ッ半時過寢ル。

十七日曇

今朝日覺六ッ半時、替ること無之。半右衛門罷出候。

神君樣御遺訓も拜誦す。

孫八罷出、今夕御拜借御願、八大夫伊勢守樣御勝手向江罷出候段申達ス。

松波彌次郎罷出、近思錄申上之、皆濟。弓術稽古。五ッ半時過寢ル。

憂心悄々
慍于一小

八月十八日

菊池爲三郎來

松波彌次郎詩經を講す

將軍淺草寺に御成

十八日晴

今朝目覺六ッ半時、其外替ること無之。半右衛門罷出候。孫八罷出、書付二通差出、申達候ハ〔書付　水戸……〕西川八左衛門よりバ水戸殿内菊池爲三郎と申者罷出、八左衛門逢申候ハ、御重役中ニ逢度段申、八左衛門より〳〵ニしたがいは抔申候故、誠五郎申、誠五郎世話ニる半右衛門ょ逢會、側用人ニ逢度段、不相成段申故、書付二通差出す所之と云々。

松波彌次郎詩經、今日ゟ申上之。松平源太郎罷出、明日御成ゝ御沙汰有之段申達ス。

六ッ半時ゝ御供揃ニ候。表へ詰め申候。居合稽古。

御道筋

坂下御門ゟ、内櫻田御門前、和田倉御門外左に、小普請方元小屋前右に、小笠原右京大夫屋敷前、松平越前守屋敷前、常盤橋御門外左に、本町大傳馬町通り、旅籠町通、油町通、鹽町横山町三丁目ゟ右に、吉川町兩國橋上ミ　御召場より御船ニ被為　召、大川通り淺草隨身門前御上り場ゟ被為　上、觀音境内ゟ御小休所淺草寺　又境内ゟ雷神門通り大川橋際、　御召場ゟ御船ニ被為　召大川通永代橋際　御上り場ゟ被為　上、相川町より福嶋橋、八幡橋　御渡、仲町通、　御膳所深川永代寺　還御三十三間堂御

通拔、潮見橋平野橋　御渡、洲崎辨天境内　御通拔、元之御道通、永代橋際　御召場ゟ
御船被爲　召、瀧川十次郎番所前、豐海橋、湊橋、日本橋川筋一石橋　御上リ場ゟ被爲
上、常盤橋御門、夫より　御成御道筋之通り。

五ツ半時寢ル。

八月十九日

十九日晴

今朝目覺六ツ時二寸五歩、其外替ルヿ無之。御成ニ付松之間へ相詰ル。半右衛門罷出候。皆川多左衛門罷出、明日飛脚、道中常振差立候段申達ス。並北川市郎、前髮執中度段相願、宜ク候と申之。

水野主計罷出、山形熊三郎養家之妹、水野五郎八妻女ニ致度段、御内意相伺之。

松平源太郎罷出、今日尾張樣へ罷出申候。此方ゟ之口上振趣意。

御勝中御障りも不被成御座候哉。越前守樣御承知被遊度、且又餘り押付かましき事なから、御對顏御願被成候。

縫殿へ面會、縫殿申候ニ、明後日御忌解、廿五六日頃御家督之樣子故と言て、重役へ申談し、明日參候樣申參ル。五ツ半時打二寸廻り供揃、壹寸前位ニて出宅

縫殿ゟ源太郎へ之文通

以手紙致拜見候。然者、御勝中爲御見舞御出、其節鎰丸殿御對顏之儀、先刻御懸合有

之、其段御申上有之候處、明廿日五半時過之御供揃ニて、御出之筈御座候旨、且又御忍被爲解候節、爲御知方之儀ニ付、委細御紙面之趣致承知候。　仍御報如斯御座候。　以上

八月十九日　津田[illegible]藏

松平源太郎様

孫八罷出、明後日田安別墅箱第へ參候様申來ル。　橋府ニも同やう參候段申之。

大和様爲御知左之通、

以手紙致啓達候。　然者大和守様御領分、武藏國比企郡入間郡高麗郡上總國望陀郡村々之内、去月廿七日八日大風雨ニて、川々滿水堤切所等出來、田畑幷民家水入、山崩川缺砂押潰家怪我人等左之通、

武藏國村々之内荒所

一田畑石砂水入百三拾ヶ村、一潰家貳拾五軒、一民家石砂水入千九百四拾七軒、一堤切所六ヶ所、一堤半欠所四ヶ所、一蛇籠大〆切切所長七拾間余壹ヶ所、一人馬怪我無御座候。

右之外川欠圦樋等押拂、幷破損所、堤欠所、川除抗土籠出、橋損所、用水路押埋之義も未相分不申候。

上總國村々之内荒所

一田畑山崩川欠砂押五拾六ヶ村、一潰家壹軒、一半潰家貳軒、一卽死壹人、一流死貳人、

右之通御座候。　尤以損毛高之儀者、未相知不申候旨、御用番江御屆被成候。　右爲御

知各様迄拙者ゟ宜得御意旨、被仰付如此御座候。　以上

八月　　　　　　　　　　　　　　　　　　多賀谷伊織

嶋田清左衛門様

御請合中様

成先生講義。柔術致す。五ツ時寝ル。

廿日晴

八月二十日

今朝目覚六ツ半時、例之通、其外替ルヿ無之。五ツ半時打二寸廻りにる供揃、四ツ時へ壹寸前にる尾州へ參ル。手續左之通り、

尾州家を訪はる

小書院へ相通り、縫殿罷出候に付、此方申之、

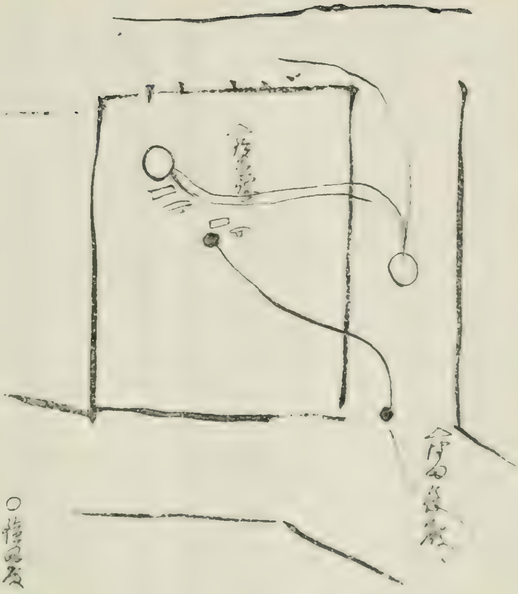
鎰丸様御始、御朦中御障不被御座成候哉、爲御見舞伺公いさし候。並昨日も、以家來段々御逢之儀申上候所、御許容被下、忝厚致大慶候。宜シウ。

縫殿申之、

先日ゟ段々心配いさし忝候。

鎰丸様と御對話

縫殿申候も、今日も鎰丸様にも御對顏御喜悦、御人拂ひ可申哉と申之。此方曰、ソレニハ不及段。又々縫殿申之、トウ／＼トいさし候故、御小姓共拂申付ル段申之。此方尤と同心す。ソレヨリ縫殿姑く退去。又々縫殿案内にて通す、奥



御座之間ニ於いて對面。入側迄出迎。茶多葉粉盆出す。菓子も同やう。ソレヨリ親話いたし、退去。

藥研ゟ中研へ參り、鈴木彈正ニ逢、今日之禮ヲ申述。

貞愼院樣方、御廣敷御用人長尾監物ヲ以テ、菓子頂戴。都而先日之通り縫殿ニも禮ヲ申之。

歸宅九ッ時打二寸廻り。

皆川多左衛門罷出、御書見セル。

飛鳥井大納言殿、烏丸殿暑中見舞狀參ルニ付、これ方も返書遣す

田安五ッ時前ニ御供揃ニ相成ルニ付、此方六ッ半時過供揃ニ相成ル。

尾張方申參ル

以手紙令啓達候。鎰丸殿明廿一日方忌被解候樣被　仰出候。此段越前守殿江宜

相違旨ニ付、如斯ニ候。以上

八月廿日　　津田縫殿
　　　　　　細井藤助

狛木工様
御詰合中様

酒井鐐姫様ゟ肴到來。五ッ時過寢ル。

以手紙得貴意候。然ハ　御滕中爲御見舞被致伺公、其節　鎰丸様　御對顔被成下候様被仕度旨、先刻罷出御掛合申上候處、明廿日御指支も無御座旨被仰下候ニ付、罷歸其段申達候處、早速御領掌被下忝く奉存候。明廿日何等之差支も無御座候間、彌五半時過供揃ニ而被致伺公筈ニ御座候。左様御承知被下、宜御取斗可被下候。且又御忌被爲解候節、爲御知可被下哉之段、御内意之趣、其段申聞候處、格別之御懇意之御調方忝被存候。已來右様之御廉、御殿様ニ爲御知ニ被仕度旨御座候間、何分御含、宜御取斗可被成下候。右爲可得貴意如斯御座候。以上

八月十九日　　松平源太郎

津田縫殿様

八月二十一日田安箱崎邸に參る

廿一日晴

今朝目覺切六ッ時、其外替ル事無之。御程合ニ而、五ッ時打壹寸五歩ヨ、箱崎御

下屋へ參上。
一位様益御機嫌能奉恐悦候。釣魚五十
民部様少し御不快、早急御宜目出たく候。
歸宅六ツ時へ五歩前。

（用狀）
以手紙致啓上い。然者無量院様、當九月二十一回御忌御相當之處、當月へ御取越、於
上野凌雲院御法事　八月廿六日、御逮夜
　　　　　　　　　廿七日　御當日
右之通御執行有之い。此段爲御知可得御意如此御座い。以上
八月廿日

以手紙致啓上い。然者靈明院様、當十月四日七回御忌御相當之處、御取越、於上野凌
雲院御法事日割左之通、
八月廿八日御逮夜、廿九日御當日、
右之通御執行有之い。此段爲御知可得御意如此御座い。以上
八月廿一日　　藤井十藏
　　　　　　　本目平五郎
大道寺七右衛門様
中村八大夫様

八月二十二日
惣七の人相書

直ニ寢ル。

廿二日晴

例ㇾ通半右衛門罷出候。佐渡守殿祭禮見物ㇾ段、皆川多左衛門申達之。雲州へ九ッ半時ㇾ供揃ニる參ル。細川斷。阿州參ル。佐渡志摩大中駒次郎囃子興行。

歸宅五ッ半時、直ニ寢ル。

（觸達）

一青山下野守殿ゟ御留守居御呼出ニゐ、御渡ㇵ御書付壹通左之通、

當正月十八日夜、三拾間堀貳町目國次郎店權四郎幷同人悴豐三郎娘美代を及殺害ㇵ躰ニる欠落致しㇵ、召仕惣七人相書。

一年齢貳拾五歳よりふけㇵ方

一生國下總國匝瑳郡登戸村

一中せい中肉筋骨太き方

一顏丸き方ニゐ、頰骨高く、頰こけㇵ方

一色赤黑く

一眼中尖く、丸き方、右ㇾ眼より貳分程下り、耳ㇾ方へ掛ケ、横ニ壹寸五分程ㇾ古切疵跡有之

一眉毛濃き方

一鼻筋ホやくゝ、先丸き方
一耳常躰
一口大きく、辨舌荒く、少し鼻へ掛り、笑ひ候節齒くき出候方
一齒並揃ひ、色白き方
一百會より後ロへ掛ケ壹寸程之古切疵跡三ケ所有之
一月代常躰、右之鬢薄き方
一左之足、向ふ脛よりふくら脛へ掛ケ、巾壹寸竪八寸程之古切疵跡有之
一其節之衣類、木綿藍竪縞綿入、同紺茶竪縞羽織を着し、太織御納戸色股引ニて、[illegible]茶竪縞小倉帯を〆罷出
右之通之もの於有之ハ、其所ニ留置、御料ハ御代官、私領ハ領主地頭江申出、夫より江戸おゐて鍋嶋内匠頭番所へ可申出候。若及見聞候ハヽ、其段も可申出候。[illegible]又もの等迄、入念可遂吟味候。若隱し置、脇より相知候ハヽ、可為曲事[illegible]

己八月

武術
御覧來ル廿五日廿六日兩日ニ可被　仰付候。
一中ノ郷見分ノヿ
一佐渡守様御内願之事

八月二十三日

廿三日晴

例ゝ通替ルヿ無之。牛右衛門罷出候。皆川氏申候ハ、大和靈邸參候段申之。

帶刀用有之。

成先生講義。居合致す。五ッ半時寢ル。

八月二十四日　田安家に參らる

廿四日曇

今朝目覺六ッ半時、其外替ルヿ無之。四ッ半時ゝ供揃ニる、田安へ參ル。

一位樣御始、益御機嫌能奉恐悅候。

饗應賭(のり)弓有之。家來共ニも拜見被仰付。歸宅五ッ半時。直ニ寢ル。

中の鄕御屋敷見分

阿部伊勢守方へ中ノ鄕へ被參候ニ付爲見分孫八參ル

八月廿四日中ゝ鄕御屋敷見分名元

天方孫八
嶋田清左衛門
鈴木主税
西尾源太左衛門
淺井八百里
福山藤右衛門
鈴木仁大夫
三岡次郎大夫

柳下雄助
青木一右衛門
齋藤市右衛門
加藤佐七郎
御料理方
手傳
御道具役
奥御坊主
表御坊主
御作事方
〆
大奥
磯岡
花野
磯田
湊
壽清院
〆

八月二十五日

廿五日雨

今朝目覺六ッ時打二寸五歩廻り。

武術一覽。

皆川多左衛門罷出、大和守様廿六日之所、廿七日ニ相成候段申達之。

劍術稽古。詩經彌次郎申上之。五ツ半時過寝ル。

廿六日小雨

今朝目覺六ツ時打二寸五歩。五ツ時之揃ニる武技一見。用人罷出、明日例刻供揃ニる天德寺へ參詣。

（用狀）

以手紙令啓達候。今日鎰丸殿へ上使を以遺領相續被仰出忝悦被存候。仍之、爲御知被申入候。右ニ付御附屆等之儀、兼て被及御斷候通、嚴儉約中ニ付、猶更御斷被申候。此段越前守殿へ可相達旨ニ付如斯候。以上

八月廿六日

津田縫殿

細井藤助

狛木工様

御詰合中様

御手紙致拜見候。然者鎰丸殿家督被仰出候上、御祝儀物御進上之義、兼て御斷

武術御覽

詩經

八月二十六日

天德寺に參らる

鎰丸様御家督

も有之候得共、格別之御續柄ニ付、御進上有之度旨付而ハ、家督相濟候御目、右御儀者御指出有之差支有之間敷哉、御問合之趣致承知候。右ハ御進上物之義、嚴敷御儉約中ニ付、被及御斷候。尤入御念候段ハ、可相達置候。以上

八月廿五日

皆川多左衞門様

成瀨大内藏

以手紙致啓上候。然者御遣領御相續被　仰出候上、御祝儀物御進上之義、皆川多左衞門殿方御問合有之候付、御進上物之儀ハ、嚴敷御儉約中付、御斷被成候旨相達候得共、當時格別之御續柄之義ニ付、表向御進上物ハ御斷相成候得共、御内々鮮鯛ニ而も御進上被成候ハヽ、全御續柄に付御受納可相成候間、此段も全御心得迄ニ相達候。此段可得貴意如斯御座候。以上

八月廿五日

松平源太郎様

津田縫殿

御手紙拜見仕候。然者　御遣領御相續被　仰出候上、御祝物被致進覽度旨、皆川多左衞門方御問合得貴意候處、進覽物之義も、嚴敷御儉約中付、御斷相成候段御達御用候得共、當時格別之御續柄之義付、御内々鮮鯛ニ而も進覽ニ相成候ハヽ、全御續柄に

付、御受納可相成旨、爲心得被仰下、承知仕候。御多用中段々御配慮被成下候趣、忝仕合奉存候。右昨日之貴報迄如斯御座候。以上

八月廿六日　松平源太郎

津田縫殿様

今日鐐丸殿へ御遺領御相續被仰出。鎗術稽古。四ツ時前寢ル。

廿七日小雨

八月二十七日天徳寺に參る

今朝目覺六ツ半時、其外替ルこと無之。五ツ半時之供揃ニる、天徳寺ニ參詣。歸宅四ツ半時。

直ニ帶刀用有之。中ノ郷橋ノヿ、明日山野十兵衛之義取扱候段申之

右ニ付中ノ郷橋損し候ニ付、此度ハ手入無之、來春可致筈。

國許中作　薬田幸八死

孫八罷出、國許中作之由五十六程　薬田幸八死去之由風聞有之。會讀致す。

（觸達）

巳八月廿七日

阿部伊勢守殿御渡候御書付寫一通、大目付稲生出羽守殿方來ニ

袖ろ
大目付江

和泉

和州多武峯學頭
竹林坊前大僧正

右大職冠之社頭并諸堂社大破付、修復爲助成、和泉壹ヶ國御料私領寺社領、立大[illegible]府内寺社在町、且藤氏之面々、當巳正月より來午正月迄、巡行勸化御免被成下候處、藤氏之面々數多之儀、萬石以下之分難相分、穿鑿ニ手間取候内、無間茂限月ニ相成候由、勸物集兼助成少ニ付、此度相願、勸化月數之儀、來々未正月迄、年延巡行勸化御免被成下候間、去辰十二月相觸候通相心得、志之輩ハ物之多少ニよらす、可致寄附旨、御料ハ御代官、私領ハ領主地頭より可被申渡候

巳八月

右之通可被相觸候

五ッ半時過寢ル。

八月二十八日

廿八日大雨或ハ小雨

今朝目覺六ッ半時、替ること無之。半右衛門罷出候。

一位樣ゟ被仰出候、春秋明月館下書いたし。

春秋明月館

當月廿一日晩立通飛脚、道中常振今日朝着、國表相替ル儀無之、目出度候。

土屋十郎右衛門呼、用狀ヲ見ル、

（用狀）

覺

一今十日新札押初、御規式有之ニ付、罷出候面々名元、左之通

町奉行　奈良權大夫
奉行　佐々木小左衛門
目付　中根新左衛門
札所奉行　高畠市郎右衛門
　武田藤三郎
　岡谷彌右衛門
御勝手役　吉田彌左衛門
　近藤四郎右衛門
小役人格受込指添　高木茂兵衛
小役人　村山嘉太郎
小算　江上晋之助
同　野田廉藏

同　水野官藏
同　高橋助右衛門
同　南部傳太郎
助左衛門悴　渡邊甚大夫
七左衛門悴　嶋田長太郎
小算格御趣向方　林倭藏
小寄合格御札方奉行下代　平田多助
同格御趣向方　清水要右衛門
同格同區　江守五郎左衛門
下代四人
札見貳人
御用使貳人
同御雇壹人
表御坊主三人
御札組拾五人

薬田幸八死去

貧民を救恤せらる

右之通ニ御座候　以上

八月十日

孫八罷出、八郎兵衛方之書状一見、薬田幸八病氣之所、十二日養生不叶死去。

（用状）

八月廿一日立飛脚同廿八日申來ル

町奉行奈良権大夫内達も有之、於國元八郎兵衛取計ニる、今日を凌兼候趣ニ付、左之者共へ籾壹俵ッヽ遣由

籾　壹俵

木田横町

北下

七　兵衛　三十五歳

同　人妻　三十三歳

同　人悴　貳歳

籾　壹俵

同石坂新町

與兵衛　五十歳

同　人　娘　拾八歳

同　人　悴　十六歳

籾　壹俵

同新屋敷上町

清右衛門　三十三歳

同　人　妻　三十五歳

同　人　娘　弐歳

一　梁田幸八病死ニ付、書物懸り假り野中重左衛門ニ申渡旨。

笹治兵庫死去

國許作柄米價

雲州の大火

江戸の米價

一加州粟ヶ崎借財之方へ、茶器類遣候所、達而辭退ニ付、昨年遣し置く札所ニ有之印子、幷古金遣し切、其上當暮米八百俵遣候由。

笹治兵庫病氣之所、十四日養生不相叶、殘念ニ候也。

國表天氣宜、中作位ニハ參可申候哉と風聞之事。　米前月ハ六拾一匁位之由。當月引下り丘拾八九匁位之由。

森六大夫田安へ罷出、彌靈邸へ被爲入候儀、十一日指支無之段申上之。

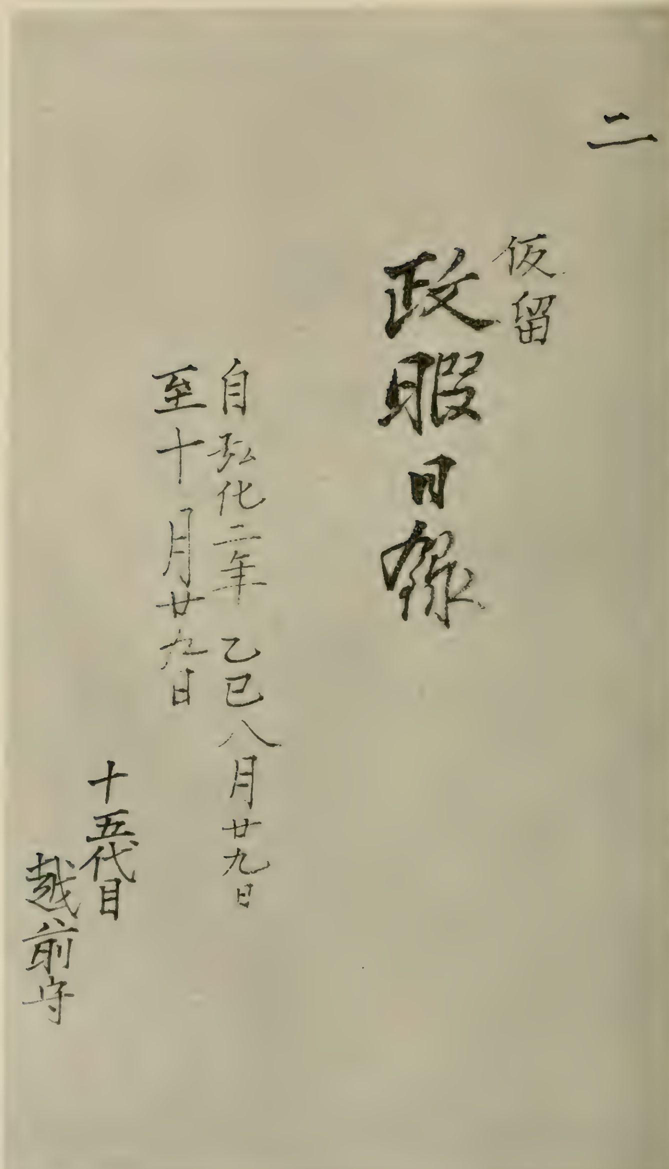
以手紙致啓達候。　出羽守様御領分嶋根郡野波浦と申所、先月十日未下刻出火、東風強、竈數百拾六軒幷納屋二ヶ所、堂三ヶ所、致燒失、同日戌刻頃鎭火ニ相成、怪我人死牛馬等も無御座段、今朝御用番に御屆書被差出候。　右爲御知、且右ニ付御見舞御使者等之御沙汰も御座候ハヽ、堅御斷旁　越前守様に被仰進候。　此段貴様方迄、自拙者共宜申述旨被仰付如斯御座候。　以上

八月廿八日

江戸米相場、一兩ニ付白米四斗六舛

御屋敷米相場四斗七舛

政在養民



二

仮留
政服日録

自弘化二年乙巳八月廿九日
至十月廿九日

十五代目
越前守

假留

政暇日録

自弘化二年乙巳八月廿九日
至十月廿九日

十五代目
越前守

八月二十九日

廿九日晴

今朝目覺六ッ半時、其外替ル事無之。半右衛門罷出候。于時田安へ差上候額

額字春秋明月館

字［春秋明月館］認。以庄九郎さし上、御受納有之、御滿悅被遊候段申來ル。

皆川多左衛門罷出申達候ハ、御城中之御紋服之儀ニ付、三河守（斉民）殿ゟ御願書御出し被成候間、貴所樣之方ニても、御同樣御さし出し被成候やう。三河守殿ゟ被さし出候御願書左之通り、

葵御紋に付御願

紋所ニ葵相用候家々之家來、御城へ罷出候節、御紋付之衣服等致着用候儀可致遠慮旨、先達而被　仰出候ニ付、指留置申候。然ル處其後相願候通、越前守家之儀ハ、先祖秀康以來自紋ニ御座候間、御附屬之舊臣ハ不及申、勤功茂有之譜代之者共迄ハ指遣置候ニ付、　御城へも着用致來候。其上、　公儀ゟ茂、葵　御紋御時服等頂戴仕罷在候者共茂有之候。先達而被　仰出候儀ハ、諸侯方御一統之儀ニ御座候得共、越前守家紋之儀ニも御座候處、葵　御紋御免之御家同樣之御譯ニ相成、故越前守斉善代ゟ着用不相成候而ハ、家紋之趣意相立不申、先祖ゟ之家格茂相廢、甚以歎敷被存候。仍之再應相願候も恐入奉存候得共、何卒以前之通着用爲致度、厚御憐許被成下候樣奉願候。以上

廿九日晴

今朝[illegible]其事報知に[illegible]

[illegible]

[illegible]

御名内

御家之方ニ而もケ様御願書相成候ハヽ宜与奉存候。猶又思召相伺度存候。

左之通り

紋所葵相用候家々之家來、　殿中御紋付之衣服着用之儀、先年御差留相成候處、三河守家ニ而も、往古ゟ葵御紋　御免之上相用候儀ニ無之、先祖中納言秀康自紋御座候ニ付、代々家紋ニ相用來、外替紋無之候間、御附屬之舊臣、其外重立候家來へハ、葵紋服差遣、既享保年中御改正以前ハ、公儀ゟ家來へ葵御紋御時服被下置候儀ニ有之、多年連綿家來　殿中着用爲致來候儀御座候處、三河守代ゟ難相成候而者、前々ゟ之家格も廢、對先祖へ如何ニも歎敷奉存候。再應相願候段者奉恐入候得共、家紋之儀ニ御座候間、先規之通家來共　殿中着用爲致度奉存候。　何卒別段之譯を以、願之通御聞濟被成下候樣偏奉願候。　以上

月日

御名家來

三河守殿存し。　公邊ニ而も大分御陵夷之由。　故乘虛被出度存候之由被相考、

其通りと任差圖。

又帶刀老罷出、用狀見セル、

（用狀）

御鷄支配

覺

御鷄支配可被　仰付哉　　皆川多左衛門

皆川多左衛門江戸留守中、御鷄假支配可被　仰付哉　　水谷壹岐

〆

覺

御近習番簗田幸八跡被　仰付、御書院番組に可被入哉　　彦坂又五郎

〆

小島宗印の愼

御書付

小嶋宗印に申渡覺

其方儀心得違之趣相聞、不調法之事ニ付依之遠慮被　仰付候間急度相愼可罷在候

以上

月

御書附右同断　玉村如琢

右同断　大橋有甫

入湯願

口上之覚

拙者嫡子丹波儀、痛所御座候ニ付、致湯治可然旨、手醫師共申聞候。依之加州山代江三廻り入湯爲致度、若相湯不致候ハヽ、右日數之内同國山中粟津江茂入湯爲致度願存候。此段御家老中迄宜御申達可被下候。以上

八月六日　本多内藏助

秋田八郎兵衛殿

小島宗印のことに付御批評

右之段相伺之。小嶋宗印儀御咎ハ、當夏中虫干之折、二ノ丸ニて殺生致し候故、ヶ様相成申候。

愚論此宗印抔ハ、坊主之事也。二ノ丸ニる獵いたし候も不埒之事と可謂。去かれとも大臣として夜獵ニ行くと云ハ、上方之許とはいへと、心得可有之義。別る發足前百擧抔ニハ色々話等もいたし、百擧申候ましも、二邊を一邊ニ

まよと云て、夜獵抔ニ行くハ、此於越前守も不審也。自分ニもわろく、人ニもあら
も同様なあろを、能き氣然こて咎らさ物シヤ。弘化二年乙巳九月朔日書之
波々伯部氏熊藏ニ申來(事脱カ)ル。水野荒次郎ニ事も同様。岸惣左衛門ニ事も同様、
靈明院殿法事ニ付、帯刀代拜ニ參ル。
詩經松波彌次郎申上之。万右衛門いさす。乗馬いさす。五ツ時過寢ル。

九月朔

七(九カ)月朔晴

今朝目覺七ツ半時、六ツ時打二寸廻りニ供揃ニ而登城。成嶋先生ニ面會。成瀬隼人正、西筑前守ニ呼、鎰丸殿輔翼ニ儀相頼ム。細川兵部大輔參勤ニ御禮、留守居相殘ル。細川越中守へ參堂ニ久庵ヲ以テ相斷。文左ニ通リ

鎰丸様輔佐のこと

先日以久庵御沙汰之趣、於越前守忝御深志之御事奉多謝候。御緣家之儀ニも候間、行末毎々往來、只今手前儉約中、貴殿ヲ招請申事も不相叶、貴殿之方へ參候も御氣之毒、此度之所ハ御斷申入候。

出仕御斷

紀伊殿　松平攝津守　松平左京大夫　松平大學頭
松平中務大輔　堀大和守　南部甲斐守　松平兵部大輔
榊原式部大輔　松平左兵衛督

ソレヨリ西城へ登城

謁　出

戸田淡路守　牧野河内守　稲生出羽守　永井眞之丞

水野甲子二郎

九月朔日

松榮院様を訪らる

退城より神田橋へ參ル。歸宅九ッ半時打壹寸五歩廻り。長爐之間ニおゐて、明日之献上之時服拜見。皆川多左衛門罷出申候ハ、今日尾州へ御使せん鯛一折進物御家督之御悦也、其節此方參候事問合、五日頃參候やう申ニ付、五日ニ罷越。詩經致す。鎗術いたす。五ッ半時過寢ル。

鎰丸様輔佐に付ての御依頼狀

中西氏へ口上

先般ハ御遺領無御相違目出度。鎰丸殿御幼年之御事故、萬事御心付ケ、御學問邊、御行狀之御事、御心付キ次第各方可申上候。

成瀨隼人正へ

先般御遺領無御相違目出度奉存候。鎰丸殿御幼年之御事ニも候へハ、萬端御心付ケ被成、別る其　御家之御儀ハ、　公儀ニ被差續候る之御身分なれハ、

何分御明君と御成り被成候半而ハ、一向不相濟、外々之御家臣とも違、其許之義ハ　御附屬之事ニ候へハ、猶又御平生之御動靜、御學問邊厚御補翼被申上候樣御賴申候。

〆

巍光院樣三回忌

帶刀用狀之内より左之通り有之

來月四日　巍光院樣三回御忌ニ付、御當日朝於　運正寺、御法事御執行ニ付、被備物左之通り

御香奠　金貳百疋

貞照院殿御香奠　金百疋

銀五枚　右御法事料

此度用人へ被仰出　月日八月廿日

菅沼市左衞門差加

市橋環藏

奧村良筑の養子許可

養父隱居 家督被下大番入

眞下宗圓弟、奧村良筑へ養子願之通り、八月五日申渡之。

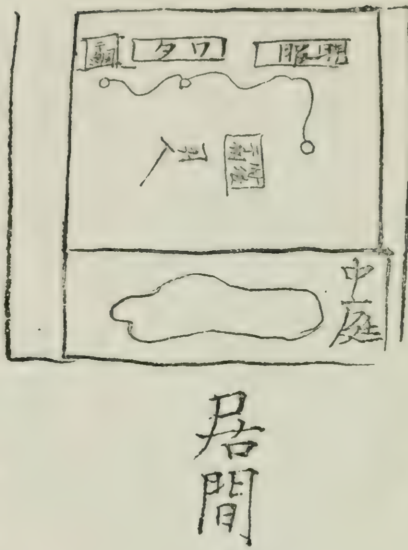
國枝藤兵衞妹、小笠原土用犬丸家中小笠原多八郎と申者へ緣組願度段申來ル、宜段申之。

岸惣左衛門娘、有馬日向守家中谷川藤左衛門へ緣組願。八月五日申渡之。

小嶋逸八御内用ニ付、先達る加州粟ヶ崎へ參ルゝ段申渡ルゝ得共、此度差留。右廿九日ゝ事。

二日曇小雨

今朝目覺六ツ半時、其外替ること無之。半右衛門罷出ル。



神田明神祭禮番附出ルニ付、一位様、右衛督様、千重姫殿、純姫殿、筆姫殿、よミ井との幷松榮院様、謹姫様へ進上申候。

御代拜歸り皆川多左衛門罷出、申上之。

今朝拜領ゝ時服頂戴。

九月二日

公方様 右大將様に重陽ニ付、時服ニ宛献上、使者聞番、

白綸子 二

熨斗目 二

菊池爲三郎のこと

但綸子ノ方紅裏

御簾中様へ同断ニ付

白銀　三枚

同日重陽ニ付

公方様ゟ老女衆奉文を以時服二拜領

右ニ付御城へ罷出候ニ付、波多ノ頼太郎、堀蓮之助拜見ニ罷出候。孫八罷出申達ス事、左之通り、菊地爲三郎之儀、ヶ様昨日及返答候段、申達之。

先達ゟ委細御物語有之候書取弐通、篤と致披見候。有志之御方悲歎之次第、實ニ左も可有御座儀、忠情之至、先方之心底乍慮外、深く致感佩候。素方　水戸様御精忠ハ申、若上ゟ御慕被遊候儀故、當時之御運ヒ、不淺御遺憾之儀承知致居候得共、寄以厚く致熟慮候得共、元来並之御方と違、公邊御續柄と申、格別重き御方様之儀ニ候得ハ、中々不容易、卒爾ニ御取次も難致候。仍之先方書取ハ、先日致返却候間、宜御挨拶御申述有之候様、致度存候。以上

九月二日　　大方孫八

高野半右衛門様

島田清左衛門罷出申候ニ、今年も御正面、竹相さて候哉之伺立候様申之。詩經致す。弓術稽古。五ツ半時寢ル。

申渡之覺

水野越前守
名代野田甲斐守

其方勤役中、不正之取斗共有之段、追々達　御聽候。依之急度も可被　仰付候處、出格之以　思召、御加增一萬石、本地之内一萬石、并居家敷家作共被召上、隱居被　仰付、下屋敷に罷越致蟄居、急度愼可罷在候。

越前守嫡子　水野金五郎
名代戸田豐後守

其方父越前守、勤役中不正之取斗共有之候ニ付、隱居被　仰付蟄居致し、急度愼可罷在旨被　仰付候。其方に爲家督五萬石被下、應之間詰被　仰付。追ゐ所替可被　仰付候。差控可罷在候。

堀大和守
名代榊原隱岐守

其方勤役中不正之取斗共有之段、追々達　御聽候。依之急度も可被　仰付候處、出格之以　思召、御加增七千石、本地之内三千石被召上、隱居被　仰付、逼塞仕可罷在候。

大和守嫡子　堀左近將監
名代内藤遠江守

其方父大和守勤役中、不正之取斗共有之候ニ付、隱居被仰付、逼塞仕可罷在旨被　仰付候。其方に爲家督壹萬七千石被下、前々之通柳之間席被　仰付、差扣可罷在候。

右於戸田山城守宅、老中列坐同人申渡之。大目付土岐丹波守、御目付石谷鐵之丞相越ス。

九月二日

九月三日

三日朝曇夕晴

今朝目覺六ッ半時、其外替ることと無之。半右衞門罷出候。

水野主計罷出、鱸長右衞門弟芳吉儀、横井二郎右衞門養子ニ相願、御内意相伺之、表願出候樣申之。

嶋田清左衞門罷出申候ハ、明日晩立通り飛脚、道六(中)日振差立候段申之。御家老御用ニ付るゝ事也。八ッ時ゟ灸事いたす。

灸事

甲州の葡萄到來

御鶉支配

田安ゟ、甲陽御菜地とふどう頂戴。孫八罷出申候ハ、明後日染村ニ、御拜領之時服綾織頂戴被仰付候樣申之。皆川多左衞門御ッ支配之儀、今日申渡之段申之。

又一位(たやす)樣御儀、十一日靈岸島へ可被爲入候所、御故障之譯合有之候ニ付、十四日十八日之内可被爲入積。森六大夫へ相達之。五ッ半時過寢ル。

門出入請帳
芝居書付
神田祭

四日小雨或ハ晴

今朝目覺六ッ半時、其外替ること無之。半右衛門罷出ル。目付土屋十郎右衛門罷出、門出入請帳、見セル。十郎右衛門申候ハ、芝居書付、御覽ニ入れル事有之ル哉と云ゟら、見ぬと返答す。則御覽ニ可入旨申之。一覽いたす。島田清左衛門罷出、神田祭禮、松平志摩守殿被參度段申之。其通り御出被成ル樣申之。奉行西尾源太左衛門召呼、勝手向ヽ儀承ル。成嶋先生被罷出、書經講義有之。柔術いたす。馬術稽古。飛脚出立。五ッ半時過寢ル。

明日常磐橋へ罷出ル名元

松榮院樣御附
倉橋
染むら
同右筆
いの
同次
か瀬
呉服間
さち

同三ノ間　た満

同末頭　壹人　さま

同仲居　壹人　哥仙

同使番　壹人　志のぶ

右之通り

九月五日

五日好晴

尾張家へ參る

今朝目覺六ツ半時、其外替ルこと無之。半右衛門罷出候ニ五ツ半時打ニ付廻りし供揃ニる、尾州殿へ參上。先方手續左之通り。小書院へ通り、成瀬内記ニ面會、愈御勇健被成御座、就中先殿ハ、御遺領御相續被仰出、目出度、右御歡申入候ニ前大納言様御始一も宜シウ。委細可申上旨ニて退去。引續津田縫殿ニ逢。鎰丸様ニも彌御勇健目出度、先殿ハ御遺領御相續被仰出、重疊之御儀、今日ハ御對顔宜シウ。縫殿申、鎰丸様へも色々被爲進、御滿悦被遊候旨申之。此方行届かぬと申之。程合ニる、御居間書院へ通り、御對顔、凡て先日之通り、人拂有之。

鎰丸君と御對顔

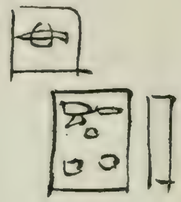
池田新太郎の話

尾張名所圖會拜受せらる

池田松平新太郎少將殿、終夜寢タられす、經學ま志セられ候儀御嗜、其外色々敎訓いさす。鈴木彈正申候ハ、先源懿様ゟ尾張之國名所圖繪被爲進候哉と云、此

方承知不仕段申候。依之鐙丸樣ゟ拜受。交肴付。程合こゐ退去。菊之間へ
參り、貞愼院殿ゟ長尾監物罷出、御菓子頂戴、御料理頂戴。
ナます、平、汁、飯、燒物御吸物一種之

附錄　尾州樣こゐも、嚴御省略こて、御馬も五十疋之所、廿五疋こ相成申候由。先公奢侈、家來こても迷惑と見へて、五十日こも不相立内、改革可致段抔申述之。



神田橋御住居の老女等來る

菓子も出て、程合こて退去、歸宅九ツ半時二寸五歩。御住居之老女、倉橋、染村初數人參ル。乘馬も見セル。色々饗應。染村へ綾織遣す。これそ先日ゟ御拜借之儀こ付、心配いさし候所ヲ以遣之。染村儀も悅顔之。

松平大和守樣ゟケ樣申來ル、

彌御安泰被成御座、珍重思召候。將又御次男駒七郎樣、近々御嫡子こ被成御願、御願之通被　仰出候上そ、引續　御目見御願可被成と思召候。依之爲御相談、以御使者被御進候。　御心附之儀茂被成御座候ハヽ、被仰進候樣被成度思召候。其節そ方々御心添被進候樣、御賴思召候。此段宜申上旨被仰付候。　御惣容樣に茂被仰進候。駒七郎樣ゟも御同樣被仰進之候。

九月

尾張ゟケ様申來ル

以手紙致啓達候。彌御安全被成御勤珍重奉存候。然ハ今日ハ緩々御對顔被成、御満足思召候。其節御直々被進相成候御品々、御肴添相廻申候間、宜御取計可被下候。

右可得貴意如斯御座候。以上

九月五日

御手紙拜見仕候。愈御安健被成御勤仕、珍重御義奉存候。然ハ今日ハ緩々御對顔被爲在、御大慶ニ被奉存候。其節御直々被進ニ相成候御品々、御肴添御廻し被下候御紙面之趣を以、直様申伸候處、殊之外御喜悦ニ而、段々御懇志之義共、厚々思召候。此段御手前様迄御禮旁、能々可得貴意旨御申付ニ御座候。右貴答迄如斯ニ御座候。

以上

九月五日　　松平源太郎

津田縫殿様

五ッ半時寝ル。

九月六日

六日晴

今朝目覺六ッ半時、其外替ること無之。半右衛門罷出候。

十三日ニ阿部伊勢守殿幷お謹殿、中ノ郷下屋敷へ被參候由、駒野始ゟ內々申來ル。右ニ付若、田安樣十四日ニ被爲入候へ者、レン日之儀ニ而、支度整兼候間、十八日頃ニ被爲入候樣、內々き井の方迄申遣す。返書不參。

細川家より土產物來る

松平源太郞罷出、細川兵部大輔殿、此度參　覲ニ付、土產物到來、鐔貳組、佐賀關鰯一曲到來。

尾張家の鈴木津田等に物を贈る

島田淸左衞門罷出、鈴木彈正津田縫殿ニ、ケ樣御仕向。此譯合者、先日ゟ段々市ケ谷館へ參り、色々世話ニ相成候ニ付、ケ樣取扱候段申之。

津田縫殿
鈴木彈正

七子紬二疋雲丹五合
三段交肴一折
右御用人ゟ手紙添差越し申候

江口長阿彌
金五百疋雲丹三合

近藤順阿彌
右同斷

右御留守居ゟ右同斷

木綿御寢着のこと

鈴木主稅罷出、夜分御寢召之儀ニ付而、是迄絹差上度、奧ノ番共ゟハ申之。乍然、此方存候處、木綿と云へ者、何ニ而も木綿、寢着ニも木綿と申候得共、主稅兩人孫八とも相談し、ケ樣ニ奧ノ番へ可申旨相達之。

御平常御寢召之儀も、絹木綿ニ不拘、都而御紋無之御召物等、何ニ而も被為召候間、
新規御出來之節も、右之心得ニ而、御麁末之御在合物等調進し、差上候様可申候。
但御くるミ之儀ハ是迄之通り絹類ニ而指上可申事。

御領分
越前國豐田郡田野村
百姓　彦左衛門

右之もの青山大膳亮領分、越前國井口村與八郎悴甚左衛門ニ、横領取候金一兩御札
都合貳貫四百四拾目分、領主役場ニ取上有之候間、今般呼出、右次第可申渡處、直濟相
出候も可致難儀候間、右役場方懸合可引渡候旨、領主家來江相達置候間、受取次第彦
左衛門江渡遣、證文取之可差出候。
巳九月

田野村百姓の件

松波彌次郎罷出、詩經いとす。中村政右衛門罷出、鎗術稽古。明日廻讀可致所、
下見出來兼候ニ付相止。
阿部伊勢守殿、十三日ニハ又御差支出來ニ付、彌御斷。右ニ付今朝逸井へ遣し
候儀も有之候ニ付、麁末ニ認、伊勢守殿被斷、十四日御差支無之旨、早々申遣之。
五ッ半時過寢ル。

九月七日
具足修理成る

七日雨

今朝目覺六ッ半時、其外替ること無之。半右衛門罷出ル。孫八罷出、御具足御修理相整ルニ付、二領見セル。島田清左衛門罷出申ルゆへ、明日　浚明院様御靈前へ、五ッ半時過ゟ御供揃ニる御參詣相伺フ。公方様御同所様御忌日ニ付、五ッ時ゟ御供揃ニる御參詣。松波彌次郎罷出、詩經いたす。弓術稽古。おゐ井殿ゟ方々、多分　一位様十八日ニ被爲入ル哉ゟ旨申來ル。十四日ニハ不相成由。五ッ半時過寢ル。

九月八日
上野に御參詣

八日小雨

今朝目覺六ッ半時、其外替ること無之。五ッ半時ゟ供揃ニ而、上野　浚明院様御靈前へ參詣、歸宅九ッ時へ懸り。皆川求馬罷出、淨光院殿增上寺天德寺御代拜申上之。明日登城例刻ゟ段、嶋田清左衛門申上之。歸還、田安へも參ル、再供揃ニる。

田安へ參る

成嶋先生書經講義。居合稽古。五ッ半時過寢ル。

九月九日
神田祭見

九日晴

今朝目覺七ッ半時、其外替る事無之。六ッ半時ニ登城。彌祭禮ニハ、大和守、佐

渡守、志摩守罷越。

攝津守悴松平中務大輔歳廿一祭禮見物致度旨申之。此方申、手前儀も當時專儉約中ニ付、御客樣方御斷申上。大和守、佐渡守、志摩守ハ同性(姓)ニ候間、是ハ宜、他御姓も御方々ハ、御斷申上候と云之。推而も申之、左樣ニ候へ共、時候御見舞も御かどこる、御出被成、大和守へ用事有之候旨ニて、見物所へ參り、一應對顏も上、すはり込申候心得。御家來ハ、御無沙汰相願申候。先を承知す。

物のこと

西城御登城

西城へ登城。

(覺書二通)

松平若狹守
戸田淡路守
堀　伊賀守
水野甲子二郎
戸川中務少輔

九月九日

九月九日
出仕御禮

松平攝津守
松平修理大夫
細川越中守
松平陸奥守
松平大學頭
松平播磨守
細川兵部大輔
南部甲斐守
松平左兵衛督

神田橋へ參る
新米の儀
田安へ參る
田安屋敷繪圖
筆姫樣短尺
九月十日
綱目讀誦
銀主に謁を賜
鈴木主税御稽古の時間を定む
九月十一日

退出掛、神田橋へ參ル。 歸宅九ッ時懸り。

假御座ミ間ニおいて、新米例ミ通相祝之。 奉行西尾源太左衛門賄番鈴木仁大夫 出席天方孫八、島田淸左衛門、

九ッ半時二寸廻りニる田安へ參ル。 民部卿樣御頭痛氣ニ付御斷 一位樣御始御機嫌能奉御悅ル。 田安御屋敷惣繪圖拜借。 筆姫樣御短尺御出來。 ミ井ゟ謹樣へ御細工物進上也。 歸宅五つ時二寸五歩 直ニ寢ル。

十日晴

今朝目覺六ッ半時、其外替ルヿ無之。 半右衛門罷出す。 綱目讀誦す。 孫八罷出申達ル ハ、西尾源太左衛門相達ル ハ、銀主へ御目見、御乘馬拜見被　仰付ル樣相達之ニ付、松ミ間ニおいて御目見御馬方ミ乘馬拜見と相伺ミ、其通りと申之。 松波彌次郎致す。 鈴木主税罷出、明日ゟ是迄ミ通り、彌次郎九ッ半時、御稽古八ッ時相伺之。

劔術稽古。 馬術稽古。 五ッ半時寢ル。

十一日曇

今朝目覺六ッ半時、其外替ること無之。 半右衛門罷出ル。 島田淸左衛門罷出、

九月十二日

探源院様の靈前に參詣

矢島勝山に御目見

輪講々師桑山華陽

九月十三日

飛脚着國許無事

荒木密太郎のこと

野村次郎

明日五ッ半時ゟ供揃ニる、探源院殿御靈前へ御參詣、相伺之。矢島七郎右衛門到着ニ付、明日御歸殿掛御目見。勝山新左衛門同斷。松波彌次郎今日ゟ九ッ半時ニ罷出、詩、經申上。中村政右衛門罷出鎗術稽古。五ッ半時過寢ル。

附錄　猶帶刀不快不罷出段、孫八申上之。

十二日晴

今朝目覺六ッ半時、其外替ること無之。

五ッ半時ゟ供揃ニる、探源院様御靈前へ參詣。歸殿ゟ節矢嶋七郎右衛門勝山新左衛門到着御目見。高畠甚五左衛門忰十九才、死去ゟ様子昨日承之。四ッ半時打壹寸五歩廻り歸宅。

五ッ半時ニ輪講。講師桑山華陽。弓術稽古。

阿部殿御出、先廿八日ニ相極候段、駒野罷出申上之。五ッ半時過寢ル。

十三日晴

今朝目覺六ッ半時、其外替ること無之。半右衛門罷出候。四日晩立道中六日振、大井川ニる二日滯留、朝着。國表先靜謐悦候。目付用狀見セル。荒木密太郎阿部百次郎ゟ事申來ル。荒木密太郎上方筋へ立退候由。野村次郎太郎不

太郎のこ
上

行狀之次第、左之通り

野村次郎太郎養母ハ、ミゑと申、中宿ニ居候由。松本何煮賣いさし候後家、ゆがと申者ハ、兼々懇意ニ有之候由。百姓二人折々御城下へ罷出、ゆかミ所ニ而食事いさし、ゆがへ申候ニ、とこぞよき女有之ニ、知ラセ候樣申付、則ゆが、次郎太郎養母ミゑへ其事相噺、百姓へ引合、追々馴染ミ、百姓も密會等も折々いさし候由。又ミゑ引合せニ而ハまさ一人之百姓へ、これも町人之娘ツキと申者ヲ、密通致サセ、右ゆが故障これあり候故、外町人宅ニ而、密會致サセ、屏風圍之内ニて呑酒いさし居候所へ、町組吟味ニこし候由。右次郎太郎義も誠ニ勝手向難澁いさし、これも引合之女有之由。故聞繕見セル。

松波彌次郎罷出近思錄申上之。居合稽古。乘馬稽古。

（用狀）

口達

御家中之面々他行之儀、日歸ニ而も公料、他領之分ハ、夫々御法通も有之儀ニ候處、近來心得違之族も有之趣相聞候。以來右躰之儀無之樣被　仰出候間、可被得其意候。
以上

八月二十四日　　御目付

追而組支配有之面々ハ、右之趣可被申渡候。

以手紙致啓上候。然者　御遺領御相續被　仰出候爲御祝儀、先頃て以御使者御内々鮮鯛一折御進上有之、御滿足被　思召候。右ニ付御挨拶被遣物之儀、當時格別御儉約中ニ付、押付進上物有之向江御挨拶被遣物て無之儀ニハ候得共、當時格別之御續柄ニ付、御内々鮮鯛一折爲御挨拶被遣候。右て以御使可被遣之處、前顯之通、諸向江御儉約中御挨拶被遣物茂無之全御内々之儀ニ付、御使て不被遣候間、此段貴樣迄宜相達旨被　仰付候付、如斯御座候。以上

九月十三日　　津田縫殿

松平源太郎様

以手紙得貴意候。然て　御遺領御相續被　仰出候爲御祝儀、先頃以御使者御内々鮮鯛一折御進上有之候ニ付、右爲御挨拶、御内々鮮鯛一折被進之。右て當時格別之御續柄之御譯合、御細書被仰下候趣、早速申達候處、段々　御懇志之御儀共、厚忝被存候。

右御禮之儀、御手前樣迄宜得貴意旨、御申付ニ御座候條、如是御座候。以上

九月十三日　　松平源太郎

津田縫殿様

松平大和守殿御二男駒七郎儀、御願之通り御嫡子ニ被成四品之心得ニて〈一〉

郎嫡子と定る

松平佐渡守より中の郷御屋敷借用のこと

九月十四日

野村次郎太郎事件

むね、被仰渡之。　五ッ半時寝ル。

(用状)

松平佐渡守様御留守居河島與一右衛門を以、大道寺七右衛門迄中之郷御屋敷御借切にて、眞田信濃守様御同道御出被成度由御頼有之。　仍て左之御趣意を以御斷、

来春　松榮院様中之郷御屋敷へ　御遊慰之御沙汰も有之、此節少々御手入中にて、職人手を引候て指支之筋も有之、且伊勢守様御夫婦様、是迄同所御屋敷御承知無之に付、當年中歟來春かに御見物之御積りも有之候。　當年御借切り御出の儀て、御斷被成候。　明年に至り、御指支無之時節に相成候ハヽ、其節御案内可申上候。

因て中之郷御屋敷ハ、御歴々様御出之儀て、一寸　松榮院様へ申上候儀　御座候故、甚六ケ敷御都合共御座候。

十四日曇

今朝目覺六ッ半時、其外替ることと無之。　半右衛門罷出候。　家老用承ル。

(用状)

御書付

野村次郎太郎に申渡覺

其方養母みる儀、度々町家に罷出、不埓至極之趣相聞、侍之操義無之に付、侍格御削に被成、　御城下立退被　仰付候。　且又其方儀も兼て取締り方も可有之之處、不参届

其上心得違之趣相聞不調法之事ニ付、依之閉門被　仰付候、急度相慎可罷在候

以上

月

覺

小算格
又下役
吉田久太郎

右之者兼る行狀不宜心得違之趣相聞候ニ付、押込可被　仰付哉、

荒子
若嶋惣八郎
倅　今吉

右之者其心得違之趣有之ニ付、押込可被　仰付哉、

出合宿出入者の處分

岩野村
長兵衛

右之者兼る被　仰出も有之處、度々出合宿に罷越、心得違之趣、其上掛り合之身分をも存居、致寄會候趣、不埒至極ニ付、御城下幷居村追放可被　仰付哉、

上淨法寺村
五郎左衛門。

右之者兼而被　仰出も不辨、度々出合宿に罷越、心得違之趣ニ付、押込可被　仰付哉

七寶師
宗閑養子
捨三郎

右之者兼而行狀不宜、心得違之趣相聞候ニ付、押込可被　仰付哉

松本下町孀美濃屋
ゆか

右之者、兼而被　仰出も有之處、出合宿いたし、其上女手引等いたし候趣、不屆至極ニ付、御城下追放可被　仰付哉

萬町古木屋清右衛門妻之妹
つき

右之者、兼而被　仰出も有之處、度々出合宿に罷出、心得違之趣ニ付、押込可被　仰付哉、

一島田清左衛門罷出、九鬼長門守殿祭禮見物被參度相斷、中務殿屋敷へ被參候事無之、田第ニて見候由。

土田幸圓　高橋榮德

鈴木主税罷出、土田幸圓可罷出筈之處、阿州へ三河殿被越候故、高橋榮德參ル。

成嶋先生講義。萬右衛門いとす。五ツ半時寝ル。

九月十五日

十五日曇

今朝目覺七ツ半時、其外替ること無之。六ツ時過ゟ供揃ニて登城。昇營中、左東長門守殿ニ面會いたし、長門守殿祭禮見物致度旨被申候得共強而相斷、又日向守殿ニも、今日祭禮ニ付、御出被成候やう申之。退城掛神田橋へ參り、對顏、歸宅四ツ時二寸五分。

神田祭見物に來客

拙屋へ祭禮爲見物、松平大和守殿、松平佐渡守殿、松平志摩守殿、松平日向守殿也。大和守殿志摩守殿ゟ肴到來。此方ゟ種々饗應有之。

松榮院樣より重詰來る

松榮院樣ゟ御重詰戴。大和守殿始へ相贈。祭禮濟夜五ツ時頃　此時分四客歸宅。

淺井八百里祭禮の詩

淺井八百里祭禮ニ付詩ヲ作。よき志ノ詩故よろす。

九月十五日陪觀　神田祭、有感而作

祭時何必愛千金、壯觀豪華傳到今、
如醉如狂群庶態、欲聾欲眩丈夫心、
媚曲艶聲樂亦滛、知否　明神祠祝侶、
不容誠敬不來歆、

臣淺井昭拜

大和守領分の水害

九月十六日

五ツ時過寢ル。

（用狀）

以手紙致啓達候。然者大和守樣御領分、武藏國比企郡入間郡高麗郡村々、當七月中滿水荒所有之候處、尙又去月廿八日大風雨ニて、川々滿水堤切所等出來、田畑幷民家水入潰家等左之通

一田畑石砂水入　百三十ケ村　一潰家　五軒

一民家石砂水入　千七百二十六軒　一堤切所　六ケ所

一堤半欠所　貳ケ所　一蛇籠大〆切切所一ケ所

一川除杭出籠出流失百六十五ケ所　一人馬怪我無御座候

右之外田畑荒所、川欠、圦樋等押拂、幷破損所、堤欠所、川除抗出、籠出、橋損所、用水路押埋之義ハ、未相分り不申候。

右之通猶又破損所、民家幷田畑水入出來、尤御損毛高之義ハ、未相知不申旨、御用番へ御屆被成候。右爲御知被仰進候。此段各樣迄自拙者宜得御意旨、被仰付候間如此御座候。以上

九月

太田半右衞門

嶋田淸左衞門樣

御請合中樣

十六日曇

田安家より靈岸邸へ御入來のこと

九月十七日

御遺訓拜誦

大般若經を修す

九月十八日

田安一位樣等靈岸邸に御入來

今朝目覺六ッ半時、其外替ること無之。半右衛門不快。綱目獨誦す。
松平佐渡守殿ゟ肴到來。
島田淸左衛門罷出、明日大盤(般)若御祈念、取斗ゟ段申之。松波彌次郎罷出、詩經いさす。鎗術稽古。馬術稽古。彌靈邸へ十八日兩君被爲入候事。此方も六ッ半時過ゟ供揃ニ而、靈園へ參ル。
廿二日田安御方々樣御登城ニ付、御淋しく被爲入候故、此方ニも罷越候樣申來ル、內々。五ッ半時寢ル。

十七日曇夕雨

今朝目覺六ッ半時、其外替ルヿ無之。半右衛門罷出候。御遺訓拜誦。例ゟ通大盤若有之、參拜致す。
松波松濤詩經申上之。弓術稽古。
今日孫八初靈園へ見分罷越、御附森六大夫罷越。五ッ半時頃寢ル。

十八日晴

今朝目覺六ッ時、其外替ること無之。五ッ時ゟ供揃ニ而靈岸島中屋敷へ相越す。一位樣右衛門君九ッ半時頃靈岸亭屋敷へ御越、色々饗應。釣御船歌、網柿

御なけ物ニる手前水主之者ニ被下之。御茶屋へも被爲入、御菓子御吸物御酒御三度目上り。委曲之義、右筆部屋御留記ニ有之。御歸殿切六ッ時頃。松井庄九郎田安へ御使相勤之、天方孫八右同斷。此方歸宅六ッ半時へ懸り、五ッ半時頃寝ル。

九月十九日

十九日雨

今朝目覺六ッ半時、其外替ること無之。半右衛門罷出ル。

明日飛脚、六日振ニ相立候段相達之。

御領分損毛書

島田清左衛門罷出、御領分損毛書見セル。且御預所之儀も、申達之。

（用狀）

拙者領分越前國、當春以來相應之氣候ニる、稲生立宜趣ニ候處、五月廿日夜大雨、川々出水、窪所之分水下ニ相成痛候上、土用前ゟ雨天勝ニる、六月十六日ゟ同廿一日迄雨降續、九頭龍川足羽川共滿水、別る日野川筋之義ハ、山崩等有之、寛政元酉年以來之洪水ニる水勢强く、田地圍堤川除等數百ヶ所押切、川欠永荒所出來、田畑砂利土押入等夥敷有之、往來道橋所々押流シ、既ニ旅人往來も相滯申候。右等之次第ニて窪所之田面數日水浸ニて、水腐株絶等出來申候。其上七月上旬俄ニ冷氣相催、雨天打續時候殊之外不宜、同十二日ゟ霖雨、就中十五日ゟ十七日迄大雨ニて、亦々川々滿水、先達る之出水後、堤川除等未補理不行屆内故、田面に水溢、別る痛强き處、冷氣勝ニる蝗虫蟇虫等致增長、作毛一躰相後レ、二百十日以後ニ相成候得共、草生のミまて出穂無之

田面茂有之、右躰度々之水損虫痛等ニ而、夥多分之損毛ニ相成可申儀御座候。然処
之儀ハ相知不申候得共、此段先御届申候。以上
巳九月二十日　　　　　　　　　　　御名

越前國御預所四萬六千石餘、天保十四卯年ゟ當巳年迄三ケ年間を以、是迄之通御預
被仰付、當年限ニ御座候。如何相心得可申哉、此段相伺申候。以上
九月　　　　　　　　　　　御名

反町源五衛門等に物を賜ふ

九月二十日 筆姫様御登城

源懿公の御遺物

反丁源五衛門初へ、昨日ハ慰問ニ下緒一ッ、被下之。御近習番初へも御取扱有之。松波彌次郎罷出、詩經いたす。柔術稽古。五ッ半時過寢ル。

廿日朝晴夕雨

今朝目覺六ッ半時、其外替ること無之。半右衛門罷出候。筆姫様へ、明後日御登城ニ付、其節ハ御心得方認指上候。別紙秘藏箱ハ内あり。飛脚差立。成島先生書經、武成ハ編講義。（成島先生、明後日靈岸島御中屋敷へ被参度段相願之）源懿公（尾州）爲御遺物、置物小簞笥印籠二參ル。五ッ半時過寢ル。

九月廿一日

海福敬翹

九月二十二日

將軍世子家祥公門前御通過

成島良讓靈岸邸に參上

廿一日曇

今朝目覺六ッ半時、其外替ること無之。半右衛門不快不罷出。綱目獨誦す。孫八今日青山殿へ出候ニ付、御用捨相願之。九ッ半時ま廻讀いたす、海福敬翹講師。天方孫八迄、竹中織部ゟ明日指支も無之候ハヽ、田安へ四ッ半時頃迄ニ參候やう、諾了、彌參ル。こなと四ッ時へ二寸前ニる供揃いたす積。島田清左衛門へ申す、明日羅漢寺筋へ御成ニ付、田安相斷。六ッ時二寸五歩ニ目覺、雄藏ゟ相伺之。鎗術稽古。馬術稽古。大和守殿ゟ直翰到來、交肴野菜物進物。卽答いたさす。明日返重いさす積。五ッ半時頃寢ル。

廿二日晴

今朝目覺六ッ時二寸五歩、其外替ること無之。半右衛門罷出候。六ッ半時過ニ御供揃ニる、右大將(家祥)樣羅漢寺筋被爲成、門前通御ニ付、松ニ間へ相詰、還御七ッ半時過同通御ニ付相詰、

成島先生靈岸島中邸へ爲保養被越。淺井八百里罷越。

明日銀主御目見、松ニ間ニおいて之。乘馬御馬方乘母衣も致候積。

(用狀)

明日御目見の人々

九月廿三日八時揃

高三百石　石井太郎左衛門
同　百石　仙波太郎助
拾五人扶持　中井新右衛門
拾人扶持　原　嘉右衛門
高三百石　橋本清右衛門
高百五十石　三村清左衛門
同　百石外五人口　鹿島利右衛門
拾人扶持　倉　又左衛門
拾人扶持　三村清次郎

右於長爐之間御立掛り
御目見被　仰付、御用人披露之、御側御用人御取合申上之、畢而　御馬拜見被　仰付、御馬方相勤之。

九月廿一日阿部伊勢守殿御渡候御書付寫二通、大目付堀伊賀守殿より來。

馬喰町御用屋敷において、御貸出相成候御貸附金拜借之儀に付、口入或は世話人抔と申成、其向に寄候るは掛り役人之由品能申僞、借方江及相對、謝禮等申請候族も有之候趣相聞、不屆之至に候。右樣之儀は、一切無之事に候條、向後如何敷もの於有之者、月番之町奉行江早速可相達候。

右之趣向々江可被相觸候。

九月

靈岸島屋敷奉行等に物を賜はる

覺

一今度於東叡山、御法事中前々之通、式日立合内寄合可被致候。勿論拷問手鎖或ハ籠舍繩掛候類之儀ハ可爲無用候。

一御法事中、普請鳴物祭禮法事等、不及相止候事。

以上

九月

當月番
嶋田清左衛門
前月番
皆川多左衛門へ
靈岸島御屋敷奉行
市川市郎左衛門
御作事奉行
齋藤二郎右衛門へ

松波彌次郎詩經申上。弓術稽古。次乘馬有之。

（覺書）

覺

むら目	貳
蚫	二ツ
海老	三ツ
いなだ	貳ツ
こち	三ツ
平目	貳枚
蚫	貳ツ
こち	壹ツ
いなだ	壹ツ
ふき	二わ
葉生が	二わ
まつ茸	拾五
くわへ	貳わ

右靈岸嶋御屋敷へ　御兩卿様御立寄ニ付、先日ゟ格別致心配いニ付被下之

海老　貳ツ
あ己ひ　貳ツ
葉生が　貳己

河合五右衛門
草尾鉦太郎へ

右去十八日靈岸嶋御屋敷江　御兩卿様御立寄之節、御人少之處、御供御先番兼御手長等兩人ニて持切相勤いニ付、被下之。

御會讀御相手
淺井八百里
桑山彦助
海福猪兵衛
松波彌次郎へ

海老壹
いなだ壹
宛

右被下之

大奥へ

御野菜物品々

右被下之

〆

明後日田安へ參様申來ル。五ツ半時過寢ル。

九月二十三日

廿三日大風荒雨

今朝目覺六ツ半時、其外替ること無之。　半右衛門罷出候。

（德川鎰丸様家督御禮の覺書）

九月廿三日

一今巳後刻御黒書院に　公方様　右大將様　出御

御家督之御禮

德川鎰丸殿

名代　松平攝津守

銀　百枚

卷物　二十

綿　五十把

御刀　寶壽　代金三十枚

御馬　二疋

右御目見

御　斷

紀伊大納言殿

水戸中將殿

右鎰丸殿御家督之御禮被申上候ニ付　御對顔

松平攝津守

松平中務大輔

右同斷ニ付御目見

鎰丸殿家老

成瀬隼人正

右同斷ニ付御目見

竹腰兵部少輔

政暇日錄　弘化二年九月

鐐丸殿遺領相續被仰付候御禮 尾張前大納言殿使者　神尾□五郎

鐐丸殿家老

巻物五 銀馬代　成瀬隼人正

同　竹腰兵部少輔

巻物三 銀馬代　頭 津田大隅守

同　中西筑前守

御同人家來

巻物二 銀馬代　頭 鈴木彈正

同　橫井孫右衞門

同　津田縫殿

同　成瀬大内藏

同　大野藤十郎

同　頭 細井藤之助

同　松村新兵衞

同　成瀬内記

銀主に御目見

松波彌次郎罷出、詩經申上。

銀主御目見（用人島田淸左衞門、御館入御用達町人共側用人御目見被御付、難有仕合、）ソレヨリ桃川店へ罷越、吸物酒出ヽ積。居合稽古。五ツ半時過寢ル。

九月二十四日

廿四日晴

今朝目覺六ッ半時、其外替ること無之。半右衛門罷出い。島田清左衛門罷出明日田安様參いやう、供揃四ッ半時へ二寸前ニる出之。

成嶋先生書經講義。柔術成島先生被相越遷引ニ相成いニ付延引　五ッ半時過寢ル。

九月二十五日

田安家へ參らる

廿五日曇

今朝目覺六ッ半時、其外替ること無之。半右衛門罷出候。四ッ半時前ゟ供揃ニゐ、田安へ罷越。

△一位様御初盆御機嫌よく奉恐悦い。

鎰丸殿ニも御出被成、御障りこれなくい。

田安御祖先御贈官ゟ儀ニ付、阿部へ申いやうゟ御内用被仰付い。

御二度御膳二汁七菜戴ニ鎰丸殿御初ゐ御入館ニ付、如斯御料理出ッ、

御囃子有之い。

御三度目戴、來月三日田館へ參候やう被仰付。

黛山樓の額

一位様　思召ニる黛山樓ゟ御額拜戴。靈岸島中邸茶屋ニかく無之、ゆのやうな勝景ゟ所よ、かく無之といふそ不副、これを被下いと申事、子々孫々迄

大切ニ可仕事。
鎰丸殿御歸宅六ッ時前頃、尾藩家臣依願早ク歸宅也。
歸宅五ッ半時。直ニ寢ル。

廿六日曇

今朝目覺六ッ半時、其外替ル事無之。半右衛門罷出ル。
一位樣ゟも御内用、孫八へ相談、いつれ近日罷越ル積。老女花井罷出、謹姫殿、中郷へ被參ル儀御斷。伊勢守殿間、依無之ニ。

謹姫樣より中郷へ御出御斷り

明日五ッ半時も供揃ニる、天德寺へ參詣も儀、清左衛門相伺之。
佐渡守殿被參、逢對いさしル。松波彌次郎罷出、詩經いさす。鎗術稽古。五ッ半時過寢ル。

廿七日晴

九月二十七日天德寺御參詣

今朝目覺六ッ半時、其外替ること無之。五ッ半時も供揃ニる、天德寺へ參拜。
歸宅四ッ半時五歩廻り。次乘馬申付。松波彌次郎不快不罷出、故詩經いさす。
狛帶刀ニ面會。千重姫樣御結納有之ニ付、以渡邊長十郎鯣御目錄十參ル、直答。
御見延御顧御催促、御住居明日差出草稿孫八ゟ見セル。五ッ半時過寢ル。

千重姫御結納

廿八日晴

今朝目覺六ッ半時、其外替ること無之。　半右衛門罷出ル。

今廿一日晩立通飛脚、道中常振今日到着。　國表彌靜安ニ。　米價古米六十八匁、

新米六十五匁位。　土屋十郎右衛門御用狀見セル。

松波彌次郎不罷出。　居合稽古。　五ッ半時過寢ル。

飛脚到着福井表の米價

（用狀）

拾遺二十一日飛脚之節ゟ事

九月五日　澁谷權左衛門、左ゟ通被仰出ル旨斷申聞、

昨年御趣意ニ付、御坂拜領被相止ル所、當年ゟ如以前拜領被仰付ル間、左樣可被相心得ル。

福井表に於ける要件

同　日　波々伯部熊藏、今日ゟ御免。

十三日　井上半大夫申聞ルハ、同役山田藤兵衛義、役儀取扱方不念ゟ儀有之ルニ付、遠慮罷在度旨、口上書ヲ以御用番へ相達ル處、伺ゟ通遠慮、譯、密太郎跡榮藏儀、遠慮伺中、右通路料理方野方錂次郎いたし居ル所、故障有之、新番岩佐七九郎通路致度旨、藤兵衛へ相達ル所、

家老へ不相伺、自己ニ差圖いたし、跡ゟ家老へ相達、差圖いたし候
事承、恐入伺書出候由。

十五日　仙石万右衛門儀も、役義ニ付不念之義有之、伺書差出候所、不及遠
慮指扣罷出候樣、譯、

十六日　彦坂又五郎、（山本源左衛門次男）近習番簗田幸八跡申付ル。

同　日　小島宗印そしめ之義申來ル。小島宗印代狩野元照、玉村如琢、大
谷八十郎、大橋右甫、瀨尾權八。

同　日　書院番組生駒彌右衛門養家之弟顯藏（昨年大味川へ参り告申付候人）養有馬日
向守家中醫師合屋鎌輔と申者へ養子ニ差遣ス、家老相伺、其通り
と申之。

同　日　鱸長右衛門弟芳吉儀、橫井三郎右衛門養子願、任。

同　日　新番組富田長左衛門悴他三郎、妻女無之ニ付、松村佐右衛門娘妻
女ニ致度相願、（他三郎と娘と從弟）任。
橫井三郎右衛門ゟも、願同斷。

十一日　牧野彦右衛門奥手傳差ゆるす。

同　日　西尾七兵衛悴祐次郎儀、年頃罷成候ニ付、齋藤數馬妹妻女仕度願、任。數馬方も右同斷。

九月廿九日

廿九日曇

今朝目覺六ッ半時、其外替ること無之。半右衛門罷出候。磯岡龍邸へ罷出、叢君之要之外帶刀罷出用狀見セル。良讓先生書經講義。五ッ半時過寢ル。

九月晦日

晦日朝雨夕晴

今朝目覺六ッ半時、其外替ること無之。半右衛門罷出候。明日例刻登城いさし候段、島田清左衛門罷出申上候。田安御兩卿樣中邸へ被爲入、一統心配いさしい候ニ付、（孫八多左衛門清左衛門、懷中物一、盃一、袖落一、主稅八百里へハ袖落一、枝折一、盃一、多葉粉入一、）以思召被下。來ル四日、松榮院樣西御登城ニ付、朝抔て早く候故、五日ニ參候樣申來ル。阿部殿へ八四日ニ參ル。松波氏罷出詩經申上。劔術稽古。馬術稽古。五ッ時過寢ル。

米價

金壹兩ニ付、白米四斗九合五夕（但百文ニ付六合三勺）中

同　四斗貳升貳合五夕（但百文ニ付六合五勺）下

十月朔日

十月朔日晴

今朝目覺七ッ半時、其外替ること無之。六ッ時ゟ供揃ニる、御本城へ登營。御城

中よて、成嶋先生ニ面會、四日相斷六日ニ相成申候。ソレヨリ、西丸へ登城御用部屋へ参ル。歸宅九ツ半時打二寸過ル。孫八罷出、田安へ明後日參候様。四ツ半時頃ゟ鎗術稽古。彌次郎不致。五ツ時過寢ル。

（覺書）　西丸

阿部能登守　安藤對馬守
土岐丹波守　林　内藏頭
御使番方助　服部　中
十月朔日

十月二日
天梁院様御忌日
輪講

二日晴
今朝目覺六ツ半時、其外替ること無之。半右衛門罷出候。今日天梁院様御忌日ニ付、天徳寺へ皆川求馬御代拜、歸逢。明日四ツ時ゟ供揃ニ而、田安へ參ル。輪講松波正誠講師弓術相止。乗馬稽古。明後日阿部殿へ参候ニ付、若此方乗馬致候義も有之候而ハ最故、致ス。五ツ時過寢ル。

三日曇
今朝目覺六ツ半時、其外替ること無之。半右衛門罷出候。松平源太郎罷出、彌、

阿部伊勢守を訪はれ乗馬

阿部様へ参ル儀申之。四ツ時ゟ供揃ニる田安へ参ル。
一位様益御機嫌能奉恐悦候。昨日五十三間御庭菊花御拝見ニ付、御飾物有之候。一位様ゟ山茶花、右衛門様ゟ松植木之。
帰宅五ツ半時二寸前。直ニ寝ル。

四日晴風

今朝目覚六ツ半時、其外替ること無之。半右衛門罷出候。用人罷出、明日晩立通飛脚、道中常振差立候段申上之。表方ヲ始、江戸詰伺、松平源太郎罷出申之。
佐渡守殿心願ゟ義ゟ事。
八ツ時ゟ供揃ニる、阿部勢州当時家近親揃へ参邸。
乗馬有之。○越前守△勢州

一○越前守 白瀧手馬 △勢州 廣谷
二○越前守 勢州廣谷手馬 △勢州 矢島
三○越前守 同馬木野山 △勢州 手城

以上

謹姫殿へ對面、酒吸物菓子食饗應

歸宅五ッ半時二寸左歩。直ニ寢ル。

今日内用手續左之通り

田安家祖先宗武卿御贈官のことを依頼

謹姫殿化粧之間ニおいて、勢州へ申述候ハ、先月廿五日田安へ私參候節、一位殿被申候ニハ、天保十一年八月日、御側衆水野美濃守殿へ、御先代御贈官願書被差出候所、如何之譯ニ候哉御指戻シニ相成、只今ニ而ハ六ヶ年相立候事故、被差出度存心ニ御座候。彌差出シニ相成候而宜候哉、其許樣迄御内々伺候樣被申付、其上只今ニ而ハ、一位殿老年之事ニも候へハ、尚又於私も相願候と申之。勢州殿、なる程六ヶ年も相立候事故宜、其上此度之御願御尤ニ存候間、彌其筋方御差出シに相成候樣ニ存候。又此方申候ハ、右之趣一位殿へ申聞候ハヽ、可被相悦候と申候。

二又相願申候、私儀成嶋桓之助心願之儀、今日私參候儀承知仕、此方願書差出シ申候。尚又宜クと申之。勢州殿委細心得居可申候と返答す。

〈終〉

十月五日

五日晴

門帳

今朝目覺六ッ半時、其外替ること無之。半右衛門罷出候。土屋十郎右衛門罷、

出門帳見セル。

神田橋へ参らる

八ッ時ゟ供揃ニ而、神田橋へ参ル。　右大将様ゟ花活　松栄様ゟゑんす紅白、南天植木

高畠市郎右衛門悴三次郎、妻女無之ニ付、荒川万吉妹、妻女仕度御内意伺、田邊五大夫悴榮太郎、同断ニ付、長谷部作内娘妻女御内意伺、松平源太郎申之。宜ト申。

（用状）

松平佐渡守兼々心願之儀、別紙之通数例御座候旨、則佐渡守ゟ申上候由。何卒右之振合を以、心願之筋相整候様、於拙者奉願候。以上

十月五日　　御名

十月六日

六日晴

今朝目覚六ッ半時、其外替ると無之。半右衛門罷出す。綱目獨誦す。成嶋先生書經講義。洪範

寛政系譜の御觸

寛政系譜御觸参ル。中村稽古延引。五ッ半時過寝ル。

十月七日

七日晴

今朝目覚六ッ半時、其外替ること無之。半右衛門罷出候。松平源太郎罷出、淨観院殿御法事ニ付、献上物伺。宜ト申之。灸事いたす。馬術稽古。

灸事

天方孫八罷出、明後日田安へ被為入、伊勢守殿ゟ節之模様申上、御挨拶之上、直書

か磯岡ゟ孫八ヵを遣して返答之積。其節松前大之鉢木進呈之積之。

（用状）

十月七日　勝山新左衛門

詰中

表御納戸掛り可被仰付哉

十月七日

一阿部伊勢守殿御渡ニ付御書付寫貳通稲生出羽守殿方來

袖ゟ　大目付

今度　淨観院様御法事中、表向之面々不及參詣候。

十月

袖ゟ　大目付

御菓子類　松平加賀守　同　断　在府之間詰　同　断　堀田備中守

同　断　酒井若狭守　同　断　松平伊賀守

右之通御法事中、爲伺御機嫌　御本丸西丸ヘ一度可有献上候。

一御精進明之御香奠、不及献上候。
右之外在府之万石以上之分も献上物ニ不及候。　尤御法事相濟、御精進明之御香奠、
不及差上候。
右之通可被相達候。
十月

一阿部伊勢守殿へ御呼出、御留守居罷出候處、御書付御渡有之
淨觀院様七回御忌御法事、於東叡山御執行付、御香奠献上之覺
一白銀五枚充　六拾万石以上　　一同　三枚充　三拾万石以上
一同　弐枚充（拾万石より弐拾九万石迄）　　一同　壹枚充（壹万石より九萬九千石迄）
一同　弐枚充　三拾万石以上之嫡子　　一同　壹枚充　拾万石以上之嫡子

右之通以使者、來ル廿六日朝六時文殊樓通被差越之、本坊江可被献之候。　尤
使者熨斗目半袴可爲着用候。
十月

今度　淨觀院様御法事中、爲伺　御機嫌、　公方様　右大將様江御菓子類、御
精進物之内指上申度候。　此段相伺申候。　以上

十月七日　　　　　　　　御　名

五ッ半時過寝ル。

八日晴

今朝目覚六ッ半時、其外替ると無之。半右衛門罷出い。松平源太郎罷出、明日田安へ四ッ時過ゟ供揃ニる、罷越候い段、相伺之。

孫八罷出、〇ゟ事相伺。宜クと申之。

（用状）

〇ゟ事十月八日　　　　　　　　松平源太郎

此度従公邊、御系譜御書上ケゟ儀、被　仰出いニ付、御自分儀御用掛り被　仰付い。

且又別紙名元ゟ通、右御用掛り被　仰付い。其段可被申渡い。

一田川清介儀、　御家譜書抜爲御用出府致居繁勤ニ者い得共、此度御　公邊御系譜御書上ケゟ儀被　仰出いニ付、右御用も取調い様被　仰付い。其段可被申渡い。

別紙

矢嶋七郎右衛門

波々伯部一右衛門

篠原長次郎

右同斷ニ付、　〆　中村八大夫

御自分儀　御用掛り被　仰付候　〆

松波彌次郎罷出、詩經申上之。居合稽古。稽古的內ならし內見。五ッ半時寢ル。

十月九日

九日晴

今朝目覺六ッ半時、其外替ること無之。半右衛門不罷出。綱目獨誦。四ッ時過ゟ供揃ニて、田安へ參ル。

田安へ參る

一位樣益御機嫌能、奉恐悅候。

民部卿樣ニも被爲入候。阿部樣ゟ模樣申上之。

歸宅五ッ時壹寸五步廻り。直ニ寢ル。

十月十日

十日晴

今朝目覺六ッ半時、其外替こと無之。半右衛門罷出候。昨日田館へ參り、御先代樣御贈官願、阿部樣へ參り、都合宜趣　一位殿へ申上、御悅喜被遊候段、勢州殿

側向の稽古的を覧る

十月十一日

勝山新左衛門に賜物

鹽鮎子献上

御風邪

十月十二日

し方へ以手紙申越す。
鹽鮎子籠明日献上ニ付、長爐し間迄見分ニ罷越す。 側向一統稽古的見ル。 觀
術延引。 馬稽古。
五ッ半時過寢ル。

十一日晴

今朝目覺六ッ半時、其外替ること無之。 半右衛門罷出ル。 帶刀ニ逢對、相川友節、牧野彦右衛門跡相伺、勝山新左衛門出精相勤ルニ付、銀三枚ッヽ被下置ル。
鹽鮎子籠献上ニ付、御本城爲拜見、日比彦之丞、笹川熊次郎、鈴木仁大夫、三岡次郎大夫罷越、五ッ時過歸ル。 成嶋先生書經講義。 中村稽古延引。
敬臨館少々風邪ニ付、藥服用カコントウ。
松平源太郎罷出、御奉書御受見セル。 五ッ時過寢ル。

十二日晴　　　　　　鈴元冲

今朝目覺六ッ半時、其外替ること無之。 半右衛門不罷出。 少々感冒いたしルニ付、廻讀ヲ初弓術稽古延引。 孫八罷出申上、

(用狀)

十月十二日

御留守番組勝山新左衛門儀、為失却年々銀三枚ツヽ被下置候。其段可被申渡候。

松平源太郎
西尾源太左衛門

別紙之通被　仰付候。其段可被申渡候。

別紙

奥御坊主
和田友節
友節事友助

和田友節に御加増

小算格ニ御取立、御充行弐石、御増都合拾石弐人扶持被成下、奥御納戸方手傳被　仰付候。

右之通可被申渡候。

半井元沖

執匕元沖葛根湯給ル。松波彌次郎罷出詩經申上。

孫八罷出、一位様靈岸島江被為入候節之御入用見セル。五ツ半時寝ル。

十三日晴　鈴龍澤

十月十三日國許飛脚到着

今朝目覺六ツ半時、其外替ること無之。半右衛門不罷出候。

當月六日晩立、通飛脚今朝到着、國表相替候儀無之候。目付用状見セル。

松波彌次郎罷出、詩經申上。

後藤三右衛門御仕置

十月十四日

冠服稽古見ル。形 武田喜内 井戸庄右衛門 也

（用狀）

十月十二日

阿部伊勢守殿御渡ㇱ御書付寫貳通、大目付深谷遠江守殿方ゟ

袖うら 大目付に

後藤三右衛門不屆之儀有之、御仕置ニ成ㇱニ付、右代り四郎兵衛替後藤吉五郎江申付ㇱ。金改包方等諸事是迄之通取計ㇱ間、為心得向々江可被達ㇱ。

十月

於東叡山 淨觀院樣御法事日割

十月十九日開闢　廿日千部讀經　廿一日中日

廿二日御經結願　廿三日御逮夜　廿四日御當日

右之通ㇱ間可被得其意ㇱ。

五ッ半時寢ル。

十四日晴　鈴萬悌

今朝目覺六ッ半時、其外替ることと無之。半右衛門罷出ㇱ。猶帯刀罷出用狀見

狛帯刀のために館號を撰ばる

愼脩館

高島甚五左衛門半井元沖御書物をすゝむ

セル。

先日帯刀申候ニ、酒（酒井）ヤ外々ニハ館號有之候得共、私方ニハ無之と申候ニ付、今日館號相撰遣し申候。

愼脩館
弘化二年乙巳冬十月十四日 越前少將　源慶永□□撰

右之所

精義館、立義館、愼脩館、清風館之内、好を遣すと申ニ而愼脩館頂戴致度申ニ付、右之所を遣し申候。以上

孫八罷出、田安一位様、右衛門殿被爲入候節之入用帳、差出す。御臺所方御入用斗、御手元金之内ヲ以致ス。三拾両三歩二匁八ふん七厘

二度目食事後、のミ月代いたす。市橋万右衛門稽古延引。高島甚五左衛門稽古、爲運動いたす、元沖之依請之。顔洗下洗いたす。明日登城例刻にいたす。

松波彌次郎、詩經延引。今日文照院様御靈前へ參詣、風邪ニ付延引。

（用状）

十月五日　飛脚用

相馬一九郎差加

笹治右平大

笹治兵庫病中願之通り、養子被仰付、家督七百廿五石無相違被下置、寄合引渡之席被　仰付。笹治右平大　酒井彦六次

澁谷權左衛門差加

簗田鍊吉

簗田幸八病中願之通り、養子ニ被仰付、家督百石無相違被下置、大御番組ニ入。

笹治兵庫病中相馬一九郎養子相願候節、末々兵庫娘ち一所ニ致度旨、願之通り被仰付、其段兵庫一家共之内へ可申聞候。

九月廿五日

安部清兵衛遠慮今日免。

大番組三浦李左衛門養家之伯母、伊東三郎兵衛悴安太郎妻女願、申付。

新番大久保惣兵衛次男武次郎、大谷助六家来佐野大造養子願申付。

野村次郎太郎之儀申來ル。

田邊讓右衛門弟鎌之助儀、當年廿四歲罷成、高畠甚五左衛門養子願、末々娘と一所ニ仕度願、双方願差出。

中田他三郎妻女無之ニ付、中村市郎右衛門妹妻女願。

無役留守番組渥美佐太郎弟與三吉、當年二十歲罷成候。狛木工家來佐藤次右衛門へ養子願。

橋井吉十郎妻女離緣

相馬一九郎同斷

中野作左衛門退役願差出

今度〻飛脚ニ相廻ル。

府中　米壹俵ニ付六拾三匁位○大豆壹俵ニ付四拾九匁位○小豆壹俵ニ付五拾八匁位

三國　米壹俵ニ付六拾五匁位○大豆壹俵ニ付四拾六匁位○小豆壹俵ニ付五拾五匁位鹽兩ニ付拾八匁位以上

阿部伊勢守殿青山下野守殿御渡候御書付寫壹通、堀伊賀守殿ゟ來ル。

達ら
大目付江
淨觀院樣七回御忌御法事ニ付、爲伺御機嫌、來ル廿一日御本丸西丸江、高家鴈之間詰御奏者番可有出仕候。
一御法事相濟候付而、同廿六日爲伺御機嫌、御本丸西丸江、溜詰堀田備中守高家鴈之間詰御奏者番芙蓉間御役人登　城、其外万石以上ハ、月番之老中和泉守宅江使者可被差出候。右之通可被相觸候。
十月

覺
一今度於增上寺、御法事中、前々之通、式日立合內寄合可被致候。勿論拷問手鎖或ハ籠舍繩掛候類之儀者可爲無用事。
一御法事中、普請鳴物祭禮法事等、不及相止候事。
十月
五ッ時前寢ル。

十月十五日

齒醫師石野榮壽

愼脩館の清書

十月十六日

成島筑山

十五日晴

今朝目覺七ッ半時、其外替ること無之。

六ッ時過の供揃ニ而、御本城へ登城。ソレヨリ神田橋へ參ル。歸宅九ッ半時打二寸五歩。

天方孫八罷出、御拜借御見延の一條、猶又御住居ニおいても心配致候由。河與左衛門申聞、其餘湯島邊齒醫師石野榮壽と申者出入致度旨。則天梁君の御幼年の時分ニも罷出候由、内願書出す。人物の義も、請合の由。御廣敷御用人衆守山主計頭、井關縫殿頭相賴、與左衛門申談義致す。

愼脩館の清書認、以孫八帶刀へ遣す。

松波彌次郎出、詩經申上。劔術稽古。馬術稽古。五ッ半時過寢ル。

乾隆三經
易述義
詩折中
春直解

十六日晴

今朝目覺六ッ半時、其外替ること無之。半右衛門罷出候。成嶋筑山先生書經講義有之、洪範皆濟　明日乘馬いたす、次乘馬有之、猶帶刀ニ拜見申付。

(用狀)

十月十六日

青山下野守殿御渡ゟ御書付寫二通、土岐丹波守殿方ゟ

袖うら
大目付に

今度
廣大院樣御法事中、表向之面々不及參詣候。
十月

〆

在府之
溜詰
松平加賀守　堀田備中守　酒井若狹守　松平伊賀守

右之分來月御法事中爲伺御機嫌　御本丸西丸に御菓子類一度可有獻上候。御精進明之御肴も不及獻上候。右之外在府之万石以上之分獻上物ニ不及候。尤御法事相濟御精進明之御肴差上ニ不及候。
右之通可被相達候。
十月

五ッ半時過寢ル。

十月十七日

十七日晴

今朝目覺六ッ半時、其外替ること無之。半右衞門不罷出、綱目獨讀、幷御遺訓幷

淺井八百里輪講

伊達文峰

姉小路に三千疋

十月十八日

関。

天方孫八罷出申達候處、石川美濃守ゟ之達書一冊幷森宗兵衛悴大八御番入之願、以呈書相願。 近日孫八田安へ罷出候儀有之候ニ付、其節申上積。 幷磯岡神田橋へ參り、染村ニ面會いさし、御拜借御沙汰之儀相伺之。 幷姉小路〆。是ハ物故、賄賂抔多く取り候て、御政治ニも携候ニ付、そシリて申之。右ケ様な抔ニ頼紅もきゝい儀ニ、七里ケツハイニ候得共、志らさるし〳〵、〳〵、嗚呼殘念〳〵〳〵〳〵。少々貨賄いさし候儀ニ付、旁相談罷越。

輪講有之、講師淺井八百里

甲冑ニて小子乘馬、地鞍も乘、其外次乘馬有之。 伊達文峰も乘ル。 狛帶刀との、天方孫八老、土屋十郎右衛門、水野主計拜見。

磯岡罷歸、御住居ニるも心配被致候由。 姉小路〆之貨賄ニ三千疋位ニる宜段、染村申之。

五ツ半時寢ル。

十八日

今朝目覺六ツ半時、其外替ること無之。 半右衛門不罷出、綱目獨誦す。 松波彌次郎罷出詩經申之。 武内流居合稽古。 松木植木、福山藤右衛門へ遣す段八百

里申之。五ツ半時過寢ル。

以上

久能山御參拜の夢

慶永曰、十七日晚靈夢見申候。譯ハ駿州久能山へ參拜いたし候夢之。一位様　民部卿様　右衛門督様幷此方之。御三方様御拜相濟て、此方長袴のし目にて罷出、御別當案内にて罷越し、中程ゟ御別當ハ控、其節此方申候ハ、御靈前迄御出不被下候へハ、道相わかれ不申候と申之。御別當ハ曰、當山ハ掟ニ御座候と申之。推る相尋候へハ、右ニも道あり、左ニも道あり、此靈山ニ限り參詣仕候者、或ハ讒姦惡人抔ハ參拜も不出來、左右ハ内御宮へハ參拜不被仕候とハ承りニ付、此方自分窮恭敬參拜仕候へハ、左ハ方へ曲り候へハ、こゝに御靈像御安置ニる、御たけ三尺五寸斗、御甲冑ニる御立被遊、御白髮あり〳〵と拜し申候る罷歸、跡ハ不覺、誠不審なとにて、奇妙なるとなり。嗚呼ありかたし。益窮誠敬候て、國家可治事と自覺申候。

十月十九日

十九日曇

今朝目覺六ツ半時、其外替ること無之。半右衛門罷出候。孫八罷出候ニ付、來午年家老供詰猶木工相詰候様、孫八迄申之、時ニ孫八云、桑山彦助家來勘七、上月

押込申付

熊之助家來榮藏、御門限切レ候ニ付、押込申付候由、申之。
松平源太郎罷出、明晩立通飛脚差立段申之。
松波彌次郎罷出、詩經申上之。　市橋万右衛門罷出、柔術稽古いたす。　入浴。　乘馬稽古いたす。　五ッ半時過寢ル。

十月二十日

廿日晴

今朝目覺六ッ半時、其外替ること無し。　半右衛門罷出候。　松平源太郎罷出、來月廣大院様御法事ニ付參詣、幷淨觀院様御法事中、御菓子献上公儀へ相伺書付致一見。　長爐ゟ間へ參り、献上ゟ御菓子一覽。　孫八へ書付等渡ス。
成嶋先生被罷出、書經講義有之。　旅契
明日例刻治正院様御靈前參拜、用人相伺之。
五ッ半時過寢ル。

十月二十一日

天德寺御參詣

廿一日晴

今朝目覺六ッ半時、其外替ること無之。　半右衛門罷出候。　五ッ半時ゟ供揃ニる、治正院殿御靈前へ參拜、天德寺之。　松波彌次郎罷出、詩經申上。
田安へ參る二十五日頃。　中村稽古。　五ッ半時寢ル。

廿二日晴

切支丹證文

今朝目覺六ッ半時、其外替ることと無之。半右衛門罷出候。松平源太郎罷出、切支丹御證文廿四日被差出候ニ付、本書一見。御使者御目付土屋十郎右衛門

輪講無之、明日ニ相成。弓術馬術稽古。五ッ半時寢ル。

十月二十三日

反町源五右衛門

廿三日晴

今朝目覺六ッ半時、其外替ることと無之。半右衛門不罷出。綱目獨誦。天方孫八田安へ參り、來午年御附反町（ソリマチ）源五右衛門御供ニ召連候哉ㇾ伺ニ罷出、并森宗兵衛義も申述。輪講有之、講師桑山彥助

居合稽古。五ッ半時寢ル。

十月二十四日

栃屋縫之助のこと

廿四日晴

今朝目覺六ッ半時、其外替ることと無之。半右衛門罷出候。松波彌次郎罷出、詩經申上之。柔術稽古。田安へ明日彌參候哉不相分候ニ付、松井庄九郎遣ス。

栃屋縫之助、有故服痛ニ付小屋へ下ル。

目、右縫之助ㇾ儀、夕方此方へ色々申聞ケ、田安樣へ被爲入候事ニ付、今朝ゟ御さう〳〵と被遊、御不賴母敷事御容間ニ御座イマスと申之。此方親此所へ

參る故、樂しく思フ、御騷々被遊、とうまて親様ゟ、御安心被遊間敷、只今ゟ御年ニ相成、マタ御本心不相立候、誠御不賴母敷存候。　御手打ニ相成、切腹ニるも可仕候ハヽ、本懐ニ存候と申内、仁大夫御膳ゟ御支度御宜と申、〆切り相成ル候て、膳前ヨ八百里へ手紙遣ス。　膳相濟て後、彦之丞ゟ申上候ハ、縫之助不快、猪兵衛頭取助致度段申上ルニ付、大義ニる表ニいさし、彦之丞へ右ゟ段申て、彦之丞も相驚、喜八郎連之助相招承ル由。　尤縫之助申上候節、喜八郎連之助侍座、八百里申候ハ、私ふと縫之助御小屋へ參候處、曾禰次郎臺所ニ居り、縫之助ニ逢度段申之。　曾禰次郎今晩私御小屋へ雄藏始寄合申居候と云々。　八百里左様ならそ宜と申て、主税御小屋へ參り、縷々申述候所、其所へ彦助參り、何事やら今曾禰次郎が、縫之助殿不快御小屋へ被下(サカ)候事を、八百里殿が參ルといふとそ、何事やら、曾禰次郎申之、主税殿ゟ所へ參りてきけそ相分り可申と皆申候故、ふと參り申候と申之、八百里委細申聞ケ、縫之助不快ニ付、御案し被遊候て、八百里參り候段可申、志かし雄藏と彦助と居り、熊次郎始御小屋へ相返して、縫之助へ篤と承る筈八百里申聞候。　又主税へも何ゟ相談致候事有之由、跡て可申述と云て主税小屋へ參ル。

石野榮壽
十月廿五日
宗武卿御贈官願
栃屋縫之助發狂か
十月廿六日
栃屋縫之助の樣子

石野榮壽の儀ニ付、神田橋へ孫八參ル。明日、田安へ彌被參い樣ニ、田安御用人方こなた用人迄申來ル。參るへく旨申之。供揃四ツ半時過と申之。五ツ半時過寢ル。

廿五日晴

今朝目覺六ツ半時、其外替ること無之。半右衛門罷出い。松平源太郎罷出、淨觀院樣御法事ニ付、御香奠白銀三枚御目錄見セル。四ツ半時過の供揃ニ而、田安へ參ル。一位樣御始益御機嫌能奉恐悅候。明日御先代御贈官願被差出い由。歸宅五ツ半時へ壹寸五歩前。直ニ寢ル。

どうも縫之助狂氣の由、此方實ハ九ツ半時頃迄、おきて居申い。

廿六日晴

今朝目覺六ツ半時、其外替ること無之。半右衛門罷出い。成嶋先生被罷出、書經講義有之。

中村稽古延引。乘馬稽古。

栃屋縫之助狂氣不相治いニ付、以直書、主稅八百里迄書下ル。右の所感悟いさしい哉、汁子一椀たべ申い由。此方天地へは忠義難有奉存候。明日例の通り、

天德寺へ參詣。五ツ半時過安眠ル。

十月廿七日
天德寺に御參詣

廿七日晴

今朝目覺六ツ半時、其外替はこと無之。半右衛門罷出候。御內書御渡。天德寺へ參詣、歸宅四ツ半時打二寸廻り。松波彌次郎罷出、詩經申上之。

福山侯へ手紙遣す。卽答有之候。

弓術稽古いたす。廻讀無之。五ツ半時過寢ル。

十月二十八日
國許飛脚到着
縫之助へ腰物を渡す
桑山歸童卒去

廿八日晴

今朝目覺六ツ半時、其外替ること無し。半右衛門罷出候。當月廿一日晩立通飛脚、道中常振今日到着、先國許相替候儀無之段、喜いたし候。

目付用狀見ル。栃屋縫之助へ、腰物相渡候由。

桑山彥助養家高祖母六日、同桑山歸童十一日死去いたし候趣。依之、彥助方忌相請、來月十一日迄ニ而、三十日ニ相成候由。

松波彌次郎罷出、詩經申上。

佐渡守湯漬所望差上、幷對顏。居合稽古。五ツ半時過寢ル。

十月二十九日

廿九日晴

田野村百姓の件

今朝目覺六ッ半時、其外替ること無し、半右衛門罷出ル。家老用有之ル。松平源太郎田野村百姓之儀申上。市橋稽古。明日西城例刻登城、相伺之。乗馬延引。五ッ半時過寢ル。

（用状）

十月廿五日

廣大院様一回御忌御法事、於増上寺御執行付、御香奠獻上之覺

一白銀五枚充　六拾万石以上　　一同三枚充　三拾万石以上

一同　貳枚充　（貳拾万石より拾九万石迄）　　一同壹枚充　（壹万石九万九千石迄）

一同　貳枚充　三拾万石以上之嫡子　　一同壹枚充　拾万石以上之嫡子

右之通、以使者来月十二日朝六時、表門通大方丈に可被獻之ル。尤使者熨斗目半袴可爲着用ル。

十月

一大目付中方御觸達来

明廿六日上野御香奠獻上使者、明ケ六時前迄ニ參着可被致ル。且右使者不足様相揃可申旨、阿部伊勢守殿御沙汰ニ付、是又爲心得申達ル。被得其意、答之儀も、明伊留守方に可被申聞ル。　以上

十月廿五日

明廿六日御香奠獻上使者、明ヶ六時前迄相揃ひ樣相達ひ處、七半時前不遲樣相揃可申ひ、右之趣被得其意、答之儀ゑ堀伊賀守方へ可被申聞ひ。　以上

十月廿五日

田野村百姓の件

十一月二日久世出雲守殿へ差出寫

先達る御書付を以御達御座ひ、越前國大野郡田野村百姓彦左衞門、同郡青山大膳亮樣御領分井口村與八郎忰甚左衞門ニ被盜ひ金子銀札、大膳亮樣御役場ニ御取上ヶ有之旨、御呼出之上可被　仰渡之處、遠路之儀付御慈愍を以、右御役場へ懸合、御渡相濟次第、證文指上可申旨奉畏ひ。　則御渡相濟ひ付、彥左衞門指出ひ受取證文、國元役人共方相廻ひ付、指上申ひ。　以上

十一月

御名內
大道寺七右衞門

米價

上兩ニ付四斗五升

（政暇日録二終）

在府
三

仮留

政暇日録

自弘化二年乙巳十一月朔日
至十二月廿九日

十五代目
越前守

在府

三

假留

政暇日録

自弘化二年乙巳十一月朔日

至十二月廿九日

十五代目

越前守 □

（表紙裏貼紙）

飛脚之部

十月十二日

十月十二日の飛脚の要件

久野忠右衛門、高屋久郎左衛門隠居を始、鈴木丹蔵役替之儀、此度申来ル

佐野内膳高田作之丞、織田半左衛門江戸詰申付

生駒弾五右門弟顯藏、有馬日向守家中へ養子之儀申付

齋藤數馬養妹西尾助次郎へ緣組願之通り申付

水野五郎八妻女無之ニ付、山形熊之助養妹緣組願之通り申付

表小姓鱸長左衛門弟芳吉、横井三郎右衛門養子願之通り申付

新番格富田長左衛門悴他三郎妻女無之ニ付、松村佐右衛門娘と緣組願之通申付

長谷川八十郎妹儀、河津佐大夫悴孫十郎妻女ニ致度段相願之

櫻井定右衛門三男又次郎儀、當年拾五才罷成候、有馬日向守家中今本行馬出信左衛門と申者養子願差出之

廿日

斬罪

明後廿二日於場所斬罪申付

吉崎蓮如上人忌

口上覺

本願寺第八世蓮如上人三百五拾回年忌間近相成候ニ付、吉崎浦舊跡爲巡回、

御門主御下向之儀、兼る思召ゟ御座候得者、御下向ニ相成候ハヽ、時節柄ニ御座候得共、有緣之末寺共隨喜仕、彌御國恩之程重々難有可奉存候。此段御賢察被爲成下、別段之御評議を以御下向之義御聞濟被爲成下候樣、御願可申出旨、本山ゟ被申付候間、此段宜御願申上候。以上

十月十四日

東御堂輪番

皆演坊　印

寺社御奉行所

御書付

織田半左衛門江申渡覺

其方儀、御役儀ニも不似合、御時節柄不相當之取斗有之、心得違之趣相聞不調法之事ニ候。依之御役　御免被成、末之番外被　仰付、遠慮被　仰付候。

急度相愼可罷在候。以上

但席小栗仁右衛門次

月

伊東六郎兵衛

御書付

伊東六郎兵衛江申渡覺

其方儀、御時節柄心得違之趣相聞、不調法之事ニ候。依之遠慮被　仰付候。
急度相慎可罷在候。以上

月

瀧仁左衛門

御書付

瀧仁左衛門江申渡覺

其方儀、先年為御咎被　仰付候處、亦復心得違之趣相聞、不調法之事ニ候。依
之閉門被　仰付候。急度相慎可罷在候。以上

月

河合藤左衛門

御書付

河合藤左衛門江申渡覺

其方儀、先年ゟ御咎被　仰付候処、亦復不慎之趣相聞、不調法之事ニ候。依之
閉門被　仰付候。急度相慎可罷在候。以上

月

〆

覚

（御先物頭織田半左衛門跡被　仰付
御役料百石可被下置哉　　大藤治兵衛

（御留守物頭大藤治兵衛跡
可被　仰付哉　　川地又兵衛

（小馬印奉行川地又兵衛跡
可被　仰付哉　　松尾源左衛門

（御腰物数寄方奉行松尾源左衛門跡
被　仰付、御書院番組江可被入哉　　津田友右衛門

〆

（綿麻奉行
可被　仰付哉　　古市八兵衛

（荒子頭古市八兵衛跡
可被仰付哉

（川除奉行大橋金兵衛跡
可被仰付哉

但席其儘

一是迄役中被下置候御足充行以後不被下候事

〆

大橋金兵衛

御[illegible]
安達次郎八

十一月朔日　御登城

十一月朔日晴後風

今朝目覺七ッ半時、其外替ること無之候。六ッ半時ニ供揃ニる、御本城へ登城、夫ゟ西城へ登館、夫ゟ神田橋へ登ル。歸宅八ッ時。松波彌次郎延引。中村稽古。乘馬稽古。五ッ半時過寝ル。

十一月二日　姉小路への多葉粉盆

二日晴

今朝目覺六ッ半時、其外替ることなし。半右衛門罷出候。姉ヶ小路へ人賂賄ニ多葉粉盆見ル。

成嶋先生書經講義。弓術稽古。桑山彦助明日ゟ忌免ス。歸華死去より廿一

日なれそ之。五ツ半時過寝ル。

十一月三日

三日晴

今朝目覺六ツ半時、其外替ること無之。半右衛門罷出候。孫八罷出、反町源五右衛門儀來年歸國之節、省略中ニ付、一人召連候義ニ付罷出、其上御勘定組頭塚越藤助御用御頼之儀、織部迄相願。

門出入帳

土屋十郎右衛門罷出、門出入請帳見セル。松波彌次郎罷出、詩經申上。居合稽古。五ツ半時過寝ル。

十一月四日

四日晴

今朝目覺六ツ半時、其外替ること無之。半右衛門罷出候。狛帯刀用有之。皆川多左衛門罷出、明晩立常振飛脚差立候段相伺之。松波彌次郎不罷出。市橋万右衛門延引。

灸事

灸事有之。乘馬稽古。五ツ半時過寝ル。

十一月五日

五日時雨

今朝目覺六ツ半時、其外替ること無し。半右衛門罷出候。目付ゟ存寄差出、織田半左衛門、瀧仁左衛門之義、國許ゟ申參候通りニ相成。

輪講

輪講有之、講師、海福敬翹、堯舜之道を樂ム事論、誠ニ面白し。

小石川の火事

山名次郎八

古着燒捨物

十一月六日

山名次郎八御預

十一月七日

廣大院様御法事中ニ付、明日御菓子献上ニ付（[illegible]）今日見分ニ長橋し間へ参ル。昨夜小石川筋出火ニ付、土屋釆女正屋敷前ニおいて、屋敷し者と申分有之ニ付、公儀御目付へ達書差出。乘頭山名次郎八（今日町奉行[illegible]）劍術いさす。古着燒捨物侍臣へ遣す。（主税をしめて故有之、八百甲無之、）五ツ半時過寢ル。

六日晴

今朝目覺六ツ半時、其外替ること無之。半右衛門罷出ル。昨夜御呼出ニる、今日山名次郎八をしめ遠山左衛門尉役所へ罷出ル。右し義ニ付、燈灯其外人返り不申ニ付、平賀三五郎迄書付差出。成嶋先生書經講義有之。中村稽古延引。山名次郎八町役所ゟ歸宅六ツ時半頃、（[illegible]）五ツ半時過寢ル。

七日晴

今朝目覺六ツ半時、其外替ること無之。半右衛門罷出ル。山名次郎八今日も町奉行へ罷出ル。昨日篠原充助へ御預ニ付、從是も林作助近親故、作助へ御預ニ付、獄裁所へ作助爲稽因罷越、歸宅五ツ時頃、次郎八儀八十日罷出ル樣申參ル。

（八儀八留守居下役篠原充助へ御預被成ル由。）

皆川多左衛門罷出、十日參詣可致筈之所、十日參詣ニ相成候へハ、都合あしくニ付、明日五ッ半時之供揃ニて參詣、御經濟四ッ時頃故、天陽院迄罷越、夫ゟ程合ニて參詣之積。家老用有之。松波彌次郎罷出、詩經申上之。馬術稽古。弓術稽古。五ッ半時過寢ル。

十一月八日

八日初雪後夕雨

今朝目覺六ッ半時、其外替ること無之候。

增上寺へ御參詣

五ッ半時之供揃ニて增上寺へ參詣。

但天陽院迄罷出、程合ニて參詣之所、本坊へ參候へハ御本丸後宮之長女被參、姑延引終直ニ參詣。

松波彌次郎罷出詩經申之。居合稽古。

皆川求馬罷出、御代拜歸申上之。五ッ半時過寢ル。

十一月九日

九日曇

今朝目覺六ッ半時、其外替ること無之。半右衛門不罷出、綱目獨誦。皆川多左衛門罷出、太田原飛騨守殿ゟ手紙參り、返翰爲見ル。天方孫八罷出、明日龍邸へ罷出ル段申述之。御家講書披持參 松波彌次郎罷出、詩經申上之。柔術稽古。五ッ半時過寢ル。

十一月十日

山名次郎八

十日晴

今朝目覺六ッ半時、其外替ることと無之。半右衛門罷出候。山名次郎八今日罷出へきゝ所、明日ニ相成候。天方孫八龍郎へ罷出候。成島先生書經講義有之。町同心持田太郎助参り、次郎八同道人不相成由申之。五ッ半時過寝ル。

（觸達）

一大目付中方御觸達来ル、左之通

明後十二日増上寺へ御香奠献上之使者、不遅様可致参着旨、青山下野守殿被仰渡候ニ付、相達候間、被得其意、答之儀ハ土岐丹波守方へ可被申聞候。以上

十一月十日

大目付

御名殿

留守居

十一月十一日

十一日晴

今朝目覺六ッ半時、其外替ることと無之。半右衛門罷出候。山名次郎八獄屋所へ罷出、歸宅六ッ時頃。十五日彌、中ノ郷へ伊勢守殿被參候由、次郎八之義ニ付、此方参候ゟも不苦明日狛帯刀阿部様へ參ル。松波彌次郎罷出、詩經申上之。鎗稽古。五ッ半時過寝ル。

十一月十二日

十二日晴

今朝目覺六ッ半時、其外替ることも無之。半右衛門罷出ル。明日田安へ四ッ半時ゟ供揃ニる罷越。天方孫八田安へ參ル。

反ソリ町源五右衛門之儀、勝手次第國へ召連候樣差圖有之。
用賴勘定組頭塚越藤助被受候由。

狛帶刀龍邸へ參ル、此譯委細不記、追る記之 松波彌次郎罷出、詩經申上之。弓術稽古。五ッ半時過寢ル。

十一月十三日

十三日曇

今朝目覺六ッ半時、其外替ること無之。半右衛門罷出ル。四ッ半時ゟ供揃ニる田安へ參ル。

一位樣、益御機嫌能被遊御座奉恐悅候。

一位樣御加階之御祝儀ニ付、服紗麻上下。歸宅五ッ半時壹寸五歩廻り。

山名次郎八獄裁所へ罷出候、例之通り。

六日晩立通飛脚今日到着、國表靜謐安意之事之。目付用狀見セル。直ニ寢ル。

(用狀)

十一月六日晩通飛脚、同月十三日着、國元靜謐之。

用書

國元ゟ相伺

佐々木小左衞門病身ニ付、退役相願候ニ付、役料先物頭次席申付、但席横田作大夫ト

次ヘ、小左衞門跡原平左衞門。平左衞門跡千本嵩左衞門ヘ。

番頭役村田十左衞門、退役相願候ニ付御免、大番入、跡大久保元作申付ル。

十月廿九日　評定留拔萃

川崎茂大夫隱居を始、南部源兵衞役替迄申付。

中山仙右衞門病身ニ付、退役願ニ付、大番入申付、年來出精相勤候ニ付、銀一枚被下。

高畠甚五右衞門養子願之通り申付。

中田他三郎願申付

渥美佐太郎願申付

十一月五日

惠眞院殿ヘ

香奠金二百疋

大久保善十郎妻女無之ニ付、近藤次右衞門娘後妻願、先妻ハ吉田祐藏姉之。

長谷部作内娘、田邊五大夫悴榮七郎ヘ緣組願。

荒川萬吉妹高畠一郎右衞門悴三次郎ヘ緣組願。

高田孫一郎娘、雪吹八郎右衞門悴彌太郎ヘ緣組願。

〆

米價

古金銀引替の觸達

城下米價

米　六拾三四匁　三國米六拾二匁位、大豆五拾匁位、小豆五十五匁、鹽兩ニ付拾八俵半位、　府中米六拾五匁位、大豆五拾三匁位、小豆五十五匁位、

手形六拾六七匁

以上

十一月十三日、大手後口御勘定所へ御留守居御呼出ニ付、中村八大夫罷出候處、左之通御書付御渡有之、

古金銀引替方之儀ハ、度々御觸も有之候得共、未た世上有高多ニ有之、兎角富家之者共圍持、或ハ遠國邊鄙等ニ而ハ、今以新古金銀取交通用いたし居候趣、粗相聞、停止之品取遣いたし候儀、不届ハ勿論、貯置無詮儀ニ而、尤吹替被　仰出候上ハ、引替殘多有之候而ハ、世上通財却而減少いたし、自然諸物融通ニ拘り候間、領分内重立候者共へ、右等之趣能々被申諭、實意ニ出進方一際相增候樣可被取計候。　且其品ニ寄、御代官方及掛合候儀も可有之候間、得其意、尤引替人持主ニて御手當竝道中諸入用之儀ハ、先達而相達候通心得、引替所手遠之場所ハ、最寄御代官所へ申立、引替候樣可被申渡候。

右ハ阿部伊勢守殿へ申上之上申達候。

出役之者　奉行

石河土佐守

十一月十四日

上納御見延

山名次郎八

十四日雪、

今朝目覺六ツ半時、其外替ること無之。半右衛門罷出候。家老用狀見ル、昨日上納御見延、當年限と被仰出候。成嶋先生雪天ニ付來臨斷。今日雪天ニ付、明日阿部夫婦延引。明日例之通り登城、夫ゟ神田橋へ參ル。山名次郎八町奉行所へ參ル、大きニ都合宜、最早姑らく出るニ不及。五ツ時過寢ル。

十一月十五日

十五日晴

今朝目覺七ツ半時、其外替ること無之候。六ツ時過之供揃ニて登城。夫ゟ神

小學ノ講釋

田橋へ参り、小學講釋いたす、立教第一ヵ聘則爲妻迄 松波彌次郎罷出、詩經申上之。 劍術延引。五ッ半時過寢ル。

十一月十六日

十六日晴

栃屋縫之助を國に返す

今朝日覺六ッ半時、其外替ること無之。 半右衛門罷出ル。 栃屋縫之助病氣ニ付、國許へ相返す。

松波彌次郎罷出、詩經申上之。 中村稽古いたす。

小姓番割

小姓番割 縫之助相返ル後之番割

壹番

櫛 近藤雄藏 信敏
栗山彦助 政喜
上月熊之助 景泰
岡田喜八郎 貞幹
波多野頼太郎 通弘
堀蓮之助 勝恭

貳番

日比彦之亟 尙行
小姓頭取介 海福猪兵衛 敬翘
笹川熊次郎 正辰
大井會彌次郎 光益
荻原長太郎 季定
〆

五ッ半時過寢ル。

十一月十七日

十七日晴

今朝目覺六ツ半時、其外替ること無し。半右衛門罷出ル。綱目不讀、御遺訓之。
栃屋縫之助、彌廿日出立いたしル由。
海福猪兵衛小姓頭取助、堀連之助觸掛り。
天方孫八罷出、自分手寫ら天保壬亥年ゟ弘化二年迄御省略被仰出控、此方ニく
れる。成嶋先生被罷出、書經講義有之。乘馬稽古有之。七ツ時ゟ小姓番替。
五ツ半時過寢ル。

天方孫八御省略の扣を提出す

十八日晴

十一月十八日

今朝目覺六ツ半時、其外替ること無し。半右衛門罷出ル。皆川多左衛門罷出、
本多定次郎御添願書、明後日差出す樣申上之。九ツ半時廻讀いたす、松浦彌久郎講師
淺井八百里引込。

淺井八百里引込

明日六ツ半時ゟ御供揃ニる、右大將樣木下川筋へ被爲成、門前通御ニ付、表座敷
へ相詰ル段、松平源太郎罷出申上之。
居合稽古いたす。五ツ半時過寢ル。

十九日晴

十一月十九日

今朝目覺六ツ半時過、其外替ること無し。半右衛門不罷出。綱目獨誦す。

今朝右大將樣木下川筋へ被爲成、門前通行ニ付松ミ間へ相詰。

皆川多左衛門罷出、細川兵部大輔今日婚姻相整候ニ付、兵部へ鹽鯛一箱越中へ歡斗。

松波彌次郎罷出、詩經申上之。　柔術稽古。

七ッ半時過還御ニ付、松ミ間へ相詰、右大將樣御小用御整ニ、屋敷辻番所へ被爲成、疊へ御わらし之上有之候故、疊替ニ付土藏へ相納置候由。

御案內申上候人

御徒目付　速水錶次郎

御小人目付　番場惣三郎

名倉新之助

五ッ半時過寢ル。

廿日晴

今朝目覺六ッ半時、其外替ること無し。　半右衛門罷出候。

樂亭老侯警書出來、慶永ミ自書之

皆川多左衛門罷出、彌、廿三日佐渡守始靈岸嶋下屋敷被越松平佐渡守、同大助、眞田信濃守、九鬼南嶽、成瀬隼

人正也

上納御見延の挨拶

天方孫八罷出、先日御上納御見延之義ニ付、松榮院様へ御反物御文庫之内、紫村へ銀十五枚ネと、濱川へ五枚ネと被遣。姉小路〆へ反物二反文庫之内をやる。阿部伊勢守殿、近頃刀を被好候故、御道具之内平信國之御刀有之候故御内々方被進ル積、天方孫八申之。

松波彌次郎罷出、詩經申上之。劔術稽古延引。朝目覺立腹あしく候故、服薬。

五ツ半時過寝ル。

十一月二十一日

廿一日晴

今朝目覺六ツ半時、其外替ることと無之。半右衛門罷出候。皆川多左衛門罷出、明日田安四ツ半時前（四ツ半時へ二寸五歩）供揃ニ而參ル段相伺之。

三國港の新藏

昨日留守居、町奉行遠山左衛門尉へ呼出ニ而、坂井郡三國湊新藏と申者、御引渡有之段申上之。成嶋先生書經講義有之。五ツ半時過寝ル。

十一月二十二日

廿二日晴

今朝目覺六ツ半時、其外替ることと無之。

田安へ參る

四ツ半時前之供揃ニ而、田安へ參ル。

十一月二十三日

一位様益御機嫌能、奉恐悦ル。 今日千重姫様御立振舞之。

師走の中ころ、わかれらあら 千重姫のきミ、松平武成あそんのもとへ、ろしつろせ給ひ志故、霜月末の二日 一位の君ゟ、さけさろなるふけさせ給ひて、千重姫の君哉もてなさせ給ひ、やつろれも、從ひ侍りてよめる

慶 永 上

ろきりなく妹脊の道を守りなは、猶もさろへん君か齢哉

寄松祝

高砂乃尾上の松ま幾千年、君ろ操をたゝへてやみん

千重姫様さし上

歸宅五ッ半時打壹寸五歩廻り、 直ニ寢ル。

廿三日晴

今朝目覺六ッ半時、其外替ること無之ル。

昨日阿部様ゟ手紙參ル、今日返翰認遣す。 天方孫八、御住居へ參る。 居合稽古いさす。 帶刀拜見。

乘馬稽古いさす。 五ッ半時過寢ル。

十一月二十四日
冬至により書を待臣待女に給ふ

廿四日晴

今朝目覺六ッ半時、其外替ること無之候。

至日ニ付、元氣認、御住居花村、民浦、歌野、中年寄へ遣ス。見天地之心（復卦彖傳）主從安靜以微陽（同所）堀運之助へ、大奥三嶋へ心安身自安を認遣ス。

山名次郎八、町奉行へ罷出ル、六ッ半時過歸り。

四ッ半時前ゟ供揃ニて、明日田安へ參ル。

松波彌次郎罷出、詩經申上之。やハら稽古。

五ッ半時過寢ル。

十一月廿五日
田安へ參る

廿五日雪

今朝目覺六ッ半時、其外替ること無し。綱目獨吟す。松平佐渡守屋敷へ被勤候ニ付、於松ゟ間面會。四ッ半時ゟ供揃ニて、田安へ參ル。

一位樣始益御機嫌能、奉恐悅候。鎰丸殿ニも御出有之。

歸宅五ッ半時へ掛り直ニ寢ル

十一月廿六日

廿六日晴

今朝目覺六ッ半時、其外替ること無し。半右衛門罷出候。皆川多左衛門罷出、

廿八日御城坊主ヲ呼、於松ゝ間逢ㇾ段申付。成嶋先生被罷出書經講義有之。左兵衛督手紙來ル。五ッ半時過寢ル。

十一月二十七日天徳寺に參詣

廿七日晴

今朝目覺六ッ半時、其外替ること無之ㇾ。五ッ半時ゝ供揃ニる、天徳寺へ參詣、歸宅四ッ半時打二寸廻り。孫八罷出、松榮院様御始へ御取扱左ゝ通り、

御上納御見延に付御取扱

御上納御見延ニ付

松榮院様へ
　御帯地　一筋
　交御香　一臺

御本丸老女
姉小路殿へ
　緋紋縮緬　一反
　紫同斷　一反
　交御香　一籠
〆

御住居老女
染村へ
　緋紋縮緬　一反
　御香料　白銀七枚

同　濱川へ
　御香料　白銀五枚

同　御右筆へ
　金弐百疋
〆

右十一月廿八日出ス

表方
　七子紬　一疋
　外　白銀三枚
　　河合與左衛門
　七子紬　一疋
　　山田太郎左衛門

青籠入交御肴　　一籠

外信國作御刀身　　伊勢守様へ

一　（御肴一臺
　　御樽代貳千疋）

右御留守居御使者　　石河土佐守殿

一金壹百疋　　御同所用人渡邊利右衛門

一金五百疋つゝ　　御同所用人三人

一金貳百疋つゝ　　御同所取次三人

〆

一金三百疋　　御殿御勘定同心
　　關根仙太郎

〆

右十一月廿八日

田安へ参る

田安へ參ル

（用狀）

以手紙致啓上候。然者千重姫様来月十八日松平右近将監殿へ御引移、御日[illegible]

被成御整候。此段爲御知可得御意如此御座候。以上

十一月廿七日　　當月十[illegible]
　　本日十五日

大道寺七右衛門様

中村八大夫様

孫八罷出、九鬼南嶽方、此方ニ面會いたしたき旨、七右衛門迄申來ル。五ツ半時過寢ル。

九鬼南嶽面會を求む

廿八日晴

十一月二十八日

今朝目覺六ツ半時、其外替ることと無し。綱目獨誦す。松波彌次郎罷出、詩經申上之。居合稽古いたす。皆川多左衛門罷出申達候ハ、昨日防之者三人程御歸また相成申候内、防之者庄之助と申者牢死仕候ニ付、牢法之取扱ニ可致段、町奉行所ニて申達。公邊之義とハ申なから、御家之御扶持人なれハ、牢法之取扱ニる相濟不申ニ付、遠山景元迄願書ヲ差出。今日庄之助死骸御渡ニ相成申候由申達候。

防の者庄之助牢死

一昨日成嶋先生へ進物之筆房之刀、返却ニ相成ル。

成嶋進物の刀を返却す

八ツ半時前、御城坊主ゟ於松之間面會、罷出候名元、

御城坊主に面會せらる

星野久庵　公邊
大黒意土田幸圓　前田久盛　高橋榮治
島　中村順齋　鈴木宗濟
西　勝村良順　中村順榮
谷村嘉順
也

閏　長三　大順漂書

大懇意之者ニシマジリメン一反ツヽ、次奉書紙一束ツヽ

松榮院様御始御取扱今日。五ツ半時過寢ル。

十一月二十九日 淺井八百里出勤

廿九日晴

今朝目覺六ツ半時、其外替ることと無し。半右衞門罷出候。今朝ゟ淺井八百里出勤。田安ゟ略歷昨日相廻り候ニ付、今日松平三河守殿へ手紙ニ而進呈。廿

飛脚着國許無事

一日晩立、通飛脚道中六日振、山ノ内ニる二日逗留、今日到着。國許相替候儀無之、目出さく奉存候。

防の者の赦免願

山名次郎八之時之一件ニ付、防之者出牢いさし、跡三人入牢中ニ付、御赦免相願書付、皆川多左衞門罷出申上之。

明後日、威德院様御忌月ニ付、參詣可致之所、登城ニ付、明日例刻參詣いさす。松波彌次郎罷出、詩經申上之。柔術稽古いさす。

（觸達）

十一月廿八日

青山下野守殿御渡候御書付寫貳通、堀伊賀守殿ゟ來る。

袖うら大目付へ

當八月人相書を以相觸候。三拾間堀貳丁目國次郎店權四郎並同人悴娘等を及殺害欠落いたし候右權四郎召仕、惣七事松五郎儀、於勢州庄野宿召捕候間、不及尋候。其段向々に可被相觸候。

巳十一月

人馬賃錢の割增

袖うら大目付へ

道中筋宿々困窮ニ付、人馬賃錢割增、左之通可請取旨申渡、

日光道中 粕壁宿

去ル子十二月ゟ當巳十一月迄中五ケ年之間、人馬賃錢都合四割五分增申付置候處、猶又當巳十二月ゟ來ル戌十一月迄中五ケ年之間、是迄之通四割五分增。

中山道 洗馬宿 本山宿

去ル丑正月ゟ當巳十二月迄五ケ年之間、人馬賃錢都合四割五分增申付置候處、猶又來午正月ゟ來ル戌十二月迄五ケ年之間、是迄之通四割五分增。

右割增錢申渡候間、可被得其意候。

右之趣、向々に可被相觸候。

巳十一月

（用狀）

廿九日飛脚到著

十一月十一日

落合丈右衛門娘、西田中村儀左兵衛養子徳之門[illegible]

娘と從弟と之之願差出

廿日

大藤治兵衛始之役替申來ㇳ

松田理兵衛、來年江戸詰申付

野村次郎太郎閉門、今日方免

荒川十郎右衛門次男直治嫡子願

伊藤留三郎、京都實相院門跡醫師信弘平原ノ妻女ニ致度旨

中田他三郎、養家弟久次郎拾五歲養子願

十六日

川端小作家督申付

古市八兵衛始ゝ役替申來ㇳ

櫻井定右衛門ゝ願申付

瀧仁左衛門告申來ㇾ、閉門申事ニテ敗家

東本願寺願申付

河合藤左衛門告申付

安達次郎八川除奉行となる

郷廻り

十一月三十日

天德寺へ參詣

織田半左衛門告申付、伊東六郎兵衛同樣

河津(佐)大夫願申付

大野宗大夫養家之弟五郎吉儀、拾七歳罷成候。堤武右衛門養子差遣、末々武右衛門娘と結婚願

〆

織田半左衛門通路前田彦次郎、伊東六兵衛通路津田友右衛門、瀧仁左衛門通路坂部多膳衛門、河合藤左衛門通路中村市郎左衛門

郷廻り上方へ竹下丈太夫、下方へ藤井久左衛門也。 御願所郷廻り上方へ久保村祐七、下方へ柴田長右衛門之

〆

織田半左衛門へ申渡之覺

其方儀御役儀ニも不似合、兼て心得方不宜、且「　　」是程於國表迦へ申候

五ッ半時過寝ル。

卅晦日晴

今朝目覺六ッ半時、其外替ること無之候。

五ッ半時ニ供揃まる、天德寺へ參詣。 歸宅九ッ半時へ二寸前。

家老用狀見ル。 執法用狀見ル。 今日三人出牢ニ上御預。

成嶋先生書經講義有之。 三河守樣ゟ返章來ル。 明日例刻登城いたす段、多左

衞門伺之。五ッ半時過寢ル。

朔日晴

十二月朔日
御登城

今朝目覺七ッ半時、其外替ること無し。六時ゟ供揃ニ而、西丸へ登城、夫ゟ神田橋參ル。歸宅八ッ半時。松波彌次郎不致。出牢ゟ者共病氣ニ付、今日醫師安田元武被申付。稽古延引。五ッ半時過寢ル。

二日晴

十二月二日
腹合不良

今朝六ッ(目覺)半時、其外替ること無し。半右衞門罷出候。少々腹合不宜、脈數ゟ有之候ニ付、藥服用執七半非元沖。天梁院樣御忌日ニ付、御代拜歸皆川求馬ニ不逢。松波彌次郎詩經申上之。弓術馬術延引、皆依腹合之。孫八罷出、御預所見取御取(箇)問帳見セル。五ッ半時過寢ル。

十二月三日
取箇帳を見らる

三日晴

一橋慶壽に菓子を贈らる
染村等に白銀を遣ること

今朝目覺六ッ半時、其外替ること無し。半右衞門不罷出。綱目獨誦。菓子杉折、一ッ橋民部卿樣へ以直書進呈。天方孫八罷出申達候ニ、今度、一昨日染村年々銀三十枚ッゝ於公儀被下置候ニ付、手前ゟ遣ス事申上候。

白銀三枚　御年寄染村へ

同　一枚　御末頭屋ゟ

天徳寺御参詣

明日、例刻供揃ニる、天徳寺へ參詣可致段、多左衛門伺之。松波彌次郎罷出、詩經申上之。居合稽古いたす。五ッ半時過寢ル。

十二月四日

四日晴

今朝目覺六ッ半時、其外替ること無之ㇾ。五ッ半時ゟ供揃ニる、昇安院様御靈前へ參詣、歸宅四ッ半時二寸廻り。成嶋先生書經講義有之。乗馬稽古いたす。嶋田清左衛門罷出申達候、

(用狀)

拙者儀歳暮之御祝儀、

一位様　御臺様御在世中、御使御廣敷番ゟ頭を以、白銀十枚干鯛一箱充致拜領來ㇾ處、昨年ゟ其御廉ゟ無御座ㇾ間、右拜領物從　御簾中様被下置ㇾ様奉願ㇾ。昨年者御年柄故、相願ㇾ儀指扣ㇾ儀ニ御座ㇾ。何卒宜御沙汰被成下ㇾ様奉願ㇾ。以上

十二月四日

御　名

十二月五日

五ッ半時過寢ル。

五日晴

門出入帳　山名次郎八　灸事

今朝目覺六ツ半時其外替ること無之。半右衛門罷出候。土屋十郎右衛門罷出、門出入請帳見セル。宋老用無之。山名次郎八評定所へ罷出ニ付、灸事やめす。

銀札通用期間延期願

（用狀）

阿部伊勢守樣へ左之通差出

古來銀札通用有之候處々、御領中爲致通用候樣被　御出候ニ付、猶者御分國札通用之義、其節御届申達、享保十五戌年以來廿五ヶ年を年限御届申、是迄之通相伺致通用來候。右ニ付文政四巳年十月御届申、同十三寅年方來寅年迄廿五ヶ年ゝ内、爲致通用度段相伺候處、其儀通用可申付旨御指圖ニ付、右年限中爲致通用候今以通用宜候付、右年數滿候後、來ニ卯年方又ゝ廿五ヶ年ゝ内、爲致通用度存候。前廉御達申御指圖致承知候得共、前後通用ゝ爲宜御達候。仍之相伺申候。以上

十二月　御名

五ツ半時過寢ル。

十二月六日

六日晴

今朝目覺其外替ること無之、半右衛門罷出候。松波彌次郎罷出、詩經中士之稽古延引。

阿部殿へ差出候草案認。五ツ半時過寢ル。

十二月七日　阿部伊勢守に呈書

七日晴

今朝目覺、其外替ることなし。半右衛門罷出候。阿部殿へ差出候書面、孫八迄相渡し。松波彌次郎罷出、詩經申上之。居合稽古面白。

寒中の御勤

清左衛門罷出、十一日ヲ始、寒中諸々御勤相伺。

五ツ半時過寢ル。

十二月八日　慶永公講師として輪講

八日晴

今朝目覺、其外替ること無し。半右衛門罷出候。輪講いたす。講師慶永。家老用有之。明日小松川筋へ、兩丸共被爲成候ニ付、門前通御ニ付、松之間相詰候段相伺之。田安へ明後日參候樣。

五ツ半時過寢ル。

十二月九日　將軍等小松川筋へ御成　慶永公御風邪田代

九日晴

今朝目覺七ツ半時其外替ること無之。半右衛門罷出候。御本城御西城小松川筋へ被爲成、門前通御ニ付、松之間へ相詰。少々風邪、其上痰氣ニ付、田代萬貞へ服藥。葛根湯。右故、明日田安相斷。

萬貞吉田元端

吉田元端罷出、診察いたす。松波彌次郎罷出、詩經申上之。市橋積吉延引。霊御門前通御ニ付、松之間へ相詰候事、風邪故不參。華丘ハ存。

（願書）

御用番牧野備前守殿幷阿部伊勢守殿へ左之通出

松平佐渡守心願之儀ニ付先達るも申上候通、近來多年勤仕之面々、結構被　仰付候例も有之候得て、佐渡守儀も四十餘年相勤候儀ニ御座候間、右勤功を以溜詰格同品之内一廉持餘之儀、心願之通被　仰付被下置候樣、於拙者本望[illegible]候。　宜敷御含被下宜御沙汰可被成下候。　以上

十二月

川越侯嫡子駒七郎樣のこと

彌御安泰被成御座珍重思召候。將又駒七郎樣御嫡子御願之通被　仰出候ニて、引續

御目見御願可被成与思召候ニ付、先般爲御相談、以御使者被仰進置候處、御生質御虛弱被成御座、其上御癇症強、是迄茂無御油斷種々御養生御差加被成候得共、此節別る不被成御勝、　御目見御願之儀段々御延引被成候處、兎角御全快被成間敷御實躰御座候。尤駒七郎樣ニも、御引込被成度之旨、仍之、御嫡子御退身之儀御願可被成与思召候。右ニ付爲御相談、以御使者被仰進之候。御心付之儀も被成御座候て、被仰進候樣被成度思召候。此段宜申上旨被仰付候。御惣容樣へも被仰進候。駒七郎樣方も御同樣被仰進之候。

松平大和守様
伊藤源五兵衛

五ッ半時過寢ル。

十二月十日

十日晴

今朝目覺六ッ半時、其外替ること無之候。劔術相休。松波彌次郎不致。明日、砂村屋敷へ雲州參候由。阿部様揣劔御喜ミ由。五ッ半時過寢る。

十二月十一日

慶永公風邪

姫王村の公事論

御伽坊主林悦

孫八等用人に鴨料理を遣さる

茅場町火事

十一日晴

今朝目覺六半時、風邪未快。

一御預り所姫王村領分西方寺村盛土公事論ミ儀ニ付、七右衛門十郎左衛門出ル。

一彌次郎致ス。一雲州砂村延引。

一御住居へ御伽坊主林悦出、寒中ニ付拜領物手焙。風邪ニ付御住居へ不參。

一此間一橋ゟ到來ミ鴨、料理申付、今夜孫八始用人共四人相伴ニゐ遣ス。

一夜六時過ゟ、茅場町火事、貞照院殿へ見廻新七郎遣ス。松平和之進殿ゟ、火消人數爲引換、權太權大夫遣ス。

慶永公御發熱嘔氣

一六半時過ゟ發熱嘔氣有之、晩食吐ス。又〻葛根湯呑。

一五ツ半時過寢ル。今晩右發熱ニ付、八百里へ代筆申付之。

（書狀）

駒七郎樣御儀、先達ゟ　御嫡子御願之通被仰出候ニ付、可[illegible]處、御生質御虛弱、其上御癇症強被成御座候ニ付、種々被成[illegible]候得共、[illegible]被成御勝、　御目見御願之義、段々御延引被成候處、行末迚ゟ御全快ゟ[illegible]不被成御座候旨、御心痛之御義ト御察思召候。右ニ付、　駒七郎樣ニも[illegible]被成度之旨、依ゐ御嫡子御退身之義、御願可被成と思召、[illegible]御使者を以被仰[illegible]被成御承知、何之思召も不被成御座候。猶又御療養專一之御儀ニ思召候。右御[illegible]廻御挨拶旁以御使者被仰進候。　駒七郎樣にも御同樣被仰進候。

十二月十二日

十二日晴風

一今朝目覺五時、風邪未快。

一彌次郎不致。

二番町出火　白井茂兵衛

一八半時過、二番町出花、松平兵部殿へ火消人數爲引纒、高橋吉兵衛遣ス。

（御供頭寄相勤ニ付）加銀拾枚被下置候　白井茂兵衛

右今朝孫八ゟ相伺、其通り申付候。

一今夕九半時過ゟ、晩發之氣味ニて衂血、七半時過壹度、夜ニ入壹度、都合兩度有之。

鈴木主税日記代筆　十二月十三日

一六半時過寢ル。且風邪ニ付、主税へ代筆申付ル。

十三日晴

一今朝日覺六半時、風邪未快。

一彌次郎不致。

一來ル十九日、帶刀阿部侯へ出候筈之旨、孫八罷出申聞。且又其節致持參書取本紙出來之上、爲見候筈之事。

一五半時過寢ル。不快中ニ付主税へ代筆申付ル。

主税代筆

尾張家より來狀

（來狀）

以手紙致啓上候。然者近日此御屋敷に御出之節、御逢之儀ニ付、頃日御申聞之趣相達候處、御滿足思召候。御逢可被成との御事御座候。併來ル十五日比ニハ、御元服御官位可被　仰出御内沙汰爲相聞、旁御日限色々御指支ニ而、廿日以前ハ御出御座候共、　御逢難被成候間、廿日以後御指支無之御日並兩日程、追而從是相達可申候間、左樣御承知被下度候。此段可得御意如此候。以上

十二月十三日　　津田纏殿

十二月十四日　病氣稍快　國許の飛脚着

十四日晴

一今朝目覺六半時、不快順快床上ル、褥ニ罷在養生。

一去六日晩發飛脚、山ゝ内ニ而一日半逗留、今朝到着、國許靜謐之由、八百里訴出申達。

一四半時前目付用承之。國元ゟ之用狀披見。

一九時前家老用承之。前同斷、用狀披見。

主税代筆

一六半時過寢ル。不快中ニ付主税へ代筆申付ル。

十二月十五日　寒鰤到着

十五日晴

今朝目覺六ツ半時、順快。寒鰤つく、夫々へ進上。存て花はし印へ、小鯛一枚内々ニてゐく。

鐐姫様より來簡

登城相斷。半右衞門いさす。一位様幷三河様へ手紙まん上。

彌次郎いさす。鐐姫様ゟ直手紙來ル。

鐐丸様敍爵慶臧卿と申す

鐐丸殿官位從三位中將慶臧（ヨシツク）卿

五ツ半時過寢ル。

十六日

十二月十六日

今朝目覺六ッ半時、順快。　手水今朝よりいたす。　髮も同様、淸左衛門罷出。

水害損毛の届書

（用狀）

拙者領分越前國、當春以來相應之氣候ニ而稲生立宜趣ニ候處、五月廿日夜大雨、川々出水、窪所之分水浸ニ相成、土用前よ里雨天勝ニ而、六月十六日ゟ廿一日迄雨降續、九頭龍川足羽川とも滿水、別而日野川筋之儀ハ山崩等有之、水勢强く、田地圍堤川除等數百ヶ所押切、永荒所出來、田畑砂利土押入等夥敷有之、窪所之田面數日水浸ニ而、水腐株絶等出來、其上七月上旬俄ニ冷氣ニ相成、雨天打續、時候殊之外不宜、同十二日よ里霖雨、就中十五日より十七日迄亦復川々滿水、出水後堤川除等未補理不行届内故、田面江水溢レ、別而痛强處冷氣勝ニ而糠蟲蓁蟲等致增長、作毛相後レ、二百十日以後ニ相成候得共、草生而已ニ而出穗なき田面も有之ニ付、先達而御届申候。　收納ニ至り相糺候處、水損蟲付荒所ニて、過分之損毛ニ相成候。　則損毛高、破損所等左之通ニ御座候。

一高八万九千四百四十貳石八斗

此内　高三百貳十貳石八斗　當巳年水損田方永荒

高八萬九千百貳十石　當巳年田畑之内水損虫痛冷氣等ニ而無毛之分

一往來道幷耕作道損共　　十八ヶ所

一石橋土橋流落大損共　　十貳ヶ所

一川除所用水處幷閘堤損共　　百十貳ヶ所

此長サ七百三十五間

一溺死人斃牛馬無御座候

右之通ニ御座候。此段御屆申候。以上

十二月　　　　御名

御勘定所に諸家様留守居御呼出ニ而、御書付類或者御達事等之儀、以前者御別紙御格達ニ而御座候處、何頃より歟御同列様方御組合ニ而御達御座候様に相成候。何卒以来ハ松平加賀守様御同様御別紙御格達ニ被成下候様奉願候。將ニ中頃御書中様ニ而御書付類御渡、大目付中様御目付中様御觸達等茂、同様御組合ニ而御渡、御順達ニ相成候ニ付、安永五年奉願、其後ハ御老中様ニて茂御書付類御別紙ニて御渡、大目付中様御目付中様御觸達茂、御格達ニ被成下候儀ニ御座候間、御勘定所之儀茂右之御振合、御別紙御格達ニ被成下候様奉願候。以上

御名内

高野半右衞門いとす。彌次郎いとす。五ッ半時過寢ル。

（用狀）

十二月十六日

侍從　酒井與四郎

四品　松平甲斐守

思召有之ニ付四品　大久保加賀守

四品　植村出羽守

右於御白書院緣頰、老中列座備前守申渡之。

奥平九八郎　大膳大夫ト伺

酒井聕七郎　大學頭ト伺

大久保金五郎　長門守ト伺

谷　弘三郎　播磨守ト伺

驊　　富丸
長門守ト伺

有馬満丸
筑後守ト伺

毛利健之助
出雲守ト伺

紀伊守嫡子
鍋島三平
加賀守ト伺

周防守嫡子
板倉新十郎
右近将監ト伺

小普請奉行
大屋圖書
遠江守ト伺

甲府勤番支配
近藤織部
信濃守ト伺

中奥御小姓
佐野與八郎
備後守ト伺

右諸大夫被　仰付旨、於同席列座同前、同人申渡之、若年寄中侍座。

酒井與四郎

右雅樂頭と可改旨　御意之趣、於御黒書院溜老中列座備前守申渡。

一此度　御男子樣御誕生被爲　在候處、思召有之候ニ付、表向御弘ハ不被
仰出候。御名之儀ハ　田鶴若殿与被　稱候旨、被　仰出之。

時服五
御側衆
松平筑後守

老衰其上腰痛ニ付、内願之通隱居被　仰付、家督惣領淡路守江被下置候。
淡路守取來五百俵被下、拜領物迄被仰付、且數年無懈怠出精相勤候ニ付、
向後時々勝手次第爲伺御機嫌、奥江罷出候樣被　仰出候。

御小姓
松平淡路守

父筑後守内願之通隠居被　仰付、家督無相違被下之。

右於奥相済

十二月十七日

十七日晴

今朝目覚六ツ半時、其外替ること無之。順快。未快ニ付、田安明日相断。清左衛門罷出ス。彌次郎いとす。五ツ半時過寝ル。

松平田鶴若

牧野備前守殿御口達書写一通、土岐丹波守殿方来ル。

此度　御男子様御誕生被為　在候處、思召有之ニ付、表向御弘メ不被　仰出候。

御名之儀者、松平田鶴若与被称候。右ニ付都而表向御祝儀等申上候ニ不及候事。

十七日

十二月十八日

十八日晴

今朝目覚六ツ半時、順快。半右衛門罷出ル。家老用有之、下書見セル。彌次郎いとす。五ツ半時過寝ル。

十二月十九日

十九日雨

今朝目覚六ツ半時、順快。其外替ること無し。半右衛門罷出ル。帯刀今日阿部様へ罷出ル。謹姫、斗へ御逢、伊勢守殿御逢無之、封書ニテ差上ク。成嶋先生被罷出、書経講義有之。

明晩常振飛脚、到著之段清左衛門伺之。

御拳場に立入りを禁ず

出火の節

（觸達）

阿部伊勢守殿御渡候御書付寫一通、牧野備前守殿御渡候書付寫一通、青山下野守殿御渡候御書付寫一通、稻生出羽守殿ゟ來ル。

袖うら 伊勢守殿御渡

大目付へ

御拳場之内へ近頃怪敷姿ニ而立入、鷹抔据徘徊致し候者有之段相聞、不埒之至ニ候。此以後右躰之者及見候ハヽ、早速可申出候。若見遁しニ致し、外ゟ於相知ハ、村役人共迄急度可申付候。

右之趣御料ハ御代官、私領領主地頭寺社領共不洩様可被相觸候。

右之通天明六午年相觸置候處、近頃觸面之趣等閑ニ相心得候者も有之哉ニ相聞、不埒之至候。向後御拳場之内、鷹抔据候而徘徊致し候輩於有之ハ、吟味之上嚴重之御沙汰ニ可被及候間、右躰之者及見聞候ハヽ早速可申出候。

右之通可被相觸候。

十二月

袖うら 備前守殿御渡

大目付へ

出火之節、見物ケ間敷もの罷出間敷旨、去辰年も相達候間、面々其心得ハ可有之候

見物人の來集を禁す

得共、兎角火近之場所へ多人數立集及混雜、消防等之妨ニ相成候由ニ付、以來右
得違之者有之候ハヽ、時宜ニ寄帶刀致し候ものとも見搦捕相糺候儀も可有之候
間、彌心得違之儀無之樣、向々へ可被達置候事。

袖うら
下野守殿渡
大目付へ

一歲暮之爲祝儀、老中若年寄中へ被相越候義、廿八日前勝手次第見合、不込合樣可被參候。
一年禮之儀、元日より七日迄之內、何茂へ勝手次第不込合樣可被參候。
附風烈之節ハ年禮可爲無用候
一寺社之分も可爲前々之通候。並町人諸職人等も可爲同前候。
右前々も相觸候通、供之者大勢無之樣可被致候。
十二月

五ツ半時過寢ル

十二月二十日

廿日雨

今朝目覺六ツ半時、其外替ること無し。半右衛門罷出候。月代いたす。彌次郎いたす。明日老中初寒氣見舞勤ム、三河阿州も勤メ。孫八辰ノ口へ罷出ル。明

十二月二十一日　將軍龜有筋に御成　老中へ寒中見舞

十二月二十二日　紀州水戸へ寒中見舞

十二月廿三日　一ッ橋へ參る　駕の者を處分す　蟹江善右衞門

日龜有筋へ被爲成、門前通御。五ッ半時過寢ル。

廿一日晴

今朝目覺六ッ時二寸五步、其外替る無之候。

公方樣御成ニ付、門前通御ニ付、松之間へ相詰。

五ッ半時之供揃ニ而、牧野備前守（不快戸田山城）並松平和泉守並三河守殿阿州へ勤ル、歸宅四ッ半時壹寸五步廻り。中村稽古いたす。明日紀州水戸へ勤ム、五ッ半時供揃。彌次郎不快、不罷出。尾州六日之由。

五ッ半時過寢ル。

廿二日晴

今朝目覺六ッ半時、其外替ること無之。紀州水戸寒中勤ムル、歸宅九ッ半時へ懸り。孫八罷出、源五右衞門之儀、委細織部申談して吳ル。

廿三日雨

今朝目覺六ッ半時、其外替ること無之。半右衞門罷出候。五ッ半時之供揃ニ而、一ッ橋へ參ル。夫ゟ神田橋へ參ル段以主税伺之。駕之者與三五郎、門前不埒之義有之候ニ付、押込申付ケ、右ニ付門番同やう押込。右ニ付蟹江善右衞門

其内ヲ組ミ者有之ニ付、遠慮伺差出、不及其儀段、差圖いたす。　成島先生被罷出、書經講義有之。三聖物迄ミ討會ニ成ゐ之。

五ツ半時過寢ル。

十二月二十四日 一橋に參る

廿四日晴

今朝目覺六ツ半時、其外替ることと無之候。　五ツ半時過ミ供揃ニる、一ノ橋へ參ル、奥平大膳元九八郎合客。　夫ゟ神田橋へ參ル、歸宅七ツ時打二寸廻り。　松平源太郎罷出、松波彌次郎妹、牧田攝津守養子主殿助へ縁組御内意相伺之。　明日四ツ半時ミ供揃ニる、田安へ參ル。　五ツ半時過寢ル。

十二月二十五日 田安に參る

廿五日晴

今朝目覺六ツ半時、其外替ることと無し。　半右衛門罷出候。　四ツ半時ミ供揃ニる、田安へ參ル。　鑑丸様ニも御出被成候。　清左衛門罷出、眞田五郎兵衛始名替相伺、明日差圖、廿八日ゟ相改候様申述ル。　歸宅四ツ時へ二寸前、直ニ寢ル。

（來狀）

以手紙致啓上候。　然者來春　越前守様爲御年始、此御方に被成御出候儀、正月九日

ニ被成御出候様との御事に御座候。尤御在府之節ハ、御年始御出御定日ニ御心得被成候様との儀ニ御座候。此段宜様御取計被御申上可被下候。右可得御意如斯御座候。以上

十二月廿五日

尚々正月九日て、毎年清水一橋よりも御年始御入御定日ニ御座候間、御心得ニ得御意置候。以上

竹中織江

櫻井源大夫

天方孫八様

一

以手紙致啓上候。然者　尾州様に越前守様より御餞別被進之儀、兼ゐ御問合有之候処、二枚折御屏風一双御差出之積ニ相成申候。尤御品御支度之儀、御頼之趣先達ゐ被仰越候ニ付、此御方ニゐ宜取計可申候間、日限て御勝手次第ニゐ、御使者御差出可被成候。右御目録て、御持参有之候心得ニ御座候間、左様御承知可被成候。此段得御意候。以上

十二月廿五日

猶々本文御品代料之儀ハ、御先格之通拾五両程之積ニゐ御支度いたし可申候間、追ゐ其向方仕様書等差出候上、猶又可得御意候。且御添肴并御使者柄之義ハ、天保九戌年之通、御熨斗包此御方ニて御用意いたし可申候。御使者ハ御用人中御勤ニゐ可然候。以上

嶋田清左衞門様
松平源太郎様

十二月二十六日
尾州家へ参らる

廿六日晴

今朝目覺六ッ半時、其外替ること無之候。五ッ半時ゟ供揃ニる、尾州へ市ヶ谷御館へ參ル。鐐丸殿ニ進。貞愼院(齊朝)様ゟ御菓子到來。中將(慶臧)殿ゟ置物。例ゟ通彌次郎いさす。政右衞門いさす。人溶いさす。五ッ半時過寢ル。

十二月二十七日
天徳寺御参詣

廿七日晴

今朝目覺六ッ半時、其外替ること無之候。天徳寺惣御靈屋へ參詣、御廟共。歸宅九ッ半時壹寸前。清左衞門罷出、明日登城並御歳暮、御使重陽御内書頂戴、登城前いさす。夫ゟ神田橋、夫ゟ田安へ參ル段相伺之。孫八罷出、昨年、礒岡御用多ゟ處出精大儀ニ付、

稽古納御目見
年始の習禮

白ちりめん別段被下候段相伺之。明日中村政右衞門、市橋万右衞門御稽古納ニ付、御目見、御意大儀。星野求庵、上田幸圓罷出、年始習禮いさす。

（屆書）

圍籾の屆出

覺

一籾三千貳百石

右者、去丑年圍穀之分、高壹万石ニ付籾百石之割合を以、當巳年迄圍増候樣被　御出候付、當年之分前書之通圍置候段、國許役人共ゟ申越候。則當年ニ而皆濟ニ御座候。此段御屆申上候。以上

十二月

御名内
中村八大夫

醫師供方風儀に就きて

(觸達)

牧野備前守殿御渡御書付酒井安房守殿ゟ來る

袖ゟ
大目付江

御醫師中供方のもの共風儀不宜、病家に罷越酒代又は辨當料と唱、ねさりヶ間敷儀申掛候ものも有之ニ付、去ル丑年相達置候處、近來又々弛之候趣相聞候ニ付、可及沙汰處、御醫師中手限之制度行屆兼候由ニ而、其筋に取締相願候ニ付、町奉行に達、口入之もの共呼出、夫々相糺、以後心得違決而無之樣、奉公人共に精々可申聞旨申渡置候。若相背もの於有之ハ、無用捨召捕可及吟味條、侍共之儀ハ嚴科ニも相當り候間、入念可申付置、今度之儀ハ御醫師より取締之儀相願候事故不及沙汰候。此後銘々申付方等閑之儀於有之ハ、其方共ニおゐても、不束之事ニ候条、急度可及

沙汰い間、能々申渡置い様可致い。

右之通奥醫師に相達い間、爲心得諸向醫師共に可被達い。

十二月

五ッ半時過寢ル。

十二月二十八日

廿八日晴

今朝目覺六ッ半時、其外替ること無之。

御登城

五ッ半時ゝ供揃こゐ登城。夫ゟ神田橋、夫ゟ田安、歸宅七ッ時へ二寸前。

歲末の遺物

(遺物覺)

桟留袴地壹反ッ、(御小姓頭取・奥之番)

白木綿壹反ッ、(御膳番・平御小姓・御近習番)

右ハ近年御燒捨物被下之御品、追ゝ御麁末ニ相成い上、昨年ゟ大古物被下も無之ニ付、新御趣意金ゝ内を以、當年限被下之。

金百疋充(御召料方・御小道具方手傳共・同斷掛り御坊主共)

三百文充(御召料方・御小道具方小使共)

同貳朱充　平御坊主共

右ハ御用多ゝ處、困窮相勤い二付、右同斷當年限り被下之。

御內書

出殿前御內書頂戴、家老目見有之、歸宅後年寄へ不相替さかな一折、手目錄遣。

磯岡

磯岡格別心配ニ付、白ちりき(め)ん二反遣ス

昨年ゟ用多之處、格別骨折出精致候ニ付、乍麁末遣ス。

本多定次郎

本多定次郎西丸御納戸ニ相成ル。

五ッ半時過寢ル。

十二月廿九日

廿九日晴

今朝目覺六ッ半時、其外替ルこと無し。

明日登城伺之。清左衞門罷出、御目錄見セル。

飛脚着

廿日晩立通飛脚、常振今日到着。

目付用狀見セル。庭納拜。大奥歳暮、御佛前拜、献上物見ル。五ッ半時過寢ル。

（政暇日録三終）

政暇日記

自弘化三年丙午正月二十日

至二月廿六日

十五代目

越前守

政暇日記

自弘化三年丙午正月元日
至二月十八日

十五代目
越前守 慎獨

弘化三年正月元日
登城正を賀す
神田橋へ参らる
福引あり
正月二日
三献之祝儀
讀書初

正月元日晴

今朝目見八ツ半時、規式有之。
六ツ時へ二寸前ニる供揃、ぶら〳〵明ケニる登城。
公方様、右大將様御白書院へ出御、紀伊殿水戸殿松平加賀守松平三河守松平肥前守松平因幡守兎御吸物頂戴、御時服二ツ、拜領、三河守ハ太刀目錄持參ニ御禮、夫ゟ相濟て西丸へ相廻ル、夫ゟ神田橋へ參ル、歸宅九ツ半時。
於御座ニ間、御鏡餅拜領、御目錄拜見いさす。
手元福引有之。五ツ半時寢ル。

二日晴

今朝目覺六ツ時、規式有之。五ツ時揃ニる假座敷舞臺へ移り、三献ニ祝有之。猶帶刀、天方孫八御相伴、給仕岡田喜八郎、大井曾禰次郎之。夫ゟ用人ヲ始一統流レ頂戴有之。
讀初大學三綱領八條目　高野半右衛門出ル。
書初
△乾元萬物資始ム手前ミ

乗馬初

正月三日

水戸齊昭に賀狀を呈上

飛脚到着

〇百事樂ム嘉辰ヲ 一位様ゟ被仰付

二様共認、△之方三枚之内、壹枚年德たな、壹枚田安、壹枚殘ス。〇之方ハ二枚之

内、一枚田安、一枚殘す。

一脈ノ春陽回レ造シ化ヲ、 壹枚唐紙

萬方ノ民物賴レ生ルニ成ニ

陽和忽チ轉ス氷霜ノ後チ 壹枚唐紙

元旦又如シ天地初ノ

慰ニ認申候。側用人以存侍座、用人拜見。

乗初黒澤いたす。二番川福引有之。五ツ半時過寢ル。

三日晴

今朝目覺六ツ半時、規式有之。今朝ゟ素讀いたす。水戸前中納言殿へ年始狀呈上。孫八ゟ評定留出す。主税へ相渡す。松平源太郎罷出、明後日老中並尾州へ相勤候段相伺之。五ツ半時過寢ル。廿日立飛脚、廿九日到着。其節之評定留並半紙、目付ゟ差出す。寫左之通り、

十二月十九日御書出し被下候面々左之通り

跡知之書出し　酒井彦[illegible]
右同断　[illegible]右[illegible]太
右同断　牧野[illegible]吉
家督知之書出し　佐久上市左衛
跡知之書出し　川村乙[illegible]郎
家督知之書出し　市[illegible]
跡知之書出し　[illegible]田[illegible]吉
家督知之書出し　久野文四郎
右同断　高屋十[illegible]郎
右同断　川[illegible]等[illegible]郎
右同断　細井仲齊
跡知之書出し　細川玄[illegible]

〆

去ル十一日、於評定所誓紙有之ニ付、面々左之通り

原　平左衛門
菅沼平五衛
千本藤左衛門
服部三郎兵衛
八田今右衛門

右役儀之誓紙申付、家老前ニ而判元相調之

右同斷家老目通ニ而判元相調之

松山藤助

野治七郎右衛門

木内甚兵衛

小堀傳右衛門

高久官大夫

右同斷奉行目付判元見屆之

小川茂兵衛

大久保元作

右同斷目付判元見屆之

南部源兵衛

鈴木作大夫

大橋金兵衛

古市八兵衛

右同斷奉行目付判元見屆之

十一日

新番組山田茂兵衛、寛彌三右衛門家屋敷無之ニ付、相應之家屋敷明有之ハ節願

十六日

高木庄右衛門留守番へ人ハ儀申來ル

添役　高嶋孫兵衛

荒川十右衛門養子外登、先達ゟ病死ニ付、直治儀嫡子ニ致度段願申付候儀申来ル。
勘定奉行　土屋文藏　菱川權吉
中田他三郎養子久次郎願申付
落合丈右衛門娘幸若へ遣し候義申来ル
伊藤登美三郎願同断。
大野宗大夫弟五郎吉儀、堤武右衛門養子願之通り申付
南部源兵衛義、妻女無之ニ付、宇貝八郎右衛門娘妻女ニ致度願、八郎右衛門方も同様、
粟田八十郎妻女無之ニ付、木田荒町正藏寺娘、妻女ニ致度段願
當年秋詰水野主計と致候様、平本作野右衛門へ申付候義ニ伺之。

三國府中の米價

三國
米壹俵ニ付　六拾五匁五分位
大豆壹俵ニ付　四拾八匁位
小豆壹俵ニ付　五拾五匁位
鹽兩ニ付　拾八俵位

府中
米壹俵ニ付　六拾二匁位
大豆壹俵ニ付　五拾二匁位
小豆壹俵ニ付　五拾四匁位

正月四日

四日曇夕降雨

酒井若狹守等の年賀狀

今朝目覺六ッ半時、其外替る無し。規式今朝方無之綱目誦す。松平源太郎罷出、本多內藏助並堂上方、酒井若狹守へゝ年始狀披見。家老用有之。

飛脚出發

今晩常振飛脚國表へ遣ス。

明日　大樹濱御庭被爲成、御門前通無之

明日老中不殘紀州水戸へ相勤候段、五ッ半時ゝ供揃ニる罷越候段、用人相伺之、尾張へも勤候存ニ候所、尾張差支有之候ニ付、追る相勤候。

阿部伊勢守殿御渡候候書付寫壹通、被得其意、答ゝ儀ハ深谷遠江守方へ可申聞候。

御本丸普請上納金

　　　　袖裏大目付へ

　御本丸御普請、御普請ニ付、萬石以上ゝ面々上納金、年割納願相濟後、御役御免又ハ家督ニ付、金高増減被仰付候所、右ハ當年を限り、來正月ゟ居屋敷燒失等之外ハ、都る最前願濟金高ゝ通り上納可有之候。

　右ゝ趣寄々可被相達候。　十二月

松波彌次郎罷出、詩經申上之。　五ッ半時過寢ル。

正月五日

五日晴

老中及三家に御年賀

今朝目覺六ッ半時、其外替ること無之候。

五ッ半時ゟ供揃ニ而、老中不殘紀州へ水戸へ年始祝詞として參館、

阿部伊勢守樣へ〻口上扣

愈御堅固御越年珍重存候、年始御祝詞申上候、御返禮旁申入候

牧野備前守殿
青山下野守殿
戸田山城守殿
松平和泉守殿

愈御堅固御越年珍重存候。年始御祝詞申入候。

紀伊殿水戸殿

愈御勇健被成超歲珍重奉存候。年始御祝詞何公(候)いたし候。

紀　一位殿へも御祝詞宜

水　中納言樣御始年始御祝詞申上

吉原燒失

歸宅九ッ半時へ壹寸前。孫八罷出、吉原燒失ニ付、深淺本邊へ出茶屋出候ニ付、

執法方觸出し、一昨日ゟ案文見セル。

五ッ半時過寢ル。

正月六日

六日晴

今朝目覺六ッ半時、其外替ると無之候。 四ッ半時頃用達町人共、並幡野保太郎目見有之。

成島書經初講義

成嶋先生被罷出、書經講義有之、此方初會ニ付、のし目麻上下之。 筆一本唐渡まう捧呈。

孫八田安並一ッ橋、龍ノ口貞照院殿江年始爲御祝儀罷出ル。

明日七菜ニ付登城、供揃例刻、用人伺之。

松平源太郎罷出、鯛目錄見セル。 五ッ半時過寢ル。

正月七日

七日晴

今朝目覺七ッ半時、其外替ること無之。

註、昨夜五ッ半時過彼是四ッ半時近居り。 今朝七ッ半時ニ目覺め、ねむくして心氣茫然たり。 心怠惰ニ成易きもの故、ケ様ニ時も、なるたけ心ゟ目が明き候ハヽ、宜クと存候。

登城

六ッ半時過ニ供揃ニる登城、夫ゟ西丸、夫ゟ神田橋へ參ル。 歸宅九ッ時打二寸五歩。

飛脚到着

正月八日
門出入帳
比丘尼の年賀

彌次郎いさす。馬術いさす。
廿八日晩立飛脚、今日到著、國表無異也。
孫八嗣子諒之助、華藏妻願快ゝ由。
五ツ半時過寝ル。
八日晴
今朝目覺六ツ半時、其外替ること無之。綱目獨誦。目付用狀並門出入請帳見セル。家老用有之。比丘尼出ル。

本立院　鏡智院
顯示院　頻圓昌院
法性院　知法
禪知院　頻本是院
頻更法院
壽清院
本明院
明曉院
以光院
信定院

正月九日

家祥公三河島筋御成

清水家外諸家に回禮

正月十日

手昆布遣す。献上並手昆布遣す。

彌次郎いさす。明日右大將樣三河島筋へ被爲成ニ付、門前通御ニ付、松ミ間へ相詰候段用人伺之。右ニ付田安相斷。清水ヲ初所々廻勤相伺之。

五ツ半時過寢ル。

九日晴

今朝目覺六ツ時、其外替ること無し。

右大將樣、今日三河島筋へ被爲成、門前通御ニ付、往來共松ミ間へ相詰ム。

五ツ半時ミ供揃ニる、清水（彌御勇健被成御超歳、珍重奉存候。年始御祝詞申上候。）松平玄蕃頭、本庄安藝守、伊東修理大夫、松平甲斐守、本多中務大輔、松平阿波守殿、松平三河守殿

愈御堅固御越年珍重奉存候。年始御祝詞御返禮旁申入候。

三河守殿ニハ御返禮とハ不申候。

歸宅九ツ時へ五歩前。彌次郎いさす。

御出入醫師石野榮壽儀、依願帶刀

御免被成、其段可被申渡候。

松平源太郎

十日雨

今朝目覺六ッ時、其外替る事無し。綱目獨誦。雨天ニ付上野參詣延引。明後日芝天徳寺參詣いたし候積。彌次郎いたす。五ッ半時過寢ル。

正月十一日　具足開の儀

十一日晴

今朝目覺七ッ半時二寸五分、其外替ることと無し。六ッ半時揃ニ而、具足ニ而家老相伴、於松之間具足之餅頂戴、一統濟候。五ッ半時過。筑山讓先生被罷出、書經講義有之候。ひをどし具足著用。五ッ半時過寢ル。

正月十二日　増上寺天徳寺に御參詣

十二日晴

今朝目覺六ッ半時、其外替ること無し。五ッ半時之供揃ニ而、増上寺へ參詣、夫ゟ天徳寺へ參詣いたし候、歸宅九ッ半時壹寸五歩廻り。彌次郎いたす。尾州へ十九日ニ罷越候樣、天野藤十郎ゟ申來ル。五ッ半時過寢ル。

正月十三日　田安家へ御年賀

十三日晴

今朝目覺六ッ半時、其外替る事無し。四ッ半時へ二寸前之供揃ニ而、年始爲祝詞田安屋形へ參館、尾州ニも御出被成候。

一位樣ゟさくら鉢植

右衞門督樣ゟ梅鉢植木

正月十四日
東王寺清覺

純姫様
筆姫様方さゝゐ一籠
き井方盃十五
右之通御投惠有之ハ
一位様へ幾千代紙一箱
右衛門督様へ右同斷
純姫様へ布目半切百枚
筆姫様へ繪奉書半切百枚
き井打曇奉書百枚
右之通進呈

歸宅四ッ時五歩廻り。直ニ寝ル。

十四日晴

今朝目覺六ッ半時、其外替ること無し。綱目獨誦。松平源太郎罷出、明日登城、夫方神田橋、供揃刻限例之通り相伺之。御城坊主小出善丘跡、東王寺清覺へ御出申付ル義相伺之。

同心持田太郎助、古谷堅助御出入相伺之。

執法用状見ル。家老用有之。彌次郎いさす。孫八罷出、大奥御供人數相伺之。

年寄　歌島
若年寄　花野
同富格　初瀬
錠口　藤井
同斷助　そ那
右筆　みよ
半下　吳竹

五ツ半時寝ル。

正月十五日

十五日晴大風

今朝目覺七ツ半時、其外替ること無し。

御登城

六ツ時し供揃ニる御本丸へ登城、夫ゟ神田橋へ參ル、歸宅九ツ半時へ懸り。 松波彌次郎詩經申上。

本郷丸山より火事
靈岸島邸燒失

七ツ時ゟ本郷丸山邊ゟ出火し處、常盤橋屋敷無別條、靈岸嶋中屋敷不殘類燒、茶屋並馬見所殘ル。 外ハ、南八丁堀本多兵部大輔殿屋敷燒留り、誠ニ大火大風也。

火事の次第

火事次第

七ッ時頃、本郷丸山邊出火と申事ニ付、一統申候ハ、何分大風ㇾ事ニ候故、常盤橋風筋不宜候ニ付、道具片付ル内追々大火ニ相成申候。右ニ付小姓波多野頼太郎（此者隨分學問有之）へ申付、略筮爲取申候所、ヶ様な卦出申候。左ㇾ通り

☲
離爲火

☲☰
變卦 火天大有

右ㇾ象出申候。

夫ゟ五ッ半時前頃爲見廻、屋敷見廻ル。此時分粥を此方始食ス。又内々腰掛へも参ル。夫ゟ大分本邸火消参候ニ付、玄關迄立退、少し風筋宜候ニ付、又々居間へ罷越、夫ゟ跡乃屋敷を見廻ル。志めり七ッ時頃。

靈岸島屋敷燒失。貞照院殿御障無之候。例刻寢ル。

十六日晴

右（靈岸島）屋敷燒失ニ付、存ヲ以郡役所へ預候金、元利共取上（五百五十兩程）ニる信義旁勘定所助成致申候積。方々ゟ見舞参ル。昨晩田安ゟ爲見舞、近習番以中山熊三郎参ル。成嶋先生被罷出、書經講義有之。五ッ半時前寢ル。

（頭注）波多野頼太郎 / 貞照院様御無事 / 正月十六日燒失ニ付助成金

類焼届書

（届書）

昨日、出火御座候處、拙者靈岸嶋中屋敷建物並長屋向不殘致類燒候、此段
御届申候。以上

正月十六日　　御名

正月十七日

十七日晴

今朝目覺六ッ半時、其外替ること無之。
用人ハ主役ニ候得共、度々本邸靈邸火事ニも馴れ候義故、孫八ニも猶以心配致
候様申付。
彌次郎いさす。馬いさす。五ッ半時寝ル。

正月十八日

纒持久米次郎死去

十八日晴

今朝目覺六ッ半時、其外替ること無之候。五ッ半時之供揃ニて、田安へ參ル。
歸宅六ッ半時へ五歩前。

覺

舊冬方御預被置候纒持
久米次郎

右之者兩三日以前方、少々脚氣之症ニ御座候處、昨夜中方俄に衝心仕、今十八日巳之

刻致病死ル。此段御屆申ル。

正月十八日

松平越前守内

篠原允助

當分常ヘ

橋隔日勤

田代萬貞

半井元冲

右ニ付檢使罷越、左之通り

遠山左衞門尉組與力

貞照院様勤

千種龍澤

德岡五三郎

同組同心

大竹惣藏

川口惣三郎

鍋島内匠頭組同心

大芦五郎右衞門

山崎榮太郎

以上

右ニ付、安田元珉居不申ルニ付、爲名代本山春庵罷出ル。五ツ半時前寢ル。

安田元珉
本山春庵
正月十九日

十九日晴

尾州家其他に御年賀

今朝目覺六ッ半時、其外替ることと無之候。五ッ半時ゟ供揃ニ而、攝津守殿倍渡守殿尾州江年始祝詞勤ム。尾州へ例之通り。八ッ時打壹寸廻ル。

高畠市郎右衛門出府

高畠市郎右衛門到着ニ付目見、直ニ用承ル。

五ッ半時過寢ル。

正月二十日

廿日雪

今朝目覺六ッ半時、其外替ることと爲し。半右衛門罷出候。源太郎罷出、一ッ橋

廿五日申來ル。

今日雪ニ付、成嶋先生相斷。替日廿二日。

孫八罷出伺之。

（用狀）

覺

一金壹兩貳歩ツヽ　御物頭

一金壹兩壹歩ツヽ　末々番外

一金壹兩ツヽ　御番組 御醫師

一金三歩ツヽ　小役人 小算格迄

一金貳歩ツヽ　小寄合格 以下

材木其他の高値を禁ず

〆

勤番

一金貳歩ツヽ　御番組

一金壹歩ツヽ　（小寄合以下）格

右之通り

（觸達）

正月十九日

阿部伊勢守殿御渡候御書付寫貳通、酒井安房守殿ゟ來ル

袖ら　大目付へ

此度江戸表火災ニ付、材木其外之諸色、商人共より在方へ注文申遣候ハヽ、元直段成丈下値ニ可賣出候。若無謂高直ニいたし候もの於有之ハ、可爲曲事もの也。

右之通關八州幷甲斐伊豆國村々へ、御料ハ御代官、私領ハ領主地頭より可被相觸候。

正月

袖ら　大目付へ

右之趣向々へ可被相達候。

拜借金上納延期

此度類燒之面々、兼而諸拜借有之分年賦上納之儀、年延ニ被成下候間、當暮ハ上納ニ不及候條、其向々へ寄々可被達候事。

正月

田安へ參る

彌次郎いたす。田安九ッ半時彌參ル。

五ッ半時過寢ル。

正月二十一日

廿一日晴

今朝目覺六ッ半時、其外替ること無之。

反町源五右衛門御供御免のこと

家老用有之。田安用人竹中織部方、反町源五右衛門義、當年御國元へ御供御免内願之義、夫々相達候所、表方役とも達、奥勤メ之事ニ而候へ共、思召ヲ以御免被仰出可然哉との評議、越前守様へ可申上候樣申參ル。孫八方返翰左之通り、

御手紙拜見仕候。然者舊冬御内談申上置候反町源五右衛門方、當年御國元へ御供御免内願之儀、夫々へ御達御座候所、表方御役とも達、奥御勤之事候へ共、思召を以御免被仰出候ても可然哉との、御内評議まて、其　御方樣御伺相濟候間、其趣を以　越前守様に可申上旨承知仕候。其上表立源五右衛門方御免並同人代り御供御勤之方取調可申上旨、是又承知仕候。則御紙面を以申上候所、此上之義ハ、其　御方樣思召を以被　仰付御座候樣被成度旨御座候。左樣御承知被下、宜御取計可被下候。

右御報如斯御座候。以上

千重姫様御里開き

正月二十二日 高畠市郎右衛門

御感冒半井元冲薬を調ふ

正月二十三日 御就國中仙道御通りと定まる

御年賀御回勤

九ッ時供揃ニる、田安へ參る。今日千重姫様御里開ニ付、右近將監ニも被參候。
歸宅九ッ時へ壹寸五歩前。直ニ寢ル。

廿二日雪

今朝目覺六ッ半時、其外替ること無し。半右衛門罷出ル。札所奉行高畠市郎左衛門ニ面會。成嶋先生被罷出、書經講義有之。
少々感冒乃きミニ付、ケイシ加葛根湯、半井元冲調上いたし候。源太郎罷出、中仙道勝手次第ニ御差圖有之段申上之。五ッ半時過寢ル。

廿三日晴

今朝目覺六ッ半時、其外替ること無之。半右衛門罷出候。中仙道彌御治定ニ付、被仰出源太郎へ相達候様孫八申上之。松平源太郎罷出、今日も天氣も宜候ニ付、九ッ時過ニ供揃ニる、廻勤いたし候段申上之。

愈御堅固　小笠原左京大夫　白須迄
御越年　九鬼長門守　同斷
珍重存候。　内藤紀伊守　同斷

年始御　岡部内膳正　同断
祝詞申　松平出羽守　通り用人ニ逢フ
入候。　松平左兵衛督　白須迄
　　　　松平志摩守　白須迄
　　　　松平兵部大輔　通り用人迄

七ツ半時へ懸り歸宅。
孫八田安へ罷出、源五右衛門も一條也。
五ツ半時頃寢ル。

正月二十四日　芝増上寺御參詣

廿四日晴

今朝目覺六ツ半時、其外替ることと無し。半右衛門罷出候。松平源太郎罷出、明日飛脚相立候段申上之、常振。五ツ半時過も供揃ニる、芝台徳院樣御靈前へ參詣、……（將軍御參詣の略なるべし）還御後ニ付九ツ時過出宅。歸宅八ツ時打二寸五歩。
家老用有之。

砂村御屋敷奉行假並當分　矢嶋藤八郎

廣敷用達假兼帶申付、貞照院殿之方相勤樣明日申渡候筈。家老相伺之。

通用銀札の件

申達

越前守領分通用銀札、繼年季被相伺候通り被仰付候處、右通用之儀ニ付るそ、新古札相場立方之儀ニ付、去巳五月中申達置候趣不相馳候樣可被取計候。

右そ阿部伊勢守殿に申上之上、石河土佐守申達

午正月

家老申上之、

一ッ橋四ッ時之供揃ニる、民部卿殿紅葉山參詣相濟候注進ニる、出宅之積候段清左衛門相伺之。

彌次郎いたす。稽古延引。五ッ半時頃寢ル。

正月二十五日

廿五日晴

今朝目覺六ッ半時、其外替ること無し。半右衛門罷出候。四ッ時過之供揃ニる、一ッ橋へ爲年始祝詞參館、歸宅八ッ時へ二寸前。

一橋家へ御年賀

明日所々勤いたす段源太郎申上之。彌次郎いたす。稽古いたす。

白銀三枚　福山藤右衛門

同二枚ッヽ　用達三人

同二枚　針谷春專

蒸籠二組ッヽ　番士三人

金貳百疋　添役四人
蒸籠二組ッヽ　御附書物役二人
同斷　勘定役壹人
金百疋ッヽ　小坊主三人
同斷ッヽ　徒出居番四人
蒸籠一組　出居番壹人
同斷　錠前番九人
金二百疋　臺所目付二人
蒸籠二組ッヽ　同料理方四人
同壹組ッヽ　同下代二人

孫八申上之。五ッ半時過寢ル。

正月廿六日　諸侯に御年始御返禮

廿六日晴

今朝目覺六ッ半時、其外替ること無之。五ッ半時ゟ供揃ニ而、諸侯年始返禮相勤ム。

松平修理大夫
奥平大膳大夫
植村出羽守

例文

有馬日向守
大久保加賀守
森　越中守
脇坂淡路守

石川市郎左衛門

歸宅九ッ時打二寸廻り
孫八罷出、馬喰町拜借之儀ニ付再願見セル。少々ッヽ相直す。石川市郎左衛門、永々貞照院殿用達助相勤候ニ付、金貳百疋被下ニ取斗段、申上之。彌次郎罷出、詩經申上之。五ッ時過寢ル。

正月廿七日

廿七日晴

天德寺に御參詣

今朝目覺六ッ半時、其外替ること無之候。
五ッ半時ゟ供揃ニる、天德寺へ參詣、並年始祝詞として諸侯方相勤ル。
間部安房守
細川越中守
堀田攝津守
松平因幡守

講師慶永

正月二十八日

松榮院様御年賀として登城

例文

南部甲斐守
眞田信濃守
天德寺へ參詣
松平右近將監（是ハ四品以上ニも無之、尚も十萬石以下ニ付得共、千重[illegible][illegible]御續ノ以[illegible][illegible]）
松平大和守
松平日向守

歸宅九ッ時打五歩廻り。

明日登城いたす段申上之。今日廻讀始いたす、講師慶永（此方ノ始繼上下也斷規則ニ度）

弓術いたす。五ッ半時過寝ル。

廿八日晴

今朝目覺七ッ半時二寸五步、其外替ることも無之候。六ッ半時ゟ供揃ニ而登城。

歸宅四ッ時二寸五分廻り。

今日松榮院様御本丸へ年始御祝詞として御登城。右ニ付生鯉　大樹へ献上。

大樹ゟ御塗重一重拜戴、松榮院御傳　御歸館松榮院様六ッ半時之。

彌次郎不致。居合いたす。

五ッ半時過寢ル。

正月二十九日

廿九日曇朝少シ雪氣

今朝目覺六ッ半時、其外替ると無し。松平源太郎罷出、明日上野惣御靈屋參詣可致段相伺之。

諸侯へ御返禮回勤

五ッ半時ゟ供揃ニる、年始祝詞返禮として所々廻勤。

酒井雅樂頭大手前
稻葉丹後守小川町
土屋采女正同斷
堀田備中守同斷
松平若狹守
松平備後守

置物御拜領

夫ゟ神田橋へ參ル。公方樣ゟ御傳ニる置物拜領。八ッ時壹寸廻り歸宅。

彌次郎いとす。

御頭痛

稽古延引。少々不快頭痛ニ付、明日延引ゟ積。

貞照院殿二日御引移ゟ由、五ッ半時前寢ル。

正月晦日

晦日雨

今朝目覺六ッ半時、微邪ニ付上野參詣相斷。

彌次郎いさす。稽古いささす。廿一日晩立通飛脚、今朝到、相替候義無之。孫八罷出、靈岸島淫社拜殿稲荷堂ニ可致段相伺之。五ッ半時過寢ル。

靈岸島耶
内稲荷堂

二月朔日

二月朔日晴

今朝目覺六ッ半時、其外替ること無し。半右衛門罷出候。孫八罷出申達候處、

細川家より中郷馬場拜借

細川能登守使者上田收ヲ以、中郷馬場拜借頼申來ル。宜段差圖。

彌次郎いさす。孫八罷出申上候處、松榮院様中郷御沙汰止ニ相成段申上之。

五ッ半時過寢ル。

二月二日

二月二日晴

今朝目覺六ッ半時、其外替ること無し。半右衛門罷出候。多左衛門罷出、土井能登守、九鬼式部少輔、石原清左衛門年始狀差上候ニ付、返書見セル。孫八罷出申上候處、猶江與次内悴權之丞、馬術修行尚又爲致度ニ付、來年迄殘ス願差出シ、宜キ段差圖。藤澤彦次郎御帳付御免、御勘定所勤被仰付。山崎尚助御帳付見習申付段相伺之。

猶江權之丞

阿部伊勢守に御直書

阿部様御貸附金之儀ニ付直書差出。彌次郎いさす。五ツ半時過寝ル。

二月三日

三日晴

今朝目覺六ツ半時、其外替ること無し。半右衛門罷出す。綱目獨誦。成嶋先生被罷出、書經講義有之。貞照院殿今日彌砂村屋敷御引移有之候。

貞照院砂村に移らる

乗馬いさす。五ツ半時過寝ル。

二月四日

四日晴

今朝目覺六ツ半時、其外替ると無し。半右衛門罷出候。天方孫八田安へ出ル。

國許飛脚着

廿六日晩立通飛脚、今日到着、國表靜謐之。彌次郎いさす。帯刀用有之、十郎右衛門同斷、但門前見セル。

入浴いさす。五ツ半時過寝ル。

二月五日

五日晴

今朝目覺六ツ半時、其外替ること無し。半右衛門罷出候。灸事いさす。五ツ半時過寝ル。

二月六日

六日晴曇

今朝目覺六ツ半時、其外替ること無之。半右衛門罷出候。

類焼に付

靈岸島類焼ニ付、下々方致献上物々とも受納不致段、國元へ申遣候處、國許執政

献上物不受の御意見

ゟ帯刀迄以内狀申遣候儀ニ付、此方愚存相認、草案孫八へ見セル。孫八校訂いたす之。

家譜書上帳

松平源太郎罷出、家譜書上帳草案見セル。

皆川多左衞門罷出、山野十兵衞當秋江戸詰伺。雨森小十郎悴捨六、前髮取願申付。

就國發駕の日を定む

今日發駕治定四月廿八日と諸向へ申通有之。近火之節相れさらされ故、家中之者へ褒詞有之。

政右衞門いたす。次乘馬いたす。五ツ半時過寢ル。今到着之評定留

先武具奉行鈴木作大夫跡、高木藤左衞門申付。

大番組吉田伊兵衞養子藤吉儀、病身ニ罷成候ニ付、双方和談之上離緣願申付

恒岡安左衞門妻女無之ニ付、東鄕庄之助妹後妻ニいたし度願申付

國枝藤兵衞妻女無之ニ付、加藤又右衞門娘後妻願

先便十六日評定留

當夏歸國禮使者内意申付　　芦田内匠

南部源兵衞妻女願、栗田八十郎同樣願申付

吉田茂左衞門妻女無之ニ付、河合太郎大夫妹後妻願

瀧仁左衞門實子政吉儀、當年拾五歲ニ相成候ニ付、嫡子願

（用状）

正月十六日

平本作野右衛門

御自分儀、當秋　江戸詰被　仰付、水野主計と可被致交代候。且又詰中御足高五拾石被下置。

松榮院様御用兼帯相勤候様被　仰付候。

御奉行市村勘右衛門儀、當春江戸詰西尾源太左衛門と交代被　仰付置候處、佐々木小左衛門儀内達之趣も有之、御役　御免被成、原平左衛門に跡役被　仰付候。然ル處今一兩年之處ハ、御用繁雑之儀ニ付、勘右衛門此表に罷越候るハ、平左衛門儀を新役岡田金左衛門一人ニるハ取調屆兼、御差支之儀、且ハ御不益之儀も出來可申哉ニ付、勘右衛門儀詰　御免被成、平左衛門に江戸詰源太左衛門と致交代候様被　仰付可然との事。

一大御番組渡邊元右衛門弟藤吉儀、先年吉田伊兵衛養子ニ差遣候處、病身ニ罷成候ニ付、双方和順之上致離縁、元右衛門方に差戻申度、元右衛門儀も引取申度との事。

正月廿日

多賀谷舎人

御自分御番組鈴木作大夫儀、別紙御書付を以被　仰付候。何も退出後、御目付共申談可被取扱候。

鈴木作大夫遠慮

望月八郎右衛門遠慮

別紙

御書付

鈴木作大夫江申渡書

其方儀、先役中心得違之趣相聞、不調法之事ニ候。依之御役[illegible]
付候。急度相慎可罷在候。以上

正月

望月八郎右衛門儀、別紙御書付を以被　仰付候。何も差出候、御目付共申書可請取
扱候。

川地又兵衛

別紙

御書付

望月八郎右衛門江申渡書

其方儀、心得違之趣相聞不調法之事ニ候。依之遠慮被　仰付候。急度相慎可罷
在候。以上

正月

廿日評定

町田左久馬江戸表馬術修行願

二月七日

七日晴

今朝目覺六ッ半時、其外替ること無し、半右衛門罷出候。靈邸類燒ニ付、下々ゟ献上物いたし候とも、受納不致段之儀ニ付、國許へも差遣候愚存、帯刀迄相渡。明日上野參詣相伺之。筑山先生被罷出、書經講義有之。五ッ半時過寢ル。

二月八日

上野へ御參詣

假養子の内書を提出

八日晴

今朝目覺六ッ半時、其外替ること無之候。五ッ半時之供揃ニ而、上野惣御靈屋並淩雲院へ參詣。歸宅九ッ時三寸廻り。假養子之儀ニ付、内々伊勢守殿迄内書差出す、下書認、明日磯岡依罷出之。彌次郎いたす。居合いたす。明日田安へ參ル段相伺之。五ッ半時過寢ル。

二月九日

田安へ參る

九日晴

今朝目覺六ッ半時、其外替ること無之候。半右衛門罷出候。孫八一橋へ出ル。四ッ半時之供揃ニ而田安へ參ル。御機嫌能一ッ橋尾州ニも御出被成候。

歸宅五ッ半時打壹寸廻り。直ニ寢ル。

十日晴

今朝目覺六ッ半時、其外替ること無之。半右衛門罷出候。成嶋先生被罷出、書經講義有之。市郎右衛門、御札所之義ニ付用有之。

二月十日

中山道通過に付尾州家へ御賴

(口上書)

二月十日

當夏　御歸國之節、中山道御通行被遊候ニ付、木曾路人馬其外御差支無御座候樣尾州樣へ御使者を以、御賴御口上左之通り、

春寒未相礫不申候處、愈御勇健被成御座珍重奉存候。當年歸國之節、中山道通、御領分木曾路致通行候。其節人馬其外萬端差支無御座候樣、夫々被仰付被下候樣致度、此段厚御賴旁以使者得貴意候。

(觸達)

阿部伊勢守殿御渡候御書付寫一通大目付酒井安房守殿方來ル

一主上御不豫之處、御養生不被爲叶、去ル六日被遊
崩御候ニ付、爲伺御機嫌明十一日惣出仕之事。
但西丸にも惣出仕之事

一病氣幼少隱居之面々ハ、月番之老中和泉守宅に使者可差越事。

一在國在邑之面々ハ、使札可差越事。

但在國在邑之嫡子隱居も右同斷

一普請鳴物今日より來ル十四日迄、五日停止之事。

右之通可被相觸候。

二月十日

主上崩御ニ付、惣出仕有之ニ付登城、五ツ時過之供揃ニ而

五ツ半時過寢ル。

十一日晴

二月十一日 仁孝天皇崩御に付御登城

今朝目覺六ツ半時、其外替ること無之候。五ツ時之供揃ニる、兩丸へ登城、惣出仕

屏風内　紀伊殿
　　　　水戸殿

黒鷺　　松平加賀守

櫻之間　松平三河守
　　　　松平越前守
　　　　松平大和守
　　　　松平阿波守
　　　　松平因幡守

上席方申上

主上崩御ニ付、奉伺御機嫌マス

老中御用番阿部伊勢守

御機嫌不被爲替、出仕之段及言上ル。

御老中於席之謁。歸宅九ツ半時打二寸廻り。

靈岸寺に御參詣樂翁公の墓を拜せらる

今八ツ時前ゟ供揃ニる、清浄院様御忌月ニ付、深川靈岸寺へ參詣、御廟并別

段樂翁殿御墓へも參拜致ル。

歸宅七ツ半時へ二寸前。五ツ半時過寢ル。

二月十二日

十二日雨

早朝目覺六ツ半時、其外替ること無し。半右衛門罷出ル。彌次郎いたす、輪講不致。孫八龍ノ口へ罷出ル。五ツ半時過寢ル。

二月十三日

十三日晴

今朝目覺六ツ半時、其外替ること無し。半右衛門罷出ル。孫八罷出、昨日谷中南泉寺へ御代拜之儀、昨日以熊次郎御尋、やう／＼夫ゟ氣付、皆川（多）左衛門御代拜相勤。等閑ニ付、月番多左衛門伺差出ル様申ル得共、しかし存無之故不及伺段申之。

成嶋先生被罷出、書經講義有之。五ツ半時過寢ル。

二月十四日

十四日晴

今朝目覺六ッ半時、其外替ること無し。半右衛門罷出候。六日晩立通飛脚、今日到着、國許靜謐。目付家老用有之。松波彌次郎いとす。五ッ半時過寝ル。

（觸達）

阿部伊勢守殿御渡候御書付寫壹通、大目付稻生出羽守殿ゟ來ル

大目付江
袖ら

明十五日御禮過、
公方樣西丸江被爲　成候ニ付出仕之面々西丸江罷出ニ不及候間其段可被達候。

二月十四日

二月十五日

十五日晴

今朝目覺七ッ半時、其外替ること無之候。六ッ時ゟ供揃ニて、御本丸登城。歸宅四ッ時打二寸廻り。

御鷹の鶴拜領

今日上使以長田六左衛門殿、御鷹乃鶴拜領例之通り。夫ゟ御本丸西丸へ登城、夫ゟ執政廻勤、歸宅八ッ時打二寸廻り。孫八罷出、阿部樣へ參上候所、不容易御傳言有之。五ッ半時過寝ル。

二月十六日

十六日晴

今朝目覺六ツ半時、其外替ること無之。半右衞門罷出候。四ツ半時ゟ供揃え る、神田橋御住居へ參ル、歸宅八ツ半時二寸前。

諸國人別改

（觸達）

一稻生出羽守殿ゟ御觸達來ル

當午年諸國人別改被差出候筈ニ付、諸事改方認方等ハ前々之通ニ候間、人別改帳面

當八九月頃迄之内、自分方に可被差出候。以上

二月十六日

乗馬いたす。次乗馬も有之、役人拜見。

假養子の件ニ付上意

俄ニ御住居染村罷出ル。譯ハ此方假養子之儀ニ付、左之通り

染村云、今日八ツ時頃、御城姉小路殿ゟ只今上り候樣申來候ニ付、上候所、公方樣ゟ

如斯云々之　上意ヲ姉小路伺候ニ付、右故染村を呼出候段申之。

上意

表ゟ越前守當夏國許へ罷歸候故、假養子之内願差出候所、尤之儀ニ被思召候得共、乍然、田鶴若樣と申せとも、御幼冲之義、且　西丸ニも御誕生無之候間難被成、御三卿方の御子樣方も無之候間、乍御氣之毒難被成、此段越前守へ可申

聞との上意ニ候。

右申述ル。終る染村退散。

　假養子之事

書面内願之趣ハ定例之通り、當分養子之願書指出候樣可被致候事。

　馬喰町之事

馬喰町御貸付金のこと

馬喰町御貸付金壹万七千兩、追々御貸渡可有之候間、委細之儀ハ、御勘定奉行江申置候樣可仕候事。

右今日御用番阿部伊勢守樣へ、御留守居呼出ニる御渡也。五ッ半時過寢ル。

二月十七日

　十七日晴

今朝目覺六ッ半時、其外替ること無之候。家老用有之。帯刀へ馬喰町之義ニ付、愚存書相渡。草稿秘藏箱ニ有之候。

成嶋先生被罷出、書經講義有之候。明日彌四ッ時揃ニる、鶴庖丁申付ル。

平士乘馬彌明日見セル。五ッ半時過寢ル。

二月十八日

　十八日晴

今朝目覺六ッ半時、其外替ること無し。半右衛門罷出候。

拜領靏庖丁申付ル。此方麻上下、家老側用人役人相見。両部屋壹・二番頭共。

手元ゟ
百疋　右ほう庖丁　森澤左郎左衛門
五拾疋　長袴御丸帯　齋藤儀左衛門
同断　半服紗侍　長谷川晋五郎
同断　同断介添　渡邊利右衛門

表方へ乗馬見セル。五ツ半時過寢ル。

（用状）
御道中御小姓御人不足ニ付、御小姓介被仰付。　岡部半兵衛
二月十八日
來ル廿六日五半時御供揃にて、松平隱岐守殿御養母貞壽院様御廣式へ為御對顔被為入候。但御召服御服紗御上下
月日

（政暇日記終）

政暇日記

自弘化三年丙午正月廿日

至四月廿六日

十五代目

越前守

政暇日記

自弘化三年丙午二月廿日
至四月廿六日

十五代目
越前守 〔愼獨〕

二月十九日
札所の件

十九日晴

今朝目覺六ッ半時、其外替ること無之。半右衛門罷出ル。札所奉行市郎右衛門御用有之、人拂用有之、其節此方製作之偶法遣ス。

松波彌次郎罷出詩經申上之。柔術いたす。

五ッ半時過寢ル。

二月廿日

廿日晴

今朝目覺其外替ること無之。半右衛門罷出ル。還御濟ニて參詣、上野　最樹院横御靈屋へ參詣。歸宅九ッ時打三寸五歩廻り。成島先生被罷出、書經講義有之。此方田安へ參ル。事ヲ廿三日頃　四ッ谷御中屋敷へ御出ニ付、其節同所御屋敷江參ル樣。

仁孝天皇崩御に付御香奠

(觸達)

阿部伊勢守殿御渡ル御書付寫壹通、稻生出羽守殿方來ル

袖ゟ

大目付へ

先帝崩御ニ付、四品拾萬石以上より、京都江以使者御香奠獻上之義、安永八亥年後桃園院崩御之節之通可被差上ル。委細酒井若狹守へ可被相伺ル。尤獻上相濟ル以後、月番之老中へ可被相屆ル。

二月廿一日
砂村邸の圖

二月廿二日

右之趣可被相觸候。

二月

御本丸當番表組頭山田清喜方左之通申來ル

先帝崩御ニ付去ル十三日

東宮に　御踐祚被爲　在候事、

先帝御諡號迄

大行天皇与奉稱候事、

右之通伊勢守殿被　仰聞候段、稻生出羽守殿被申聞候間、申進候。以上

二月十九日

五ッ半時過寢ル。

廿一日晴

今朝目覺六ッ半時、其外替ること無之。半右衞門罷出候。砂村御屋敷繪圖面並書付、多左衞門見セル。

四ッ谷御中屋敷へ廿五日參候樣申來ル、田安方。

乘馬平士拜見。彌次郎いさす。五ッ半時過寢ル。

廿二日晴

今朝目覺六ツ半時、其外替ること無之。半右衛門罷出候。彌次郎い今才
今日飛脚相立（振六日）
多左衛門罷出、御呈書見セル、（天氣御伺之）

邸内を巡視せらる

屋敷廻りをる、（孫八御小屋、八百里主税同斷、御留守居役所、御金奉行も役所へ參ル。）
五ツ半時過寢ル。

二月廿三日

廿三日晴
今朝目覺六ツ半時、其外替ること無し。半右衛門罷出候。九ツ半時頃ゟ鎗術稽古、引續居合。五ツ半時過寢ル。

二月廿四日

廿四日晴
今朝目覺六ツ半時、其外替ること無之。半右衛門罷出候。市郎右衛門今書立出立ニ付、今朝御目見例之通り、（但御役人並故、御國御家老安否無之。）直ニ呼出用有之。家老用有之。成嶋先生被罷出、書經講義有之候。
明日五ツ時ゟ供揃ニる、彌四ツ谷御屋敷へ參ル。五ツ半時過寢ル。

二月二十五日

廿五日晴
今朝目覺六ツ半時、其外替ること無之候。五ツ時ゟ供揃ニる、田安四ツ谷御屋

敷へ參る。但途中乘馬荒波、還り駕。

一位樣益御機嫌能奉恐悅候。

右衞門督殿ニも被爲入、御供之人ニも拜見御返。

四谷の田安邸に參らる

歸宅六ッ半時へ壹寸前。直ニ寢ル。

二月二十六日

廿六日晴

今朝目覺六ッ半時、其外替ること無之候。明日天德寺へ參詣、夫ゟ大將但馬へ相勤、夫ゟ靈岸島中屋參(敷脱カ)候段相伺之。五ッ半時ゟ供揃ニる、松平隱岐守中屋敷ニる、貞壽院樣へ參ル。歸宅鎌落五步廻り。入湯。五ッ半時頃寢ル。

二月二十七日

天德寺に參る

長州邸に年賀

廿七日雨

今朝目覺六ッ半時、其外替ること無之候。五ッ時ゟ供揃ニる天德寺へ參詣。夫ゟ長州屋敷へ年始返禮ニ參ル。靈邸。鬭但馬守なし。歸宅四ッ時五步廻り。成嶋先生被罷出、書經講義有之。弓術稽古いたす。五ッ半時前寢ル。

二月二十八日

御登城

廿八日小雨夕晴

今朝目覺七ッ半時、其外替ること無之候。六ッ時ゟ供揃ニる、御本丸へ登城、歸宅四ッ時二寸五步。

彌次郎いたす。居合稽古。五ッ半時前寢ル。

二月二十九日

廿九日雨

國許飛脚到着

今朝目覺六ッ半時、其外替ること無之。半右衛門罷出候。廿一日晩立通飛脚、今朝到着、國許無恙候。家老目付用狀見ル。彌次郎いたす。柔術稽古いたす。五ッ半時過寢ル。

三月朔日

三月朔日小雨

神田橋へ參り御雛を觀らる

今朝目覺六ッ半時、其外替ること無之候。四ッ半時ゟ供揃ニる、神田橋へ參ル、歸宅八ッ前。中村稽古致す。兩部屋御住居、御ひな樣拜見。五ッ半時過寢ル。

三月二日

二日曇後晴

年寄增役

今朝目覺六ッ半時、其外替る無し。半右衛門罷出候。孫八罷出、御年寄增役ゟ儀相願申之。成嶋先生被罷出、書經講義有之候。五ッ半時過寢ル。

三月三日

上巳晴

御登城

今朝目覺七ッ半時、其外替ること無之候。六ッ半時ゟ供揃ニる御本丸西丸登城、夫ゟ神田橋へ參ル。歸宅九ッ時へ一寸前。夫ゟ松榮院樣御使、家老當日御祝儀申上、手長蚫遣す。彌次郎いたす。

次乘馬いたす、並此方も乘ル。五ッ半時寢ル。

三月四日 來栖半之丞 門出入帳

四日晴

今朝目覺六ッ半時、其外替ること無之候。來栖半之丞献上物之儀ニ付、孫八迄書付相渡候。委細秘藏箱之内ニ有之。家老用有之、目付門帳見セル。彌次郎いたす。入浴。

明日、彌田安箱崎御下屋敷へ參ル。清水、一橋、田安御兩卿様、并純姫様、筆姫様ニも御出被成候由。

五ッ時前之供揃ニて、相越積。五ッ半時過寢ル。

三月五日 田安箱崎邸に參る

五日晴後曇

今朝目覺六ッ半時、其外替ること無之候。五ッ時之供揃ニて、乘馬ニて箱崎田安御下屋敷へ參候。清水、一橋、田安御兩卿様、純姫様、筆姫様被爲入。

清水御茶之。歸宅六ッ時 二寸五歩。五ッ時寢ル。

三月六日

六日雨

今朝目覺六ッ半時、其外替ること無之。半右衛門罷出候。成嶋先生被罷出、書經講義有之候周官。七郎左衛門拜聽。五ッ半時過寢ル。

馬喰町拝借金に對しての御挨拶

（用状）

（端裏書）「午三月七日御進物御使者中村八大夫」

中村八大夫御使者

覺

一上青籠入交肴　阿部伊勢守様

一白銀拾五枚
三段交肴　石河土佐守殿

一金五百疋ツヽ　御同人用人
小林八左衛門
渡邊利右衛門
田寺三大夫

一同五百疋　別段
渡邊利右衛門

一同貳百疋ツヽ　御同人
取次　三人

一白銀拾五枚
三段交肴　塚越藤助殿

一金三百疋　御同人
用人

一同壹兩ヲ　同
取次惣中江

右ハ今般馬喰町御拝借金被　仰出候ニ付御贈ニ相成候様相伺申候。以上

三月　　　　　　　　　　　　　　中村八太夫

三月七日
灸治

七日雨

今朝目覚六ッ半時、其外替ること無之。半右衛門罷出候。灸治いたす。五ッ半時過寝ル。

三月八日

八日晴

今朝目覚六ッ半時、其外替ること無し。半右衛門罷出候。清左衛門罷出申入候を、

與左衛門悴　河合虎之助

太郎右衛門悴　山田猪太郎

鍋三郎悴　松平紫藏

旗本

右ハ面々御目見願度、十五日ニ申付。

山田敬作
出府
靈岸島御

山田敬作到着、目見申付。左門罷出、御代拝細申上。帯刀用有之、源三郎假養子願込之事、防火十郎右衛門心配之事、九ッ半時供揃ニる、靈岸島へ参ル、御庭八幡始参詣。屋敷廻り。

七ッ時打一寸五歩廻り。田安へ明日參ル段相伺之。用人也。五ッ半時[illegible]

九日晴

一日覺六半時、素讀半右衛門罷出。

一孫八罷出、大奥老女願書披見、左之通　六日拾遺

八十瀬[illegible]眼病ニ付、[illegible]相勤[illegible]ニ付、[illegible]

ハ。右御評議ニ相成ハてハ、御人少ニ付御用向御差支等可有之[illegible]

恐入ハ得共、仲ケ間壹人御增被仰付被下置度、此段奉願ハ。以上

三月　　　　　　[illegible]

一孫八罷出、老女人撰書差出之、初瀬室田。

一四半時前供揃、田安へ參ル。一位樣益御機嫌能恐悦之事。夜四時へ壹寸五

分前歸ル。四時過寢ル。

（別紙）

三月九日

御徒石川平[illegible]儀、押込今日方被差免ハ。[illegible]

松平源太郎

土屋十郎左衛門

別紙之者共、押込今日方可被差免ハ

（傍注：御ッ八幡に參らる　三月九日／老女八十瀬眼病／田安へ參らる）

三月十日
御風邪
三月十一日
三月十二日
龍澤も當番員に加はる

十日曇夕雨
一日覺六半時、半右衛門罷出、唐鑑不時ニ承之。
一晝前ゟ増寒感冒、萬悌元沖春庵診、葛根湯萬悌へ調上申付、夕方發熱、夜中微汗、
五半時過寢。（今夕文武不致）
十一日晴夕少々雷雨
一日覺六半時、今日文武不致。始終褥中ニ臥起自在。早朝少々鼻血。晩發少
々有之。昨日ゟハ一体快方也。五半時寢。
十二日晴
今朝日覺六ッ半時、半右衛門不致。彌次郎いさし、始終褥中ニ臥起自在。昨日
ゟも惣體快方也。
孫八罷出、敬作明日砂村へ参り、龍澤御茶屋落付、是迄當番（萬貞元沖）両人ニて是迄相

大道寺七右衛門組
松崎芳次郎
今村五兵衛組
松村鐵次郎

三月十三日　サイケイ湯　大字を書かる　結髪手水

勤ㇾ得共、従是八龍澤ヲ入レ、三人勤ヲにいたし可申段、孫八相伺之。五ツ半時過寝ル。

拾遣、田安方十五日参ㇾ候様申来ㇾ候共、先可断段申遣ㇾ候、半三郎へ新右衛門方庄九郎迄手紙を遣しㇾ候。

十三日晴

今朝目覚六ツ半時、追々頭快、半右衛門罷出ㇾ。今日方サイケイ湯呑申、彌次郎いさす。大字いさす、與左衛門へ遣す。公正無私といふ四。萬貞免ㇾて髪を俺末ニ結ひ、手水も致ㇾ。五ツ半時過寝ㇾ。

（用状）

三月十三日

小役人格御廣敷添役御本丸大夫儀、及大病ニ付相願、其後介病死ㇾ候ニ付、依之、養子保之助其儘御徒ニ被仰付、御充行並之通拾五石三人扶持被下置候。其段申遣ㇾ候様、御徒頭取扱に可被申聞ㇾ。

松平源太郎

三月十四日

十四日晴

今朝目覚六ツ半時其外替ることも無之。半右衛門罷出ㇾ。帯刀罷出申上、

（用状）

八十瀬罷め室田之に代る

三月十五日 登城、代田安へ

覚

眼病ニ付、老女願之趣意有之ニ付、御城勤御免可被成哉

此内一人御年寄被　仰付、並御城勤可被　仰付哉、

八十瀬

若年寄格
御錠口
初瀬

表使格
御右筆
室田

〆

鎌仲四十一才ニ相成、實子無之ニ付、養父順庵忰順庵養子仕度。

小森弟二郎忰道五郎、御侍見習ニ付、免願差出、不免。

砂村敬□□書いとす。十郎左衛門。

成嶋先生被罷出、書經講義有之、帯刀十郎左衛門拜聽

五ッ半時過寢ル。

十五日晴

今朝目覺六ッ半時之。例之通りニ供揃ニて登城、夫ゟ神田橋、夫ゟ田安へ參ル。

一　住様参詣御肴来悪様也。

兼道様ニも被為入、左兵衛、左門も参ル。

帰宅夜九ツ半時壹寸廻る。直ニ寝ル。

（用状）

三月十五日

大御番組武部作大夫弟鉄蔵達書被　仰付置候処、今日方御免被成候、右鉄作大夫に可被申渡候。

松平源太郎

西尾源太左衛門

小役人格御料理方村井七郎兵衛倅廣吉儀、押込被置候処、今日方御免被成候、右親へ可被申渡候。

土屋十郎左衛門

別紙之者共、押込今日方可被差免候。

別紙

吉田五左衛門組
藤山茂三郎

井原森助組
堀尾鐵之

齋藤六組
荒井仙次郎

石黒嘉吉
岩崎利兵衛
石黒茂作

十六日晴

三月十六日天龍寺に御参詣
国許飛脚着

今朝目覚六ツ半時、半右衛門罷出候。入浴。九ツ半時之供揃ニる、品川天龍寺へ参詣、帰宅七ツ時打二寸廻り。今朝當月六日晩立通り飛脚到着、國元静謐之。五ツ半時過寝ル。

天徳寺境内地所囲込の件

(用状)

弘化二巳年五月

一天徳寺境内地所囲込之義ニ付、寺社奉行青山大膳亮殿にて御願書左之通

天徳寺境内地狭ニ付、先年方門前地囲込之義相願候義ニ御座候處、此度尾張様四谷御堀端屋敷之内と、天徳寺下屋敷之内と切坪相對替之義出願仕候義ニ御座候。

右天徳寺義ハ、越前守菩提所之義ニも有之、歴代之墓所近ニ門前町家之不浄所等も有之、旁々迷惑仕候義ニ御座候。右門前囲込地之義ハ、先年方度々相願候得共、相整兼候處、又候此度替地之趣意を以再應出願仕候義ニ御座候間、何卒右願面之通、御聞済被成下候様、於越前守為相願申候。以上

五月　　御名内

同三年三月十六日

一右ニ付青山大膳亮殿方御呼出ニ付、家老等罷出候処、右ハ此節御普請有之候[illegible]
　天徳寺門前地引移之義ニ付、先達而被相伺候御書面之趣を以御取調[illegible]
　合ハ上、備前守殿へ伺候ハ、今般共々御普請有之、天徳寺江も門前地引移之[illegible]
　願も相済候ハ間尾張殿四谷御屋敷之内ニ、天徳寺下屋敷内相対替ニ而、右替地
　願、右願相済候ハ上、改而門前地引移之義可願出旨申渡候ハ間、右様申達候

三月十七日

十七日雨暴風

目覺常例、半右衛門罷出ル。家老日付用狀見セル。成嶋先生被罷出、書經講義有之。五ツ半時過寢ル。

三月十八日　天徳寺に御参詣

十八日小雨

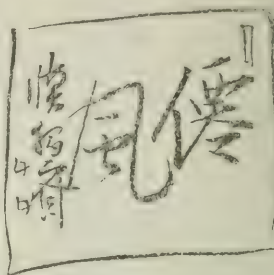
今朝目覺六ツ半時、五ツ半時ゟ供揃ニ而天徳寺へ參詣。居合いたす。五ツ半時過寢ル。

三月十九日　田安より御依頼の[illegible]

十九日曇

目覺常例、半右衛門罷出ル。田安方御頼之額出來、今日書申ル。未相濟ル。孫八三河守樣へ出ル。彌次郎いたす。乘馬いたす。五ツ半時過寢ル。

三月二十日
灸治



廿日雨

日覺常例、五ッ半時ゟ供揃ニる、南泉寺へ參詣、歸宅九ッ時壹寸廻り。灸治いたす。

（觸達）

三月廿日

一阿部伊勢守殿御渡御書付寫壹通、大目付土岐丹波守殿方御觸達來ル、左之通

神保・
大目付に

大和
下總
下野

遠州濱松
諏訪大明神大祝
杉浦大學

右社頭其外大破ニ付、修復並鳥居、石ニ而[illegible]
奉行達印ニ而勧化致、并祭礼従来、当年[illegible]
寺社領在町共可致遣行候間、信仰之輩[illegible]
官弘領之領主地頭よりも可被申聞候

午三月

右之通可被相觸候

（用状）

三月十九日

心得違之趣相聞候ニ付押込

〆

[illegible]

同　[illegible]右衛門[illegible]

同　[illegible]

[illegible]衛　[illegible]蔵　[illegible]門

三月廿一日 隣家酒井家に参る

三月廿二日 室田年寄となる

三月廿三日 成島甲子太郎來る 乗馬

五ツ半時過寝ル。

廿一日雨

今朝目覺六ツ半時、其外替ることと無し。半右衛門罷出ル。八ツ時ゟ供揃ニ而、隣家酒井(忠発)左衛門尉が屋敷へ参ル。鐐姫様愈御安泰之。歸宅五ツ半時過。直ニ寝ル。

廿二日晴

目覺常例、半右衛門罷出ル。室田年寄申付、八十瀬内勤申付。四ツ半時過ゟ供揃ニ而田安へ参ル。

一位様益御機嫌能奉恐悦ル

歸宅五ツ時打二寸五歩。直ニ寝ル。

廿三日曇

今朝目覺常例、半右衛門出ル。成先生及悴甲子太郎來臨、先生書經講義有之、終て乗馬、具足乗馬、次乗馬之。

御馬見所

御谷盛　うほ皮

御小皿　むさし物

ふ
竹の子皮

湯

捺　所

茶椀　あんかけ
玉子
ひきぢ[illegible]

汁　すまし
[illegible]

小皿　香の物
守口大こん

菜　飯

外物

中皿盛

玉子
ろ[illegible]こ
竹の子
九年母
[illegible]ろ

湯

畢る

三月廿四日　天徳寺に參詣

三月廿五日　松の下露

三月二十六日

干菓子

〆

五ツ半時過寢ル。

廿四日小雨

今朝目覺常例、五ツ半時過ゟ供揃ニて、天徳寺大安院樣御靈前へ參詣、歸宅四ツ半時打五歩廻り。

家老用有之。

長尾謙沖養子順庵儀、當午ノ二拾歲ニ罷成候ニ付、初て御目見被下置候樣奉願候。取次七醫師半井玄沖之。

彌次郎詩經申上之。万右衛門罷出、柔術いさす。五ツ半時過寢ル。

廿五日小雨

今朝目覺常例、半右衛門罷出候。松之下露讀ム。彌次郎いさす。劍術居合いさす。居合ニて面白し　五ツ半時過寢ル。

廿六日雨後晴

今朝目覺常例、半右衛門罷出候。成嶋先生被罷出、尚書講義有之。明日八ツ半

時前ゟ供揃ニ而、田安へ參ル段河太郎用人方申來ル、五ッ半時過登營、

三月二十七日　今姫

廿七日曇

常例目覺、五ッ半時ゟ供揃ニ而、天德寺へ參拜、歸宅、八ッ半時前ゟ供揃ニ而、田安へ參ル。但、金姬樣被爲入候ニ付、對面として罷越、一位樣並御簾中樣ニハ十一年振ニて對面。歸宅四ッ半時。直ニ寢ル。

三月廿八日　長尾頼庵等に謁を賜ふ

廿八日晴

常例目覺、半右衞門罷出候。五ッ半時ゟ供揃ニ而、松ゟ閣へ參ル。鎌冲養子長尾頼庵、並南泉寺入院ゟ御禮、並旗本ニ初て面會。

内ノ藏門觸　河合虎之助　四十二歳

太郞左衞門倅　山田猪太郎　二十八歳

鈴三郎養子　松平孝藏　五十一歳

初て對面

御意　初て今日ハ天氣も宜緩りと

表使　磯田

出精相勤候ニ付錠口格申付

居合いさす。次乗馬いさす。此方ゟ乗ル。五ツ半時過寝ル。

三月廿九日

廿九日晴

目覺常例。五ツ半時ゟ供揃ニ而、靈岸寺へ參詣、四ツ半時打壹寸五歩廻り。

箕山先生被罷出、書經講義有之。

（用狀）

一京都表稱田八郎右衛門清田丹藏方ゟ左之通申來る

三月七日辰半刻、於德大寺亭御先例之通り大納言殿出座、勅答被　仰出、無御滯相濟申候。且又御香奠獻備、同十六日ニ相成候ニ付、正卯ノ刻泉涌寺へ罷越、御香奠獻備万端無御滯相濟、右爲御届御目附石谷鉄之丞殿並所司代酒井若狹守殿御廟所へ之御使者相濟、午半刻引取申候。

御用番戸田山城守殿に御屆出候寫

先帝崩御ニ付、當月十六日、京都泉涌寺へ御香奠白銀十枚、以使者致獻備候。此段

御屆申上候　以上

三月廿七日

三月廿九日　　　　　　　　　　　　　　　　松平[illegible]太郎

大御番組林作助儀、山名次郎八御預ヶ被置候處、壹人ニ而長々之義、且又病身ニ有之ニ付、御自分被相願候趣も有之ニ付、日之内当番相勤、其余御用向有之節者、御番出候而不苦候旨可被申渡候。依之同御番組永田日郎兵衛、渡辺伴右衛門、中條ヵ右衛門、武部作大夫江者御預ヶ被　仰付候間、申合相守り候様是又可被申渡候

五ツ半時過寝ル。

三月卅日　晦曇後雨

目覺常例、半右衛門罷出ル。帯刀用有之、（小關五三郎之事）鐐姫様へ返書呈上。劍術稽古。明日登城いたす。薩州ゟ長書状参ル、返翰清左衛門見セル。五ツ半時前寝ル。

鐐姫様に返書

四月朔日　四月朔日晴

四月二日

三の間ゟ使

松平直諒のために四品の御禮

今朝目覺七ツ半時。六ツ時之供揃ニ而登城、西丸へも登城。夫ゟ神田橋へ參ル。歸宅九ツ半時壹寸廻り。鎗術居合いたす。八ツ半時前寢ル。

二日始晴、後雷雨又晴

目覺常例、半右衛門罷出候。左門御代拜歸テ逢。干鰈獻上物を見ル、明日獻上ニ相成申候。三ノ間ゟ使事次にいたし候様之老女伺差出、孫八見セル。賴太郎、喜八郎、五郎兵衛、次郎兵衛明日御城拜見干鰈ニつく

（用状）

同姓佐渡守儀、兼而之心願、年來之勤功を以城主格、並四品被　仰付被下置候様度々奉願、間茂無之儀ニ候得共、當年ニてハ四十四年御奉公相勤候。將ニ近年九鬼長門守、毛利日向守、南部左衛門尉御引立之例も御座候間、右等之儀を以兩様ハ難相整筋ニ候ハヽ、四品被　仰付被下置候様奉願候。佐渡守儀、彼是老年ニ相成候得ハ、心中察入、且又拙者無程御暇被下候ハヽ、致歸國候事ニ御座候間、其以前被　仰付被下置候ハヽ、致安心難有奉存候。此等之趣厚御含、御沙汰被成下候様奉願候。以上

御名

四月朔日

阿部伊勢守殿御渡候御書付寫壹通酒井安房守殿ゟ來ル

三河岡崎伊賀八幡の勧化巡行

袖ゟ
大目付へ

三河　摂津　但馬　丹波
信濃　越後　下總

右伊賀八幡諸堂社大破ニ付、修復爲助成、右七ヶ國並伯耆内武家方寺社七ヶ年之間勧化御免寺社奉行連印之勧化状持參、當年四月ゟ来ル三月迄、御料私領寺社在町可致巡行候間、信仰之輩ハ、物之多少ニよらす可致寄進旨、御料ハ御代官、私領ハ領主地頭ゟ可被申渡候。

三河岡崎伊賀八幡神主
[illegible]

午三月

右之通可被相觸候。

灸治

灸治いたす。五ツ半時寝ル。

（用状）

四月朔日

松平[illegible]

小關幸吉

其方養父五三郎儀、病身ニ付内願之通休息被　仰付、家督[illegible]年ニ付、御[illegible]扶持方七人扶持被下置、無役御留守番組に被入候。右之趣罷帰養父江も可申聞候。

四月三日

三日晴

國許飛脚着

目覺常例、半右衛門罷出候。

廿二日晩立通飛脚、今日到著、靜謐之。家老用有之。成嶋先生被罷出、書經講義有之。乘馬いたす。

（用狀）

土屋十郎右衛門儀伺書之儀ニ付、不念之儀有之、恐入遠慮仕罷在度旨、口上書差出候事。

四月二日

西尾源太左衛門

土屋十郎右衛門差扣中、御自分儀御目付假役帶被　仰付候。

四月三日

西尾源太左衛門

別紙之通被　仰付候。其段可被申渡候。

別紙

御徒目付
乙部祐八
長文五右衛門
岩屋源兵衛
池村啓三郎

組之者御吿被　仰付候節、調方不念之儀有之ニ付、押込

[illegible]

南[illegible]右衛門殿

[illegible]殿

土屋十郎右衛門殿

[illegible]殿

中根[illegible]衛門殿

竹澤九十郎

右同断

右之通可被申渡ゟ

五ッ半時過寝ル。

四月四日

四日晴

目覺常例、半右衛門罷出ル。家老用有之。小森弟次郎倅[illegible]五郎儀、[illegible]御付ゟ一付、合力[illegible]之[illegible]、右[illegible]相[illegible]

何ゟ下書見セル。柔術いたす。五ッ半時過寝ル。

四月五日　山王へ参る

五日晴

目覺常例、半右衛門罷出ル。五ッ半時ゟ供揃ニ而、山王へ參詣、歸宅四ッ半時へ五歩前。彌次郎いたす。劍術。乘馬いたす、次乘馬有之。五ッ半時過寝ル。

四月六日　砂村の邸に赴かる

六日晴

今朝目覺常例、五ッ半時ゟ供揃ニ而、砂村抱屋敷へ參ル。貞照院殿無御障ル。歸宅六ッ時打五歩廻り。五ッ半時ニ寝ル。

（觸達）

一大目付中方御觸達寫

當月十三日釋奠被　御出候ニ付、右前日、万石以上名代以使者獻備有之候。諸家使者揃刻限之儀、十二日五時、四品以上松平遠江守、拾万石以上使者參著、其以下ハ四時參著之事ニ候間相達候。尤當春學問所御座敷向御燒失ニ付、此度ハ御供所假講席ニ相成候。且故障屆並問合之儀も有之候ハ、林大學頭宅ヘ申出候樣可被致候。右之趣、被得其意、答之儀ハ稻生出羽守方江可被申聞候。以上

四月六日　　　　　　　　　　　　　　　　大目付

御名殿
留守居

四月七日
門出入帳

七日曇

今朝日覺常例、半右衛門罷出候。十郎右衛門罷出、門帳見セル。成嶋先生被罷出、書經講義有之。五ッ半時寢ル。

四月八日
增上寺、天德寺江參詣

八日晴雨

今朝日覺常例。五ッ半時ゟ供揃ニる、增上寺天德寺へ參詣。歸宅四ッ半時壹寸廻り。成嶋先生被罷出、書經講義有之。乘馬いたす。

尾張家へ御暇乞のこと

（用状）

四月八日

一尾張様御用人津田準蔵方左之通申来ル

御暇被　仰出候ハヽ、来ル廿八日御発途之御手順ニ相成申候哉、[illegible]

候ハヽ、爲御暇乞

此御屋形へ御出之義ニ、幾日頃之御手順ニ候哉、又ハ暫之内　[illegible]之[illegible]ニ付、

右爲御暇乞御出之節、緩々　御逢被遊度御様子ニ而、[illegible]出[illegible]

ニ候哉、御内々及御打合候。　且御出之義、可相成は[illegible]時頃御[illegible]ニ而、[illegible]

ニ相成候ハヽ、此御方御都合も御宜ニ付、御内々御打合申候。

五ッ半時過寝ル。

四月九日

島田清左衛門歸國上下を遣さる

猶木工出府

九日晴

目覺常例、半右衛門不罷出レ。獨誦。　明日嶋田清左衛門出立ニ付、今日御目見、道中無事テ、家老共始へ宜申聞け。上下を遣す。　四月二日立、一日滞留今日到著[illegible]

四ッ半時ゟ供揃ニ而、田安へ参ル。　一位様益御機嫌能奉恐悦レ。

歸宅六ッ半時へ二寸五分。　猶木工道中無恙今日酉刻到著。　五ッ半時過寝ル。

（觸達）

四月九日

四月十日

一大目付中方御觸達來ル、左之通
來ル十七日紅葉山御宮へ被遊御參詣候ニ付、其節豫參可被成御勤哉承度存候。
右之段書付來ル十二日迄、深谷遠江守方へ可被差越候。以上

十日曇

今日目覺常例、半右衛門罷出候。
狛木工御目見、狛木工跡ニ致事向之儀承之。　目付用有之。彌次郎いさす。劍術いさす。乘馬いさす。

千種龍澤

(用狀)
四月十日
其方儀高足扶持五人扶持被下置候。且又松榮院樣御附被　仰付候。
千種龍澤

天龍寺住職交替

品川天龍寺儀病身ニ付、住職難相勤、隱居被致度旨書付を以被相願候。依之願之通被　仰付、後住之儀者、武州足立郡大芦村龍光寺先住魯道に被　仰付候。其段可被相達候。
松平源太郎

五ツ半時過寢ル。

四月十一日

十一日曇

假養子のこと

今朝目覺常例、半右衛門罷出候。家老用有之。假養子佐渡守肯ゝ内談度段、相伺之。用狀見ル。

阿部邸御訪問

九ツ半時ゟ供揃ニる阿部へ參ル。二君御障無之、目出度候。外ニ内用有之候得共、不記。饗時軍談有之。

歸宅四ツ時二寸廻り。直ニ寢ル。

四月十二日

佐野内膳出府

微恙

十二日曇

今朝目覺常例、半右衛門罷出候。彌明日大和守邸へ參ル筈。内膳昨今日到着、直ニ御目見。微冒ニ付、元冲藥調上葛根湯。成先生被罷出、書經講義有之。五ツ半時過寢ル。

四月十三日

十三日曇

目覺常例、半右衛門罷出候。彌次郎いさす。武藝延引。藥ハ前請之。五ツ半時前寢ル。

（覺書）

參覲ニ付

四月十三日

銀百枚
巻物三十

右就御暇被遣之

上使戸田山城守
松平加賀守

同　青山下野守
松平大隅守

同　齋藤左源太
松平肥後守

同　戸田山城守
松平筑前守

同　阿部伊勢守
佐竹右京大夫

同　土屋釆女正
丹羽左京大夫

同　戸田山城守
松平土佐守

同　青山下野守
上杉彈正大弼

同　阿部伊勢守
松平內藏頭

四月十四日　假養子のこと　佐藤昌甫

四月十五日　慶喊君宰相に任ぜらる

四月十六日

右就参府被遣之

十四日曇

目覺常例、半右衛門罷出候。孫八假養子之義ニ付、雲州江遣ス。家老用有之、當昌甫義、醫術修行として來夏迄小田原表ニ居段願、春迄と差圖。彌次郎いさす。万右衛門いさす。五ッ半時過寢ル。

（觸達）

一　牧野備前守殿御渡候御書付寫左之通り

袖うら　大目付へ

明十五日例月之御禮無之候間、此段可被相觸候

四月十四日

十五日曇晴曇

今日覺常例、半右衛門罷出候。四ッ半時ゟ供揃ニ而田安へ参ル。諸侯参賀ゟ禮有之。尾州宰相ニ被任候。歸宅五ッ半時貳寸前。直ニ寢ル。

十六日晴

中根新左衛門出府
假養子のこと

上使來邸
就國の暇と物を賜はる

目覺常例、半右衛門罷出ル。目付中根新左衛門、昨夕到著ニ付、今朝目見申付。直ニ呼出、國許樣子承ル。望月圓次出羽守方使者ニ參り、假養子之儀、何ニ而存寄無之段申之。孫八出ル。今日上使青山下野守殿、被參ル段爲知有之。九ツ半時過上使青山下野守殿被參、如例此方䟽込迄出迎、松之間ニて御上意拜聽。

上意之趣下野守殿被述

御請

在所へ之御暇被下、拜領物被仰付。近々御目見可被仰付ル。

國許へ之御暇被下置、拜領物被仰付、近々御目見可被仰付旨、難有仕合奉存ル。

及言上と御答

拜領物

銀三十枚

卷物二十

御加冝衆美部八藏殿

御城坊主

終て退散。

西丸よりの上使

八ッ半時過、西丸上使松平和泉守殿被越、同前

上意ミ趣和泉守殿被述

御暇ニ付拜領物被仰付

御請

御暇被下レハニ付、拜領物被仰付、難有仕合奉存レ。

及言上との御答

卷物二十

終て退散。委細ミ讓式帳。

大崎七大夫歸國

歸掛、大崎七大夫明日出立ニ付、御目見。

夫ゟ家老共始恐悅申上。

上使の返禮

廻勤

今日以上使國許へミ

御暇被下置、品々拜領物被仰付、從　右大將様も、以上使拜領物仕、重疊難有仕合奉

存レ。

今日上使御勤御大儀ニ　御老中不殘

下野守殿

ル、爲御挨拶致伺公ル。　　和泉守殿

五ツ半時過寢ル。

（覺書）

四月十六日

銀三十枚 巻物二十	上使阿部伊勢守	松平三河守
銀五十枚 巻物二十	同　青山下野守	御名
巻物二十	同　戸田山城守	松平大和守
銀三十枚 巻物二十	同　阿部伊勢守	松平阿波守
銀五十枚 巻物二十	同　青山下野守	細川越中守
銀百枚 巻物三十	同　戸田山城守	松平陸奥守
銀五十枚 巻物二十	同　阿部伊勢守	松平大膳大夫

上使参邸の節覺書

銀五十枚　同　青山下野守
巻物二十　松平因幡守
巻物二十　同　[illegible]　松平備後守

右就御暇被遣之

（覺書）

上使ゟ出之節爲　御出迎、殿様御門蹴込内迄被爲入、御會釋有之、御案内ニ而
松之間に御通、二之間ニ　御扣被遊。　上使御會釋ニ而、御着座、上意之趣、御請
被遊、直ニ御拜領物前へ　御出、　御頂戴相濟。　此節松之間二之間迄、御用人[illegible]方
御長蛇持出、差上之。　御敷居外ニ而　御請取、　上使に　御居被遣。　[illegible]方[illegible]ニ
而御用人へ　御渡被遊。畢而松之間御入側に　御退被遣、引續御持[illegible]出之。　御請
ニ而引之。　御茶出之。　相濟。　御執持之御方御案内ニ而再　御出座　御請[illegible]　但
上、
國許にゝ御暇被下置、拜領物被仰付、近々　御目見可被　仰付旨、難有仕合奉存候
御案内ニ而、以前之通御門蹴込内迄、　御送被遊、被爲　入掛御執持之御方に　御挨
拶被遊、御城坊主に茂　御會釋被遊。
一右大將様方ゝ
上使御取扱右御同様
御請

四月十七日

御暇被下候ニ付、拝領物被仰付、難有仕合奉存候。

（觸達）

大目付中方御觸達來ル、左之通

明十七日、紅葉山　御宮へ　公方様　右大將様　御一同被遊　御參詣候間、豫參可被成御勤旨、牧野備前守殿被仰聞候。御供揃五時被　仰出候間、右刻限より不遅様、紅葉山へ可被成御揃候。

一御請之義不及申候得共、可被入御念候。若御斷之儀も出來候ハヽ、今日中深谷遠江守方へ可被申聞候。以上

四月十六日

十七日晴

目覺常例、半右衞門罷出、御遺訓附錄謹誦。成嶋先生可被罷出之所、微恙ニ付延引。替日廿日。彌次郎いとす。

（用狀）

四月十八日

一御用番牧野備前守殿方、御連名之御奉書、並御家來可被　召連旨、御切紙御到來被遊候。左之通

明日五半時登　城、御暇之御禮可被申上候。以上

四月十七日　　戸田山城守

御名殿

家來一人御目見被　仰付候間、召連可被罷出候。

青山下野守
牧野備前守
阿部伊勢守

一津田縫殿ゟ左ゝ通申來ル

爲御暇乞、此御屋形へ御出日限ゝ義、御任官ニ而品々御差支ゝ御日並有之候ニ付、來ル廿五日廿六日兩日ゝ内、御差支無之候間、右兩日ゝ内御取極、前以御案内有之候樣。

猶々御刻限之義も、九時過御供揃ニ而御出相成候樣

初瀬へ遣し候大字認高節千年竹 貞姿萬古松之。明日退城後直ニ廻勤いたし候。五ッ時寢ル。

十八日晴

今朝目覺七ッ半時。六ッ半時過ゝ供揃ニ而、御暇御禮登城。夫ゟ委細別帳ニ有之候。廻勤。歸宅九ッ時過。九ッ半時過御馬參ル。七ッ時過御鷹參ル。兩樣共頂戴。

初瀬に書き遣さる

四月十八日　就國暇の御禮に登城

御馬と御鷹と來る

（用状）

一牧野備前守殿に御留守居御呼出ニ而、御渡御書付

御暇ニ付被下候御鷹、可相渡候間、今晩八時大岡主膳宅に家来可差越候事。

四月十八日　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　御名

武州川越火災

以手紙致啓上候。然ㇾ大和守様御居城御住居御臺所ゟ、當十五日戌ノ中刻過出火、御住居向不殘、並御長屋二棟、御門壹ヶ所、御門番所二ヶ所、内壹ヶ所火移候得共早速消留、其外飛火ニ而、御本丸内御長屋壹棟、八幡曲輪内御長屋壹棟燒失、右之外御櫓御門御園向等別條無御座、尤人馬怪我無御座段、御用番に御屆被成候。右爲御知被仰進候。此段各様迄、拙者ゟ宜得御意旨、被仰付、如此御座候。以上

四月　　　　　　　　　　　　多賀谷伊織

嶋田淸左衛門様

御詰合中様

四ッ時寝ル。

四月十九日

十九日曇

日覺常例。

一橋、神田橋へ御暇乞

老中阿部伊勢守正弘青山下野守忠良戸田山城守忠温へ逢對、九ッ時供揃ニ而出宅。夫ゟ爲暇乞一ッ橋へ參ル。夫ゟ神田橋へ參ル。歸宅八ッ時へ壹寸前

（用狀）

四月十九日　　松平源太郎

新番格野村此右衛門儀、詰越出精相勤候ニ付、[illegible]下置候。[illegible]取扱候。

兩親等急變の時急出府のこと

一阿部伊勢守樣へ御差出ニ相成候御内慮伺書

在國中祖父母兩親等、萬一急變之病症相發、不一通及危篤候節、國許江申達候上出府對面致度旨相願候而も、遠路往復ニ日數も相掛り候ニ付、[illegible]一類中之内ゟ相願御指圖之趣、國許へ申遣致出府候儀ニ相成申間敷哉、且又[illegible]之御證文等も、同樣一類中ゟ相願候儀ニ相成申間敷哉、[illegible]旨被申聞候間、此段御内慮奉伺候。以上

[illegible]

醫師千種龍澤

一御用番牧野備前守殿へ御差出ニ相成候書

松[illegible]院樣に、手前醫師千種龍澤与申者へ御[illegible]被申付候。[illegible]

四月廿日 上野へ御參詣

四月二十一日 假養子ノ[illegible]

五ツ半時過寝ル。

廿日晴

目覺常例。五ツ半時より（遣御後之參詣）供揃ニる、上野惣御靈屋、並凌雲院へ參詣、歸宅九ツ半時。

成嶋先生被罷出、書經講義有之。

爲賤別

旅硯　顏氏家訓

乘馬いたす。五ツ半時過寝ル。

廿一日晴

目覺六ツ時二寸五歩。五ツ時過より供揃ニる出る。牧野備前守殿逢對、假養子願持參、（委細別ニ有之）松平和泉守殿勤、夫より出羽守兵部大輔へ爲暇乞參ル。夫より田安へ參ル。

一位様益御機嫌能し。

御名内

四書滙參

田川清介

右衞門様ゟ四書滙參到來。

山名次郎八御咎ニ付、夜六ツ半時三寸廻り之歸殿、夫ゟ早々直ニ寢ル。

（用狀）

一牧野備前守殿ニ御留守居御呼出ニ而御渡御書付

御名留守居
千種龍澤

右明廿二日五半時、本庄安藝守宅ニ可被指出候。

四月廿一日

（御書院番組田川清介儀、御家譜書拔爲御用出府被　仰付候ニ付、金五百疋被下置候。
且又同人儀、立歸り出府之處、詰ニ御立被下候。其段申渡可被取扱候。

四月廿一日

佐野内膳

別紙之通被　仰出候。左樣相心得可被取扱候。

四月廿一日

別紙

天方孫八

鈴木主税
淺井八百里

原平左衛門

御分量金之外、御手元御用之分、去ル丑年ゟ追々被　仰出、奥御納戸引請取斗候
廉々宜候ニ付、今般御手元御用之分、惣る奥御納戸方引受被　仰付候間、其段申渡
可被取扱候。　且又金銀受取調印之儀も、各可被取斗候。
〆

此内壹人
鈴木主税
淺井八百里

別紙之通奥御納戸に被　仰付候間、各右取扱掛り被　仰付候。

別紙

御分量金之外、御手元御用之分、去ル丑年ゟ追々被　仰出、奥御納戸引受取斗候
廉々、格別御倹約行届、御都合宜候ニ付、今般　御手元御用之分、惣る奥御納戸方引
請被　仰付候。
〆

原　平左衛門

右同断ニ付、御側御用人御側向頭取に申談、可被取扱候。

別紙

右同断

四月廿二日　灸治　山名次郎八

〆

廿二日曇

目覺常例、半右衛門罷出候。龍澤若年寄之邸へ出ル。家老用有之、[illegible]灸事いさす。

山名次郎八之義ニ付、伺差出候やうの御内調候所、不及其儀旨御指圖有之。五ツ半時過寢ル。

（用狀）

四月廿二日　松平源太郎

大御番組山名次郎八儀、先達る　公邊方御預ケ之儀ニ付、一家之内同御番組林作[illegible]

に御預ケ被成、永田四郎兵衛、淺見伸右衛門、市嵜方右衛門、武部作大夫に[illegible]御預ケ置

仰付置候處、執淺　御免被成候間、其段右之面々に可被申渡候。且又[illegible]

衛門儀も、次郎八御小屋に見廻り、萬事心を付候様申聞置候處、不及其儀旨、早々可被

申聞候。

四月廿三日　田安へ参らる

廿三日晴

目覺常例。五ツ時過之供揃ニる、芝増上寺拜禮。夫方紀州、大和守、三河守勤ル。

九ツ時壹寸廻り歸宅。明日田安へ參候様申來ル。南嶽殿被越、昨年高徳[illegible]、宗城（伊達）

吉川左門
加藤佐七郎

御預所掛

と同様ニ侍遇之。家老ニ乗馬見セル、山名次郎へ通路高崎吉兵衛五ツ半時過寝ル。

（用状）

四月廿三日

佐野内膳

吉川多左衛門養子左門儀、御代拜御使者並御客取扱等ニ御雇被成候ニ付、銀五枚被下置候。其段可被申渡候

一新番組加藤佐七郎儀、詰中吟味役指添兼帯相勤候ニ付、金三百疋被下置候。其段可取扱候。

四月廿三日

佐野内膳

（御自分儀詰中御書院番頭、大御番頭假、御徒御馬支配假、並御留守中大奥御用を始、御側御用人取扱候御用向取扱　被仰付候。

原　平左衛門

御自分儀、詰中御預所掛り兼帯被　仰付候。

中根　新左衛門

御自分儀、詰中御預所掛り被　仰付候。

四月廿三日

原平左衛門差加

川嶋安兵衛

其方儀出精相勤候ニ付、御取立被成、新番格ニ被　仰付候。

佐野内膳

新番組後藤右橘儀役中爲失却、銀三枚充年々被下置候。此段申達可被取候。

此内壹人

福山藤右衛門

山通與右衛門

別紙之通被　仰付候。其段夫々可被申渡候。

別紙

一統上席

御廣敷添役

勘定役筆書役

手傳

御仕所扱運動

福一郎兵衛

役中爲失却、金貳兩ツヽ、年々被下置候。

小算格
御廣敷書役
勘定役兼
冨田半右衛門

出精相勤候ニ付、御充行貳石御増都合拾石貳人扶持ニ被成下候。

御廣敷道具番
臺子油部屋
〆り役
荒子
利右衛門部屋
吉兵衛

困窮相勤候ニ付、御小人株半金上納ニ而、御廣敷御小人に御入人被　仰付、御充行並之通、五石貳人扶持被下置候。
但正金ニ而上納之事
右之通可被申渡候。

外御用
此内壹人

別紙之通被　仰付候。其段可被申渡候。

名代
上坂藤大夫
岩城藤左衛門
中根[illegible]右衛門

別紙

[illegible]小[illegible]
吉川[illegible]

困窮相勤候ニ付、小寄合格ニ被成下候。

右之通可被申渡候

廿四日

目覺常例。十六日晩立飛脚、今日到著。國許靜謐之。五ッ半時之供揃ニ而、清水。夫ゟ水戸暇乞ニ勤ル。夫ゟ田安へ參ル。歸宅五ッ時。寢ル。

廿五日晴

今朝目覺常例。四ッ時之供揃ニ而、神田橋へ參ル。夫ゟ尾州樣へ參ル。御對面。乘馬拜見、庭廻り、例之懇遇。

五ッ半時過寢ル。

廿六日曇

（頭注）四月二十四日　清水、水戸へ暇乞

（頭注）四月廿五日　尾州家へ參らる

（頭注）四月二十六日

日覺常例。松之間ニ於て、松高斧次郎殿、北村定五郎並松井□六郎ニ逢フ。留守用有之。比丘尼ニ出ル。五ツ半時寢ル。

○編者云、四月二十七日以下五月十一日に至る十五日間の記事を缺けるは、御就國として、中山道を越前福井に御旅行中の故なるべし。即ち御家譜に四月二十八日朝五時江戸御發駕中山道通御旅行五月十二日御着城とあり。而して御旅行の記事は別に東山道路記と題して、全集紀行の部に之を收めたり、參着すべし。

（政暇日記　終）

在國

政暇日録

自弘化三年丙午五月十二日
至同閏五月七日

十五代目
越前守慶永



在國 政暇日録

自弘化三年丙午五月十二日
至同閏五月七日

十五代目
越前守慶永 慎獨

柳營五月御用番

本老中　戸田山城守
西丸老中　松平和泉守
本若年寄　大岡主膳正
西丸同斷　酒井左京亮
寺社　青山大膳亮
留守居　佐野日向守
町奉行　鍋島内匠頭
御勝手方　石河土佐守
公事方　牧野大和守
御目付　石谷鉄之丞
同斷　本多隼之助

（黒田八郎右衛門
長谷川右衛門）
（猪子六左衛門
東條十大夫）
高田次四郎
中村庄兵衛
内木與一右衛門

御家御月番

用番・有賀内記

御年寄　工藤伸一郎
番頭　多々谷舍人
用人　水谷壹岐
小性頭取　相馬一九郎
御役番　稲葉式部
（酒井彦六
稲垣安左衛門）
御側頭　村上沖之助
菅沼十左衛門
奉行　市村潤右衛門
小番頭　井上半大夫
目付　太田三郎兵衛
（雨森儀右衛門
波々伯部八大夫）

五月十二日晴

今朝目覚九ツ半時頃起出立致し
九ツ時ニ借請ニ而今荘を出発ニ而湯尾
峠を越へ鯖波村脇本村宅ニ而小休
ここにて朝飯をいたし出立松森村并庄
左衛門ニ而小休府中伏拝茶屋ニ而休息
門兵衛勘兵衛役人ニ而者なし此處者去能所
控衆　出立申し候之処就在人々と
婚例ニ而　出立白鬼女川へ参り所
子丑之刻も無之卜し浅水川を渡りて
川端ニ而後藤吉木与兵衛殿時之役人

弘化三年五月十二日　鯖波猪右衛門　松森茶屋彦助　白鬼女川　誠照寺　水落より馬上　江端　福井御着城の狀況

五月十二日晴

今朝日覺九ツ時前、相替候儀無之。九ツ時之供揃ニ而、今莊を發途ニて湯尾峠を越へ、鯖波村猪右衛門宅ニ而小休、こゝまて朝飯をいたす。夫ゟ松森村茶屋彦助へ小休。府中伏拜所におゐて、本多內藏助家老役人共そしめ罷出居、供頭披露、出タカと申言葉遣之、馳走人を始例之如し。夫ゟ白鬼女川へ水主頭猪子六左衛門罷出、名斗申之。渡川相濟て川端ニ而徒頭青木與一右衛門、時宜役畑中藤八郎罷出、名斗申之。徒頭時宜役兩人共先へ相立、披露共外いたす。鯖江間部下總守ゟ馳走人等被差出。并誠照寺ゟも如例。夫ゟ水落清水捨三郎へ休、四ツ時頃於是、髮並月代等いたす。是ゟ馬上。荒井邊ゟそ町人共罷出、徒頭時宜役供頭等披露。江端ニ如例町在寺社之者共罷出。町奉行奈良權大夫可罷出之所、長々不快ニ付、寺社町奉行奈良權大夫假目附太田三郎兵衛ニ申付、席々ニおいて出たかと言葉を遣之。夫を請て三郎兵衛罷出候町人共へ申聞。夫ゟ木田赤坂ゟ、本町櫻ノ門鋉門下馬門、鋉門內ニ而諸組諸下代共並居、岡部左膳前下馬門內先物頭福田八郎右衛門罷出、言葉名斗。右之方道中抱駕籠之者共と供頭披露。太皷門內番所惣與力共拜伏。夫ゟ右持物頭蜷江善右衛門罷出

城内御出迎の狀況

名斗。瓦門前目付　罷出名斗。瓦門内左留守居用人を始、役人共並居、尤白洲之。出タカ。こゝにおいて下馬。刀をとり小姓へ相渡し夫ゟ供ゝ面々皆休メ、式臺右（岡部左膳酒井外記 有賀内記供狛帶刀）拜伏膝下へ手を下ヶ、出ヤツタカ、旅中無滯今日も天氣も宜。左城代側用人（城代笹治織居側用 人秋田八郎兵衛）膝下同斷、出ヤツタカ。徒番所徒頭假山本清右衛門名斗。大番所多ヶ谷舍人名斗。番士一組、出さか。使番所ゟ緣頰迄番組ゝ者幷無息雜居、出さか。鶴ノ間緣頰迄諸物頭ゟ末ゝ番外迄、出さか。大廣間正面緣頰寄合子供ゟ上座番外子供迄、出さか。大廣間西ゝ方緣頰寄合ゟ定座番外迄、出さかハ（寄合ゝ面々へ 會釋有之。）書院床ノ後高知嫡子膝下同斷、出やつさか。銕炮ゝ間杉戶際水戶、山川會釋有之、出さか。同斷宇都宮彌三郎。時計ゝ間右筆、表納戶醫師、前髮子供、出さか。掃除奉行青木與一郎藤田新左衛門之。澁谷權左衛門掃除掛りと披露、言葉なし。銕炮ゝ間高知膝下同斷、出ヤツさか。天氣相。同所上、本多內藏助膝下へ手を下ヶ都て家老と一所。夫ゟ燒火ゝ間天方諒之助秋田水門、出さか。鞢靼ゝ間本多丹波、岡部造酒、酒井小隼人有賀此面、笹治右近、狛中膝下同斷、出やつさか。夫ゟ御座ゝ間へ相參りいて著座。

松榮院樣ゟ着城爲御歡、用人相勤之、荒川十右衞門之。終る長鮑差出す。

本多内藏助
岡部左膳
酒井外記
有賀内記
内藏助悴 本多丹波
左膳悴 岡部造酒
外記養子 酒井小隼人
内記養子 有賀此面
織居養子 笹沼右近
帯刀弟 狛中
天方孫八

右ゝ面々へ手自長鮑遣す。其節目出さイと申ゝ

夫ゟ韃靼ゝ間へ、先立用人いさし着座

秋田八郎兵門

高知

酒井與左衛門

本多豐後

笹沼織居

松平莊兵衛

稻葉敬次郎

大谷助六

杉田五郎兵衛

本多四郎右衛門

芦田内匠

荻野左近

明石縫殿

水戸但馬

高家

山川登彌太

宇都宮彌三郎

留守居 毛受傳三郎

同斷 飯田作左衛門

孫八悴 天方諒之助

八郎兵衛養子 秋田水門

一 右之面々西縁頬ゟ罷出、手自長蚫遣す。

畢る

右勝手口ゟ罷出、長蚫手自遣す。

畢る

芦田内匠

當年歸國御禮使者内匠、目見申付。用人御歸國御禮使者芦田内匠と披露。其

時此方被申候ヘ、於江戸表用人共申談し、相勤候様、道中無事ニ而申之、奥ニ而帷子一廣蓋ニ載セ、内匠前ニ指置、内匠頂戴終る、家老共有賀内記取合退去、夫ゟ又々罷出、長蛇可遣之所、其時此方放心致候哉長蛇遣し候事を忘却いたし、其ゝ松榮院様謹姫殿ニ宜クと斗り申之候なれとも、長蛇不致候ニ付、下り不申、此方そこニて、ふと申聞る事なきといふから、内匠ほいなく退去。

長蛇を御忘れらる

此方も御座之間へ參り、秋田八郎兵衛を呼ニ遣し、相咄候内、天方孫八罷出、御長蛇被下候義御忘却、血涙とく／＼と申て參り申候故、氣がやつと付申候。　又々糧紙之間へ參り、長蛇差出、内匠罷出此方申候ハ、改る遣ハすと申、こゝニ於て忘却いたし候義を實ニ心外耻入、家老共へも側用人を相陀、内匠へも申聞、ソレニる事濟申候。

此日記ハ萬世へ傳へ候存し、斷然と我非を上ケ、後主之心得とハせるニ。

神拜の儀

夫ゟ御座所宗像大明神へ拜禮、夫ゟ辨天稻荷、夫ゟ御靈屋等へ參拜之上、上へ上る。　夫ゟ程過て祝膳差出す、給へる。

明日、御宮並孝顯寺運正寺瑞源寺華藏寺東光寺へ參詣之段、八兵衛相伺之、並是迄之通り稽古日割相伺之、不記。

田安一位様に水餅献呈

今日飛脚出立ニ付、一位様へ吹聽狀呈書、並坂口之水餅獻呈。

五月十三日
御宮と御靈屋に參拜

六ツ半時頃寢ル。

十三日晴

今朝目覺六ツ半時。

五ツ半時ゟ供揃ニ而、御宮　御靈屋　孝顯寺御靈屋御廟共、運正寺同斷、瑞源寺同斷、華藏寺御靈屋、東光寺同斷、歸城九ッ時過。

觸頭
本多五郎右衛門

使番
林　忠兵衛

時宜役
櫻井庄九郎

大番
渡邊元右衛門

本　鄕　庄　助

本多猪兵衛

澁谷與五左衛門

歸りゟ筋補、下馬吉田五左衛門

大番頭菅沼市左衛門

使　番石川彌五大夫

供頭助門野太郎右衛門

從頭助畑中藤八郎

其餘替りし儀無之。

五月十四日
神明足羽黑龍社等に御參詣

五ツ時前寢ル。

十四日晴

今朝目覺六ツ半時。

五ツ半時ゟ供揃ニて裏通り神明足羽人丸、將軍地藏、黑龍等へ參詣、歸城四ツ時過。

[illegible] 村上伸之助

徒番 中村庄兵衛

歸りし節

先物頭下馬相詰 今村五兵衛

大番頭 齋藤數馬

供頭助 淺見七十郎

岡田喜八郎病む今日無事歸城

加藤又一郎三寺與右衛門死去

五月十五日

供頭助
丹羽與右衛門

右ニ而々致供候。

小姓役岡田喜八郎、腹合不宜ニ付、藪原宿へ致逗留養生いたし度旨相願、於同驛三日滯留、追快ニ付去ル八日同驛致出立、道中無滯致到著。

私云、喜八郎三日致逗留、少し宜ニ付野尻迄參候由。彌以順快ニ付、驛亭急ソき漸今日致到著候。誠目出さく存候。此人性温和なる物ニて、隨分執法ニ役ニも立ち可申物之。

加藤又一郎去ル十一日、三寺與右衛門去月廿一日病死。死後書付八郎兵衛を以テ見セル。

醫王寺ゟ大なるふきを献進、奈良權大夫ゟ指出。五ツ時頃寢ル。

十五日晴

今朝目覺常刻。五ツ半時ニ供揃ニる、本丸へ移。本多內藏助家老共祝儀申上。終る一人ツヽ、本多丹波をしめ、夫ゟ杉戶際天方孫八初目見、終る於席々禮を受ル。四ツ半時過座所へ參ル。九ツ半時過留守用承ル

家　　老

側用人 従前之例 不罷出

金津奉行

町奉行 不快

御預所元〆

奉行

目付

札所目付

御預所郡奉行

郡奉行

右之面々方承ル、不記。餘事無之候。五ツ時過寢ル。

十六日晴

五月十六日　通鑑綱目

今朝目覺常例。半右衛門綱目申上。

評定日八郎兵衛罷出ル。

大番組高島甚五左衛門養子鎌之助、御序之節初而御目見願。中野文左衛門養子文

詩經鎗術

栃屋縫之助

五月十七日

評定留御覽

弓術

歡島等到着

五月十八日

次郎願、同斷。願書兩通共見セル。

彌次郎詩經申上之。鎗術いたす、中村政右衛門罷出、相手松尾傳藏（表壹邊、眞ノ位高上壹邊、奥手數二邊いたす。）

栃屋縫之助段々長引ニ付、猪兵衛頭取助申付。五ッ半時頃寢ル。

十七日晴

今朝目覺常例、半右衛門罷出、綱目幷御遺訓拜誦。

太田三郎兵衛罷出、評定留（十一日 十六日）兩通見セル。且又吉田伊兵衛悴藤吉、及離縁候始末聞繕差出。評定所留一見し上留ル。委細ハ別紙ニ有之。彌次郎罷出詩經申上之。

飯島四郎右衛門並養子三九郎、相手長作罷出、弓稽古、相手（鈴木主税、近藤雄藏、飯島四郎右衛門、飯島三九郎、高村長作）

七ッ半時過哥嶋初道中無滞今日到着、目見申付。五ッ半時頃寢ル。

十八日晴

目覺常刻半右衛門罷出、綱目可申上候所、持病氣ニ付斷、綱目獨誦。彌次郎詩經申上之。居合稽古高畠甚五左衛門、並大橋金兵衛生田十左衛門罷出、相手（居合太刀）

奥長刀留補手いさす。　乗馬並次馬申付馬方へ申付。　九ツ時過寝ル。

五月十九日　江戸より飛脚着

十九日晴

今朝目覚常例半右衛門罷出綱目申上之。　十二日晩立通飛脚道中常服今日到着。　江戸替る事なし。

松栄院様　一位様御方々様、益御機嫌奉恐悦い。　餘事外ニ記ス。

家老罷出、瑞源寺館物御寄附、并吉田伊兵衛転役之始伺。　渥美直記廿五日ニ取扱、吉田仙客明日取扱可申段相伺之。　太田三郎兵衛罷出用状見ル。　重衛精

古平蔵矢ノ市左衛門雪吹八郎左衛門出ル。

五ツ半時過寝ル。

五月二十日　評定日

廿日晴

今朝目覚常刻、半右衛門罷出い、綱目申上。

今日評定日ニ付、秋田八郎兵衛罷出い。

評定所

注同文献著加

吉田仙格

養父益庵家督百石無相違遣ス。表御鍼醫師申付候段家來申聞。

松平源太郎

今度歸國道中供私壹人相勤候ニ付、目錄之通り遣之候段、家老申聞

目錄

召帷子一

但目銀於同席用人被相渡

土屋十郎右衛門

右同斷

目錄

銀壹枚

但同斷

市村勘右衛門

別紙之通り申付候、其段可申渡旨家老中聞

別紙

小役人格廣敷添役　中野平左衛門

小役人ニ致、臺所目付

勝田與右衛門跡申付

右之通り可申渡旨

前波忠兵衛

右同断

別紙

往　野坂貫助

小役人ニ致廣敷添役

中野平左衛門跡申付

右之通可申渡旨

恒岡安左衛門

横井三郎右衛門養子芳吉儀、當年二拾六歳罷成候、御序ゟ節初てゟ御目見願書付指出候。但書面ハ側用人以秋田八郎兵衛見セル

西村勘五兵衛弟八五郎儀、當年三拾才ニ相成候、本多筑後家來給人福岡幾太郎と申我養子ニ致度旨申聞候ニ付、差越度願、幾太郎と八五郎とハ實從弟ゟ由、右ゟ趣家老へ相達候。

毛受傳三郎

留守番組竹內嘉藏養子熊藏、伴五郎左衛門悴五郎作御目見願、横井三郎右衛門願と同斷。

市村勘右衛門

但嘉藏養子熊藏、當年貳拾五才、伴五郎左衛門悴五郎作當年拾五才由、

新番組若森才大夫養子元四郎、御目見願右同斷、但元四郎當卅六才

井上十大夫

新番組佐々木惣四郎儀、痛所有之候ニ付湯治可致旨、引間正順差圖、依之加州山中ゟ三廻り入湯、若相應不致候得ハ、右日數ノ內同國山代粟津へも入湯致度旨願口上書差出、其段家老へ相達、

九ッ半頃彌次郎詩經申上之。八ッ時ゟ出淵傳之丞罷出、鎗術稽古いたす、相手高久官大夫。次遣彥坂又五郎。明日灸治を可致段主稅迄申付之。五ッ半時過寢ル。

五月廿一日
猪子六左衛門組水主鯉を上る

廿一日曇

今朝目覺常刻半右衛門罷出候、綱目申上之。昨日猪子六左衛門組水主稽古ニ罷出候所、鯉壹取り候ニ付差出。

孫八八郎兵衛罷出申達候ハ、御用召ノ節、敷居內へ入り候義、寄合ハ敷居內、番外ハ敷居外と申事、御初入ノ節相極ル所、威德院樣御代ハ、兩方共內へ入り申候間、從此以後も番外も寄合と同樣ノ積ニ致候段申上之。

灸治いたす。五ツ半時過寢ル。

廿二日雨

今朝目覺常刻半右衛門罷出ル。五ツ半時鉄砲ノ間へ移、役替申付。

熊谷熊之助

敷居外へ罷出、夫へといふ、相進敷居内へ入レ、

其方儀觸頭渥美新右衛門跡申付、家老有賀内記結構被仰付、難有仕合御請申上

退去。

鰕江善右衛門

罷出夫へと二度いふて相進、

其方儀側物頭石川平八跡申付。

佐々木小左衛門

其方儀持弓頭鰕江善右衛門跡申付

高江友右衛門

其方儀、長柄奉行三寺與右衛門跡申付。役料百五拾石遣ス

櫻井庄九郎

三丁火消

其方儀、纏奉行加藤又一郎跡申付、
何レも御請申上、家老取合有之。
石川平八
隱居ニ御禮申上、家老取合有之。
水谷壹岐罷出、著中御機嫌御伺之。御國使者近例ニ通り三丁火消、大久保喜十郎青山彌右衛門ニ內善十郎へ申付可申哉ニ伺、其通りと差圖いたす。
大谷儀左衛門
泉水預り申付、座所預り免。
波々伯部八大夫
座所預り申付
石川平八
同　瀨六
年寄ルニ付隱居申付、忰瀨六へ家督無相違遣之、大番入申付。
夫ゟ端午ニ御目錄拜戴。
彌次郎罷出詩經申上之。　弓稽古堀江九郎左衛門相手

五月二十三日　江戸へ飛脚一位様等に呈書

五月二十四日　大安寺に御參詣

五ツ半時過寝ル。

廿三日曇

今朝目覺常刻半右衛門罷出綱目申上。今晩立通飛脚、道中常振江戸表へ差立、右ニ付　一位様へ呈書(半切)花漬、民部君、右衛門君、尾張宰相君へも呈書(二ツ切)き井同斷。

彌次郎不致。　居合稽古甚五左衛門罷出相手本多五郎右衛門高須幸八罷出ル。

明日六ツ時前ゟ供揃ニ而大安寺へ參詣。　水谷壹岐罷出申達ル、細川越中守殿妾服ゟ次男長岡□之助御届ニ付、天方諒之助改名可致段申達

諒之助事

天方彝(ツネ)之助

被改名致ル

六ツ半時寝ル

廿四日曇

今朝目覺七ツ時、其餘替ることなし。

六ツ時過ゟ供揃ニ而大安寺へ參詣、御像拜禮、畢而御廟へ拜詣、夫ゟ客殿へ通り、

方丈罷出ル。久シウテト申之。再罷出拜領物之御禮ニて、菓子の挨拶をいふ

し、夫ゟ山亭枯木堂（座禪堂之事）並開山堂近邊を廻り、歸城四ツ半時壹寸五歩廻り

出城掛

使番　雨森作助

大番頭　大宮万之丞

下馬門々番　片山平七

歸城掛

下馬門番　比企作左衞門

大番頭　多ケ谷舍人組

使番　石川彌五大夫

供之面々

觸頭　村上冲之助

使番
村上作右衛門

右席々ニる名斗を申之

彌次郎罷出詩經申上。市橋軍藏罷出柔術稽古。相手蟹江善右衛門 生田十左衛門 乗馬稽古。

六ツ半時過寢ル。

五月二十五日 評定日

廿五日曇

目覺常刻半右衛門罷出、綱目申上。

今日評定日ニ付八郎兵衛罷出

評定所

重忌中
渥美直記
永見隼人差加
名代
奈良助右衛門

直記儀、養父新右衛門家督貳百五拾石無相違遣之、定座番外申付。此段直記江可申聞旨家老申聞。

大宮万之丞

番組吉田伊兵衛儀、別紙

書付を以申付、何茂退出後、目付共申談可取扱旨家老申聞。

別紙

書付

吉田伊兵衛へ申渡覺

其方養子藤吉儀、先達る及離縁い始末、病身とハ乍申、其方儀取扱方不念屆、心得違ミ趣相聞不調法ミ事こい、依之役儀御取揚被成、閉門被仰付い。急度相愼可罷在い。以上

五月

水谷壹岐

別紙ミ通り席ミ儀可申渡旨、家老申聞。

別紙

熊谷熊之助次

渥美直記

右之通可申渡旨

恒岡安左衛門

西村勘五兵衛弟八五郎、本多筑後家來福岡幾太郎と申者養子差出度旨願之通申付候。其段勘五兵衛へ可申聞旨家老申聞。

中川主膳

私番組渡邊元右衛門儀、別紙書付を以申付候、何茂退出後、目付共申談可取扱旨家老申聞、

別紙

書付

渡邊元右衛門へ申渡覺

其方弟藤吉義、先年吉田伊兵衛養子ニ指越候處、及離緣候始末、病身とて乍申、心得違之趣相聞候ニ付、逼塞申付候。且又其方儀も取斗方不參屆候趣相聞、不調法之事ニ候。依之遠慮申付候。兩人共急度相愼可罷在候。以上

五月

佐々木惣四郎湯治願之通り申付候、其段惣四郎へ可申聞旨、尤前後目付へ相届候様、是又可申聞旨家老申聞。

井上半大夫

飯田作左衛門養子徳次郎儀、蒲生浦専徳寺へ由緒有之ニ付、無據用事ニ而宿泊差越申度旨願、家老へ申達、

毛受傳三郎

内田作兵衛養子四郎吉、星野織之助養子友次郎、初而之御目見願家老へ申達。

中川主膳

山田清兵衛妻女無之ニ付、安川幸助妹後妻ニ致度旨。　先妻ハ安本新助妹ニ候處、不縁ニ付双方和順之上離縁致差戻候旨、願口上書差出候段。

松平源太郎

安川幸助山田清兵衛と同斷

稲葉式部

無役留守番井上次郎八妹、矢嶋七郎右衛門忰準作後妻ニ致度旨。右妹義ハ先年能勢小之助妻女ニ差遣候處、双方和談ニ而上離縁引取置候旨、願口書差出、其段家老へ申達候所、再縁ニ而事故勝手次第申付候樣申聞、

井上半大夫

高橋素平願、飯田作右衛門養子德次郎願と同斷、

成瀬惣右衛門

周防長兵衛養子平吉、高屋伊喜右衛門養子小金吾、御目見願、内田作兵衛願と同斷、

小栗次右衛門

秋田三五左衛門嫡孫城太郎目見願、右同斷

彌次郎罷出、詩經申上之。劔術稽古。五ツ半時過寢ル。

五月廿六日
松岡天龍寺に御參詣

廿六日曇

目覺七ツ時、六ツ時過〻供揃ニる、松岡天龍寺へ參詣、御像拜、終る御廟所拜、夫ゟ山へ上りて直ニ歸城、四ツ時二寸廻り。

使番　中村久藏
大番頭　菅沼市左衛門
下馬門々番　周坊長兵衛
切手門々番　鈴木百助

遠方ニ付
御意無之

切手門々番　望月八郎右衛門
下馬門々番　成瀬惣右衛門
大番頭　齋藤數馬組

歸城〻節

供之面々

使番 中村庄兵衛

觸頭 永見隼人

使番 榊原惣三郎

徒頭 青木與一右衛門

例之通り

時宜役 梶川半兵衛

大番 久野文四郎

石川瀨六

坂部多會右衛門

有澤勘助

一大番所は番頭詰合候て、前々之通り名をいふ。若不詰節ハ、何ことも無之。

彌次郎罷出詩經申上之。　政右衛門罷出、鎗術稽古相手波々伯部八大夫。

三度膳後、極々内々ニる繼上下ニ相成、宗像大明神へ拜詣、廿日ゟ今日迄七日ゝ間精進いたし申ゝ。是ハ當節此許家老始心得あしく有、忠良者ヲ退ケ、希甘俗ゝ故、不得已事、香を燒神慮伺ゝ所、卦ニて

䷤ 風火家人　䷕ 山火賁變爻

之

（神慮を伺はせらる）

松平源太郎罷出申達ゝ者、多喜多藤内妻女無之ニ付、八田金右衛門娘後妻ニ致度旨、内意伺。然ル所、藤内妻未離縁ゝ達不存ニ付、暫預置。

五ッ半時過寢ル。

廿七日雨

（五月二十七日運正寺に御參詣）

目覺常刻、五ッ半時ゝ供揃ニる、運正寺

諦觀院様御靈前へ拜詣、夫ゟ御廟所へも拜ニ罷越、夫ゟ歸城、四ッ時ゟ歩廻り。

出城懸

使番　石川彌五大夫

大番頭　中川主膳

下馬門々番　高村藤兵衛

供之面々

觸頭　本多五郎右衛門

使番　中村久藏

徒頭　青木與一右衛門

時宜役　樋口喜左衛門

大番　生田十左衛門

加藤武右衛門

松江三郎右衛門

榊原藤五郎

側用人罷出ルニ付、多喜多藤内離縁候事承候所、相違無之ニ付、差圖宜クと申、源

評定留

太郎へ八郎兵衛ゟ申通す。家老用有之。評定留源左衛門罷出入寛。弓術稽古いたす。五ツ半時過寝ル。

五月廿八日

廿八日雨

今朝目覚常刻、半右衛門罷出綱目申上之。高畠甚五左衛門罷出、居合稽古相手大谷半平安本新助之。彌次郎罷出詩經申上之。五ツ半時過寝ル。

角違札の引上げ

(頭書)

側用人罷出申達候て、札所奉行高畠市郎右衛門申達候て、角違札、閏五月二日ゟ貳歩引上ケ、九十三匁ニ致候。

(附箋)

廿八日補

間部下總守殿ゟ、以側用人田井舍、歸國後安否御尋問、町宿いたし、そこ一使番罷出、口上承り右筆部屋へ相達、夫ゟ返答遣す。

薄暑之砌ニ御座候處、先般彌御機嫌能被成御歸國珍重御儀奉存候。猶又此御ゝ御安否承知被仕度、以使者進上仕候宜。

側用人
田井舍

菓子　一箱
鶏卵　一箱

薄暑ゝ節愈御堅固之由、珍重奉存候。拙者儀歸國後安否爲御尋問、遠路預御使者、殊

御目錄ニ通被掛御意、御懇篤ニ至忝次第御座候。此節無異儀罷在候。猶御相答ニ
儀宜。

雨森作助

五月廿九日

廿九日晴

今朝目覺常刻、半右衛門罷出綱目申上。

評定日ニ付、八郎兵衛評定所へ罷出ル。

於評定所

矢村甚左衛門

（頭書）
野坂眞助跡小屋頭申付

三岡助右衛門

寺院番入申付候段家老申聞

市村勘右衛門差加

榊原藤五郎

金奉行吉田伊兵衛跡申付候段家老申聞

毛受傳三郎

飯田作左衛門養子德次郎儀、蒲生浦專德寺由緒有之候處、無據用事有之ニ付五宿泊り差越度旨、願之通り申付候。其段作左衛門へ可申聞旨、尤前後御日付共江相屆候樣、是又可申聞旨家老申聞。

中川主膳

私御番組山田淸兵衛儀妻女無之ニ付、安川幸助妹後妻致度旨、願之通り申付候段、家老申聞。

松平源太郎

書院番組安川幸助、山田淸兵衛後妻指遣度旨、願之通り申付候段、家老申聞。

出福無之
仙石万右衛門

名代
太田三郎兵衛

別紙之通り奉行借財掛り申談、可取扱旨家老申聞。

別紙

三國
三國與之祐
中嶋七兵衛
宮腰屋
五郎兵衛

△昨年ゟ三ヶ年割、調達金申付候處、上納方出精ニ付、桐紋附三ツ組盃一ツヽ遣候。

右之通り可申渡候

市村勘右衛門
高間文四郎
本多彌六

同心　千本藤左衛門
　　　小川治兵衛

別紙之通り申談可取扱旨家老申聞

別紙

高間文四郎支配下
鷲本村　中山雄助
河野浦　右近権左衛門

△と同断

本多彌六支配下
水落村　清水新左衛門

△と同断

千本藤左衛門支配下

松岡
山室屋　新七

△と同断
右之通可申渡候

市村勘右衛門
小川治兵衛

別紙之通り仙石万右衛門申談可取扱旨家老申聞

別紙

仙石万右衛門江相渡別紙と同断

井上半大夫

新番組高橋素平儀、蒲生浦專徳寺由緒有之候處、無據用事有之ニ付、五宿泊罷越度旨願之通り申付之。其段素平へ可申聞旨、尤前後目付共へ相届候様、是又可申聞旨家老申聞。

此内壹人
加藤茂右衛門
服部三郎兵衛

別紙之通り可申渡旨家老申聞

別紙

中判役見習
林清之助

中判本役申付、充行貳石増、都合貳人扶持ニ被成下候。

右之通可被申渡候

毛受傳三郎

留守番組八田金右衛門娘儀、多喜田藤内後妻ニ致度旨申聞候ニ付、指遣申候、尤縁組内證申合候旨、願書付差出其段家老へ申達。

中川主膳

出淵傳之丞悴文太郎、市橋文大夫養子音四郎、市島左太右衛門養子百助、御序ニ節初るニ目見願書付差出、其段家老へ申達、

但傳之丞悴文太郎當年拾五才、文大夫養子音四郎二十二才、

左太右衛門養子百助拾八才

松平源太郎

書院番組多喜田藤内儀、妻女無之ニ付、八田金左衛門娘後妻ニ致度旨、先妻義を高屋伊喜右衛門娘ニ處、双方和順ニ上離縁仕ル。願口上書差出ル段、家老申達。

彌次郎罷出、詩經申上之。 市橋軍藏罷出、柔術稽古いたす相手安本新助 片山平七 乗馬いたす。

江戸飛脚着

去ル廿二日晩立通飛脚、道中常振今日到著、江戸表相替る事なし。 一位尊君ゟ尊翰御代筆 頂戴、迚井ゟ文來ル。 五ツ半時過寢ル。

五月晦日

晦日晴(頭書)五月正米

目覺常刻替る事なし、半右衛門罷出、綱目申上之。 家老用有之、四ツ時頃ゟ九ツ

評定所留を見る

閏五月月番

半時頃ニ至る。色々用狀見セし後、大ニ論いたす。

目付罷出、評定所留見セル。彌次郎延引。出淵傳之丞罷出、劍術稽古いたす丁出

津田丈右衛門
竹澤五郎右衛門　五ツ半時過寢ル。

閏五月々番

家老	酒井外記
留守居	飯田作左衛門
大番頭	恒岡安左衛門
用人	雨森小十郎
小姓支配別役	相馬一九郎
無役留守番頭	富永新左衛門
寄合	林和泉（八ノ門）
同斷	北川市郎
觸頭	本多五郎右衛門
定座番外	海福久次郎
奉行	西尾源太左衛門

新番頭 山田藤兵衛
目付 雨森儀右衛門
目付 土屋十郎右衛門
佐々木小左衛門
井原烝助
片山平七
荻野治郎左衛門
宮北權六
千本藤左衛門
中村久藏
青木與一右衛門
側用人 天方孫八

朔日曇

目覺常刻、五ッ半時本丸へ移。家老始諸士の賀禮を受。前々之通り格禮。
彌次郎罷出、綱目申上之。中村政右衛門罷出鎗術稽古（相手中山太郎左衛門）五ッ時過寢

ル。

閏五月二日　熊谷小兵衛同名名替のこと

二日曇

目覺常刻、半右衛門罷出、綱目申上之。膳中熊谷小兵衛罷出、雜談いたす。

雨森小十郎罷出申達候處、先年寛政頃の事ゟ家老ゟ右筆部屋へ申候ハ、於公儀御老中ハ御方ハ御名ニ差合候物ハ、異役さりさりと雖モ、相改め可申と申事有之候ハヽ、昨年御老中松平和泉守殿御役ニ被成候ニ付、林和泉ニ名替可申ハ所、其儀なく、まゝ昨日ふと御帳面見候内ゟ氣付申候間、名替致させ可申と伺ハ、其通りと云之。

城下廻り道書

側用人罷出、御家老ゟも一昨日申上通、御城下廻り御道書、以來ハ最初ゟ右筆部屋へ先ニ相渡し候樣ニ相成樣家老へ申之と伺之、其通りと申之。

陳、是迄一昨夏趣意ゟ、城下廻り道書出城ハ折、直ニ供頭へ相渡し候事。

孫八姓天方月番罷出申候處、先刻小十郎ゟ申上候林和泉ハ儀ニ付、昨年三月の月番水谷壹岐ニ付、壹岐伺差出候積ハ由有物語候。後刻小十郎罷出、申達候處、

和泉事
林　八右衛門

と爲改可申存意も無之哉と申ニ付、其通りと差圖いたす。
又孫八罷出申達候ハ、壹岐伺書付差出入披見、月番家老外記申候目付へも掛候所、昨年御歡書狀稻葉敬次郞不差上と申て、月之番皆川多左衛門控被仰付候。此度ハ公邊之事ニ掛候義故、昨年之とハ又違候事も、何分差控被仰付候ハ、御尤と存候。右ニ付差控申付。

今朝雨森小十郞罷出申達候ハ、此間間部下總守殿ゟ、歸國後時候御見舞として、側用人ヲ以御使者ニ參候ニ付、爲挨拶、從此方鯖江表へ可遣使者ハ、側物頭ニ而可然と申談し候ニ付、其通りと及指圖

間部へ答進物と使者

雲丹　一壺
烏子紙　二百枚

之答進物之。

南之方圍、追々暑氣ニ向ひ、炎熱ニ相成候ニ付、北之方へ移易す。

彌次郞罷出、詩經申上之。飯島四郞右衛門、同三九郞罷出候、弓稽古相手國枝小兵衛但谷ハら斗。乘馬いたす。五ッ半時過寢ル。

飯島四郞右衛門弓稽古

閏五月三日

三日晴

今朝目覺常刻、半右衛門罷出、綱目申上之。彌次郎罷出、詩經申上之。高島甚五左衛門罷出、居合稽古（相手大橋金兵衛 生田十左衛門）五ッ半時過寢ル。

閏五月四日

四日曇

目覺常刻、半右衛門罷出綱目申上之。側用人罷出、只今家老逢度由申之。雨森小十郎罷出、明日飛脚差出候儀申之。

日掛停止半減を免ず

家老罷出、日掛相止、半減貳百石以上手當、百石以下御免之儀、并酒井彦六用人ヲ始、常親之二鞬靫役替申之、共通りと差圖いさす。

銕炮手筒差出、披見之上三挺殘。

彌次郎罷出詩經申上之。市橋軍藏罷出柔術稽古（相手菅沼銕五郎 高松仙右衛門）五ッ半時過寢ル。

閏五月五日

五日曇

今朝目覺常刻、半右衛門罷出、綱目申上之。

評定日

評定日ニ付、孫八評定所へ罷出る。共間八郎兵衛と內談、孫八評定方歸る。

評定所　　毛受傳三郎

留守番組八田金右衛門娘多喜多藤内後妻指遣度旨願ㇾ通り申付ㇾ。其段藤内へ可申聞旨家老申聞。

松平源太郎

書院番組多喜多藤内妻女無之ニ付、八田金右衛門娘後妻致度旨、願ㇾ通申付ㇾ。其段藤内へ可申聞旨家老申聞。

大宮萬之丞

加藤武右衛門悴孫吉儀、當年拾六才罷成ㇾ。御序ㇾ節初るㇾ御目見願家老へ申達。

津田丈右衛門養子豐作、最初と同斷、家老へ申達但豐作貮拾一歳

出淵傳之丞罷出、劔術稽古相手高久官大夫榊原仁右衛門　五ッ半時過寢ル。

閏五月六日

六日晴

今朝目覺六ッ半時、半右衛門罷出綱目申上之。

五ッ半時於鉄炮間直申渡

酒井彦六

其方儀側役並用人見習申付　酒井彦六
小姓表小姓支配於家老部屋申渡由

家老出席用番外記取合

海福猪兵衛

小姓頭取栃屋縫之助跡申付　海福猪兵衛

岡部半兵衛

小姓海福猪兵衛跡申付　岡部半兵衛
但席波多ノ頼太郎次へ入

八木八十八

近習番岡部半兵衛跡申付書院番入　八木八十八

栃屋縫之助

病身ニ付内願之通り小姓頭取免、書院番入　栃屋縫之助

右何レも於家老部屋、用番申渡之。

書院番二番彦坂久五郎次　栃屋縫之助

同て　眞田五郎兵衛次　八木八十八

於右筆部屋割入

右彦六並猪兵衞半兵衞並八十八結構申付候ニ付、於御座之間御禮申上。

水谷壹岐の差扣を免す

水谷壹岐差控申付候所、今日免。雨森小十郎罷出申達候處、明日彌鯖江表へ側物頭遣候宜。

間部へ答進の口上と目錄

口上

向著之節候得共、愈御堅固之由珍重存候。先頃ㇵ歸國後爲御尋問預御使者、殊御目錄之通り被懸御意忝存候。右爲御答禮、以使者目錄之通り致進覽候宜。

小栗助七

鳥子紙	一箱
雲丹	二臺

彌鯖江表へ明日差越候事

鈴木主税罷出、小姓番割申達。

壹番類
近藤雄藏
桑山彦助
上月熊之助
岡田喜八郎
波多ノ頼太郎
堀　連之助

貳番類
日比彦之丞
海福猪兵衛
篠川熊次郎
大井會祢次郎
岡部半兵衛
萩原長太郎

と相伺之、其通りと申之。

小姓介岡部半兵衛跡申付　井上彌一郎

腰物懸り　手習懸り　稽古懸り　鷹掛り　書物懸り　時體榊懸り　海福猪兵衛

主税相伺之、右筆部屋申達。於申達、川瀬次郎右衛門（近習番頭取）罷出、近習番々割相伺之。

一ノ一　村田龍之進
　　　　森田傳右衛門

二ノ一

武田喜内
野中重左衛門
井戸治兵衛
八木八十八
川瀬次郎右衛門
三岡次郎大夫
多喜田藤内
眞田五郎兵衛
横井吉十郎
坂井又三郎

一ノ二

鈴木仁太夫
溝口郷右衛門
林勘十郎
大關彥兵衛
河合五右衛門

岡部左膳花見ノ一件　閏五月七日

二ノ二

井上彌一郎
野村拾大夫
勝木十藏
河合太郎大夫
高田新七郎
彦坂又五郎

共通りと差圖す。

雨森儀右衛門儀、淨德寺へ岡部左膳花見し一條、聞繕見セル。其餘色々談す。

中村政右衛門罷出、鎗術稽古いとす(相手松尾傳藏。)乘馬稽古。五ツ半時過寢ル。

七日雨

今朝目覺常刻、半右衛門罷出綱目申上。

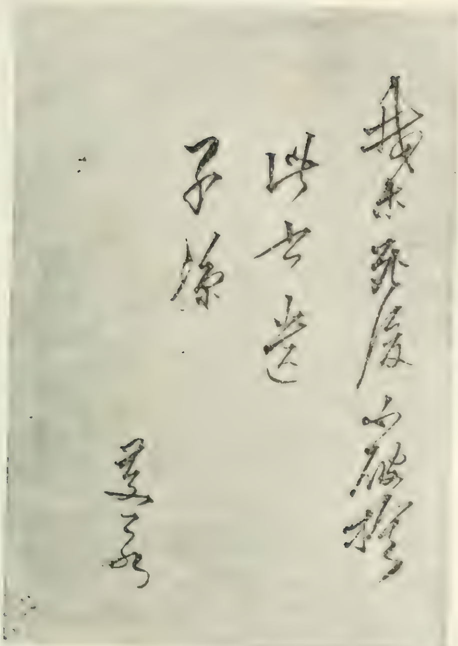
田邊五大夫太田三郎兵衛兩人召呼、此度左膳咎し一條ニ付るゝ、別て家老職身分し儀なれハ、大切し事、左樣いへハ、昨日雨森儀右衛門罷出、聞繕見セ、儀右衛門より、尚又存念承り申候。儀右衛門申候所と、同意ニハ可有之候得共、かく重く事を、銘々の心體承不申候ゐるゝ、心體濟まぬ事故、乍愚念尚又其方共の存念承度

と申ルへモ、同意ミ旨答へ申上、其餘雜話す雜話政事向の事

彌次郎罷出詩經申上之。飯島四郎右衛門罷出、弓術稽古。但於矢場的もいさす、相手飯島三九郎、桑山彦助木内甚兵衛、鈴木仁大夫春岳等之

五ツ半時過寢ル。

（裏表紙）



（政暇日録終）

在國

政職日録

自弘化三年丙午閏五月十八日

至閏五月廿八日

十[illegible]冊目

[illegible]

在國

政暇日録

自弘化三年丙午閏五月八日
至閏五月廿八日

十五代目
越前守慶永（花押）

弘化三年閏五月八日
岡部左膳花見のこと

閏五月八日曇　印

十五代目越前守源慶永印

今朝目覺常刻、半右衛門罷出、綱目申上。　雨森儀右衛門罷出用状見る。
引續山本源左衛門、土屋十郎右衛門召呼、昨日三郎兵衛、五大夫江申聞候淮南子（是ハ岡部左膳之事、豆腐ヲ一名岡部ト申、此豆腐之製作始ハ淮南の石作り出せし候故、依之心得覺ニ名くる之。）淨得寺花見一件之事ニ付、猶又存寄候所、昨日兩人申聞候と同意之。　其餘政談。
一昨日頃、岡部造酒妻致出産、今朝ウブ子病死ニ付、左膳實孫ニ候間、今日一日遠慮可致段小十郎申上之。
天方孫八罷出、酒井彦六も造酒子病死ニ付、近續ニ候間、今日一日遠慮致候間、見習日數五日之所、今日一日あけ候ニ付、十日迄見習いたし、其餘一日見習致度段、彦六相願。　夫ニて不及ニ付、今日一日ハあけ候えと相伺之。
上坂五右衛門（中村）腕痛、花木源藏腰痛（中村）並瀧仁左衛門腰痛ニ付（市橋）御稽古御相手御免相願候、其通りと及差圖。　灸治いたす。
六ツ半時前、秋田八郎兵衛外記宅ゟ罷歸り、伺之趣書付入披見。　右外の儀ニも候ハす左膳一條之事ニ付、表向寄合、執政側用人目付等之。　委細右之趣申達し、

夜中罷出申上候儀、大儀ニ存候間、有合ニ菓子遣ス。

五ツ半時寝ル。

閏五月九日

九日曇

今朝目覚六ツ半時、半右衛門罷出、綱目申上之。

鉄炮長谷川八十郎に御入門の儀

五ツ半時ニ相成、鉄炮長谷川八十郎へ入門ニ付、於居間八十郎目見申付。用人（長谷川八十郎と）披露し、メテタイと申之、用人取合申上之。右相済稽古所支度見斗宜段、以稽古掛海福猪共衛（敬翹）申候上、稽古所へ参り、常稽古ニ節ゟ少し進ミ着座ニ上、八十郎用人雨森小十郎ヲ以申上候ニ、流儀ニ鉄炮放ち方入御覧可申旨申達。小十郎伺ニ上、宜クと申。此所ニおいて、八十郎鉄炮持出し、膝ニる空操入一見、又此方参り空操二度いさし相済、復座ニ上大儀と申て退去。

岡部左膳花見のこと

四ツ時過、家老外記をしめ（左膳不快の積にて引）罷出、岡部左膳此度浄徳寺花見ニ一條、不参届ニ付、夫々締ヲ相伺之。略共餘政談。

侍臣ニ承候へを、家中渇命ニ體ニ及ひ物も有之哉ニ相聞候ニ付、月番雨森儀右衛門召呼、只今勝中ニ、侍の内ヲ渇命ニ體ニ及ひ候物も有之哉ニ相聞、侍臣ニ申事、尤氣かなくうか〳〵とを申候得共、侍臣ニ申候儀を信し候と申ニるハ無之

鷹匠野村勝五郎

候得共、死と云一字を承候而ハ、心體不安承候と申候ヘハ、儀右衛門申候處、夫レ處御鷹匠ノ内、野村勝五郎と申人ニ御座候。昨年來必至難儀ニ付、當春も三俵とやら御借し被成候。只今申立而ハ無之候得共、盆前之所ニ而ハ、是非御手當も可被成下と存居、右等之儀、移世上候儀と存し候。尙又調可申上旨申上之。此方云、是而已ニは不限、尙又致心配候樣申之。

市橋万右衛門罷出、柔術稽古いたす。相手蜂江善右衛門 雪吹八郎右衛門 乘馬稽古いたす。五ツ半時過寢ル。

閏五月十日

十日曇

今朝目覺常例、半右衛門罷出、綱目申上之。今晚立通飛脚、道中六日振、江戶表へ差立テル。右ニ付

著中伺御國使者のこと

一位樣へ口上書、　を井へ手紙を遣ス。

雨森小十郎罷出申達候處、先日相伺候著中御機嫌伺御國使者大久保善十郎へ被仰付、此度御在所と被仰出候廉々、御國許と相成候ニ付、引上御使札被差出候ニ付、御國使者善十郎へ被仰付、著中御國使者ハ野坂源右衛門ニ被仰付候段、江戶表ゟ申越。其段相伺之。

雨森小十郎罷出、御老中へ之月次之御機嫌伺、御在所御國許之義、兩通兩丸江被差出、此方ニ見セル。

澁谷權左衛門罷出、東本願寺ゟ以使僧、歸城爲祝氷砂糖一箱被贈入披露。

又々小十郎罷出申達候者、今度舊格も有之ニ付、在所と被仰出候廉々、國許と相成候ニ付、爲御禮國使者被差出候ニ付勤

老中

若年寄

御側衆

用頼之先手衆

松榮院様及田安一位様に暑中伺

百石半知御免以上の手當

右御禮使者被差出、御見廻奉札被指出。

松榮君　田安　一位様ヲ御始、右同斷ニ付、御見廻使者被差出。

此度も右之通りニ可仕旨申上之。

孫八、八郎兵衛罷出、百石半知御免以上御手當被仰出書差出候得共、追る可及挨拶と申之。

閏五月十一日

岡部左膳に御咎申達

彌次郎いさす。　五ツ半時過寢ル。

十一日小雨

今朝日覺六ツ半時、半右衛門罷出綱目申上之。　今日存寄之旨有之ニ付、今日鎗術稽古延引申付。

五ツ半時頃、秋田八郎兵衛罷出申達候ハ、今朝御用番酒井外記安知宅へ參り候所、非番月御家老出座、御目付列席ニ而、岡部左膳へ之御咎被仰出申渡候ニ付、八郎兵衛並雨森小十郎用人田邊五大夫目付同道ニ而左膳宅へ罷越し申渡候。　左膳不快ニ付親類荻野左近罷出、書付之趣申渡候處、左膳へ直々申聞、左膳御請奉畏恐入候段申。　左近再罷出、八郎兵衛ニ申伸、八郎兵衛直ニ退去、評定所へ罷出、御用番ニ申達候處、早速罷出申上候樣申聞ニ付、只今罷出申上候由。

岡部左膳

其旨有之ニ付、御役儀組頭共々御免被成、席之儀、
本席寛役次に被入、遠慮被仰付。　且又作造酒儀、
當時節柄心得違之趣相聞候。　依之御叱被成候、

御用番酒井外記宅へ月番呼出申渡筈。

御書付
渋木工一束之内

（頭書）評定所

三寺虎太郎

松平庄兵衛へ申聞覺

狛木工養子主税介儀、御時節柄心得違之趣相聞候。依之御叱被成候。木工江戸留守中ニ付、右取扱其方へ被仰付候間、木工宅へ罷越、可被申渡候。以上

閏五月十一日

一 八郎兵衛直ニ評定所へ出ル。孫八義月番之所、不快故八郎兵衛出（實ハ孫八弟傳三郎御告）ニ付不罷出。

笹治織居

望月八郎右衛門儀、白方村佛護寺由緒有之候處、無據用事有之ニ付三宿泊り罷越度旨、願之通り被仰付候。其段八郎右衛門江可申聞旨、尤前後目付共へ相届候段、是又可申聞旨家老申聞。

生駒五左衛門差加
三寺虎太郎

私儀、親與右衛門家督百五拾石、無相違被下置、大御番組へ被入候旨家老申聞

不快　飯田作左衛門
名代　恒岡安左衛門

毛受傳三郎儀、別紙以御書付被仰付候、何も退出後、御目付共申談し可取扱旨、家老申聞

御書付

毛受傳三郎へ申渡覚

其方儀、不辨御時節柄、心得違之趣相聞、不調法之事ニ候。依之遠慮被仰付候。急度相愼可罷在候。以上

閏五月十一日

奈良權大夫

別紙之通り致仰付候、其段可申渡旨家老申聞、

別紙

木田
淨得寺

御時節柄心得も可有之之處、不束之趣相聞候ニ付御叱致成候。

御時節柄心得も可有之之處、不束之趣相聞ゝニ付、叱
右之通り可申渡ゝ

町醫
三崎玉雲

雨森儀右衛門

別紙之通り可申聞旨、家老共申聞

別紙

田邊五大夫組
林久右衛門

山本源左衛門組
山形良吉

小栗助七組
坪川文七

昨年於江戸表、御手當御人數廻し罷越ゝ節、不參屆趣有之、既ニ
公邊ゟ御咎被仰付ゝ儀、兼る申斗方等閑之趣相聞ゝニ付、押込
右之通り可被申渡ゝ

田代萬悌

御匕醫師山本正伯儀、別紙　御書付を以被仰付候。何茂退出後御目付共申談、可取扱旨家老中申聞候。

別紙

御書付

山本正伯へ申渡覺

其方倅良伯儀、御時節柄心得違之趣相聞候。依之御叱被成候。以上

閏五月十一日

井上半大夫

新御番組森澤五郎左衛門儀、三國口錢方小役人牧野勘兵衛と申者、由緒有之候處、無據用事御座候ニ付、三宿泊り罷越申度旨、願書付指出、其段家老中へ申達し候。

〆

於評定所、有賀内記酒井外記へ申達、左之通り

覺

岡部左膳ニ是迄御預ケ之與力共、酒井外記ニ假支配申付ル。

〆

三寺虎太郎

大御番組二番多賀谷舍人組淺見忠兵衛次へ割入

秋田八郎兵衛罷出、今日毛受傳三郎儀、御咎ニ相成ルニ付、天方孫八實弟ニ付、遠慮伺指出ル。則御用番外記方宅へ罷越申達ル得と、不及遠慮差控罷在ル樣、及指圖ル段罷出可申上旨、外記申聞ル段申上之。彌次郎罷出詩經申上之。五ツ半時過寢ル。

閏五月十二日

十二日曇

今朝目覺常刻、半右衛門罷出、綱目申上之。五日晩立通飛脚、道中常振今日到著。

江戸表無異狀。

松榮院樣田安　一位樣御始、御機嫌宜段申參ル。

執法七屋十郎右衛門罷出、評定留入一覽。其餘色々密話す。

評定留御一覽

酒井彦六用人罷出、江戸表ゟ之御用狀見セル。

(前書)江戸表之事

當月四日、御用番阿部伊勢守殿ゟ留守居共へ切紙到來、芦田内匠義、明五日四ツ

江戸の用状御覽　廣田内匠

時　御城へ可指出旨。　卽刻、爲御請伊勢殿へ八大夫罷出候。右ニ付今五日内匠義、八大夫同道、　御城へ罷出候處、檜之間へ伊勢守殿御出座、御連名之御奉書御渡被成、御奏者番伊東修理大夫御取次ニて、卷物二内匠江拜領被仰付候。

西丸松平和泉守殿、留守居共へ同日御切紙到來、内匠儀、明五日九ッ時、和泉守殿御宅江指出候樣申來候ニ付、爲御請八大夫罷出候。　則今日御本丸相仕廻、和泉守殿御宅江内匠儀八大夫同道罷出候處、右大將（樣脫）ゟ之御奉書御渡被成、内匠八大夫同道、拜領物爲御禮、伊勢守樣宅へ相勤候。　且御奉書本紙ハ、内匠致持參ニ付、右寫二通差越候。

御奉書寫

御奉書寫

御札令披見候。

公方樣　右大將樣益御機嫌能被成御座、恐悦之旨尤ニ候。　將又今度御暇其上御鷹御馬並品々被下之、從

右大將樣も拜領物有之、且家來之者

御目見拜領物被仰付、重疊難有宜得御意候。　國許到着付而、爲御禮以使者奉

・書紙十束並御樽肴被献之候。遂披露候處、
御前江被召出、入念候段、御喜色之御事ニ候。恐々謹言
閏五月五日

戸田山城守
忠温判
青山下野守
忠良判
牧野備前守
忠雅判
阿部伊勢守
正弘判

松平越前守殿

御札令披見候。
公方様……………………………………

…………………………

…………………………

御喜色之御事ニ候。恐々謹言

松平和泉守

乗全判

松平越前守殿

閏五月五日

在所を國許と改む

高田作之丞

是迄御在所ゟ被仰出候廉々、御國許ゟ被仰出候様御内願被爲在候處、御舊格も有之儀ニ付、向後御國許と可被成下、尤御暇ニ付、上使を以御拜領物有之節之

上意振之、是迄之通り御在所ゟ被仰出ニ而可有之旨御沙汰ニ候處、此度御歸

國御禮使者被指出ニ付、從

公邊之御取扱、御國許ゟ相成、誠以

御威光ゝ御儀、目出度御事ニ候。各可爲恐悦候。

右ニ付恐悦申上面々

松ゝ間
芦田内匠

畢る
反町源五右衛門

松井庄九郎

畢る
不快引
大道寺七右衛門

原平左衛門

不快引
福山藤右衛門

中根新左衛門

中村八大夫

松田理兵衛

山口興右衛門

白井茂兵衛

横川吉十郎
不快引　西川八左衛門
大道寺七九郎
畢る　矢島七郎右衛門
畢る　表醫師

右恐悦申上、家老中謁、用人出席
用部屋

奥醫師
畢る　近習番

右同断用人出席無之

松榮院様御登城
紀伊齊順卿薨去

去月十一日、西丸へ　松榮院君
御登城被遊候節、御傳ニて拝領物有之。紀伊殿大納言齊順卿御所勞不輕御容躰、明後
五日被仰出。御大切之義て八日ニ被仰出、別紙之通り上使被進等ニ御座候。
尤御相續之儀ハ、清水様と被仰出候儀ニ御座候段、御同朋平田芝田某々留守居

迄申越候。

以上右之儀ハ江戸表より申越

家老三人罷出、江戸表より用状見セル。

此度御在所ニ被仰出候廉々、國許ニ相成候ニ付、阿部様御そしめれ、御取扱向左之通り、

（頭書）先公國許と改めに付阿部正弘への取扱

此前御内書ニ而、越前少將と被仰出候時、御老中方のハ、余程大そうニ付、此度も、右之趣ニ而可然旨、江戸表木工より申越候。

越後縮五反
青籠入交御肴

白銀五枚
三段交御肴

白銀拾枚
三段交御肴

老中 阿部伊勢守殿

奥御右筆組頭 荒井甚之丞

奥御右筆 桑山六左衛門

右之通贈

可然旨、及差圖

國許改及百石以下半減御免等公布の日を定む

右御在所ニ被仰出候廉々、國許と相成候ニ付、恐悦並一統へ申渡儀、並百石より以下半減御免、同以上乍聊御手當、十六日ゟ取扱候段申上之。共餘色々話す。

後刻秋田八郎兵衛罷出申達候ニ付、御家老共申上候此度御在所と被仰出候御廉

々以後御國許を相成候儀ニ付明日諸向へ申渡へくと申上候へとも、御目付迄申上候者、一體御家中ニゐも、干今半減御免被仰出候と待居候所へ、明日月番呼出候へ者、何事やらとはいき申候様ニ相成候ニ付、ナンテもない事を、氣をいら〱とせる様ニ相成候ゐハ、不宜候ニ付、やはり十五日一所に半減と、御在所ニ廉々御國許と相成候申渡と、同時ゟ致度旨申ニ付、其通りと及差圖。右故十五日ニ兩方共申渡積。

彌次郎罷出、詩經申上之。

半減被仰出の文言、愚存やうやく出來、並清書もいたす。五ツ半時寢ル。

閏五月十三日

十三日晴

今朝目覺常刻、半右衛門罷出、網目申上之。昨日出來し半減御免被仰出し文言、愚存まゐ〱め出來ニ付、側用人兩人迄遣置候。

右ニ付、又々側用人罷出、此方書取ニゐ尤し旨。乍然、少々書加外記自筆ニゐ指上候。彌十五日ゟ被仰出し積。

孫八正伯一揖指控免ズ

彌次郎罷出、詩經申上之。今日ゟ、孫八並正伯兩人共指控罷在候所、今日ゟ免、直ニ出勤。

今日も稽古一切不致。五ッ半時寝ル。（稽古休）

十四日晴（閏五月十四日）

今朝目覺六ッ半時、半右衛門罷出、綱目申上。側用人罷出申達候を、先日齋藤清七病死いたし候ニ付、跡松原差太郎へ申付候段申上之。尤申上候程之事ニるを無之候得共、御側近く罷出候者故、可申上段申之。但十三日ニ申渡。

（借財掛り後任に就いて）此度、岡部左膳御役御免ニ付、御借財掛り無之ニ付、外記へ被仰付候而、あさり之様ニ候得共、只今とるた、急度御振分ルニも相成候ニ付、先此儘ニて置申度段相伺候。共通りと及差圖。

許定留返却

彌次郎罷出詩經申上之。市橋万右衛門罷出、柔術稽古、（矢野市左衛門　生田十左衛門）乘馬いたす。

（本多内藏助に御逢）本多内藏助、今日夕方府中表ゟ出府ニ付逢、養老酒一小瓶、以存遣ス。其餘話す。

五ッ半時寝ル。

十五日晴小風（閏五月十五日）

今朝目覺六ッ半時、

御本丸にて諸士の禮を受けさせらる

五ツ半時本丸へ移り、家老同無息、側用人並大廣間へ參り、諸士一統之賀禮を受る。相濟五ツ半時二寸五分。座所へ歸ル。本丸へ移前家老部屋ニおいて、高知を始、末之番外迄、月番呼出、直ニ申渡。其餘ハ番頭支配頭迄申渡。

諸　月　番

國許に政を申渡

是迄、御在所ゟ被仰出候御廉々、御國許ゟ被仰出候樣、御内願被爲在候處、御舊格爲有之儀ニ付、向後御國許ゟ可被成下、尤御暇ニ付、以上使御拜領物有之節之　上意振ハ、是迄之通り御在所ゟ被仰出ニ而可有之旨、御沙汰ニ候處、此度御歸國御禮使者被指出候ニ付、從
公邊之御取扱、御國許と相成、誠ニ以
御威光之御儀、恐悦之御事ニ候。此段申渡候樣被仰出候。右ニ付高知ヲ始番組之面々迄、於鉄炮之間恐悦之謁有之。
御本丸諸士御禮相濟、御座所へ參候上ニ而、於鉄炮之間、月番呼出之。高知方末之番外迄召呼、直ニ申渡。番組之面々へハ、其番頭或以其支配頭申聞。

下國管本 [illegible]

御勝手向之儀ハ、何ツレも承知之通り、從來之御難澁、近年ニ至候而ハ、莫大之御物入も有之、必至御指支被成方も無之、此儘ニ被成置候而ハ、彌以不容易御

時體ニ被爲運候ニ付、實ニ御心外御氣之毒ニハ思召候得共、無御據御譯柄ニ付、一昨辰年ゟ來る未年迄四ケ年之間、半減御借米御賴被成候處、御家中一統、近來打續種々難題筋御賴被成候折柄、艱難相凌、辰巳兩年之間、無滯致上納候儀ニ付、當節ニ至り、彌增困窮之次第、追々入御聽、深御心痛ニ被思召候。依之、厚御評議も有之候處、下地御手詰之御趣法、尙以御行屆ハ被成兼候得共、何分指當り御家中之難儀、此儘ニ難被成置ニ付、此度以思召、百石ゟ以下、當午年ゟ半減御免被成候。　右以上之面々江ハ、當午年、來未年、乍聊御手當被成下筈候間、彌以致儉約、精誠凌艱難御奉公相勤候樣被仰出候。　尤御手當割方之儀ハ、追る御勘定所ゟ相觸筈ニ候。

但昨巳年被仰出候、地方以上增步掛り之儀も、當年より御免被成候。

一御役料之儀ハ、一昨辰年被仰出候通り、半分御借被成候。

一百石ゟ以下半減御免被成候得共、八步御借米之儀ハ、一昨年迄之通り、御借被成候。　且又、百石並拾七人扶持ニる御役料被下置候面々ハ、半減御免不被成候事。

〆

右之通り本丸於用部屋申渡す

少々御感冒

内海桃仙

閏五月十八日

勝澤一順針治申上ル

右ニ付、澁谷權左衛門始罷出、半減御免並御手當ㇾ御禮申上之。權左衛門、源太郎番組ㇾ面々の御禮申之。相馬一九郎御小姓御免、御手當御禮申上之。平木作野右衛門申之、内藏助歸府機嫌相伺之。少々感冒ニ付、出淵傳之丞稽古延引。

彌次郎罷出、詩經申上之。

辻岡玄順呼出、脈體見セル。少々感冒ㇾ由申之。葛根湯調上、奥醫師内海桃仙も診いたす。五ッ時寝ル。

十八日曇　診番 加藤周碩 辻岡玄順 匕

目覺常例、兩人拜診、感冒ニ付、床ニをり養生いたす。玄順調劑葛根湯服藥、文武稽古不致。

評定所へ孫八出ル

八ッ時過頃、晩發ㇾ氣味有之候處、鼻衂有之、跡ニ大ニ快然、午去少々頭痛覺候ニ付、當番勝澤一順ニ針治申付ル。

評定留略　井上半大夫

寅番組評定所掛ケ衛門儀、兵國日録方小役人牧野期兵衛と申者由緒有之候處、無據

用事有之ニ付、三宿泊リ罷越度旨、願之通リ被仰付ル。其段五郎左衛門に可申聞旨、尤前後御目付共へ相屆ル樣、是又可申聞旨、家老申聞。

雨森小十郎

荒川十右衛門悴直治儀、當年十七才罷成ル。御序之節初而之御目見被仰付被下置ル樣、願書付差出ル段、

菅沼市左衛門

粕谷彥左衛門悴傳次郎、御目見願、荒川十右衛門願と同斷。

山口新右衛門儀、本多内藏助家來平野淸兵衛と申者由緒有之ル處、無據用事有之ニ付、五宿泊リ罷越度旨、願書付指出ル段、

右之趣家老へ相達ル。

但彥左衛門悴傳三郎當年拾六才

恒岡安左衛門

飯田作左衛門養子德次郎儀蒲生浦專德寺由緒有之ル所、無據用事御座ルニ付、五宿泊リ差越申度旨、先達る相願ル處、願之通リ被仰付ル。然ル所右德次郎儀、此節痛所

出來難差遣候間、爲致延引度旨願口上書差出、其段家老へ相達候所、承置候段申聞。
但モ受傳三郎可相違處、遠慮中ニて私相達候。

多ケ谷舍人

濱口忠兵衛願、山口新右衛門願と同斷

閏五月十七日

十七日晴

今朝月晝常刻、半右衛門不快ニて不罷出、綱目獨誦。
感冒順快、今朝ゟ柴桂湯、玄順調進服用。
去十日晩立六日振飛脚、阿部川ニる一日逗留、今朝到着。 東武御靜謐、松榮院樣御始、田安御機嫌よし。
目付用狀見セル。 彌次郎罷出綱目申上之。

(頭書)江戸表の事　紀伊徳川齊順逝去

紀藩ゟ之爲知大意

紀伊殿所勞被在之候處、養生不被相叶、今曉子ノ下刻被致逝去候。 右ニ付一位殿定式之忌服被請候。
閏五月八日

阿部伊勢守殿御渡候御書付寫貳通、相達候間被得其意、答之儀ハ稲生出羽守方へ

可被申聞候。　以上

閏五月八日

大目付

松平越前守殿

留守居

紀伊大納言殿逝去ニ付、今日より

公方様　右大將様定式御半減之忌服被爲請候事。

閏五月八日

袖裏

大目付へ

紀伊大納言殿逝去ニ付、

公方様　右大將様爲御伺御機嫌明九日御本丸西丸へ總出仕之事

一病氣幼少隱居之面々ハ、月番之老中和泉守宅へ使者可差越候事、

一左國在邑之面々ハ、老中和泉守江飛札可差越候事。

但在國在邑之嫡子隱居も右同斷

一普請ニ今日ゟ三日、鳴物ハ七日停止之事。

右之通り可被相觸候

閏五月八日

阿部伊勢守殿御渡候御書付寫一通相達候間、被得其意、答之儀ハ深谷遠江守方へ可被申聞候。

閏五月

松平越前守殿
留守居

大目付

袖裏大目付へ

諸家蔵板書物彫刻之節、前以學問所へ草稿差出可任差圖旨、去ル寅年相觸候處彫刻出來之上同所へ差出候向も有之由ニ候、左候而ハ改方差支候間、彫刻不致以前、草稿を以學問所へ差出候樣可致候。尤醫學館天文方江差出候分も可爲同前候。

右之趣向々へ當々可被達候

閏五月

書籍出版
許可ニ付
キ

阿部伊勢守殿御渡候御書付寫四通相達候間、被得其意、答之儀ハ稲生出羽守方へ可被申聞候。

閏五月九日

袖裏大目付へ

今ゟ樣　右大將樣

御膝中爲伺御機嫌

閏五月

十日　惣出仕

十一日　溜詰
御譜代衆
此外万石以上之面々
を以使者相伺之

十二日　高家
詰衆
御奏者番
芙容間 御役人
同斷

十三日　諸番頭
諸物頭
布衣以上御役人
同斷

十四日　高家
詰衆
御奏者番
芙容之間御役人

同斷

右之通

御本丸西丸へ可有出仕候

但使者之分ハ、月番之老中和泉守宅に可差出候。

右之通り可被相觸候

壬五月

御裏大目付へ

例年此節差上候在所之産物其外、御機嫌伺等献上物、御精進物之分ハ御忌中無構可差上候。

一例年此節指上候在所之魚類ハ、御忌明献上候様可致候。尤時節おくれ損候品ハ、進る引替不及献上候。

右之通り寄々可被相達候

壬五月

公方様　右大將様

御喪中為伺御機嫌

在府ニ万石以上

酒井若狭守

松平伊賀守

右之面々より、御菓子類又ハ御精進物、一度充可有献上候。

右之通り可被相達候

壬五月

（頭書）清水中納言齊彊紀伊相續

袖裏大目付へ

清水中納言殿御事、紀伊殿御養子御相續被仰出候得共、思召も有之ニ付、只今迄清水に被遣置候御領知、其儘清水領ら被成置、御附人御抱入之者共も、清水附と可被成置候。

右之段被仰出候間、其段向々へ可被達候。

〆

（頭書）以上是迄江戸表之事を記す

右ニ付紀藩御遠行ニ付、此表ニおいても口達書付左之通り

紀伊大納言樣、御病氣之處、御養生不被爲叶、去ル八日御逝去被遊候。依之今十七日ゟ來ル廿三日迄、鳴物高聲御停止ニ候。致懸候普請之儀も、不苦旨ニ候間、可被得其意候。以上

閏五月十七日　　御目付

各中

追る組支配有之面々も、右之趣可被申渡候。

[illegible]

今朝側用人罷出申達候ニ、鴻ノ巣勝願寺、公邊ゟ追々カンケ等御免被仰付候得共、引足不申ニ付、尚御國人別ニて、金子取上被下候様相願候得共、六ヶ敷ニ付、鳥子紙千枚寄進致筈、但千枚ニ付小判十兩斗、尤代金ニてハなし

閏五月十八日

十八日晴

日覺常刻、半右衛門罷出綱目申上之。彌次郎詩經申上之。今日ゟ髮ヲ免、感冒先追恢復。五ッ半時過寢ル。

閏五月十九日

十九日晴

今朝目覺常刻、半右衛門罷出、綱目申上之。家老罷出用狀見ル。乘馬いたす。五ッ半時過寢ル。

閏五月二十日

廿日

今朝目覺常刻、五ッ半時長谷川八十郎罷出、於稽古所銃炮空操三十稽古相手

八十郎上月藩之助

評定所へ孫八出ル。

出淵傳之丞罷出、劍術稽古（相手澤田丈右衛門 竹澤五郎左衛門）彌次郎罷出詩經申上之。

評定所

菅沼市左衞門

私御番組山口新右衞門義、本多内藏助家來平野濤兵衞と申者由緒有之候處、無據用事有之ニ付、五宿泊罷越度旨願之通り被仰付候。其段新右衞門へ可申聞旨、尤前後御目付共へ相届候樣是又可申聞旨、家老中申聞。

多ケ谷舍人

私御番組淺見忠兵衞、山口新右衞門願と同趣、願之通り申付、尤前後御目付共へ相届候樣、是又可申聞旨、家老申聞。

同　人

堤武右衞門養子五郎吉儀、當年拾八才罷成申候。御序之節初てゝ御目見被仰付被下置候樣、願書付指出、其段家老へ相達、

相馬一九郎

小姓堀速之助妹、有馬日向守殿家中膳番小納戸相勤候新名（ニイナ）與大夫と申者後妻ニ差遣申度、緣組内證申合候旨願書付差出、其段家老中へ申達ス。

前波忠兵衛

割向頭取淺井八百里悴千賀太郎儀、當年拾五才（去年拾但當）罷成申候、御序之節初而之
御目見被仰付被下置候樣願書付指出、其段家老へ申達候。

此内一人

上坂藤大夫
岩城藤左衛門
武曾權大夫

別紙之通り可申渡旨家老申聞

別紙

鷹部屋頭
善太郎

御鷹小頭申付、尤行並之通り被下。
右之通り可被申渡候

〆

閏五月二十一日

五ツ半時過寢ル

廿一日晴

今朝目覺常刻。半右衛門罷出、綱目申上之。
用番一人酒井外記罷出、帶刀へ組頭之義相伺之（内記え小様故不申付）

越藩議廳箴

其節、越藩議廳箴外記迄遣之。許定所へ掛ケ候樣申聞。
於江戸表成嶋先生へ相賴、先生之文ニる直ニ被筆申候、其文

越藩議廳箴

除爾私見、執爾公議、勿狃徇衆、勿好樹異、坦懷詳審、要適其義、一藩興替係焉、百性利病寄焉、愼旃勉旃、各盡其志、

成嶋讓撰書□□

中村政右衛門罷出、鎗術稽古（相手波々伯部八大夫）彌次郎延引。五ツ半時過寢ル。

閏五月廿二日 雄鑑

廿二日晴

今朝目覺例刻、半右衛門罷出、綱目申上。彦次郎論語、甚左衛門雄鑑申上之、几如例。輪講交際之章（講師淺井八百里）弓術稽古いたす（相手高村長作）乘馬いたす。五ツ半時過寢ル。

輪講講師淺井八百里

閏五月廿三日

廿三日晴

今朝目覺常刻、

針醫師本山春庵席違のこと

側用人罷出申達候て、御針醫師本山春庵部屋席違之儀ニ付、匕醫師並春庵遠慮伺指出申候。其譯て、佐々木悌全ハ、一體春庵方て頭ニ罷居申候。譯て、春庵以

前御針、間々不愼ゝ趣有之ニ付、役儀御免、表御醫師被仰付、又々前年奥御針醫師被仰付、再被仰付候ハ、悌全方ハ跡ニ相成候ニ付、悌(二)然春庵と可參筈ゝ處、春庵ハ歸役と相心得、一順次存居候由。右ゝ間違ニ付、右ゝ面々方伺差出候得共、伺差出ニ不及段申達。灸治いたす。

灸治

彌次郎罷出、詩經申上之。高畠甚五左衛門不快ニ付不罷出、孫八彌次郎とともに居合稽古。

木内甚兵衛

趣意ニ付所務方ゟも指加、相勤候樣申付候。

川地權内

當秋江戸詰、勝山新左衛門と致交代候樣申付候。

五ツ半時過寢ル。

閏五月廿四日

廿四日晴

今朝目覺常例、半右衛門罷出、綱目申上之。

井原源兵衛へ軍配書之事

井原源兵衛罷出、軍配當否ゝ卷申上之。

側用人罷出申達候ハ、關東妙國寺廣敷迄相願候を、

諦觀院樣御尊牌御代拜のこと

諦觀君御尊牌も被爲在候ニ付、大奥老女御發駕前、御歸城、御命日、盆、御祥月、御年
忌ゝケ所〳〵御代拜相願ひ得共、ましかし盆、御祥月斗御代拜被仰付ひ樣可致段
申上之。其通りと及差圖。

家老罷出、役替相伺之。眞坂五大夫父所左衞門死去いさすひ段、五大夫相達し。

彌次郎不致。

福井御城下御巡り

八ッ半時ゟ供揃ニる、城下廻りいさす。泉水屋敷小休。對山喜晴ヲ呼

庭口ゟ、臺所脇木戸門、座所門、下馬門當直今村五兵衞 銕門酒井與三左衞門前横、佐
野内膳前横、西ノ馬場通、奈良權大夫前横ゟ、神明前通り泉水町、夫ゟ泉水屋敷
へ參る。

泉水屋敷ゟ大井曾祢次郎横前、天王町通り三浦杢左衞門屋敷横前、右ゟ八軒
町通り、三ノ丸北御門渡邊愿十郎横前、切手門當直望月八郎右衞門 二ノ丸木戸門夫ゟ
座所へ參る。

側用人 秋田八郎兵衞

用人 相馬一九郎

側向頭取　淺井八百里
供頭　岩城藤左衛門
醫師　岡部高伯
廉役
小性頭取　目比彦之丞
近習番佐　野村拾大夫
小姓　笹川熊次郎
岡部半兵衛
近習番供　勝木十藏
高田新七郎
坂井又三郎

閏五月廿五日

五ツ半時寢ル。

廿五日晴

（頭書）是ゟ評定事を書付

今朝目覺六ッ半時、半右衛門罷出、綱目申上之。五ッ半時長谷川八十郎罷出、銕炮空操稽古。
許定所へ孫八出る。彌次郎罷出詩經申上之。
出淵傳之丞罷出、劍術稽古相手高久官大夫榊原仁右衛門乗馬いたす。

許定所

齋藤數馬差加
平瀬長三郎

親久作儀、年寄候ニ付、休息被仰付、家督拾七石四人扶持無相違被下置、無役留守番組被入候。右之趣罷歸、親にも可申聞旨、家老中申聞。

名代 飯田作左衛門不快
恒岡安左衛門差加
本多平次郎

養父武兵衛儀、病身ニ付、内願之通休息被仰付、家督拾五人扶持無相違被下置、無役御留守番組へ被入候。右之趣罷歸、養父にも可申聞旨、家老中申聞。

不快
飯田作左衛門

留守番組高嶋仲右衛門儀、役儀御免被成大御番へ被入候。其段可申渡旨、家老中申聞。

名代
恒岡安左衛門

私共出精相勤候ニ付、銀三枚ツヽ年々被下置候旨、家老中申聞。

西尾源太左衛門差加
福島忠右衛門
小堀傳右衛門

御預所御代官役本多武兵衛跡被仰付候旨、家老中申聞。

秋田三五左衛門差加
多部三左衛門

御普請奉行平瀬久作跡被仰付候旨、家老中申聞。

土屋八左衛門

西尾源太左衛門差加
丹羽十右衛門

御代官役多部三左衛門跡被仰付候旨、家老中申聞。

櫻井定右衛門

掃除奉行丹羽十左衛門跡被仰付、御留守番組へ被入候旨家老中申聞。

武澤長左衛門

番改役櫻井定右衛門跡被仰付候旨、家老中申聞。

吉池角左衛門

花畑繪奉行高島仲右衛門跡被仰付候旨、家老中申聞。

小木三郎兵衛

留守武具奉行吉池角左衛門跡被仰付、御留守番組へ被入候旨家老中申聞。

雨森小十郎

本多武兵衛儀休息被仰付候處、年來相勤候ニ付、御目六金三百疋被下置候。其段申渡可取扱旨、家老中申聞。

相馬一九郎

小姓堀達之助妹義、有馬日向守殿家中新名與大夫と申者後妻ニ指遣度旨、願之通り
被仰付候。其段達之助へ可申聞旨、家老中申聞。

別紙之通り夫々可取扱旨、御家老中被申聞候

別紙

雨森小十郎

澁谷權左衛門家來　九八
雨森小十郎家來　與八
永見志馬家來　嘉藏
中根靫負家來　岩井金五郎　又一助
菅沼市左衛門家來　源助
酒井彦六家來　丈大夫

〔註〕小十郎當一作儀右衛門

松浦新吉

留吉

万蔵

笹治右平太家來
二兵衛

駒蔵

牧野幹吾家來
松助

井戸治兵衛長屋借
次助

不宜趣相聞候ニ付、押込申付候

田邊五大夫組
林久右衛門

山本源左衛門組
山形良吉

小栗助七組
坪川文七

押込申付置候處指免

高屋伊喜右衛門組
松浦新吉

銀三拾匁

右両親へ孝心、姉へも厚世話いたし奇特之趣相聞候ニ付、爲褒美遣ス

澁谷權左衛門

書院番組武田喜内儀、當年四拾歳罷成候。　實子無之ニ付、養育之甥百助儀、當年二拾四歳罷成候。　此者養子ニ致度旨、右百助儀ハ、先年御國追放被仰付候兄又七實子ニ御座候處、其節幼年ニ付喜内方ニ養育仕置候。　然ニ所、拾五才ニ罷成候以前、右又七御咎御免被成候ニ付、右之通り相願候旨、願書付口上書差出、其段家老中ヘ申達ス。

北川市郎

遠野右仲弟他五郎儀、當年拾九才罷成候。　御序之節、初而之御目見被仰付被下置候樣、願書付指出、其段家老中ヘ申達ス。

中村久藏

林惣兵衛次男外吉御目見願、右同斷、但外吉拾八才

五ツ半時過寢ル。

閏五月廿六日

廿六日晴

今朝目覺常刻、半右衛門罷出、綱目申上之。

五ツ半時居間ヘ移り、帯刀組頭之申渡。　其節之次第左之通り

[illegible]

家老兩人出席、側用人同斷、用番家老酒井外記三疊目ヘ出ル。　於此所帯刀罷

頭申付の儀

出、ソレへと二度申進ル所ニる、

猶　帯　刀

其方儀組頭申付ル

御受申上、外記申上之。帯刀退去。外記復座。又々帯刀罷出、長鮑を遣ス。

此節目出タイと申之。夫ニる事濟事此方始繼上下本人麻上下

長谷川八十郎の故老

側用人罷出申達ル八、長谷川八十郎故老相手被仰付ル樣願名元左ミ通

川地又兵衞
大谷儀左衞門
服部三郎兵衞
榎並左次右衞門
松尾傳藏
加藤所左衞門

小栗次右衞門可差出ミ所、評定日稽古ニ付不差出、村田龍之進乞、是又御側勤役不指出旨申達。

彌次郎罷出、詩經申上之。政右衞門罷出、鎗術稽古相手松尾傳藏　今朝目付用有

之。五ッ半時過寢ル。

閏五月廿七日　運正寺に御參詣

廿七日晴

今朝目覺常刻、五ッ半時ゟ供揃ニて運正寺諦觀君御靈前へ拜詣、歸り四ッ時五歩廻り。

歸りゟ折

使番當番　中村久藏

大番頭同斷　中川主膳

下馬門同斷　伊東六郎兵衞

觸頭供　本多五郎右衞門

使番同斷　石川彌五大夫

徒頭　青木與一右衞門

時宜役　澤木八左衞門

大番
堀　權之助
青木與一郎
山崎七郎右衛門
鈴木又三郎

書物小道具蟲干

家老罷出、醫師轉役之儀相伺之。
未申櫓書物虫干一見、並小道具虫干見ル。
彌次郎罷出綱目申上之。輪講不致。弓術稽古相手堀江九郎左衛門五ッ半時過寢ル。

（頭書）
閏五月廿七日

不快　多ケ谷舍人
名代　中川主膳

飯田作左衛門儀今病死候ニ付毛受傳三郎遠慮中各月番ニ而御留守居役假兼帯相勤候様被仰付候

閏五月廿八日

廿八日晴
今朝目覺六ッ半時、半右衛門罷出綱目申上之。

側用人罷出申達候ハ、飯田作左衛門昨日病死いさし候ニ付、死後書付指出候得共、今朝見セ候段申上之。

壽餅の獻上

壽餅宮塚甚左衛門祖父知了院當年百才（實ハ九十六歳）ニ罷成候ニ付、獻上いさす。

信受院樣より暑中御見舞

暑中御見舞として、從松榮院樣用人平木作ノ右衛門を以被仰進、（此方此節膳上下おたすゝ）右同斷、高知を始諸物頭末ノ番外迄機嫌相伺之候段、用人申達。

匙醫師奧鍼醫師兼帶申付　勝澤一順

奧醫師申付　細井玄養

奧鍼醫師雇申付　玄澤養子　榎並孝齊

右ニ趣不殘於家老部屋申渡之

山甲武器虫干上覽

山甲武器虫干、並書物虫干、小道具方虫干を見ル。居合稽古いさす。

夜四ッ半時頃、赤坂筋へ相當り火事有之、能々承候へた、花堂村ニ由、十間斗燒候と申事之。九ッ半時寢ル。

（裏表紙ニ識曰）

一我等死後不破拾右此日記遺子孫　慶永

在國

政暇日記

自弘化三年丙午閏五月廿九日
至同年六月廿九日

十五代目
越前守慶永述

在國

政暇日記

自弘化三年丙午閏五月廿九日
至同年六月廿九日

十五代目
越前守慶永（花押）

「印」

弘化三年閏五月廿九日

閏五月廿九日雨

十五代目
越前守源慶永印

初て鐵炮玉込ニて御覧ニ

今朝目覺六ッ半時、半右衛門罷出、網目申上之。今日ゟ於矢場、鉄炮初て玉込ニる放之。長谷川八十郎罷出、相手川地又兵衛。

慶永空放シ　三
紙　玉　三
本　玉　七

熊谷小兵衛

今日評定日ニ付、孫八罷出る。「(頭書)熊谷小兵衛罷出、暑中機嫌拜伺之。直ニ面會。」

腰物方虫干を見る。

去ル廿二日晩立通飛脚、道中常振今朝到著、江戸替事なし。

輪講講師慶永公

輪講いゝす講師慶永　出淵傳之丞罷出、劔術稽古相手竹澤五郎右衛門澤田丈右衛門

評定所

渡邊左右衛門差加
加藤芳太郎

翌又一郎家督首尾、無相違被下置、大番組へ入ル旨、家老中申聞。

澁谷權左衛門

書院番組武田喜内儀、實子無之ニ付、養育之甥百助養子ニ致度旨、願ゝ通り被仰付候。
其段喜内へ可申聞旨、家老中申聞。

大宮万之丞

番組高島仲右衛門儀、遠慮伺ゝ上指扣被仰付置候處、御免被成候間、今日ゟ致出勤候
樣可申渡旨、家老中申聞。

大宮万之丞

林作助次男小三郎儀、當年拾六歳罷成候、毛利政右衛門養子ニ致度旨申聞候ニ付、指
遣申度、右政右衛門儀由緒て無之候得共、内談致候旨、願書付口上書差出、其段家老中
申達候。

齋藤數馬

毛利政右衛門儀、當年四拾四歳罷成候、實子無之ニ付、林作助次男小三郎儀、當年拾六
歳罷成候、此者養子ニ致度旨、右作助儀て、由緒無之候得共、親類共ゝ内似合敷者無之
ニ付、内證致候旨、願書付口上書指出、其段家老中へ相達候。

井上半大夫

新番組能勢小三郎儀、痛所有之ニ付、湯治可致旨、加藤周防指圖仕ル。依之白山へ三廻り入湯致度旨、願書付指出、其段家老中へ相達ル。

中村久藏

岩城藤左衛門妻並忰源太郎、白山に三廻り入湯致度旨、願有同斷

但岡部高伯指圖

(頭書)是方廿二日晩立通飛脚今日到着記

江戸表

右大將樣御忌、今日より被爲解ル樣、

公方樣ゟ被仰進ルニ付、先達ゟ相觸ル　右大將樣御膳中、御機嫌伺之義、且木獻上等不仕分て、最早不及其儀ル。

一右ニ付、閏後十五日溜詰高家鴈ノ間詰御奏者番布衣以上之御役人、西丸へ出仕可有ル。

右之通り向々へ可被相觸ル

閏五月十三日

閏十五日御表　出御無之、月次出仕之面々四時揃之事

一西丸にも例月之通り、出仕有之ル事

但
右大將樣御忌被爲解候得共、當日之御祝儀ハ不申上候事
壬五月十四日
御忌明ニ付、明後十八日溜詰高家鴈之間詰御奏者番布衣以上之御役人、可有登城候。
右之通り可被相觸候
閏五月十六日

恭眞院殿との通路のこと

一△淸水館附戸田三郎左衞門ゟ左之通り申來
以手紙致啓上候。然ハ中納言殿紀州御養子御相續被仰出候ニ付、御跡之義、淸水附与被仰出候間、恭眞院殿より越前守樣江、御通路之義被伺候處、唯今迄之通りニ可被心得旨、阿部伊勢守殿御書取を以被仰渡候。此段可得御意如斯御座候。以上
閏五月十三日

一淸水中納言殿紀州御養子御相續被仰出候ニ付、恭眞院殿より此あとへ通路之儀ニ付、別紙之通り戸田三郎左衞門ゟ申來候ニ付、御家ゟも届等被指出候義ニも可有之哉ニ付、留守居共申談、御用番阿部伊勢守殿御勝手中村八大夫

罷出、公用人申談候處、御指出之方可然旨申聞候ニ付、去ル十六日、別紙之通り伺書差出候處、同日夕、御同所方御呼出ニ付、留守居助　田邊周吉罷出候處、御勝手ニ而指出置候伺書へ、御書取を以御指圖有之。

清水中納言樣紀州御家御養子御相續被　仰出、御跡之義、清水附と被仰出候ニ付、恭匯院樣方越前守へ御通路之儀、御伺被成候處、唯今迄之通与御指圖相濟候由ニ御座候。右ニ付、越前守方も、通路之儀是迄之通り相心得候ニ付而て、御届等指出候筋ニも可有御座哉、此段奉伺候。　以上

閏五月十六日

松平越前守内

中村八大夫

御書取

別段届書指出候ニ不及候事

紀伊家へノ御取扱

清水中納言樣紀州家御養子御相續被仰出候ニ付、御取扱之儀問合候處、左之通り御取扱有之候樣致度旨、返報來ル。

被引移候以前爲御餞別

中納言殿

道具類　一品
鮮鯛　一折
御使者
被引移候當日
御見立
御　歡
御簾中へも
御歡一ト通り　御使者
恭眞院殿へ
御歡一ト通り　御使者
右之通り
但被指出候道具、御支度御頼ニも相成候ハヽ、御出來御道具之内ニて、代金六七兩位之處ニる取斗候樣可致候。左候ハヽ、表向御掛合御座候樣致度、此段御心得迄得御意置候。

一砂村抱屋敷普請皆出來ニ付、去ル十五日別紙之通り届書、屋敷改大岡靭負へ

一差出

齋藤嘉兵衛様一手ニ御支配、西葛西領砂村新田ニ内惣地面貳千六百三拾八坪、圍四拾貳間、家百六拾五坪相濟、増家坪五百坪相濟候。御役人足賃銀附抱屋敷同所地續平井新田ニ内、惣地面千七百六拾四坪、町家作御免地、同所地續砂村新田ニ内貳千三百九拾二坪ニ抱地共一圓松平越前守致所持候處、右抱屋敷内家作ニ儀當三月中願濟ニ處、此節皆出來仕候ニ付、此段御届申上候。

以上

閏五月

松平越前守家來
大道寺　七九郎

一公方様ゟ被仰進候ニ付、
松榮院様去ル十三日ゟ御忌被爲解候旨、御附御用人中申聞。

一爲御精進揚　此方ゟ麦香一折進上、使用人勤

金奉行金子六右衛門、閏五月十八日着。

書田内匠儀、用相濟、閏五月十九日御奉書持參出立。

靈岸島中屋敷通用門出來

紀州殿御葬送

靈岸島中屋敷通用門出來之旨、目付共相違候ニ付、其段家老へ申達、閏五月廿日ゟ開門ニ相成候。紀州様ゟ左之通申來

以手紙令啓達候。大納言殿法號顯龍院殿と相唱、於國許葬送、來ル二十日卯刻發棺、東海道美濃路通被相越候積御座候。此段可得御意如斯御座候。以上

閏五月十二日

閏五月十七日、佐野内膳別紙之通申付候。

佐野内膳に申渡覺

其方儀不辨御時節柄、心得違之趣相聞、不調法之事ニ候。仍之、遠慮被仰付、急度相愼可罷在候。以上

閏五月十七日

高田作之丞

佐野内膳遠慮中、御自分儀御書院番頭、大御番頭假、御徒御馬支配假、並大奥御用を始、御側御用人取扱候御用向、取扱被仰付候。

閏五月十七日

町田左エ馬

於御國表、御時節柄心得違之趣相聞候。依之御叱被成候。

以上用人共用狀之内

口達

松榮院様御忌掛りニ付、來ル十七日迄鳴物高聲可致遠慮旨、先達而相觸置候得共、昨十三日御忌解被　仰出候ニ付、明十五日ゟ不及遠慮旨ニ候間、可被得其意候。以上

閏五月十四日

御目付

追而組支配有之面々ハ、右之趣可被申渡候

以内狀申入候。然者山名次郎八儀、支度次第御國表へ罷歸、尤道中指扣同様之心得ニ而、憚罷越候被仰付候ニ付、爲遠見、組之者兩人道中差添、立歸り可指遣哉と御家老中江相伺候處、其通り取扱旨被申聞候ニ付、其段申付之。尚又心得之儀、委細申含、去ル十四日致出立候。其節品川驛迄外ニ組之者兩人見屆指出候處、路次中何之相替候儀も無之旨、罷歸申聞候。右各様爲御心得申入候。以上

閏五月廿二日

中根新左衛門

五人様

別紙

去ル十七日、猶木工方被申聞候ハ、拙者實甥佐野内膳、今日御告被仰付恐入奉存候。依之、致遠慮罷在度旨、口上書を以宜取扱旨被申聞候ニ付、其段内膳遠慮中、御側御用人取扱候御用向取扱高田作之丞に被仰付候ニ付、同人に相伺候處其表御側御用人方、作之丞迄被仰出申越候趣ニ而、即刻不及其儀旨申聞候ニ付、其旨木工方へ相達候。

以上

月日　　　　壹人

五人様

以上目付方用狀之内

青松院様の御内書

一江戸表ゟ井方ゟ、此方迄以内書申越候趣、間違有之候るを不宜ニ付、此文ハまゝ張付置物之。

(青松院様の御内書)

橋府様　尾藩様ニも相替らす御〆もあらせ給ハやと仰戴　尾州様御事、明後廿三日被爲入候御積りニ御座候。橋府様御事先月十八日、御まろび被遊、

少〻御足御きりむき被遊候よしなり、御薬上り、大ニ御痛ミも御よろしくと
去る五日ニ、

右衛門督様御相ぞく御祝ある〻事ニ候、其せつ被爲　入、明六日ニハ濱町御屋敷へ、御釣ニ被爲入候との御事ニて例よりも少し御早〻ニ御歸殿被遊、翌六日濱町へ被爲入候所、御歩行も多く出被遊候ゆへか、また〳〵御痛ミ被遊、其上少し御水氣の氣味もあらせ給候由ニ候。　八日ニハ紀州様被　仰出まて、御機嫌御伺、御登城被遊、九日御登城御斷ニ而、全くの御用心ニ候。　先御稽古事も御休ミ被遊候。　尤少しも御寢なそは、不被遊、御らくニ被遊との事ニ候。　十五日ニも御登城御斷ニて不被遊候。　志かる處、十八日より少〻御風邪の御氣味と伺い候。　十九日ゟ御熱氣はよく、御せきも御數多ニ出、右ゆへか御むな氣あらせ給へ、廿日ニ至り、御どう氣もあらせ給へ、御二度目御上りあなく、一同御たんし〳〵申上候と申り〳〵。　ま事ま、こなさニ而おところき〳〵り〳〵。　藥員院あやまく不快ニて出不申、龍仙院壽昌院道伯了允もうかがゐり〳〵所いつれも同様御案事申上候おもむきニ御坐候。　右ニ付御匕の所へ還り不申、道伯御調合致上候由。　さしつめ、壽昌院と申所なから、同人

も藥眞院御七の事ゆへ、承知致不申候所、
公方樣ニも御聞ニ入、事の外〳〵御案事被遊、本鄉丹後守ゟ御さゝにて、壽昌院へ御藥上候やう被　仰付、長春初安心致、こなさニゐもうゐゝゐ安心致らせ。昨夜ゟ今日ハ、いろ〳〵あらせられ候やと、當分ハ御案事申上候所、先々御同ゐんの內、昨日も今日も元瑞伺ニ參り候へく候。今日ハまつ少々ハ御熱氣も御さめ、御惣體御ゆるみ被遊候と申らせ。夕ろさ元修も出申上らせ。今日ハ御氣先も御よろしく、御惣體御よろしく、元修も今日ハ下り候とや申上候ひらせ。
右の通りの御屋うさいニて
御所樣ニも、さそ〳〵御あんしあらせらる事と存上候。今日の御通りまて追〳〵御つゝき被遊候へハ、御宜と存上候。とうそ御きよ〳〵御全快のみいのり〳〵らせ。又〳〵其內可申上候。
右ニ付宗像神社ニゐ、御病氣御平愈之御祈禱申付ル。糟谷清次郎呼出、側用人申達候積。
陳

公儀御用番

右之祈禱、俄ニ心付候故、當番鈴木主税迄申之。夫ゟ側用人江申通置、八百里輪講ニて詰合居、主税相咄し候所、八百里申候ハ、凡而御心痛之餘ゟ御祈禱被遊、至極御尤ニ御座候得共、御祈禱ヲ斗御事寄セ、祈禱まさあら、是ていはといふ思召ニてハ不宜、御祈禱ハ御祈禱、何分御誠意之御儀御肝要と奉存候段、以主税申上之。

五ツ半時過寢ル。

（頭書）

閏五月十日ゟ廿九日迄正米下相場平均

上米壹俵	七十四匁三分二厘
中米壹俵	七十二匁　五厘
下米壹俵	六十九匁六分九厘

六月朔日ゟ六日迄右同斷

上米壹―	七十匁三分二厘

公儀六月御用番

老中　青山下野守

西丸老中　松平和泉守

御當家月番

若年寄　遠藤但馬守
西丸若年寄　酒井右京亮
寺社奉行　脇坂淡路守
御留守居　駒木根大内記
町奉行　鍋島内匠頭
御勘定奉行御勝手方　石河土佐守
同断公事方　牧野大和守
御目付　松平式部少輔
同断　戸田能登守

月番

中川主膳
菅沼市左衛門
荒川十右衛門
酒井彦六

稲葉式部
筏治右平太
大道寺芳三郎
永見隼人
江口源太郎
岡田金左衛門
井上半大夫
山本源左衛門
田邊五大夫
大谷儀左衛門
伊東六郎兵衛
大藤治兵衛
高江友右衛門
生駒五左衛門
本多彌六

雨森作助
青木與一右衛門
用番 狛帯刀
側用人月番 秋田八郎兵衛

六月朔日

朔日雨

今朝目覺六ッ半時。
五ッ半時供揃ニる、本丸へ移り、月次ゝ各禮請ル。末ゝ番外禮ヲ受け、御座ゝ間へ歸り掛、銕炮へ着座、堀正法目見申付く、次第荒增左ゝ通り、

堀正法に謁を賜ふ

宇治茶師 堀正法

右献上物前ニる目見申付、用人堀正法と披露、於此久シウテト申之、取合相濟退去。
但献上物茶二壺茶銘若松
跡ニて天方孫八へ承ルへと、先刻堀正法献上ゝ茶壺と、よイ品と申事。

（頭注）堀正法殺高道具献上度旨以王付紅塚口上書指出

前波忠兵衛を召す

八月二日

熊谷小兵衛小宮山周藏

淨得寺花見の件に付山本源左衛門の意見

正法申候者、私も勝手向必至困窮ニ而、持傳へし壺抔も、子々孫々ニ至候而者、質入ヵ或者賣拂ィ候様ニも相成候而者、心躰不相濟ニ付、御家様杯へ献上いたし置候へ者、跡々ニ相成候而も、拝見も出來候と申之。依而壺二ツ献上し由之。

・茶壺　黄西湖　銘壽老雲龍ミ手

腰物方虫干見ル。

廣敷用人前波忠兵衛、當年未た染々不逢ニ付、以存召呼話いたし、菓子遣す。

今日用多ニ付、夕方文武不致。五ツ半時過寝ル。

二日雨

今朝目覺六ツ半時。

熊谷小兵衛、小宮山周藏、機嫌伺罷出候ニ付逢、尤膳中之。

四ツ半時目付山本源左衛門罷出、評定留を見セル。終而申聞候ハ、毛受傳三郎し儀ニ付申上候譯者、先達而御咎被仰付候節、恒岡安左衛門申渡、太田三郎兵衛檢證ニ罷越候處、安左衛門申渡し折、當人罷出申候者、此御用書ミ趣會得不仕、御時節柄不畔と申所ニ御座候。内ニ而猥ヶ間敷儀有之候ハヽ、左も御座あるへ

くㇾ得共、淨得寺義を制外ㇳ土地、參りㇾと申ㇾて、御時節柄不辨と申所ニて當り不申ㇾと存ㇾ。安左衞門、右ㇳ席ニてかゝる申分等有之ㇾるを不宜ㇾニ付、御請可被成と申て、三郞兵衞も罷出居、正銘無疑、氣ㇳ毒ㇳ事ニハ候得共、無是非隱しㇾ儀も不出來、右故御用番へも、右ㇳ通り申達ㇾ故、何とか御取扱可有御座、御筋合と存ㇾ段申上之。

例ㇳ通り前田彥次郞明石甚左衞門罷出講談いさす。

天梁院樣御忌日ニ付、御代拜歸り酒井彥六逢フ。

今日飛脚ニ付文武延引。

　麻手拭壹筋ッヽ

　扇子壹對ッヽ

　　　　　　　　　六　大　夫

　　　　　　　　　小姓拾貳人

　　　　　　　　　同　介貳人

例ㇳ通り著中遣之手自

今日飛脚差立ㇾニ付、一位樣　民部卿樣　右衞門督樣　尾張宰相樣へ著中

暑中御見舞を出す

御見舞書状さし出ス。辻井へも同新。

右ニ付

一位様へ　素麵　貳百五十把

松榮院様へ　同断　五百把

龍邸謹姫殿　同断　貳百把

橋府慶壽君　同断　三百把

慶頼君　同断　貳百五十把

(両書)
尾張慶臧君　素麵　三百把

辻井へ　百五十把

水戸齊昭公に物を贈る

一ッ橋民部卿様此節御容躰御入被成候ニ付、別段之以存、與廻りニて呈上。

紅白薄雪

肴料

今庄葛粉

右直書ニて巣邸黄門齊昭卿へ呈上。

一昨廿九日飛脚着し處、民部卿樣御不例し由、甚御案事申上ಒこ付、以寸心不取敢粕谷淸次郎へ側用人を以申付、一昨夕ゟ今日夕迄、於庭內宗像宮尊前、御平愈し御祈禱內々執行申付、札守小サク致し爲差出候を、奧ゟ江戸表年寄へ廻し、一ッ橋御年寄へ、菓子一所こ進呈こる宜ಒ得共、夫こるて表向一通りし存こ相成、誠意通達難致事有之こ付、右札守ハ歌嶋ゟ、直こ一ッ橋谷岡迄、文を以申遣す筈。分註、谷岡て、民部卿樣御幼年ゟ相勤、歌嶋抔懇意こ付、如斯申付、

右こ付上下著用。

宗像宮へ拜禮、尙又御平癒し文相願之。

(頭書)今日ゟ岡部左膳、毛受傳三郎遠慮被仰付置ಒ所御免被成ಒ間、左樣可被相心得ಒ。

三日曇

今朝目寢六ッ半時、半右衛門罷出綱目申上之。

井原源兵衛罷出、講談いさす。

家老罷出用有之、

山本源左衛門目付罷出用有之。

芦田内匠齎す老中の奉書を進覽す

書院虫干見ル

旅服のまゝ
芦田内匠

九ツ半時頃用人罷出、唯今到着し旨申上之。内匠持參之老中方御奉書入拜覽。直ニ袴着用、鉄炮し間へ著座し所ニ而、用人嶋田清左衛門罷出、側用人秋田八郎兵衛罷出、清左衛門と左右ニ罷出居、内匠罷出居ル所ニて、清左衛門御歸國御禮使者歸り芦田内匠と披露、其節内匠直ニ申上、

御威光ヲ持マシテ、江戸表ニ置マシテ、御使者無滞相勤マシテ、難有奉存マス。

公方様右大將様御目見拜領物被仰付、冥加至極、難有仕合ニ奉存マス。

松榮院様益御機嫌能被遊御座、

田安様ニおきマシテ、一位様右衛門督様御方々様益御機嫌能被成御座、

恐悦奉存マス。

と申上之。於此（暑サミ節ヶ候）と申之。側用人取合ニ而退去。

今日用多ニ付、彌次郎延引。甚五左衛門罷出、居合いさす（相手本多五郎衛門 高須吉八）

遺補、

須崎三郎右衛門卒去

須崎三郎右衛門不快之所、今日病死いたし候旨、親類共ゟ死後書付指出、入一見。
五ッ半時過寝ル。

六月四日

四日晴
今朝目覚六ッ半時、半右衛門罷出綱目申上之。
五ッ半時於鉄炮之間、左之通り直ニ申渡
留守居役飯田作左衛門跡申付　中川主膳
大番頭中川主膳跡申付　中根靭負
家老取合相済退去。席之儀を一人上ケ、雨森小十郎次申付候。
用多ニ付、彌次郎延引。山里虫干見ル。腰物方同様。
八ッ半時高橋万右衛門罷出、柔術稽古いたす（相手山本新助・片山義七）乗馬いたす。五ッ半時過寝ル。

六月五日

五日晴
今朝目覚常刻、半右衛門罷出、綱目申上之。長谷川八十郎罷出、鉄炮稽古（相手服部三郎兵衛）

評定所

評定所へ八郎兵衛出る

評定所

大宮万之丞

林作助次男小三郎儀、毛利政右衛門養子ニ指遣度旨、願之通り被仰付候。其段作助へ可申聞旨、家老中聞。

齊藤數馬

毛利政右衛門儀、實子無之ニ付、林作助次男小三郎養子ニ致度旨、願之通り被仰付候。其段政右衛門へ可申聞旨、家老中申聞。

山名次郎八并養子小太郎儀、別紙書付を以申付候。何も退出後、目付共申談可取扱旨、右之趣家老申聞。

書付

山名次郎八
同　小太郎
に申渡覺

其方儀、昨年於江戸表、御手當乗頭相勤候始末不參屆、既ニ從公邊御咎被仰付候儀、從て心得方不宜趣相聞不調法之事ニ候。依之、休息之上遠慮被仰付候。養子小太郎へ家督百三拾石被下置、大御番組へ被入、遠慮被仰付候。父子共急度相慎可罷在候。以上

六月三日

毛受傳三郎儀別紙
御書付を以被仰付候。何も退出後、御目付共申談可取扱旨、家老中申聞。　中川主膳
御書付
毛受傳三郎に申渡覺
其方儀、先達る
御書付を以被仰付候節、不束ㇾ趣有之ニ付、御役御免御叱被成候。以上
六月五日
新番組能勢小之助儀、痛所有之ニ付、白山へ三廻り入湯致度旨、願ㇾ通被仰付候。尤前後目付共へ相届候様、是又可申聞旨家老中申聞。　井上半大夫
岡田金左衛門
別紙之通被仰付候。其段可取扱旨家老中申聞。
別紙
小役人格
料理方
七郎兵衛悴
村井新吉

追放

先達るも御咎被仰付候處、亦復於江戸表不埒至極之趣相聞候ニ付、御國追放被仰付候。且又七郎兵衛義、兼る取締り方不參届候趣、相聞候ニ付、押込、

京都屋敷預り
森庄太郎親
金藏

扶持方取揚
蟄居

不届至極之趣相聞候ニ付、庄太郎後見被指免、御扶持方取揚、蟄居有之通り可被申渡候

（高間文四郎
本多彌六）

別紙之通り可申渡旨家老中申聞

別紙

高間文四郎支配下
印田村
清右衛門

閉蟄中、昨年於江戸表、御手當爲御人數罷越候節、不埒之始末、既ニ從公邊御咎被仰付、不届至極ニ付、御城下並居村五里四方追放。

本田彌六支配下

宮地村　孫市

同　與四郎

上筋生田村　磯吉

宮地村　金助

花谷村　甚藏

右同斷ニ付、御城下並居村七里四方追放。

右同斷ニ付、御城下並居村五里四方追放。

右之通り可被申渡候

中村久藏

岩城藤左衛門妻並悴源太郎儀、痛所有之ニ付、白山へ三廻り入湯爲致度旨、願之通被
仰付候。尤前後御目付共へ相屆候様、是又可申聞旨、家老中申聞、

澁谷權左衛門

書院番組武田善内養子百助儀、當年二拾四歳罷成候、御序之節初而之御目見被仰付被下置候様、願書付指出、其段家老中へ申達候。

菅沼市左衛門

佐久士市兵衛妹義、三崎宗庵後妻ニ指遣申度、縁組内證申合候旨、願書付差出、其段家老中へ申達。

多ヶ谷舎人

西尾傳兵衛儀、三田村長門与申者由緒有之候處、無據用事御座候ニ付、五宿泊り罷越度旨、願書付差出、其段家老中へ申達。

半井元沖

奥醫師三崎宗庵儀、妻女無御座候ニ付、佐久士市兵衛妹後妻ニ致度旨、先妻儀ハ辻周永頼妹ニ御座候處、先達而病死仕候旨、願口上書指出、其段家老中へ申達。

〆

孫八中暑ニ而、今日ゟ引ヶ、夜差も有之候

武具腰物小道具方虫干見る。　書物同様。

彌次郎罷出、詩經申上之。　出淵傳之丞罷出、劔術稽古（相手榊原仁右衛門 高久官大夫）　五ツ半時過寢ル。

六月六日

六日　雷晴

今朝目覺六ツ半時、五ツ半時灸治いたす。

○八郎兵衛罷出申達候ハ、昨日毛受傳三郎、昨日御咎ニ付、恐入遠慮伺差出候所、遠慮不及差控罷在候樣申渡候段、家老へ申上候樣、○申聞。

儀右衛門罷出、評定留見セル。

彌次郎罷出詩經申上之。　中村政右衛門罷出、鎗稽古いたす（相手中山太郎左衛門）　五ツ半時過寢ル。

角違札相場引上げ

今日ゟ角違印札相場、三匁引揚候事

　但一兩ニ付九十匁ニ相成候

六月七日

七日　晴

今朝目覺六ツ半時、半右衛門罷出、綱目申上之。

秋田八郎兵衛罷出申達候ハ、御徒伴庄五郎死後書付見セル、取次青木與一右衛門。

御家譜出こと

六月八日

心月寺門前火あり

腰物武具小道具虫干見る。

會講不致ニ付、彌次郎罷出詩經申上之。弓術稽古。乗馬同様。

今朝家譜之義ニ付、權左衛門、作野右衛門罷出、人拂ニ而申談。五ツ半時過寢ル。

八日晴

今曉八ツ半時前、心月寺門前出火、運正寺之鐘聞へ候ニ付、用番帯刀並側用人出勤いたし候。運正寺も近所之事故、目覺申上、主税直ニ申聞。

目覺常刻、半右衛門罷出、綱目申上之。

腰物方武具方小道具方虫干見ル。

八郎兵衛罷出申達候儀、左ニ記之

澁谷權左衛門

松平源太郎儀、忌中ニ付、右引込中二番之御書院番頭假、御徒假支配可被

仰付候。

右者松平源太郎母病死いたし候ニ付、源太郎義者、定式之通り忌服受申候事。

右故權左衛門如申付候也。

彌太郎罷出、詩經申上之。居合いたす（甚左衛門不快不罷出）

五ツ半時過寢ル。

（頭書）

畑方町
灰屋
善右衛門孀
みつ申候

板葺家

表口三間裏行四間三尺

今八日曉八ツ時頃、私家出火之趣、御吟味被遊候ニ付、奉申上候。昨七日暮時前、圍爐裏之灰を桶ニとり、同所側ニ差置候所、右灰ニ火氣御座候か、壁ニ移家根裏ニ燃上り候ニ付、打驚表へいて、火事と呼候所、近所ゟ大勢駈付、相禦候得共、手堪ニ及不申、右體追々類燒等も出來仕、申譯無御座候。兼て火之元之義ハ、嚴重被仰出候も御座候所、不調法至極奉恐入候。尙又外に心當りも無之哉再應御尋被遊候得共、右申上候通り、少しも相違無御座候。尤怪我人等も御座なく候。以上

六月

今朝燒家數　畑方丁十軒内一軒火元
心月寺門前五軒
〆拾五軒

九日晴

今朝目覺六ツ半時、半右衛門罷出、綱目申上之。當月二日晩立通飛脚、今日到着、

火事の原因

六月九日

江戸靜謐之。

腰物方小道具方虫干見ル。

方右衛門罷出柔術稽古 相手 菅沼鐵五郎 高松仙右衛門

江戸表一事

是ゟ江戸表之事を左記之

暑中ニ付、六月二日御内證ゟ被献物之御使室田相勤。

右御献上之節、御老女中初例之通り、同人一所ニ持參被相達。

公方様

右大將様　江

熟瓜一籠ツヽ

御簾中様江

素麵一箱

一別紙之人々江、暑中爲御見舞、定例之通り被遣。使者留守居相勤。其外暑中ニ付、被遣物之義例之通り取斗ル。

[illegible]

老中
阿部伊勢守殿

（○同斷五反 △同斷）

若年寄
本庄安藝守殿

清水中納言樣、紀州家へ御養子御相續被仰出候ニ付、御取扱向先便申達候通り、御道具並鮮鯛共御賴取斗申候。且又、被進日限御使者柄等之義、及問合候處、戶田三郎左衛門ゟ、別紙之通り返報來。

御手紙致拜見候。然ハ中納言殿紀州家ニ御養子御相續被仰出候ニ付、越前守殿より御取扱之義御打合ニ付、諸家方御振合を以得御意候處、御道具類之內一品、鮮鯛共御支度之儀、御賴之趣被仰越委細致承知候。

一右被進物之儀、越前守殿於御國許御承知之上被進候とハ存候得共、其以前ニも被引移都合次第、日限等之儀ハ、猶又自是御打合可申候。

一右被進並被引移候節御使者柄之儀、御問合之趣、是又致承知候。右ハ其御方以前之御振合ニ準し、御使御勤ニ候而宜御座候。右貴報如斯御座候。以上

壬五月廿三日

一紀伊中納言樣、六月三日御登城被成候樣被仰出候旨、爲御知有之、且又御同人樣、來ル十一日赤坂御屋形へ御引移被成、御簾中樣ニも、御同日御引移被成候段、戶田三郎左衛門ゟ申來ル。

以手紙致啓上候。然ハ、中納言殿明三日登城被致候樣被仰出候。此段爲御知、可

得御意如斯御座候。　以上

六月二日

以手紙致啓上候、然ハ中納言殿来ル十一日赤坂屋形ヘ被引移、御簾中ニも同日同所ニ被引移候旨、被仰出候。　此段為御知、可得御意如斯ニ御座候。　以上

六月二日

一ッ橋民部卿様、御順快之由、御通しも御よろしく、御膳も御平生ゟ少々御控めし由、申來候。

一今度被仰出ニ付、御禮國使者雇大久保善十郎へ、壬五月十五日申渡候。　且又善十郎雇中三丁火消林鋳之進へ申渡候。

一右中御機嫌伺國使者雇野坂源右衛門へ、壬五月廿九日申渡候。

金奉行波々伯部源右衛門、壬五月廿四日出立。

閏五月廿四日

不快　高田作之丞

名代　水野主斗

大御番組町田右工馬義、何ミも遠慮被仰付候処、御免被成候ニ付、今日ゟ致出勤候様可

被申渡候。

一佐野内膳義、遠慮被仰付置候處、閏五月廿六日別紙之家老中申聞。

佐野内膳義、遠慮被仰付置候處、御免被成候間、今日ゟ致出勤、御用之外愼罷在候樣可被申聞候。

一同姓主税介儀、御叱被成候ニ付、狛木工去月廿八日、遠慮伺之上、差控被仰付置候處、昨朔日ゟ御免被成候。

六月朔日

中根新左衛門

原平左衛門儀、遠慮伺之上指扣被仰付置候處、御用差支ニ付、御免被成候。今日ゟ致出勤候樣可被申聞候。

大目付江

（頭書）
仙當作山

中仙道蕨、浦和、大宮、上尾、桶川、小田井、岩村田、奈良井、藪原、垂井拾壹ヶ宿困窮ニ付、人馬賃錢割增左之通り可請取旨、申渡

中山道
蕨宿
浦和宿

去ル丑七月ゟ、當午六月迄

中五ヶ年之間、人馬賃錢都合四割五分増申付置候處、尚又當午七月ゟ來る亥六月迄中五ヶ年之間、是迄之通四割五分増。

右割増錢申渡間可被得其意候。

右之趣向々へ可被相觸候。

午壬五月

大宮宿
上尾宿
桶川宿
鴻巣宿
岩村田宿
奈良井宿
藪原宿
垂井宿

紀州ゟ左之通り爲知有之

顯龍院殿召仕女中之内、懷妊有之候處、今朝男子被致出生候。……後略

閏五月廿四日

雲州ゟ左之通り爲知有之

以手紙致啓達候。出羽守様御領分嶋根郡水浦と申所、先月十四日辰中刻出火、西風強燒數百六拾軒、土藏七ヶ所、社之拜殿一ヶ所、藥師堂一ヶ所納屋一ヶ所、致燒失、同日未刻頃鎭火ニ相成候。尤燒亡人女壹人、怪我人死牛馬等ハ無之段、御用番届、右ニ付爲知彼方御留守ゟ此方留守迄申来る。

薩州ゟ左之通り爲知有之

以手紙致啓上候。然ㇾ修理大夫樣今日以　上使、此度琉球國に異國船到來ニ付、御願之通り御國許へ御暇被仰出、御拜領物被成、從右大將樣も以上使、御拜領物被成、重疊難有思召候、右爲知。――以上

〆

此度異國船之儀ニ付、中村八大夫ゟ天方孫八迄申越候儀、孫八書面差出し候ニ付、こゝに張付置、後世の備觀覽。〇書面今見當らず

五ッ半時過寢る。

六月十日

十日晴

今朝目覺六ッ半時、半右衞門罷出、綱目申上之。目付用有之山本源左衞門之

山里腰物虫干見る。家老用有之。

坂田七右衞門去ル九日死去ニ付、右達並札所趣法相伺之。

西本願寺より暑中見舞

葛粉　一箱

鰑　一箱

右暑中爲見舞西本願寺ゟ到來。

磨筒貳匁四分玉　　　　　　　　　　　　　　　　鉄炮師　土屋勘助

右献上致

新宮涼庭掛軸を献ず

新宮涼庭

杏壇圖　掛物　壹幅

唐筆　拾本

唐墨　五挺

右此度出福ニ付献上之

傳之丞罷出劔術いさす相手竹澤五郎右衛門　澤田丈右衛門

乗馬いさす　五ツ半時過寢ル

六月十一日

十一日晴

今朝日覺六ツ半時、半右衛門罷出、網日申上之。

長谷川八十郎罷出、鉄炮稽古相手大谷儀左衛門

鉄炮稽古中、去る六日立早飛脚、道中川々滿水ニ而一日斗し逗留ニ而到著。著

江戸より書状到著

中御尋し御奉書、同日御渡ニ相成い由、江戸靜安之。

書物方虫干見る。評定日ニ付、八郎兵衛評定所へ出る。彌次郎罷出詩經申上

之。

（頭書）是ゟ評定所之記

中村政右衛門罷出、鎗術稽古。

評定所

菅沼市左衛門

私御番組佐久士市兵衛妹義、三崎宗庵後妻ニ指遣度旨願之通り被仰付候。其段市兵衛へ可申聞旨、家老中申聞候。

多ケ谷舍人

私御番組西尾傳兵衛義、大瀧村三田村長門と申者由緒有之候處、無據用事有之ニ付、五宿泊り罷越度旨願之通り被仰付候。其段傳兵衛へ可申聞旨、尤前後御目付共へ、相屆候樣是又可申聞旨、家老中申聞。

奈良權大夫

御菩提寺中並寺社方、一昨辰年ゟ來未年迄御借米被仰付候處、此度思召を以、百石ゟ以下當年ゟ御免被成候。尤御年限中上納殘りの分、定の通り上納可有之事ニ候。其段夫々可申渡旨。

岡田金左衛門

御普請同斷、定之通り上納有之候樣、夫々被申渡候間、左樣可相心得旨、有之趣共御家老中聞候。

松村佐右衛門跡式、別紙之通り被仰付候。其段可申渡旨

別紙

親佐右衛門儀、令病死候ニ付、小役人ニ被仰付、御宛行拾五石三人扶持被下置候。

松村敬次郎

有之通可被申渡候

高間文四郎

本多彌六

千本藤左衛門

奈良備大夫へ相渡す書付と同斷

半井元沖

良醫師三嶋宗庵儀、妻女無之ニ付、佐久士市兵衛妹後妻ニ致度旨、願之通被仰付候。

其段宗庵へ可申聞旨、家老中聞。

秋田八郎兵衛

天方孫八悴彝之助、並次男朝倉八五郎儀、痛所有之ニ付、致湯治可然旨勝澤一順差圖仕候。依之白山に三廻り入湯爲仕度旨、願書付指出、其段家老中へ申聞。

菅沼市左衛門

多ケ谷舍人娘儀、年頃罷成候ニ付、相應之縁組被仰付被下置候樣、存寄之儀て、間部下總守殿家中持弓頭相勤候木内駒之助と申者妻女ニ差遣度旨、願書付口上書指出、其段家老中へ相達。

齋藤數馬

前田彦次郎相願候て、此度京都表儒醫新宮凉庭と申者、用事御座候ニ付、御城下に逗留仕居候。右逗留中、學業修行旁面談仕度旨賴遣候間、折々彦次郎方へ爲立寄申度旨、願書付指出、其段御家老中へ相達候所、願之通り爲立寄候樣、尤前後御目付共へ相屆候樣可申聞旨、被申聞候。

御奉行へ

此度馬喰町御貸附金御拜借等も有之、御札所御趣法被仰出候。然ル處御上納

之儀ニ付而者、御同所無御據御運ニ付、別紙之通り御助勢有之候樣被仰出候間、
其段相心得可取斗候。

別紙

十ヶ年済御上納之内年々

一金千兩ツヽ　　御勘定所ゟ

一同五百兩ツヽ　　御談合有之御側御用人申談候筈

一同貳百兩ツヽ　　右同斷

御札所目付
同奉行江

今般馬喰町御借入金御札所江振り込候ニ付、利足之儀ハ、同所ゟ年々定之通り上納可取斗。若自然不足金相立、且者御備金等御指支之儀出來候節之爲御備、同所質入手形、並有合手形共年々通用小手形ニ書替へ置、右手形を以、御用辨取斗之儀者其節ニ至り被相伺候ハヽ、指圖ニ可及候。

但元金之分、御勘定ニ而引受候得共、下地御手詰之事故、差支之筋有之候間、

十ヶ年ニ間金五百兩ツヽ、

御手元ゟ御渡ニ可相成候條、御札所ニ有之候手形ニ內ニる、五百兩ニ相當

分、年々指出候樣可被取斗候。尤其節御側御用人江可被申談候。

五ツ半時過寢る。

四ツ半時前、御奉書板取宿迄申ノ下刻到着ニ旨、注進有之、當番用人可罷出筈ニ

所、寢後ニ付主稅罷出申入。

御奉書板取宿に到着の注進

十二日晴

六月十二日

曉八ツ時、町奉行組ニ者罷出、御奉書石場問屋へ到着ニ旨注進有之。右ニ付七

ツ時頃、主稅罷出、右ニ趣申聞。夫ゟ起きて上下着、只今宜クと申所ニる、石場問

屋へ御奉書到著、朝六ツ時頃御奉書到著、御用人白臺ニ持出候。此方銕炮ニ間

弓を飾り候所邊迄出迎、夫ゟ居間へ參り、荒川十右衛門持出し、拜見相濟る家老

罷出御奉書拜見イタセ（アリカタイ）ト申之、難有段申退去。此方も同樣、家老役人拜見之。

御奉書到着の儀

御奉書文言

一筆令啓達候。

公方樣右大將樣益御機嫌能被成御座候間、可御心易候。將又甚暑ニ節付る、

無異有之候哉と
聞召度思召、依之如此候。恐々謹言

六月六日　青山下野守（花押）

阿部伊勢守（花押）

松平越前守殿

配符

此狀箱、從江戸至越前國福井松平越前守所へ相屆ケ、返札可來候間、於江戸月番之老中江急度可持參者也。

午六月六日　下野㊞

右宿中

五ッ半時供揃ニ而惇信院樣へ御靈前へ參詣

使番　中村久藏

大番頭　大宮万之丞
觸頭　熊谷熊之助
使者　雨森作助
下馬門々番　井原國助
徒頭　青木與一右衛門
時宜役　加藤傳内
大番　山口新右衛門
石原甚十郎
大野三左衛門
藤田新左衛門
新宮凉庭

目見申付、用人披露初テ暑サミ時分大儀有之、側用人取合有之。

彦次郎甚左衛門例ミ通り此後不記。

彌次郎致、此後不記。

新宮凉庭に謁を賜ふ

六月十三日

六月十四日

天方孫八轉役ニ付

十三日晴

明日出立ニ付、目見申付。　　平本作野右衛門

三處物（兼則長吉ニつき　はくりあこ龍）新宮涼庭ニ遣ス

今日六日振飛脚出立ニ付、一位老君へ献書。

十四日晴

家老用有之（四ツ時頃ゟ九ツ過迄）

天方孫八轉役ニ始家老筋ゟ出し申候。此方ゟ愚辨いたし申候。家老方ゟ

伺

思召有之、御役御免被成、御足高其儘寄合上席可被仰付哉、　　天方孫八

但澁谷權左衛門上

御側御用人見習可被仰付哉　　皆川多左衛門

酒井彦六

御用人可被仰付哉　九郎同様

牧野幹吾

御側役御用人可被仰付哉

〆

多ヶ谷舍人

思召有之、御役御免可被成哉

笹治右平太

大御番頭多ヶ谷舍人跡、可被仰付哉

天方孫八

御留守居役毛受傳三郎跡可被仰付哉

右之通り

此方相返し申候。此後孫八ニ就候て、論いたし候を、頑論と唱へ申候。

六月十五日

十五日晴

五ッ半時本丸へ移、於居間狛帯刀組頭之禮相濟、畢而例之通り月次之禮を一統ニ受る。

大廣間

酒井彦六
篠治右平太
渥美直記

家督之禮初而之禮を受る

六月十六日

十六日晴夕立

主税迄申聞、彼ニ儀右衛門罷出、孫八始間繕願ニ付下る、

評定所

不快
多ヶ谷舍人
名代
磯野右仲

多ヶ谷舍人儀、御役御免被成候。其段舍人へ可申聞旨、家老中申聞

秋田八郎兵衛

天方孫八忰彛之助並次男朝倉八五郎儀、痛所有之ニ付、白山へ三廻り入湯爲致度旨、願之通り被仰付候。其段孫八へ可申聞旨、尤前後目付共へ相届候樣、是又可申聞旨、家老中申聞候。

澁谷權左衛門

書院番組多喜田牧野加左衛門儀、別紙御書付を以被仰付候。何も退出後御目付共申談可取扱旨、御老中申聞候。

別紙

御書付

多喜田藤内へ申渡覺

其方儀先達る妻女及離緣候處、右妻女罷在候内、家内締り方不參届趣相聞、不調法之事ニ候。依之御役御免被成、大御番組へ被入、遠慮被仰付候。急度相愼可罷在候。

以上

六月

御書付

牧野卯左衛門へ申渡覚

其方悴小太郎儀、身分をも不弁、心得違之趣相聞、不調法之事ニ候。依之逼塞被仰付候。急度為相慎可差置候。以上

六月

○大宮万之丞

吉田伊兵衛閉門、今日方御免

○中根靱負

渡邊元右衛門伺断

齋藤數馬

私御番組吉田文太郎儀、別紙御書付を以被仰付候、何も退出後、御目付共申談、可取扱旨家老中申聞。

別紙

御書付

吉田文太郎へ申渡覚

其方弟鐵之助儀、心得違之趣相聞、不調法之事ニ候。依之遠慮被仰付候。急度為相慎可差置候。以上

此内壹人

笹治右平太

大道寺　芳三郎

多ヶ谷舎人娘儀、年頃ニ罷成候ニ付、相應之縁組被仰付被下置候様、存寄之儀ニ、間部下總守殿家中木内駒之助と申者妻女ニ差遣度旨、願之通り被仰付候。其段舎人へ可申聞旨、右願菅沼市左衛門取次相違候得共、舎人儀今日御役御免被成候ニ付、私へ御家老中被申聞候。

荒川十右衛門

別紙之通り席之儀可申渡旨、御家老中被申聞

別紙

稲垣安右衛門次、

多ヶ谷舎人

右之通り可申渡候

〆

（裏表紙）

我等死後不破捨

此日記遺

子孫

（政暇日記終）

三

在邦

政暇日記

自弘化三丙午夏六月十六日

至同月晦日

十五代目

越前守源慶永

在邦

政暇日記

自弘化三丙午夏六月十六日

至同月晦日

十五代目

越前守源慶永

愼獨

弘化三年六月十六日

内藤左右の押込

六月十六日　此記、當月十六日評定所留記、稲垣安右衛門次、多ヶ谷舎人右之通り可被申渡候。夫方内藤左右御告、奈良權大夫へ被仰渡、別記不濟認候間、ワリニてこゝへ、内藤左右としめしるすもの之、

評定所

奈良權大夫

別紙之通り可申渡旨、御家老中被申聞候。

別紙

兼る心得方不宜、其上役前等閑之趣相聞候ニ付。押込。

虚無僧取締役
内藤左右

觀音町麥屋留藏事
彌三右衛門

不屆至極之趣相聞候ニ付、御國十三里四方追放。

右之通可被申渡候

山田藤兵衛

新番組竹澤藤大夫儀、別紙御書付を以被仰付候。何も退出後、御目付共申談、可取扱旨、御家老中被申聞候。

別紙

御書付

竹澤藤大夫へ申渡覺

其方忰武三郎儀、身分をも不辨、心得違之趣相聞不調法之事ニ候。依之逼塞被仰付候。急度相愼可差置候。以上

六月

山田藤兵衛
岡田金左衛門

島崎小兵衛一家之内古市八兵衛へ、別紙御書付を以被仰付候。何も退出後御目付共申談、可取扱旨、御家老中被申聞候。

別紙

御書付

島崎小兵衛一家之内

古市八兵衛へ申聞覺

嶋崎小兵衛養家之兄晋助儀、心得違之趣相聞不調法之事ニ候。依之遠慮被仰付候。急度爲相愼可差置候。右取扱其方へ被仰付候間小兵衛宅へ罷越申渡可取扱候。以上

六月　　山本源左衛門

宇都宮彌三郎、並悴錦太郎儀、別紙御書付を以被仰付候。私共同役申談、可取扱旨

一別紙之通り夫々可取扱旨、

右之趣共、御家老中被申聞候。

別紙

御書付

宇都宮彌三郎江申渡覺

同　綱太郎

其方儀身分をも不辨、心得違ゝ趣相聞不調法ゝ事ニ候。依之、蟄居被仰付候。

且又家柄を被思召、忰綱太郎へ家督七百石被下置、座配是迄ゝ通り被仰付、

遠慮被仰付候。父子共急度相愼可罷在候。以上

六月

別紙

中川主膳家來
稻澤金次郎

西尾源太左衞門組
清助兄
小澤宇兵衞

松原權左衞門組
西　立藏

小栗助七支配
忍ゝ者
山形駒五郎

丹羽加兵衞

小森榮五郎

大谷儀左衛門組
藤次親
山田藤藏

蟹江善右衛門組
辻健助

元御附小道具
鈴木兵左衛門

同彦兵衛悴
松村傳藏

心得違之趣相聞候ニ付、押込

右之通可被申渡候

此内壹人

伊東六郎兵衛

大藤治兵衛

高屋伊喜右衛門儀、別紙御書付を以被仰付候。何れも退出後、御目付共申談可取扱旨、御家老中被申聞候。

高屋伊喜右衛門の蟄居

別紙

御書付

高屋伊喜右衛門江申渡覺

其方娘、先年多喜田藤内妻女ニ指越、此度離縁ニ相成候處、右娘儀、藤内妻女ニ罷在候內、不埒至極之趣相聞候ニ付、蟄居被仰付候。且又其方儀も、取締り方可有之處、不參届趣相聞不調法之事ニ候。依之御役御免被成、末之番外ニ被仰付、遠慮被仰付候。兩人共急度相愼可罷在候。以上

六月

荒川十右衛門

高屋伊喜右衛門儀、御役御免被成末之番外ニ被仰付、遠慮被仰付候。其段申渡候樣伊東六郎兵衛江被申聞候間、右取扱相濟候上、別紙之通り席之儀可申渡旨、御家老中被申聞候。

別紙

織田半左衛門次

高屋伊喜右衛門

有之通り可被申渡候

澁谷權左衛門

書院番組横井吉十郎儀、妻女無御座候ニ付、平井元冲妹後妻ニ仕度旨、縁組內證申合候。先妻儀ハ、中村政右衛門妹ニ御座候處、不縁ニ付、双方和順之上離縁仕指戻候旨願口上書指出、其段御家老中へ相達候處、再縁之事故、願之通り勝手次第取扱候樣可申聞旨被申聞候。

中根靱負

國枝藤兵衛儀、小笠原土用犬丸殿家中小笠原多八郎と申者、由緒有之候處、無據用事御座候ニ付、五宿泊り罷越申度旨、願書付指出、其段御家老中へ相達候。

山田藤兵衛

新番組渡邊二助儀、持病ニ積氣御座候ニ付、湯治仕可然旨勝澤一順指圖仕候。依之自由ニ三廻り入湯仕度旨、願書付差出、其段御家老中へ相達候。

生駒五左衛門

荻野治部左衛門弟小三郎儀、痛所御座候ニ付、湯治仕可然旨勝澤一順指圖仕候。依之白山へ三廻り入湯爲仕度旨、願口上書差出、其段御家老中へ相達候處、養生と儀ニ候間、願と通り勝手次第指遣候様、尤前後御目付共へ相届候様、可申聞旨申聞候。

加藤周益

御匙醫師半井元冲妹儀、横井吉十郎後妻ニ指遣申度旨、縁組内證申合候。右妹儀ハ、先年波々伯部熊藏妻女ニ指遣候處、不縁ニ付、双方和順と上離縁仕引取置候旨、願口上書差出候。其段御家老中へ相達候處、再縁と事故願と通り勝手次第取扱候様、可申聞旨被申聞候。

〆

堀達之助

多喜田藤内御咎就仰付候、森田傳右衛門實弟と事故、遠慮伺指出、小姓堀達之助も、實伯父と事故、遠慮伺指出、傳右衛門ハ實弟と事故指控申付、三日目方免

堀達之助

宇都宮親類の處分

實伯父之事故、伺預置、翌日不及其儀旨及差圖。

伺差出候姓名

宇都宮彌三郎親類

實從弟伺不及其儀　笹治織居

同　同斷　大谷助六

同　同斷　杉田五郎兵衛

同　伺預置翌日不及其儀　嶋田清左衛門

實甥　同斷　皆川多左衛門

從弟　笹治右平太

嗣太郎儀ハ實甥　大道寺芳三郎

〆

遠慮伺之上指控可被仰付候　多ヶ谷舍人

〆

多喜田親類の處分

多喜田藤内親類

前ニ有之　森傳右衛門

堀　連之助

實甥不及其儀　市橋万右衛門

聟　不及其儀　八田金右衛門

　　高尾伊喜右衛門親類

實兄不及其儀　國澤助右衛門

同姓不及其儀　高尾半三郎

　　牧野加左衛門悴小太郎親類

嫡子伺之通遠慮　牧野加左衛門

加左衛門義ハ實父、小太郎義ハ實兄　岸田藤次

愼伺小太郎義ハ實甥　渡邊助左衛門

　　竹澤藤大夫悴武三郎親類

實父伺之通り遠慮　竹澤藤大夫

武三郎義ハ實甥　徳山茂左衛門

〆

弟濱之助御咎ニ付伺之上差控　吉田文太郎

∝養家之兄彦助御咎ニ付遠慮伺の上差控　　島崎小兵衛

∝

六月十七日

十七日晴

日付用有之評定留見セル。

十右衛門罷出申達候ハ、高畠鎌之助、明日ゟ御相手ニ罷出候旨申之。

新米弐俵小俵弐合半斗ツヽ入　　種池（たないけ）村　武兵衛

右本多内藏助給知之者之由、内藏助迄願出、同方ゟ以使者献上。

主税罷出申達候は、市橋万右衛門次男千久馬、御稽古之節御次遣斗差出させ度き旨、御内意相伺之。其通りと申之。

六月十八日

十八日晴後曇

五ツ半時供揃ニて　隆徳院様御靈前へ參詣、歸り四ツ時。

使番　林忠兵衛

大番頭　大宮万之丞

供奉之面々

觸頭 熊ヶ谷 熊之助

使番 村上 作右衛門

徒頭 青木與一右衛門

時宜役 河津 佐大夫

大番 下山七郎左衛門

佐久士 市兵衛

冨田 四方之助

高松 彦藏

下馬門番 堀 勘左衛門

昨日伺、今日伺之通り、譯え三國與兵衛へ御下ケ米之儀ニ付、御奉行方相伺候義、

三國與兵衛に御下ケ米のこと

書付左之通り

馬喰町御拜借金、三國與兵衛ゟ御渡被成、江戸御運送之方へ振込候ニ付右代り銀、七月迄ニ追々可相渡筈ニ付、先達而ゟ種々心配仕候得共、昨年ゟ之跡引、並靈岸島御類燒ニ付、臨時御入用も有之、七月中ニ而壹万五千兩斗相渡不申候半而ハ、與兵衛手元も差支ニ相成可申哉ニ候得共、不融通之折柄、御才覺之心組も無御座當惑仕候。當年作躰も、豐熟之趣ニ相聞候得ハ、御藏御備米之内、左之通り御拂ニ被成哉、奉伺候。

一米三万四千九百俵余　当時御藏御有米

内九千八百俵斗　六月ゟ九月迄ニ御入用可有之哉

殘る

二万五千百俵

内一万五千俵　盆後ニ相成候ハヽ、三國與兵衛へ御渡ニ可被成哉

五千俵　御米問屋商人へ御任せ、金子調達御頼可被成哉

今日伺之通申付、夫ゟ三國與兵衛へ右之趣申聞候處、作躰も未不相分、夫ゟ御拂米と有之候ハヽ、御藏所甚御手薄之御事故、先盆後御拂ハ御止メ被成候ろ可然、

私も其存ニて趣向致置候間、先々作躰能々御見請之上、御拂奉願候段申上之。
八郎兵衛罷出、頑論互ニいたす。尤八郎兵衛は北斗◎方ニるとなし
六月十九日
十九日雨
五ツ半時、銕炮之間へ參り、申渡左之通り。
笹治右平太
大番頭多ヶ谷舍人跡申付
横田作大夫
先物頭高屋伊喜右衛門跡申付、役料百石遣ス。
兩人難有仕合奉存候段請を申之。家老取合有之。
去ル十二日晩立通常振飛脚到着、江戸靜安之。
田中大秀福井に來る
飛騨國
田中大秀
飛彈國位山栎　文臺　壹箱
右之者國學者之由、城下へ出候ニ付、献上。町奉行迄出す。
江戸飛脚着江戸表のこと
江戸表之事ヲ記ス
大和守 矩齊 去ル二日依御奉書、阿部伊勢守殿御宅へ被參候處、此度浦賀表へ異國船渡來ニ付、相州御備場へ被相越候樣被申渡候ニ付、同三日御當地發途之由爲

知有之。

松平大和守相州御備場ニ出張

右ニ付、於御備場御障りも無之候哉相伺國許へ可申越旨ニ而、同十日留守居見習大道寺七九郎罷越、ゐなと留守居助本間式平及面談候處、何之御障りも不被成御座候旨、且又彼地御用向も相濟候ニ付、近々御備場發途被致候筈之旨、罷歸相達候。

松平大和守殿相州御備場御用相濟候ニ付、今十二日歸府被致候旨、爲知有之。

紀州家へ餞別

紀伊中納言殿へ餞別之義、支度之義御頼相成候處、別紙之通り去ル七日被進候樣、戸田三郎左衞門ゟ申來ル。

刀掛一脚

鮮鯛一折

本文七日使者物頭松田理兵衞相勤候處、金三百疋被下候段、罷歸相達候。

六月七日御住居御附御用人ゟ爲知有之

富士見御寶藏番

松榮院樣御附御侍添番格
御侍御用達手傳
加茂下八十次郎

同十二日御住居御附御用人ゟ為知有之

御用達手傳

御同所樣御附添番格御侍
小森弟次郎

高田作之丞

佐野内膳儀用ゝ外愼申付い處、今日ゟ免、其段可被申聞い

袖ゟら
大目付へ

六月十一日

紀伊殿紀州家へ引移ニ付

御本丸殿中染帽子麻上下

右ゝ通可被相觸い

廿日晴後曇夜雨

六月二十日

五ツ半時供揃ニ而、有德院樣御忌月ニ付、裏通り慈本院御靈屋へ參詣、歸城、卽

荒川十右衛門罷出申達候ニ、出淵傳之丞忰文太郎御相手ニ罷出段相願いニ付、

願之通り申付。評定日ニ付、八郎兵衛評定所へ出る。

玉川浦に見當杭を建つ

澁谷權左衛門罷出申達候ハ、井原源兵衛儀、去ル十七日玉川浦之内、字ナ鳥毛ノ尾山と申所へ、見當抗再建之儀、彼地へ罷越、本保役人と出會、無難相立チ、今日罷歸候段申達候。

評定所

評定所

中根靱負

私御番組、國枝藤兵衛儀、小笠原(土)用犬丸殿家中小笠原多八郎と申す者由緒有之候處、無據用事有之ニ付、五宿泊り罷越度旨願之通り被仰付候。其段藤兵衛へ可申聞旨、尤前後御目付共へ相屆候樣、是又可申聞旨、御家老中被申聞候。

山田藤兵衛

許番組渡邊二助儀、痛所有之候ニ付、白山へ三廻り入湯致度旨、願之通り被仰付候。其段二助へ可申聞旨、尤前後御目付——後略、御家老中へ相達候。

中根靱負

渡邊元右衛門義、痛所御座候ニ付、潮湯治仕可然旨橋本彦也指圖仕候。依之泥原村保浦へ二廻り入湯仕度旨、願書付差出其段御家老中へ相達候。

篠治右平太

爲俣藤兵衛儀、痛所御座候ニ付、湯治仕可然旨山脇元恭指圖仕候。依之白山へ三廻

り入湯仕度旨、願書付指出、其段御家老中へ相達ル。

山田藤兵衛

新番組野村次郎太郎儀、妻女無御座ルニ付、本覺寺末寺善宗寺妹妻女ニ仕度、緣組内證申合ル旨、願書付指出其段御家老中へ相達ル。

六月二十一日 居合奥傳授を受けさせらる

廿一日晴曉雷雨

五ッ半時高畠甚五左衛門罷出、居奥傳授有之。鎌之助大橋由兵衛へ陪伴。𛀁しめ甚五左衛門鎌之助といふ、跡て傳授を受て大慶ニ存る。目出さいト。

目付山本源左衛門罷出、評定留見セル。

六月廿二日

廿二日晴

四ッ半時過ゟ九ッ半時過家老用有之。外の義ニあらす、頑固論之。

荒川十右衛門罷出、井上彌一郎妻女無之ニ付、中山仙右衛門娘妻女ニ致度旨、内意伺。宜クと申之。

六月廿三日

廿三日晴朝新涼

秋田八郎兵衛罷出、左ㇸ通り相伺ひ、直に郡奉行へ申渡す筈。

覺

三郡奉行共江

去ル夏以來、村々末々之者共迄、御國恩を存詰、増勵を以、御借財御返濟之方江、爲冥加月々致獻上銀、其余寺院之内ニも奇特之儀有之段、兼而達御聽、一統格別之志御滿足ニ被思召候。此段相心得、末々之者共迄、不洩候樣申渡候樣可被仰付候。

〆

六月二十四日 親隨班

廿四日曇曉雨

家老罷出、親隨班くり上之伺、ソレのミ。

六月廿五日 評定所

廿五日曇

評定所

奥向納戸役之吉田藤、内跡被仰付候旨、家老中申聞候　大關彦兵衛

御裏役大關彦兵衛跡被仰付候旨、御家老中被申聞候。　眞田五郎兵衛

御書物方眞田五郎兵衛跡被仰付候旨、家老中被申聞候。　井戸治兵衛

御目留番井戸治兵衛跡被仰付候旨、家老中被申聞候。　川村乙三郎

依岡向太衛門遠慮今日御免、役席　澁谷權左衛門

中根靱負

私御番組渡邊元右衛門儀、痛所有之ニ付、泥原新保浦へ二廻り入湯致度旨、願之通り被仰付候。其段元右衛門へ可申聞旨、尤前後御目付――略、御家老中被申聞候。

笹治右平太

私御番組湯俣藤兵衛儀、痛所有之ニ付、白山へ三廻り入湯致度旨、願之通り被仰付候。其段藤兵衛へ可申聞旨、尤前後御目付――略、御家老中被申聞候。

前波忠兵衛
岡田金左衛門

別紙之通り申談可取扱旨、御家老中被申聞候。

別紙

小役人格
御廣敷添役
牧野甚兵衛

心得違之趣相聞候ニ付、役儀被指免、押込。

山田藤兵衛

右之通可被申渡候

竹澤藤大夫今日ゟ御免

野村次郎太郎儀、妻女無之ニ付、本覺寺末寺善宗寺妹縁組致度旨、願之通り被仰付候。其段次郎太郎へ可申聞旨、右之趣共御家老中被申聞候。

御書院番組井上彌一郎儀、妻女無之ニ付、中山仙右衛門娘妻女ニ仕度、縁組内證申合　澁谷權左衛門
候旨願書付差出。　其段御家老中へ相達候。

中山仙右衛門娘儀、井上彌一郎妻女ニ指遣申度、縁組内證申合候旨、願書付指出、其段　齋藤數馬
御家老中へ相達候。

六月十六日

廿六日

臨時側へ召呼候節、菓子其外遣し物有之候節、近習番持出候儀ニ付、兼而月見年忘い等之節用人迄、近習番給仕其外ハ次へ下り、自分頂戴いたし前、持出候と仕來りニ相泥ミ、臨時彼是申立有之、差支ニも可相成趣故、側用人ゟ相伺ひ、側用人ゟ直ニ近習番頭取を召呼、申渡

一惣而思召ニ而御間内へ被爲召候程之者へ、臨時御菓子御茶其外頂戴物被仰付候節ハ、其時々被仰出次第、御近習番持出可申事。

但御月見等之節ハ、是迄仕來り之通り相心得可申事。

一定座番外以上並御附衆之儀ハ、自分頂戴ニ而被仰付間敷事。

六月廿七日
運正寺に御參詣

但定座番外ニても、御側向頭取勤中ハ、自分頂戴可致事。

右之通今度改る被仰出候。以上

廿七日晴

五ツ半時供揃ニる運正寺へ參詣、歸城四ツ時。

供奉之面々

使番 雨森作助

大番頭 齋藤數馬

觸頭 熊ヶ谷熊之助

使番供 榊原惣三郎

徒頭 青木與一右衞門

○時宜役 高坂武右衞門

大番 中村市郎左衞門

皆崎次右衛門
井上助平
笹川庄八

今晩常振飛脚出立、一位老君へ呈書。

六月廿八日
廿八日曇
何ニも無之

六月廿九日
廿九日晴

勝山の町人梅田傳兵衛の獻金
金千貳百兩　　勝山本町　梅田傳兵衛
右勝山表ニ而、身元の町人、領分ニてハ無之候得共、國中ニ罷在候ニ付、爲冥加手元獻金。右傳兵衛親類松岡町人ゟ下領郡奉行千本藤左衛門へ申達、藤左衛門ゟ側用人へ差出、早速入披見。直ニ主税ニ預ケル。

評定所
評定所　　澁谷權左衛門
書院番細井土部一郎義、妻女無之ニ付、中山仙右衛門娘妻女ニ縁組致度旨、願之通り被仰付候。此段[illegible]一郎へ可申聞旨、御家老中被申聞候。

齋藤數馬

私御番組中山仙右衛門(娘)儀、井上彌一郎妻女ニ指遣度旨願之通り被仰付候。其段仙右衛門へ可申聞旨、御家老中被申聞候。

大宮万之丞

高屋半三郎儀、當年四拾九歳罷成候。實子無御座候ニ付、養方之弟權太郎儀、當年二拾七歳罷成候、此者養子ニ仕度、右權太郎儀ハ、養父道樂實子ニ御座候旨、願書付指出其段御家老中へ相達候。

中川主膳

御留守番組岡嶋左大夫娘儀、渡邊利左衛門養女ニ仕、末々再縁爲仕度、右娘儀ハ先年願申上、先達而病死仕候利左衛門悴權七郎妻女ニ差遣候處、未年若ニも御座候ニ付、權七郎死後双方和順之上離縁仕候旨、利左衛門義由緒ハ無之候得共、内證申合候旨、願書付指出、其段御家老中に相達候。

山田藤兵衛

新番組三好久左衛門儀、妻女無御座候ニ付、有賀立長妹後妻ニ仕度旨、先妻義ハ渥美佐太郎妹ニ御座候處、昨年病死仕候旨、願口上書指出、其段御家老中へ相達候。

岡田金右衛門

新番格渡邊利左衛門儀、岡島左大夫娘養女ニ仕、末々再縁爲致度旨、右娘義ハ、先達而

田代道壽
吉益周介
中川修亭

六月卅日

病死仕候、利左衛門倅權七郎妻女ニ御座候處、未年若ニも御座候ニ付、權七郎死後叔方和順ゟ上離縁仕候旨、左大夫儀も由緒も無御座候得共、内證申合候旨、願書付口上書指出、其段御家老中へ相達候。

半井元沖

表御醫師有賀立長妹儀、三好久左衛門後妻ニ指遣申度、縁組内證申合候旨、願書付指出、其段御家老中ニ相達候。

田代道壽儀、醫業之儀ニ付、當午年秋ゟ來未春迄京都吉益周介と申者方ニ罷越、随身修行仕度旨、在江留中大坂表中川修亭と申者方ニも罷越醫術相談仕度旨、願書付指出、其段御家老中相達候。

〆

晦日晴夜微雨

家老用有之、四ツ半時前ゟ九ツ時貳寸五分迄頑固論有之。

在邦

政暇日記

自弘化三年丙午秋七月朔日

至　九月晦

十五代目

越前守源慶永

在邦

政暇日記

自弘化三年丙午秋七月朔日
至九月晦

十五代目
越前守源慶永
愼獨

月はやし梢は雨を持ながら

[illegible]

政暇日記

十五代目
越前守源慶永

七月々番

公邊

御老中　阿部伊勢守
西丸御老中　松平和泉守
若年寄　本庄安藝守
西丸若年寄　松平玄蕃頭
寺社奉行　久世出雲守
御留守居年寄　蜷川能登守
町奉行　遠山左衛門尉
御勘定奉行御勝手方　松平河内守

同断公事方　久須美佐渡守

御目付　本多隼之助

同断　三宅市右衛門

越城

中川主膳

大宮万之丞

相馬一九郎

同　人

冨永新左衛門

永見志馬

牧野幹吾

村上沖之助

渥美直記

市村勘右衛門

山田藤兵衛

田邊五大夫
太田三郎兵衛
盤江善右衛門
今村五兵衛
櫻井庄九郎
高間文四郎
石川彌五大夫
青木與一右衛門
有賀內記
秋田八郎兵衛

弘化三年七月朔日御本丸にて禮を受けらる例の如し詩經講了

七月朔日晴

今朝目覺六ッ半時、五ッ半時ゟ供揃ニる本丸へ移り、家老をしめ共餘例ゟ通り格禮受る。

彌次郎罷出、詩經申上之。今日ニる詩經相濟 中村政右衛門罷出、鎗術稽古相手

松尾傳藏 此度詩經讀上ケニ付、易經申上候るを如何と申事、兩少傳申候得共、彌

大學の會讀

次郎四書六經近思錄を心得居候得共、其餘不案內と申ニ付、是迄會讀を殘りを彌次郎申上、會讀を從是大學ニ相成ル。五ツ半時過寢ル。

七月二日

二日晴

今朝目覺六ツ半時。

運正寺に御參詣

天梁院様御忌日ニ付、運正寺へ五ツ半時ゟ供揃ニる參詣、歸城四ツ時壹寸廻り。

出殿掛

使番々　林　忠兵衛

大番頭　菅沼市左衛門

下馬門々番　鈴木百助

歸城懸ケ

觸頭　熊谷熊之助

使番供　中村庄兵衛

徒頭　青木與一右衛門

時宜役　門野太郎右衛門
大番　今村重太郎
島津庄左衛門
筒井十大夫
内田作兵衛

天方孫八のこと

孟子開講

角違札引上げ

例之通前田彦次郎、明石甚左衛門例之通罷出講釋有之。

四ツ半時頃ゟ（四ツ半時頃ゟ九ツ半時過ニ至ル）家老用有之。

此譯、孫八之儀色々及問答候得共、執政執法之申儀、篤と會得不致、何分從是可及差圖段申付置。

彌次郎罷出孟子申上之、（孟子萬章下之篇一郷之善士ノ所ゟ申之）

弓術稽古（相手服部三郎兵衛）之乘馬延引。

札所目付ゟ申達、角違印札相場七月二日ゟ貳匁引揚、壹兩ニ付八拾八匁相成申候。

五ツ半時過寢ル。

七月三日

三日雨後晴

今朝目覺六ッ半時、半右衞門罷出綱目申上之。　井原源兵衞罷出、當番ㇾ卷講釋いたす。

松山清五郎火術修行のこと

八郎兵衞罷出、御家老今日者不罷出、明日罷出度段申上之。

松山藤助悴清五郎、家傳ㇾ火術修行致度儀、當年者小身ㇾ者共半減ㇾ御免被仰出候事故、申合相試申度、　天梁院樣御代ㇾ御例も有之ニ付、御覽相願候ニハ無之候得共、御内慮相伺、御沙汰次第當秋稽古仕度旨、演説書を以八百里迄申達。則一昨日八百里此方ニ申之、演説書も入覽。　又々八百里宅ニ而清五郎へ申達候ハ、家傳ㇾ火術修行ㇾ儀候へ者、上ゟ御留被遊候譯ニ者無之、慰ニさへ不相成候ハヽ、實用向相試申儀者勝手次第さるへく、尤當時ハ　天梁院樣御代とハ御振合も相替り候儀ニ候得者、御覽ハ被遊間敷候。　仍之演説書及返却候間、以後共相試度節者、御手元ニ不拘、勝手ニ修行可致旨、及返答候事。

淺井八百里火學を講ず

八百里大學の講し致すニ付、彌次郎延引。　居合いたす。　甚五左衞門鎌之助罷出申（相手高崎等、）乗馬延引。　五ッ半時過寢ル。

七月四日

四日曇

土屋市兵衛判のこと

天方孫八退役

今朝目覺六ッ半時、半右衛門罷出綱目少しいたす。八郎兵衛と用談いたす。

昨日右筆部屋ゟ表當番帳さしいたす、此方一見いたし候所、御武具方ゟ内、去月十三日當番土屋市兵衛儀、判行忘レ候哉、筆管ておし候樣ニ見受申候。尤しミ候て可有之と存候。筆のしミ哉ニ致候所か、餘りな事故、如何いたし候哉と八郎兵衛に相談いたし申候。尚又相考、後刻可申上旨申之。いつれ明日申上候事と存候也。

家老召呼、此方申候ハ、先達るゟ孫八ゟ義色々相達候得共、此方未た會得て不致候得共、然なから、此方存を急度相立候時ハ、國家の大事ニも可及候間、此度て枉る從ひ申候。委細て此覺書ニ有之候間、披見可致候。家老拜見ゟ上、尤と申之る銘々拜見。

折掛ケ

覺書

退役申付足高共儘近習ニ指置側用人次

右之通り可申渡候

天方孫八

外　記

内記

帯刀に

右様ニ認差圖いたす。紙ハ直書半切之。此方申之同間ゝ儀ハ、追る申之。孫八跡役等ゝ儀ハ、尚又勘考中ニ候間、追る可申候と云々、家老申之。其餘石原甚十郎弟ゝ義、並家督ゝ所ゝ義相伺之。

八郎兵衛召呼、表向右ゝ儀申之。八郎兵衛申達候ハ、城下田賀屋嘉助と申者、白畑權斤献上致度段相願候ニ付、差出す段申之、近習番持參。

彌次郎罷出孟子申上之。市橋万右衛門罷出、柔術。軍藏千久馬罷出（相手蟹江善右衛門）（雪吹八郎左衛門）乗馬いたす。今日ハ荒川十左衛門乗馬申付。五ッ半時過寝ル。

七月五日

五日晴

今朝目覺六ッ半時。長谷川八十郎罷出、鉄炮稽古。（相手服部三郎兵衛）

評定所

今日評定日ニ付、八郎兵衛評定所へ出る。彌次郎罷出孟子申上之。

八ッ時頃秋田八郎兵衛、評定所ゟ罷歸り候ニ付、今日用事有之ニ付、家老ゝ内酒井外記猶帯刀兩人只今ゟ罷出候様申越へき旨申付。八郎兵衛早速申越、八ッ半時過、兩人罷出候ニ付、其段八郎兵衛只今罷出候様申ニ付、八郎兵衛申傳へ、此

方前へ外記帯刀兩人罷出、暑サ難堪と申挨拶いたし、コレへと申し罷出、此方申す今日召呼候義ハ、外の義ニハあらず、暑イ所を罷出候段ハ大儀ニ存る。昨日孫八ゝ義を指圖いたし、もふ訶の一條ニるハ遺念ハなイ、只今申付候義ハ、先年來此者ゝ儀ハ、存ま叶ハんもの、何分此度ハ深き存寄りも有之ニ付、如斯取斗ひ可申。委細ハ此覺書ニ訶りと申候る、覺書相渡。

有賀内記

覺

退役申付

但伺等ニ不及

太田三郎兵衛
田邊五大夫
山本源左衛門

退役申付役料其儘側物頭次

但伺等ニ不及

右之通り可申渡候

外記
帯刀江

中根靱負側用人となる

覺（折掛ケ）

家老職申付　笹治織居
城代笹治織居跡申付　有賀内記
側用人天方孫八跡申付　中根靱負
留守居毛受傳三郎跡申付　松平源太郎
書院番頭松平源太郎跡申付　皆川多左衛門
大番頭中根靱負跡申付　牧野幹吾
目付申付　淺井八百里
但八百里席其儘　千本藤左衛門
千本藤左衛門跡郡奉行其方共人撰いたし相伺ひ様　加賀九郎右衛門

外記
帯刀　へ

役替ノ事
備

事如右、外記内記し方を拝見いたし、夫ゟ織居し方を拝見いたし大驚キニて、暫そ何ニも無之、やゝありて帯刀ニ申ソハ、此義そ誠ニ重き儀と申物なれそ、御請難出来と云かよかろうやら、とうしさ物シヤ、顔も土の如くニ相成、帯刀

ニ申之、尤小聲ニ、帶刀申候て、何分取下り候て御請可申上、誠ニ御大事の御事シャと申之。外記此方ニ向ひ、ゑかく〳〵の儀を申之、此方取下り候て、請を申候と云やうな事てなく、當然の存ハ如何、是ニをこしつまり、又々此方ニ申候ハ、實ニ御大事の御事、もとよりと申之。此方申候ハ、此度ミ義て、決て孫八ゟ、あのやうニなる故、それて内記てしめ、かうと申ニるてさら〳〵無之、孫八のとても別種之。右故其所て懸念の無之候樣致度イ、此方とても、かゝる義て大とニ候得共、此物共儀て、急度見詰有之候間、左樣申し候ニて有之候間、何分右樣取斗可申。外記申候て、内記並御目付共三人御替へ被成候と申義て、大事ニ候間、少ッヽ御替へ被成候るて如何と申。ソレハ大事の事て、此方も承知致し居、斯不致候へてならんニつけてゐふする。中根靭負ミ事ハ、外記くどくど申之。帶刀申ハ、靭負とても、柔弱と申ニるもなし、私情の薄き人、やり過キ候義て有之候得共、何分共邊ミ所て御前までも御承知ミ上ニ候得て、宜クと存候。外記まさ少しッヽ云、左樣な靭負と存候て、番頭ニなせ伺ふさ、側用人ハ假令政務向ニハ掛り不申、番頭ハ五十人の大將ててないゐ、まさ番頭ミ方ゐおもいと存る、なせ伺ふさと云さ、右ゆへ之。外記つまり、左樣候ハヽ、追て

御出し被成、今度ハまつ御見陳(限)御尤と存候。此方ゆふ、今出すも、此後出すも同様な事之といふ。八百里之義を申しか(ママ)ゝら、此方平生心躰の義申之。帯刀も必定と傾躍いたし候。加賀九郎右衛門之義も、平生心躰之義を申之。是も感伏。松平源太郎、皆川多左衛門、牧野幹吾無遺念、内記御城代と申ハ、實ニ御憐愍之御沙汰と申る、尚又御用部屋へ取下り、追る可申上旨退去。八郎兵衛ニ一應申聞、八郎兵衛用部屋へ參候様子之。再七ッ半時過罷出、此度之義ハ、何分御格別之御事、於私共遺念なく御請可仕段申之。追る日付三人之義ハ、太田三郎兵衛(大新番頭井上半大夫跡隠居)御預所元〆役秋田三五左衛門跡田邊五大夫(二左衛門隠居)町奉行奈良権大夫跡山本源左衛門之(権大夫内願ゟ上退役)と可被仰付候ハヽ、御宜ヶと存候段申之。此方そふ相心得ると申之。右ニ付合心付いたし候ニ付、其積。靱負之義ハ御側御用人と被遊候得共、天方孫八、秋田八郎兵衛も同様見習被仰付候事故、靱負もと申ニ付、別ニ園へ參り認。

中根靱負

御用人見習申付、本役同様相勤候様

外記

帯刀へ

右ニ付孫八ゟ儀を明日内記目付退役ハ八日、織居をしめ九日十二日頃、三目付町御預所新番頭ゟ義申渡積。只今もふ及黃昏退去。八郎兵衛罷出、孫八申渡振、入一見、宜クと申之。
五ッ半時過寢ル。

（六日）

七月六日評定所新宮凉庭調達金を献上

今朝八郎兵衛評定所へ罷出ル處、家老共、八郎兵衛申ルハ、新宮凉庭、先日家老共へ面會いたし、是迄差出ル調達金、不殘献上いたし度旨申出ル事如左。

口演扣

一御高五百石御墨附二通之表

一元金九千貳百四拾七兩御勝手方並御札所證文六通之表

外ニ

金子六千四百三拾五兩余

天保七申同八酉同十三寅同十四卯年追々調達仕ル御利足積ゝ分

元利合

壹万五千六百八拾貳兩余

右ハ於京師、

御上様　御賢徳追々奉承知候ニ付、今般暑中　御機嫌伺旁出福仕候處、御目見之上、奉蒙　御懇之　御意、其上結構之御品拜領被仰付、難有仕合冥加至極ニ奉存上候。逗留中　御上様御文武を初、殊更御行狀御身廻り御質素、萬端一々乍恐奉感伏罷在候處、御勝手向之儀て、御苦勞ニも被思召候哉之風聞奉拜承、深奉恐入感涙仕候ニ付、御德行を奉仰、前文之條々永上仕度奉存候。右之趣宜御披露御執成奉願上候。以上

弘化三年丙午七月　　　　新　宮　凉　庭

酒井外記様

有賀内記様

狛　帶刀様

〽

以別紙新宮凉庭演舌差出候。

演舌奉申上候趣意

一本紙申上候通り　御德行を奉慕永上仕度志願之儀、御受納被成下候ハヽ
難有仕合奉存候。
一献納金高之内、私使矢野守祐江金貳千百四拾八兩御渡被成候趣ニ候得共、
於私聊も頂戴不仕候間、御手續を以、御引上御納金可被下候樣奉願上候。
一先達る山形新右衞門殿、八田嘉左衞門殿被見得、私調達金之儀て、去秋私ゟ
差出候使守祐江御引合之上、悉皆事濟候趣被仰達候得共、右て私一圓拜承
不仕、殊ニ守祐江添書仕差上候儀て、去秋之事ニる、其節之引合相斷候處、當
年ニ至り、又々御掛合申上候由ニる、御大切之御證文、別て重き知行御墨付
迄、守祐て一己之存寄を以、私ニ無應對、粗忽之取斗方、於私不存寄事共ニ御
座候。　右樣粗忽之者とて不存、輕卒ニ相願候段深奉恐入候。
一右献納仕候ニ付るて、御證文知行御書付御下ケ被下候樣仕度、左候ハヽ、臺
居熨斗付ニる献上仕度、則共段　御請債方迄申込候處、渡邊利左衞門殿被
見得、寫御持參、本紙證文之儀て、御使守祐ゟ、庄右衞門（庄右衞門とて當時來栖彌三郎の養父之尤山師）
之御預り申置、庄右衞門ゟ、御役所へ預置候儀ニる、難相渡旨被申聞候。　左
候得て、守祐ゟ慥成證書請取置、私ゟ預置候書付類之儀ニ付、間々之儀て申

ニ而ハ不奉及、則私之證書ニ相違無御座候。 尤前文新右衛門殿嘉左衛門殿被申聞候趣ニ而ハ、御決算事濟之趣ニ候得共、利左衛門殿被申聞候次第ニ而ハ、未御勘定廻り相濟候儀与ハ不奉存、何分守祐ハ私ゟ指出候使之義ニ而、此度本人私罷出候而、御引合申上、献納仕度段、相願候ニ付而ハ、聊御懸念無之義と奉存候。 何卒早々御評議御受納被成下、安心歸京仕候ハヽ、重疊難有仕合奉存候。 右之段偏ニ奉願候。 以上

七月　　新宮涼庭

評定日ニ付目付ゟ指出候用留寫

評定所

私御番組高屋半三郎儀、實子無之ニ付、養方之弟權太郎養子に致度旨、願之通り被仰付候。 其段半三郎ヘ可申聞旨、家老中申聞。　　大宮万之丞

私御番組多喜田藤内儀、遠慮被仰付置候處、御免被成候間、今日ゟ致出勤候樣可申渡旨、家老中申聞。　　中根靱負

齊藤數馬

私御番組山名小太郎並養父次郎八儀、遠慮被仰付置候處、御免被成候間、今日ゟ致出勤候樣、可申渡旨、

吉田文太郎弟鋏之助儀、遠慮被仰付置候處、今日ゟ御免被成候。其段文太郎へ可申聞旨。

右ゝ趣共御家老中被申聞候。

中川主膳

御留守番組岡島左大夫娘儀、渡邊利左衛門養女ニ指遣、末々再緣爲致度旨、願ゝ通り被仰付候。其段左大夫へ可申聞旨、家老中申聞候。

不快
奈良權大夫
田邊五大夫

石原甚十郎の弟友之助を追放

石原甚十郎弟友之助、不埒至極之趣有之ニ付、一昨年侍御削被成、御國十三里四方追放被仰付候處、病症有之ニ付、病氣中入牢被指置候得共、此度致全快候ニ付、追放ゝ儀、奈良權大夫申談可取扱旨、家老中申聞候。

山田藤兵衛

一、西御番組三好久左衛門儀、妻女無之ニ付、有賀立長妹後妻ニ致度旨、願之通り被仰付候。　其段久左衛門へ可申聞旨。

鵜飼小兵衛養家之兄香助儀、遠慮被仰付置候處、今日ゟ　御免被成候。　其段小兵衛へ可申聞旨。

右之趣共御家老中被申聞候。

田邊五大夫

宇都宮嗣太郎儀、遠慮被仰付置候處、御免被成候間、今日ゟ致出勤候樣可申渡旨、御家老中被申聞候。

岡田金左衛門

右番組遠藤利左衛門儀、関島左大夫娘養女ニいたし、末々再縁爲致度旨、願之通り被仰付候。　其段利左衛門へ可申聞旨、御家老中被申聞

梶川半兵衛

高屋伊喜右衛門儀、遠慮被仰付置候處。　御免被成候間、今日ゟ致出勤候樣可申渡旨、御家老中被申聞。

半井元冲

表醫師有賀立長妹儀、三好久右衛門後妻ニ指遣度旨、願之通り被仰付候。

田代道壽儀、醫業之儀ニ付、當午秋ゟ來未春迄京都表吉益周助と申す者方へ罷越、隨身修行仕度、右逗留中、大坂表中川修亭と申者方にも罷越、醫術相談致度旨、願之通り被仰付候。其段兩人へ可申聞旨、道壽儀て、尤前後御目付共へ相屆け候樣、是又可申聞旨。

右之趣共御家老中被申聞候

渥美直記

波々伯部熊藏同性八左衛門儀、先年不調法之儀御座候ニ付、蟄居被仰付候。然る所右八左衛門儀、一昨年ゟ病氣相煩候ニ付、願申上岩佐玄銈、榎並玄澤、町醫高桑道淳相頼、樣々療治仕候得共、未た彌々不仕、其上此節暑サニ相障り、難儀至極仕候。愼中之儀ニ御座候得共、看病等も不參屆、只今ニては實ニ心底も改、相愼罷在候間、格別之御憐愍を以、右御咎御免被成下候樣、願口上指出、其段御家老中被申達候。

〆

用人內達之趣も有之候ニ付、サン・キリ場今日ゟ可遣候段、八郎兵衛迄申付。出淵傳之丞稽古延引。五ッ半時過寢ル。

七月六日

六日晴後曇雨

今朝日覺六ッ半時、半右衛門罷出、綱目申上之。

八郎兵衛罷出申達候ハ、酒井外記、昨夜雨森儀右衛門土屋十右衛門両人召呼候、昨日之義申之。委細ハ外記方可申上段申之。今日色々用多ニ付稽古、文道ハ格別之事。

家老酒井外記、猶帯刀両人罷出申達候ハ、奈良權大夫内願書差出候趣意ハ、労症ニ而色々手當仕候得共、別て當節ハ不宜ニ付、何卒以憐愍退役相願、其上當役一人之事、別而恐入事と申事之。右之趣故、退役ニ而、跡々人撰相伺之。餘ハ此間之通り。

晝

九日申渡分

井上半大夫
同　三太郎

手當ニ付隠居被仰付、倅三太郎へ家督無相違被下置、大番組へ可被入哉。

奈良權大夫

病身ニ付、内願之通り御役御免被成、御近習ニ被指置、御廣敷御用人次席可被仰付哉、　御番大關有左衛門次、

笹治織部

願聞之通り

此間之通り　有賀内記

此間之通り　中根靫負

此間之通り　松平源太郎

此間之通り　皆川多左衞門

此間之通り　牧野幹吾

此間之通り　山本源左衞門

寺社町奉行奈良權大夫跡、可被仰付哉　淺井八百里

此間之通り　田邊五大夫

新番頭井上半大夫跡、可被仰付哉　千本藤左衞門

此間之通り　加賀九郎右衞門

此間之通り

小宮(山)周藏

蔵奉行千本藤左衛門跡被仰付、御役料五拾石可被下置哉、中領支配可被仰付哉、

水谷壹岐

佐野門藏江戸留守中、御鶴假支配可被仰付哉

山本左衛門御書院番頭ニ相成候へて、御鶴支配明候故、明後日ゟ唯御鶴假支配

被仰付。

鈴木主税

渥美直記家屋敷へ

渥美直記

山本源左衛門家屋敷へ

奈良禮大夫

鈴木主税家屋敷へ

山本源左衛門

奈良禮大夫罷出候御役屋敷へ

右之通替可被下哉

雨森儀右衛門

御頭可掛り可被仰付哉

是迄御頭指掛りハ御目付席頭ニて相勤候例ニ候得共、此度八百里席頭ニ候得

共、被入ニ付、相暫申付候限相伺之。

本多彌六

下領支配可被仰付哉
是譯ハ小宮(山)周藏被仰付候へハ、下領と可相成筈候得共、また西方寺村姫王村との公事落着ニハ(候)得共、餘濫有之、飛入ニ相成、直ニ相さてき候得は、又初方承不申候へハ出來不申、彌六ニてハ、其邊の所も少しハ呑込居候ニ付、領替ニて下領と可被仰付事。

〆

八日被仰付分

覺

有賀内記

御役儀御免被成、席之儀ハ岡部左膳次被仰付候。

太田三郎兵衛

御役御免被成、御側物頭次席被仰付、御役料共儘被下置候。

但席中村八大夫次

田邊五大夫

御預所懸り可被仰付哉、御預所掛りハ、至る重い役事ニ候得ハ、一日ニても五大夫ニ被仰付候と申談候事。

〆

佐野内膳

御鵜支配可被仰付哉

此方宜ヶと申之。乍然山本源左衛門町奉行、田邊五大夫新番頭といさし候而、此間三人退役と申、跡の趣意が相立不申ニ付、一邊自地ニいさし候而、夫ゟ後日又ゝ右之通り申付候へハ宜ヶと存候といふから、家老も尤といふ故、明後日三郎兵衛同様、源左衛門五大夫一所ニ退役と相極る。　彌次郎罷出、孟子申上之。

於江戸申渡

不快　天方孫八

名代　毛受傳三郎

天方孫八儀、御役御免被成、御近習ニ被指置、御足高其儘被下置、御側御用人次席被仰付候。　其段孫八へ可被申聞候。

五ツ半時過寢ル。

七日　雷晴後雨風

今朝目覺六ツ半時。

五ツ時之供揃ニ而、本丸へ移り、例之通り祝禮受ル。

末之番外相濟候而、居間へ歸り候折、於時計之間立掛り、新宮凉庭目見申付、用人

新宮凉庭に謁を賜ひ献金を嘉賞せらる

新宮凉庭と披露。此方云、此度奇特之趣申出、心入之義ハ満足ニ存ル、道中無事テト。其時八郎兵衛、御目見被仰付、御意被成下難有仕合奉存候段、取合有之。

新宮凉庭目見申付候後、奉行共直申渡。於勘定所

先年御實意を以、御調達有之候金子證文類、今般格別之御趣意ニ而不殘御上納可有之段、御達之趣、重役ゟ申聞、於拙者共も大慶ニ存候。則聽ニも達候處、御厚意之段ハ辱被存候。猶又受納有無之儀ハ、追て從此方可及御挨拶候條、此段拙者共ゟ申達候樣、重役共申付候。

岡田喜八郎の郡奉行

此方秋田八郎兵衛召呼申付候ハ、昨夜も篤と相考候跡、小宮山周藏之義ニ候、此度郡奉行ニいたし候へハ、世上ても變な人を出した、周藏義ハ側向頭取も相勤、夫レさへ勤まらぬ位ニ候へハ、中々以、郡奉行抔存も寄らぬ、右之通り周藏を不存寄出し候へハ、宜く候得共、元手元ニ指置人體も能承知之事ニ候故、昨日家老へ指圖いたし候所ハ無念候間、此者之義は相止め、岡田喜八郎ニ申付候樣可致事。將又山本源左衞門、田邊丘大夫も一邊白地ニ相成候而宜くと申候得共、しかし是も、世上て申候ハあの源左衞門、丘大夫、御目付も勤メられすして、又御役御免て、又々町奉行新番頭被仰付候ハヽ、をかしな事シ・ヤと被申ても殘念之事ニ候

間、先日家老伺之通り、兩人共新番頭町奉行同日ニ申付候樣可致事。　右於本丸申。　八郎兵衛御座所へ居間へ罷出申達候處、御家老も至極御尤之旨申之。　猶又御目付へも相調候處、差支無之旨申ニ付、其通りニ相成、右之趣故、喜八郎申付書別段相渡、左之通り

岡田喜八郎

郡奉行千本藤左衛門跡申付

外記
帯刀江

彌次郎罷出、孟子申上之。　五ッ半時過寢ル。

七月八日

八日晴

今朝目覺六ッ半時、半右衛門罷出綱目申上之。

秋田八郎兵衛有故而歯痛引込。此譯、今日內記御使ニ罷越候故、昨日列朝いさし、今日御使と云も、情實ニて不被忍、有故引込。　秋田八郎兵衛引込ニ付、名代松平源太郎、月番相馬一九郎、用番狛帯刀宅へ罷出、夫ゟ內記へ使相勤。

有賀內記

御役儀御免被成、席之儀岡部左膳次申付。

〆　源太郎罷出、有賀内記恐入御請無異儀申上候段申之。

太田三郎兵衛

御役儀御免被成、御側物頭次席被仰付。御役料共儘被下置候。但席中村八大夫次

右於用部屋申渡

田邊五大夫

御預所掛り被仰付候段、於用部屋申渡。

相馬一九郎罷出申達候ゟ、飛脚未ゝ到着不致ニ付、關ケ原邊迄別人之飛脚者差越様子相調候筈。

彌次郎罷出、孟子申上之。　五ッ半時過寝ル。

九日晴

今朝目覺六ッ半時、半右衛門罷出、綱目申上之。

五ッ半時於御座之間、笹治織居家老職申付。次第左之通り

篠治織居 家老

篠治織居

其方儀、家老職申付。

織居轉役奉畏候段申之。又外記之方へ向ひ、重キ御役儀被仰付、難有仕合奉存候段、御請申之。

夫ゟ於用部屋、織居席之儀ハ、猶帯刀次と申達。

一井上半大夫
同　三太郎

年寄候ニ付、隠居被仰付、悴三太郎へ家督無相違被下置、大御番組被入。

奈良權大夫

病身ニ付、内願之通り御役御免被成、御近習ニ被指置、御廣敷御用人次席被仰付。

但席大關新五左衛門次。

右之通り於用部屋申渡

有賀内記

其代役篠治織居跡申付、與力預ケル、

内記、外記ゟ方を向ひ、不存寄結構被仰付、難有仕合奉存候段、御請申上之。

中根靱負
側用人見習申付

松平源太郎
留守居役毛受傳三郎跡申付

皆川多左衛門
書院番頭御用人奏者兼松平源太郎跡申付

牧野幹吾
大番頭中根靱負跡申付

山本源左衛門
寺社町奉行奈良權大夫跡申付

淺井八百里
席其儘、目付役太田三郎兵衛跡申付

田邊五大夫

新番頭井上半大夫跡申付　千本藤左衛門

目付役田邊左大夫跡申付　加賀九郎右衛門

目付役山本源左衛門跡申付、役料百石遣ス　岡田喜八郎

郡奉行千本藤左衛門跡申付、役料五十石遣ス

右之通り申渡、家老外記取合有之。

終る

右隠居之御禮申上之、家老取合有之　井上半大夫

皆川多左衛門

番組加賀九郎右衛門へ申結構被仰付候段、御禮家老取合有之。　有賀内記

役中知行地方ニ直し
本役同樣相勤候樣、席秋田八郎兵衞次
席松平源太郎次
鵜假支配申付
渥美直記家屋敷江
山本源左衞門家屋敷へ
鈴木主税家屋敷へ
奈良權大夫罷在候御役屋敷へ

中根靭負
牧野幹吾
水谷壹岐
鈴木主税
渥美直記
奈良權大夫
山本源左衞門

御預所懸り被仰付候　　雨森儀右衛門

下領支配被仰付候　　本多彌六

　　岡田喜八郎

中領支配被仰付候

右之通り於用部屋、月番家老申渡。

隠居御禮の儀について

秋田八郎兵衛中根鞆負兩人罷出申達候ハ、先刻鉄炮之間へ隠居之御禮之儀ニ御座候ハ、一體多左衛門最初ニ出、夫ゟ隠居御禮と申事ニ御座候、則澁谷權左衛門存付候ニ、隠居御禮ゟ跡かと、御目付儀右衛門ニ爲調候處、先と申候故、左樣相成申候。　右ニ付儀右衛門伺書差出、用人月番相馬一九郎氣付候義申候間、兩人共遠慮伺差出申候。　差出候ハヽ、不及其儀旨可及差圖候段、申達ス。

彌太郎罷出、孟子申上之。　市橋万右衛門罷出、柔術稽古、相手生田十左衛門 矢野市左衛門　五ツ半時過畢ル。

七月十日

十日晴

今朝目覺六ッ半時、半右衛門罷出、綱目申上之。天方孫八此度退役ニ付、於江戸表、御住居　龍邸　砂村　田安等ニても大驚愕可罷在段遙察致ニ付、哥嶋へ此方以直書、磯岡之方迄申遣し候様ニと、致書付相渡し、龍邸へハ伊勢守殿之方迄、時候見舞旁申遣し候。雲丹壹壺進覽。

今日飛脚出立ニ付、文武延引。一位老君へ直書献呈。白山製寒晒献上、此間孫八献上之。五ッ半時過寢ル。

七月十一日　評定日

十一日晴

今朝目覺六ッ半時。長谷川八十郎罷出、銕炮稽古。相手大谷儀左衛門

今日評定日ニ付、八郎兵衛評定所へ出る。靱負霍亂ニ付、今日一日引込。

八郎兵衛罷出申達候而、筱治右近、有賀此面兩人講談御相伴改る被仰付候積、思召も無之哉と申ニ付、宜クと申之。天方孫八、中村政右衛門、高畠甚五左衛門兩家印可ニ付、外吉老共と一所ニ廻り被仰付候而も、孫八迷惑も可致哉ニ付、兩家御稽古之節も是迄之通り、其節も罷出候様御用人迄申通し候様可致段申之。是も宜クと申之。穴生田村之儀、幸美濃部半七と、御内用御右筆引請野村四郎左衛門兄弟ニ付、四郎左衛門方半七へ相咄候積。

土屋市兵衛判行のこと

土屋市兵衛、此間印行し儀、彌筆管ニて押ひ事、右故右様ニ相成ひてハ大變ニ相成ひニ付、御用人共心得を以、番改メ申付ひ積。此後ケ様し事の無之ひ様、嚴申付ひ積。彌次郎罷出孟子申上之。中村政右衛門罷出、鎗術稽古　相手中山太郎左衛門

評定所

評定所

別紙之通り被仰付ひ。其段可申渡旨、家老中申聞　市村勘右衛門

別紙

右大將御暇相願ひニ付、養子孫藏と申者、無役小算ニ被召出、御充行拾弐石三人扶持、被下置ひ。　御徒　伴庄五郎

右之通り可申渡ひ

高屋半三郎養子權左郎儀、當年二拾七歳罷成ひ、御序之節初而之御目見被仰付被下置ひ様、願書付共家老中へ申達ひ。　大宮万之丞

中川主膳

御留守番組川地權内儀、當年江戸詰罷越候處、兼る痔痛御座候ニ付、爲介抱悴平藏召
連罷申度旨、願口上書指出、其段御家老中へ申達候。

皆川平右衛門

牧野幹吾御番組早野織之助娘儀、南居村陽願寺新發意妻女ニ指遣申度、緣組内證申
合候旨、願書付指出、其段家老中申達候。
　但幹吾忌中ニ付私相達候。

〆

五ツ半時過寢ル。

十二日晴

今朝目覺六ツ半時。五ツ時揃ニる灸事有之。
家老罷出岡田喜八郎跡役、小姓並近習番等相伺。

御小姓岡田喜八郎跡可被仰付哉

彥坂又五郎
三寺虎太郎
武田鶴助

此内壹人御近習番彥坂又五郎跡被仰付、御書院番組へ可被入候。

右ニ付此方虎太郎ニ可申付と及差圖。家老明日可申渡段、相伺之、宜〻と申之。

秋田八郎兵衛中根靱負罷出申達ハるゝ大御番新番難澁之面々、手當相願フ人數

左之通り。

借米願の人々

引揚拜借米願之面々

△願高五俵　大御番二ノ　野村安右衛門

△六俵　同三ノ　川崎平三郎

△八俵　山田重之助

△三俵　中田作三郎

△三俵　同五ノ　横山吉大夫

△願高五俵　大御番六ノ　吉田傳右衛門

△五俵　新番一ノ　織田金左衛門

△五俵　山路辰五郎

△五俵　中村久之助

△五俵　川戸他四郎
△五俵　同二ヽ石津仲右衛門
△三俵　伊藤啓次郎
△五俵　牧山半次郎
△五俵　安藤久藏

〆

目付取扱ニて、手形三俵宛引揚拜借申付

澁谷權左衛門

皆川多左衛門忌中引込中、二番ヽ御書院番頭假御徒支配被仰付候。

右ハ多左衛門忌中ニ付如斯相成ル

秋田八郎兵衛中根粉負兩人罷出申達候ヘ、御覽御日取ヽ儀、ヶ樣相伺。

七月廿一日　長谷川八十郎

同　廿三日　津田源之丞

同　廿六日　宇都宮五郎助

同　廿九日　〳津田傳七

同　日　　　　　　　筒井十大夫

右之通り相伺之

若年寄格
御錠口
初瀬

初瀬若年寄格ト為ス

年来格別出精相勤候ニ付、若年寄被仰付、御充並之通可被下置候哉、宜ヽと申之。明日取扱候段申述。

飯島四郎右衛門罷出、弓術稽古。相手小坂小兵衛

彌次郎罷出、孟子申上之。

茱崎浦　太左衛門
　　　　十郎右衛門

常平錢献上

常平錢　五拾銅大小有之

右献上

一丁錢弐拾八貫六百九文

内拾貫五文　大ノ方

拾八貫六百四文　小ノ方

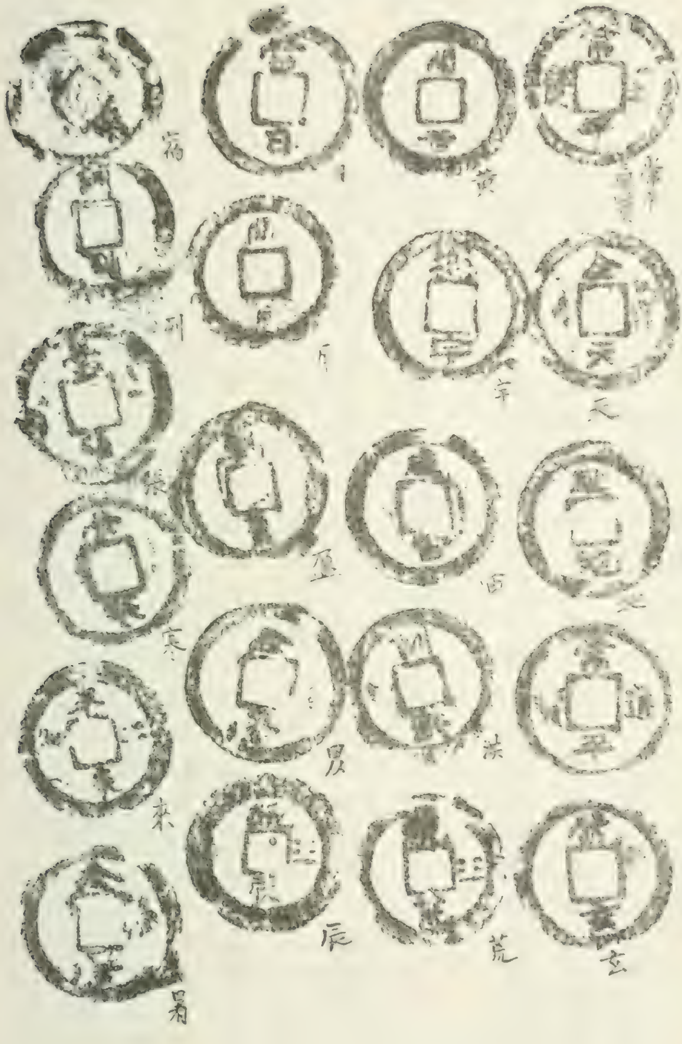
一古釜壹ツ

右者當午正月二日、此兩人鮑蛸之礒漁ニ罷出、公領左右浦地内海中ニ而漁業いたし候節、同所字鹽金崎と申海底岩間ニ、菰包三ツ相見得候ニ付、掛揚候處、右之品々拾歸り候段、中領（本多彌六支配下）郡役場へ申達候ニ付、其砌本保役場へ及掛合候所、夫々調之上、去月廿四日於本保役場、右錢釜拾揚候ものへ被下ニ相成候ニ付、右之通り献上、中領郡奉行岡田喜八郎ゟ差出、現物故、早速側向頭取へ預、後便少し老君へ献呈之積。

錢考

此錢朝鮮の品なりといふ。則前月岡部左膳の所へ、横越村證誠寺參舍ニ而、此由相者なし申候。一體此錢、太左衛門十左衛門當正月二日引揚候ニ付、後世此を見候人も誠ニ愛度と可申候。又一ツニハ名も常平錢と云て宜、乍然、いつ何時、海中又者山地ニても掘出し引揚可申哉も不知、決て祥瑞ニ者なし。まのし品者珍物之。

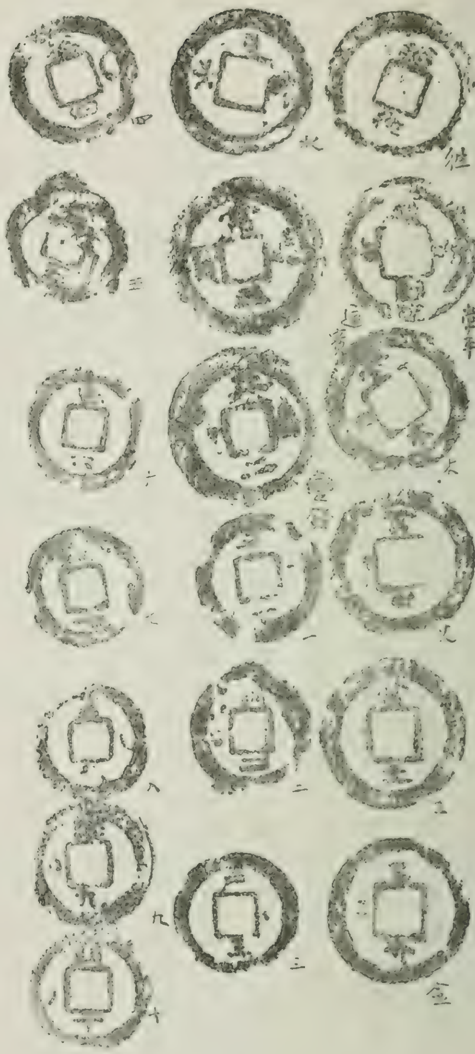
五ツ半時過寝ル。



七月十三日

十三日晴

今朝目覺六ッ半時、今日ゟ十六日迄、稽古事相休。　主税罷出申達候ハ、彦坂又五郎今日御用召ニ付、昨日御切紙頂戴いたし、早速御禮ニ可罷出候所、新役候事故、辨へ不申、養父清水可涼（又兵衛事）も長々御側ニ罷在、是以氣付可申候所、餘りの歡悅さす、忘却いたし奉恐入候。　何ニも思召不被爲在候哉と相伺候ニ付、存寄無之



段申之。

御小姓岡田喜八郎跡被仰付候　彦坂又五郎

御近習番彦坂又五郎跡被仰付候。但席　番川村乙三郎次　三寺虎太郎

右於用部屋申渡、席之儀ハ用人申渡

若年寄格

御錠口

初瀬

年来格別出精相勤候ニ付、若年寄被仰付候。充行並之通り被下置候。

右家老方側用人へ申聞、側用人方哥嶋へ申聞、哥嶋方今日初瀬へ申渡。

三國の相撲

御勧進相撲之義、於三國金鳳寺相願候處、心當相撲共、所々の相撲ま出候ニ付、心當違ニ相成、迷惑致候ニ付、加賀國大聖寺領村々相撲共召呼申度願、三國庄屋奥印ニて相願ひ、是迄他邦相撲入不申一昨年方の趣法候得共、此度之儀を格別之事ニも候間、相免し申度と願候ニ付、其通りと申之。

彦坂又五郎壹番頬へ割入候様。

明日例之通り盆ニ付、運正寺安國殿參詣、是又例之通り可致筈之處、右清メ、右筆部屋先例ニて、安國殿之先番用人幷小姓近習番斗服穢御改メニる、其餘も構無之處、元來今三度めし表ニ相成、此方ニハ前夜ゟ之清メニ付、一昨辰年ゟ右安國殿、先番外當番之小姓近習番も、明日ゟ服穢改ニ相成候得共、其餘供も素ゟ、孝顯寺慈本院等先番家老用人等何も構無之、唯々小姓近習番而已之事ニる、不都合之廉々も有之ニ付、却て舊格ニ復し候方可然哉之旨、主税側用人へ申談、主税直ニ此方へ、右之趣申達候處、以存、江戸表安國殿參拜之當日を以、則此表ニるも御宮江參詣之節之通り、城中屋形中之事前夜ゟ服穢改、尤供先番都る安國殿參詣相濟候迄も服穢改、側用人へ直ニ申付。

相馬一九郎罷出申達候ハ、一昨年御趣意ゟ後、御草履取壹人ニ相成候處、差支之趣有之ニ付、此度ゟ貳人ニ相願ひ申候。其通りと申之。

彦坂又五郎三寺虎太郎、今日ゟ三日見習。

七ツ半時過御迎火焚、直ニ大奥佛殿へ參り拜。

五ツ半時過寢ル。

十月十四日

孝顯寺等
日寺等へ
御參詣

十四日晴

今朝目覺六ツ半時、

五ツ時供揃ニて　慈本院御靈屋傚公　孝顯寺　蓮正寺　瑞源寺　森嚴寺へ參

ニ付參詣。歸宅四ツ半時へ壹寸前。蓮正寺淨光公、隆芳公、源齡公、隆德公、威德公、一天樂公、蓮觀公、昇安公、治正公、舉仙公、御灰塚公方

御靈屋相濟テ、右之通り孝顯寺御靈屋相濟テ、孝顯寺殿御質、瑞源寺探嚴寺

公　御靈屋相濟テ、右之通り夫方森嚴寺も淨光公御灰塚散參ニ參ル。

供之面々

觸頭　熊谷熊之助

使番　石川彌五大夫

徒頭　青木與一右衛門

時宜役　畑中藤八郎

大番　星野織之助

小野太郎大夫
西脇林右衛門
市嶋左太右衛門
下馬門々番　今村五兵衛
大番頭　菅沼市左衛門組
使番　中村庄兵衛

歸り掛

例之通り
盆中ニ付山御佛殿へ拜詣。
側用人罷出色々相咄し候内、雪江（雪江と者中根靱負之號故、跡々雪江と記。）申候ハ、昨日中山道通り歸り候者申聞候ハ、熊谷なハ手當出水ニて舟渡之由、高崎城下者水つきと承候。
昨日秋八、雪江罷出申達候者、御家中之内難澁物御手當相願ひ、其後荒井茂左衛門手當相願ひ候ニ付、前件之通り三俵引揚拜借申付候段、申達之。
五ツ半時過寢ル。

七月十五日

十五日晴

今朝目覺六ッ半時、

中元之爲御祝儀、從　松榮院様御使用人相勤（相馬九一郎）

秋田八郎兵衛中根靭負兩人罷出申達候ハ、鳥羽中村八幡宮之儀を、御前ニも御承知之通り、　忠直公大坂之役御出陣之節の御木像御堂及大破候ニ付、此度右村方願出、再建致度旨願書付指出。　上方も二歩（二歩とそ三百疋之）御寄附之積申上之。

鳥羽中村八幡宮修繕

生靈ニ付、御迸り火有之ニ付、其前御佛殿へ拝詣。　五ッ半時過寢ル。

七月十六日

十六日晴

今朝目覺六ッ半時、　今日諸有司出仕無之。

長谷川八十郎召呼、鉄炮稽古。　小栗次右衛門印可ニ候得共、平生稽古之節を、評定日ニ付不被罷出候ニ付、今日を以存召呼、今日ゟ此方まちを習フ。　並二寸角小的もいたす。　五ッ半時過寢ル。

七月十七日

十七日晴

今朝目覺六ッ半時、半右衛門罷出、御遺訓拝誦。

秋田八郎兵衛中根靭負兩人罷出申達候まゝ、近藤爲吉（小算）親才兵衛ゟ之存念ニて、

兼て貯置候ニ付金子金二朱五包五拾兩献上致度旨、願書付指出、受納いたし申候。

右ニ付側用人へ預ル。

運道の爲ニ相成候ニ付、遠馬位いたしいるも可然哉ゝ旨、家老抔と相談致候旨、咄す。尤取とめ候義ニるそなし。御貸馬も、とふかそしまる鹽梅之。まさ不分。

澁谷權左衛門罷出申達候ゝ、先日迎ニ出し候飛脚ゝ者、未さ歸り不申ニ付、不分候間、今一人遣し、此度そ、近國關原ゟ遠く候て宮迄迄出し承らせ可申と存候といふ。其通りといふ。

算盤を求める

算盤、下情並天地ゝ數を試候さめ相求。

大學會講

今日ゟ大學謹會講有之。序ゟ講師松波彌次郎之。

弓術いさす相手木内甚兵衛乘馬いさす。五ツ半時過寢ル。

七月十八日

十八日曇後大暴風上西雨

今朝日覺六ツ半時、半右衛門罷出綱目申上之。

家老用有之、譯そ中野儀右衛門今病死候ニ付、死後達書見セル。

御量制

御量制御ハッキリ相立、昨年ゝ所ゝ御入箇帳ヲ以見セ候段申之。尤奉行勘定奉行

御常用手

掛り方差出書付、

已年壹ヶ年御地盤御本立を以御常用元拂指引　　江戸御常用

一金貳万六千九百三十三兩三分

判金壹枚

金三千三百三十四兩貳歩三朱

銀八百八拾貫五百三拾六匁五分六厘　　惠國常用

白銀百貳拾九匁

右四口皆金ニシテ

壹万九百九拾三兩壹歩貳朱　　但判金壹枚貳拾五兩

金壹兩百拾五匁三分四厘

白銀六拾匁直し

三國與兵衛當座調達利足金戻り歩指引殘り

一金貳千貳百八拾六兩三歩

〆四万貳百拾三兩三歩貳朱

此御本立

金八百貳兩壹歩貳朱　　已經御拂米代

銀貳百四拾八貫貳百六拾六匁壹分四厘

銀貳千八百壹拾壹貫九百四拾五匁八分八厘　　十四領賣付銀夏夫銀秋夫銀其

銀貳貫三百貳拾八匁四厘　　鹽場運上町小物成

銀百貳拾四貫三百八拾八匁九分八厘　　三國口銭銀

黒龍宮に

銀四貫百七拾六匁貳分七厘　　御普請銀
銀八拾四貫貳百八拾三匁壹分五厘　　與内銀
銀七拾八貫五拾壹匁六分九厘　　綿麻代上納
銀百三拾貫匁　　御趣意方上銀
金七拾九兩壹歩三朱
銀四百貳拾七貫六百匁壹分四厘　　兩御金方諸上納並川除銀鷹餌代上道納銀共
金七千五百五拾七兩貳歩　　己年納米之内三國與兵衞に御渡米代
此米壹万八千八百九拾四俵　　但壹俵四拾六匁壹分五厘餘運賃指引假積り
右口々
〆四万貳千六百拾四兩三歩　　但金壹兩百拾五匁三分八厘
指引る
貳千四百兩三歩貳朱　　御殘金ニ相當ル
〆

右入覽此時分、南風風巽少々有之。
家老申達候處、旱魃ニ付、雨乞之御祈禱伺。

相馬一九郎

長々天氣續旱魃ニ付、於黑龍宮雨乞之御祈禱被仰付。別紙之通り可被供候。

由乞の御

天方孫八を召さる

大風雨

別紙

黒龍宮江　金百疋

右今日早速申渡管

〆

今朝少々雨降り、直に相止ミ申候。四ツ時頃ゟ風少々有之候。九ツ時頃昼飯相済、庭廻り致候刻、風巽吹つのり申候。八ツ時頃今日居合稽古ニ付、天方孫八罷出候間、召呼色々相そなし、菓子茶抔遣ス。右ミ刻雨降り出し候ニ付、風もそや是ニるとまり可申と存。然ル所一向相止ミ不申、次第吹募候様子之。雨も大分降り、並風も大分つのり候ニ付、南ミ方雨方をさて、北ミ方障子をしめ申候。八ツ半時ニ相成候ニ付、風未さ不治、風雨大分そけしく候ニ付、稽古所へ参り候事不能ニ付、縁頬を不通、休息後ロミ方より稽古所へ参り申候。其刻大奥と表と境の板塀、危吹倒れ可申哉も難斗候ニ付、奥ノ番心配いさす。夫ゟ居合つかひ候時分、風少し静まり候やうま被存申候。大谷半平可印とり手をあひ、夫ゟ又此方大刀奥をそあひ申候。又ミ上西風吹起り（初南風後西風）一いき大風雨ニて、立木の枝抔降候ニ付、大銀杏（イチヤウ）等稽古所へ

倒れ候へそ、甚危ク候ニ付、俄ニ稽古相やめ、表通り居間へ參り候所、大暴風雨ニ付、北ノ方雨戸しめ、二ノ間ニ居申候。枝並立木數本おれ候樣子、其音地響きいたし、とンと雷のなり候樣ニとう／＼となり、側用人兩人（秋田八郎兵衛 中根靱負）請、天方孫八も罷出、小姓一同（近藤雄藏、桑山彦助、上月熊之助、波多ノ瀨太郎、堀達之助、彦坂又五郎）詰居、其内二ノ間もり候ニ付、直ニ銕炮ノ間へ移り申候。此時別る大暴風。七ツ時過少し穩やうに相成申候。是ゟ段々相やミ、七ツ半時頃ニハ微風も無之候。右少し穩やうニ相成候ニ付、元ノ居間へ參り候所、居間二ノ間疊不殘上ケ、もり申候。休息同樣、後ロノ方へ參り見候所、銀杏吹折、△印ノ天井をつきぬけ候る、枝ゟ少々斗出申候。夫ゟ家老酒井外記、狛帶刀兩人機嫌伺ニ罷出、是ゟ用人追々ニ出る。二番頬側向も追々罷出、皆前へいて申候。酒井彦六初てえ。右ハ人申候ハ、國枝藤兵衛本家共潰候由。其外長屋塀等も損所數多有之由申候。又高田孫十郎ノ家潰、孫十郎と母と一所ニ家下ニ相成候由、不慇なる事ニ候。如何一命助候哉、一向分り不申と申取沙汰ニ候。

夫ゟ大奥ニ一間有之候付、當分こゝすおり候積。雨もりもきこしニ付、主税側用人抔見分いたし申候故、暮合六ツ時少し前、大奥居間へ參り申候。まと表居

町在民の救助を命せらる

間ニ居り候時分、何分ニも救恤の道相立候やう、側用人迄申付候。　日比彦之丞御機嫌伺ニ不罷出ニ付、色々相尋候所、彦之丞家潰、妻悴等を外へいて候得共、彦之丞も一旦外へ出、又々御朱印を取りまいり候時、潰家下ニ相成、しのし命ハ助り、足少々すりむき候由。　右故御機嫌伺ニハ不罷出由。　田邊周吉大番筆頭當時江戸詰家潰、兄弟二人死亡と由。　誠ニ氣ら毒不慇なる事、絶言語候。　夫よ

當番側向留守安否承候所、小遣指遣家内安全と旨申來候由。

瀧ケ鼻と申所ニ屋敷有之

側用人等毎度召呼候、家中は申すニ不及、在町等家潰難儀可爲ニ付、握飯等ニ而も、或粥抔ニ而も、民命か一番ニ候間、何分雜費を不構、能々手當致遣候樣申付。　尤堀廻りは申ニ不及、居間邊も少しも搆不申候樣申付。　六ツ半時頃三度めし喰、夫よ雪江罷出申達候ハ、先刻御家老共、三國與兵衞、室屋惣右衞門召呼、御用金等も可被仰付哉と内意申含へき哉と事申候得共、却而夫ハ、驚ヒヤウシニ相成へく候間、御奉行共へ申聞、とめさせ候樣ニ可致と八郎兵衞とも相談候事と申之、左樣取扱可申旨申聞之。　又々八郎兵衞雪江罷出申達候ハ、御奉行もなる不と驚ヒヤウシニ可相成候ニ付、見合可申候樣ニ御家老共へ申聞候得共、家老と内狛帶刀別而不同意ニ付しのき無之ニ付、此方ゟ逢候而、問答致候樣兩人申達

候ニ付、早速面談可致旨申之。兩人夫ゟ家老へ申達候る、四ツ半時頃面會いたし申候。右之節之手續共荒増認候也。外記帶刀織居罷出、互ニとふも誠ニ天變未曾有之事、心痛至極、扨殘念なる事とくり言申之。夫ゟ外記申達候ハ、誠ニ今日之天變ニ付、此上之御入用如何相運候哉、一向難知ニ付、何分ニも三國與兵衞、內田惣右衞門共外御城下元〆共召出、行々御賴金もの故、鳥渡口さし致置度段申之。右ニ付御奉行ゟ差出候書付、

今日之天變言語に絕し、奉恐入候。何も見請候通り、御城廻りを初大破ニ及び、御損毛と申、其上御家中ヲ始、末々之者共急難之義ニ、是非御救不被成候半るて難相濟趣、然ル處兼る之御難澁ニ付、指掛り御手當之御手段無之候間、何も上之御心痛奉恐察、何分指當り御助勢申上、丹精を盡し出被有之候樣、

御奉行共

右之通り指出申候。然ル所又之御奉行共罷出申達候ハ、又之跡ニて熟考いたし、相試候所、とふも驚拍子之樣ニ被存候間、先此度ハ御止ミ被下候樣奉願候段、御奉行共申聞候得共、乍然、莫大御入用ハ眼前之事ニ候間、跡て御用御賴金等被仰付候節、とふる御入用莫大之事も、眼前之事なれハ、最初ニ御沙汰之有之候ハゝ、宜ク抔と小聲（サヽヤキ）候るも不宜ニ付、只今御出シ被成方宜クと存候。於私共少々

人替文面仕候間、入尊覧候段申之。

今日之大變綸言恐入候事ニ候。何も及見聞候通り、御城廻を始、夫大破、且而御家中を始末々之者共、急難之儀ニ是非御救不被成候半而ハ難相濟、然ル所、當而之御難儀ニ付、指掛り御手當之御手段無之、其方共ニ而も家作損所之儀ハ同樣之事ニハ可有之候へ共、上之御心痛奉恐察、何も丹精を盡し、御助勢申上呉候樣頼入事ニ候。尙追ニ御奉行共ゟも可申聞候間、左樣相心得可申事。

私共部屋共召呼直演説いたし候積、思召も無之哉相伺之。此方申之、假令何ニハともあれ、誠ニ此度之天變不容易事ニ候へ共、家中潰家町在も同樣之事察入申、夫を賴ふンてもあふといふ樣な事共、第一不相濟事。何分天變ゟあれ共、物之入がハあとり前之事ニ候へ共、ソレて借財之出來候ハヾあるさなし、何分明里藏本一二万斗有之共、救恤之道相立、此方身かいか躰ニ相成候とも無搆、衣物を始、小道具方ニ有之候有金も悉々出し、衣物ふりをいたし候てなりとも、民命大事之事ニ候間、能々相考、左樣な心得違之無之候樣、彼者共も、さぞ可爲難儀と申候。ソレても色々な事申候間、其方共ニ此度之儀相任候間、宜樣取扱可申旨つき放し候所、夫ニ少々こまり、何分御前と御談可申上旨答フ。左樣候ハヾ、此方着國をいたす段申ニ付、右之書付共不用ニ相成申候。左樣ニ候ハヾ、外記申

衣物ヲ賣リテ民ノ救助ニ充テシム

候ハ、行々の所ハ是非とも、とふか⦶御頼不被成候半而ハ、右様な事ニ而、‖いくら相考候而も、決ろつく〱ニ相成不申候間、ツまりハ御頼被成候思召かといふから、夫ハ至て薄情の申方、先日も禮記を見候內、死刑ニ相當いたし候罪人をきり候も、古禮ニ而ハ、宰臣伺候節ハ、君助ケル道ハなきかと申之、二邊目罷出候節も同樣、三度目の時君默して不言、役人殿下ゟ役所へ參り、彼罪人をきり候時、もふ一邊君か助ケル道ハなきかと申シ、ソコて宰臣只今斬り候と申ニ付、悲泣哀哭し、食も不喰と云ふ樣ニ相成申候事有之、（先日純淵此方ニハ而ト申候）右様なものニて、行々詰りは賴金を賴まされハ、いくまひなれとも、今から其分別ニ而ハ不宜、一文ニ而も、一毛ニ而も、なる丈少しも借りまいと云ふのかよい。夫か借りを樂ムと云のハまるひと申ニ付、彌右の愚論ハ相止、退前いたす。

夕六ツ時頃酒井彥六、慈本院へ參り候所、少しも御宮別條無之由申之。乍去、木ハ數本倒れ申候由。孝顯寺別條無之、運正寺同樣ニ候へ共、公儀御靈屋損し申候。後（ウシ）ロの方へ穴カ明き申候。もとより御尊牌ハ御別條無之、直ニ御家御靈屋へ下遷座、覺了公（一橋先代）御位牌ニ少々雨かもり申候。其餘玉垣抔ハ悉崩レ候得共、御廟等ハ御別條無之候由。瑞源寺ニ參候所、とんと別條なし。瑞源院

淺井八百里千本藤左衞門に相當一讀を命ず

様御廟の御屋根少々まくり候由。華藏寺是又同斷、本堂大分まくられ候由。東光寺是又別條なし。イツレの所ニしても、大木も悉折れ候由之。右皆川多左衞門罷出申達之。大風雨ニ付、損所其外爲見分、目付役淺井八百里千本藤左衞門兩人見廻り申付、徒目付分役共兩人爲差出、損所等の儀も、書付可指出旨申達。則潰並半潰の分書付指出申候。其餘色々用向等有之候得共、多端故不書候。誠に慶長以來、於當國かゝる大風雨無之由。古今未曾有の事、何ともたとへん方無之、痛懷せしめ候。呉々個用人等へ申聞、此度も手入、少しも無之もよろしく、民命第一番の事ニ候間、能々救恤の道相立候樣、心配可致旨、呉々申聞。九ッ時過寢ル。

民命を第一番と心得しむ

十九日晴

七月十九日



今朝目覺六ッ半時、側用人罷出申達候ハ、御家中昨夜握めし被下候處、一統有ゟさかり候由。町方ゟ何分粥を御救として被下候段、町奉行へ相達申候。潰家並半潰長屋潰等以書付相達、末ニ記ス。其外色々用多ニる、毎度召呼令相談候。何分ニも塀廻り等其外庭内ゝ木抔、修築又ハ片付候ニ不及、大工家根屋共内被留候ニ付、一統差免、家中等悉難儀ニ不相成候様可致段、呉々申付。もとより趣意是ゟ外ハなし。

彌次郎孟子可致ゝ所、彌次郎家根大分損し候由ニる、用捨相願。稽古延引。五ッ半時過寢ル。

廿日曇

今朝目覺六ッ半時、半右衛門罷出、綱目申上之。

八郎兵衛評定所へ出る。

雪江召呼、申候ハ、家中潰家ゝ様子、城廻り破損所其外一見いさしさく候間、宜取斗候様申付候。右ゝ趣靱負とても一存ニ出來兼候事故、一筆八郎兵衛ゟさ迄申遣令相談候。八郎兵衛八ッ時過評定所より罷歸り、此節御城廻りゝ御積ニる、外ゟ被爲入候と申様な事ハ、御家中ニるも難儀ニ可有之、御城内廻り斗被遊

諸門ニ懐昔御遊覧

御手元金を家中へ下さる

可然旨、御家老共ニゐら申合候由申達候。

七ツ時少し前、城内廻りいさす。庭内木戸ゟ、馬場七人番所御門出候ゐ、御宮前、夫ゟ水谷壹岐屋敷長屋潰候を一見いさし、又元ノ如く七人番所へ入り、二ノ丸御門ゟ田が作り候有之、こゝを一見いさし、夫ゟ木戸、切手門、堀勘左衛門當直ニ付、名ヲ呼ッ。そして左ミ方石段ミ上へ登り一見。又切手門を爲開候て、頬當門ゟ爲開、少し進ミ、永見與吉山本源左衛門損所一覽。相濟ンて中仕切門前石垣へ登り、國枝藤兵衛本屋長屋共潰を一見、又堀江九郎左衛門、栃屋縫之助長屋潰是又一見、不忍見爲躰、何とも譬へん方無之、夫ゟ中仕切を入り候ゐ、本丸馬場を一見、本城橋瓦門、夫ゟ大廣間へ參り、北不明門前、又元ノ如ク本城橋へ出、太鼓門夫ゟ下馬門前、御座所門元ミ道へ參る。

秋田八郎兵衛中根靭負召呼ひ、家中定る可爲難澁候間、少々ツヽニゐも、手元ゟ遣度候間、左様相心得可申旨、今朝申付。兩人尤と申之。本潰へ三百日、半潰へ二百目と割付け相伺之。當番千本藤左衛門へ相咄候所、藤左衛門申聞候ハ、何分難有仕合ミ思召故、一邊同役へも相咄し申度旨申之。桑山彥助申達候ハ、近藤雄藏母先月十五日死去ミ旨申參り候ニ付、今日ゟ定式ミ通り、忌服受申

候段申之。

評定留

中川主膳指加
飯田徳次郎

養父作左衛門家督四百石無相違被下置、寄合之席被仰付候旨、御家老中被申聞。

中川主膳

留守番組川地權内儀、當年江戸詰罷越候處、兼る痔痛有之ニ付、爲介抱平藏儀召連罷越度旨、願之通り被仰付候。其段權内へ可申聞旨、御家老中被申聞候。

外用　相馬一九郎
名代　雨森小十郎

別紙之通り席之儀可申渡旨、御家老中被申聞候。

別紙

多ケ谷舍人次
飯田徳次郎

右之通り可申渡候

〰〰〰〰〰〰〰〰

市村勘右衛門

別紙之通り可申渡旨、御家老中被申聞候。

別紙

一統格
御料理方
永嶋藤三郎

鹽辛役被仰付候

右之通り可被申渡候

皆川平右衛門

牧野幹吾御番組星野織之助娘、南居村陽願寺新發意妻女ニ指遣度旨、願之通被仰付候。其段織之助へ可申聞旨、幹吾忌中ニ付、私へ御家老中被申聞候。

山本源左衛門

別紙之通り可申渡旨御家老中被申聞候

別紙

町中
潰家者共江

米貳拾六俵壹斗五升六合五夕

但一日五合ツ、　男三百拾九人
一日二合五勺ツ、女三百貳拾三人
右一昨十八日之大風ニ而、家潰難澁至極之趣ニ付、爲御救被下置候。
右之通可被申渡候
主税ゟ以存、彦之丞へ銀三百匁元手ゟ遣之。　卽刻彦之丞御禮ニ罷出、直ニ逢フ。
五ツ半時過寢ル。

十九日の拾遺

昨十九日拾遺
相馬一九郎申達候ハ、先日被遣候道中まで只今九ツ時頃罷歸り申候ハ末ニ記ス。

飛脚延着の事情

江戸表ゟ之飛脚延着ニ付、爲調去ル八日御旗之者申遣候處、大井川ニ而六月廿五日立之飛脚に行逢、承調候趣左之通り、
六月廿五日晩立候處、呂久川ニ而六日逗留、馬入川ニ而十日逗留、酒匂川ニ而手間取有之、不二川ニ而一夜逗留、大井川ニ而三日半逗留、大平川假橋落候ニ付、一夜逗留、姉川ニテ手間取有之、追付着可致段申之。
一去ル八日晩立之飛脚、馬入川ニ而廿五日晩立飛脚と一所ニ相成、追付着可致段相達候。　但呂久川ニ而三日、馬入川ニ而一日逗留、同所ゟ廿五日立飛脚と同路。
右之趣相達候段申上之。
六月廿五日晩立通飛脚、川々差支今日到着、引續當月八日晩立通飛脚同十九日

着。

六月廿五日晩立通飛脚ゝ用狀寫

去ル十四日公儀御目付松平式部少輔へ用賴申入候處、無異狀承知有之候。

山王祭禮之儀、御宮御普請ニ付、去ル十五日相延、來ル廿九日方被仰出候旨。

七月八日晩立ゝ飛脚ゝ用狀寫

六月廿六日、阿部伊勢守方呼出ニ付、留守介田邊周吉罷出候處、用人を以別紙御書付御渡有之候付、右寫差越候。

紀伊殿嫡子相續被仰出候爲御祝儀　　松平越前守

公方樣

右大將樣

御簾中樣

縮緬一折宛

右之通、來月九日　御本丸　西丸へ以使者可有獻上候。御簾中樣江之差上物ハ西丸中之口へ可被差上候。

六月

八月々番

公邊

老中 戸田山城守
西丸同斷 松平和泉守
若年寄 大岡主膳正
西丸同斷 酒井右京亮
寺社奉行 青山大膳亮
御留守居 土屋紀伊守
町奉行 鍋島内匠頭
御勘定奉行御勝手方 石河土佐守
御勘定奉行公事方 牧野大和守
御目付 小出織部
御目付 稲葉清次郎

越城 松平源太郎

齋藤數馬
島田清左衞門
酒井彦六
稲葉式部
磯野右仲
永見與吉
熊谷熊之助
波々伯部熊藏
西尾源太左衞門
田邊五大夫
千本藤左衞門
加賀九郎右衞門
岩上梶大夫
比企佐左衞門
鈴木百助

八月朔日
運正寺御参詣

八月朔日或ハ晴或ハ曇

今朝目覚六ッ半時、

隆芳院様御忌日ニ付、運正寺へ参詣。

供之面々

猪子六左衛門
東郷平大夫
本多彌六
林忠兵衛
青木與一右衛門
狛帯刀
中根靭負
觸頭　本多五郎右衛門
使番供　雨森作助
徒頭　青木與一右衛門

明任役
淺見七十郎
大番
皆川善兵衛
山本彦助
岡島恒之助
平田幾郎右衛門
使番
中村久藏
大番頭
笹沼右平太
下馬門々番
井原烝助
水谷壹岐
皆川多左衛門
淺井八百里

當番

番頭筆頭、
用掛

隣り掛ケ鐵炮之間へ著座ニて、左之通り申渡之。

番割軍帳用掛り申付、

但家老出席無之、側用人斗

水谷壹岐、皆川多左衛門兩人罷出申達しハ、左之通り此度御番割御軍帳御用掛り申付しゝ段、相伺之。

山野十兵衛

折々御用所へ罷出しゝ樣被仰出しゝ、

假受込
根來左大夫

加勢
野田喜平次

御軍帳御番割御用掛り被仰付しゝ

新番格御帳付
伊藤清八郎

右同斷表御用兼帯相勤しゝ樣

御帳付
小林彌十郎

御右筆部屋御坊主
早見祐甫

一右同断御用掛ら被仰付候
中村政右衛門罷出、鎗術稽古相手波々伯部八大夫可罷出候所不快
側用人申達候ハ、丑寅御矢倉かこきし候旨申達し、右屋共矢根へ上ら候事も無覚
束由申之。
彌次郎いたす。五ツ半時過寝ル。

八月二日

二日晴

今朝日豊六ツ半時、牛右衛門罷出、綱目申上之。
天璋院様御忌日ニ付、代拝歸り雨森小十郎ニ逢フ。
側用人罷出者番組門野榮十郎儀、病氣ニ付病中養子小木三郎兵衛次男八十之
丞養子致度段相願之。三郎兵衛方ら同様相願。即時直ニ死後達いたす。去
ル朔日病死いたし候旨申達之。

蓮正寺修復

蓮正寺公儀御台屋大損しニ付、御修復有之ニ付、作事奉行方積書差出す。
嶋田清左衛門罷出申達候ハ、宇都宮綱太郎袖留申度段以口上書相願之。妻木
致斎悴元賞妻女無之ニ付、大番今村重太郎妹妻女致度段、内意相伺之。
輪講いたす。大學[illegible]弓術於本丸稽古相手高村長作今日ゟ本丸ニて。五ツ半

時過寢ル。

八月三日

三日曇

今朝目覺六ッ半時。井原源兵衛罷出、例ﾉ通り講談いたす。當香卷

兩人(人側用)申達ﾚハ、手元ゟﾉ手當ﾉ義ニ付、家中調書目付ゟ差出ス。

灸治

金津市中ゟ御拂米相願ﾚ所、最早米相應ニ運送有之、充澤ニ參りﾚニ付、最早願下ケいたし、御拂米の無之ﾚ樣いたし申ﾚ。爲養生灸事いたす。五ッ半時過寢る。

八月四日

四日曇。

潰家に御手元金を遣さる

今朝目覺六ッ半時、半右衛門罷出、綱目申上之。此度ﾉ風災ニる、潰家並危ク有之ニ付、手元ゟ年聊遣ス。其番頭並留守居共申呼、今日相渡。

銀三百匁 潰家 渡邊左右衛門

大番五々 國枝藤兵衛

同斷ッヽ 大谷弟八

松原外次郎

同六々　田邊周吉

同断ツヽ　今川七右衛門

中村金兵衛

同断　無役御留守居番一ゝ　松澤金平

同断　替番一ゝ　山路長五郎

同断　同二ゝ　大橋金兵衛

同断　小姓　日比彦之丞

右ハ先達而相済今度不被下

同断　平野朴庵

〆拾三人

追々遣

銀百五拾匁　大番一ゝ　松山理左衛門

同断　　同二ゝ　湯俣藤兵衛

同五ゝ　荒井茂右衛門

同断　　同六ゝ　水野荒次郎

〆四人

危候ニ付願之上疊ミ置候分

銀百五拾匁　　御書院番一ゝ　土屋市兵衛

同断　　大番二ゝ　山田重之助

同断　　留守番五ゝ　野治七郎右衛門

同断　　新番二ゝ　高松虎吉

〆四人

去月十八日大風ニ而、居宅吹潰、並追々相潰、又々難致居住候ニ付、疊ミ置候面々も有之候處、今度之破損ハ一統之事ニ而、右様之面々江親類方助勢も届兼可申

ニ付、思召を以、從御手元年聊以別紙之通り被下置候。但別紙銀高ハ箇々上ニ記

家老用有之、御金藏御年延之書付草稿ニ而爲見、此方へも添削致呉候樣申上之。

五ツ半時過寢ル。

八月五日

五日朝雨後快晴

今朝日覺六ツ半時。

評定日ニ付、判負評定所へ出る。長谷川八十郎罷出、鉄炮稽古於本丸矢場稽古。相手松平伊織、福嶋次郎ゝさせ、傳之丞ゝさせ、相手榊原仁右衛門、澤田丈右衛門

八郎兵衛召呼、昨日御金藏御年延少しツヽ添削いさし入一見。

中根靱負罷出、右之書付爲見候上、用番狛帶刀之方へ爲持差遣。

京攝紀州方面の風害

十八日越前福井大暴風之折、於京都も荒候由。紀州も大雷風雨ニ而、雷火ニ而御天守ヲ始、御城御塀廻り等、並御家中も少々燒失之由。攝州兵庫之湊も大分荒レ、粟ヶ崎木谷藤右衛門船も二三艘損し候由。三國與吉郎京都住人ゟ方親與兵衛へ申遣候書狀之由之。五ツ半時過寢ル。

八月六日

六日朝曇後雨

今朝日覺六ツ半時、半右衛門罷出綱目申上之。

目付加賀九郎右衛門用有之、評定留を見セル。其餘色々長談。

今日晩立常振道中ニる差立、右ニ付一位様へも寸書献呈。

側用人罷出申達候ハ、昨日ゟ此方添削いさし候書付、家老共畏り候段請申上之。

其餘少々心付有之候ニ付、尚又兩人へも申之。中村政右衛門罷出、鎗術稽古いさす。天方孫八も罷出、相手波々伯部八大夫

評定所

澁谷權左衛門

書院番組牧野加左衛門悴小太郎儀、逼塞被仰付置候處、今日ゟ御免被成、其段加左衛門へ可申渡旨、御家老中被申聞候

出福無之　仙石万右衛門

名代　千本藤左衛門

別紙之通り支配下に可申付旨、御家老中被申聞、

別紙

只今頃ゟ新米先賣先買致儀、並米手形不致所持、質手形を以致賣買儀、右兩樣共、急度致間敷候。此段前々之趣を以、支配下へ可被申付候。

別紙

新米出揃候迄、酒造米買込被指留候事。

右之趣支配下に可被申付候

山本源左衛門
小栗久右衛門
高間文四郎
本多彌六
岡田喜八郎

前文右同断

新番組竹澤藤大夫忰武三郎儀、道中被仰付置候處、今日方御免被成候。其段藤大夫へ可申達旨、御家老中被申聞候。

山田藤兵衛

御書院番組野田喜平次忰万太郎儀、當年拾五歳罷成候。御序之節初而之御目見被仰付被下置候樣、右万太郎母儀者、養父喜左衛門娘ニ御座候旨、願書付口上書指出、其段御家老中へ相達候。

皆川多左衛門

波々伯部 熊藏

大宮左金吾儀、横山十郎兵衛稽古所撓竹、兵庫村筋へ五宿泊り罷越、代取申度旨、願書付差出其段御家老中へ相達候。

千本藤左衛門

雨森儀右衛門嫡孫庄九郎、御目見願野田喜平次願と同斷。

上屋十郎右衛門弟小六儀、高畠甚五左衛門稽古所撓竹切、家久村筋三宿泊り右同斷、

但庄九郎母儀ハ、跡部幸八郎悴妹拾五才

皆川平右衛門

牧野幹吾御番組今村重太郎妹儀、妻木敬齋悴元眞妻女ニ指遣申度、縁組内證申合候。

右妹儀ハ、元眞と從弟ニ御座候旨、願書付口上書差出、其段御家老中へ相達候。

但幹吾忌中ニ付、私相達候

勝澤一順

奥御外科妻木敬齋悴元眞儀妻女無之ニ付、今村重太郎妹妻女ニ爲仕度、縁組内證申合候。右重太郎妹儀ハ、元眞と從弟御座候旨、願書付口上書指出、其段御家老中へ相達候。

〆

五ツ半時過寢ル。

八月七日

江戸飛脚到着

暴風雨ニ福井藩ノ被害報告

七日初曇後雨

今朝日覺六ッ半時、

去月晦日晩立通飛脚今日到著、江戸表靜謐之。

少々有故、今晝立道中三日半積飛脚指立、委細譯合左ニ記ス。彌次郎いとます、

五ッ半時過寢ル。

七日着飛脚之用狀

水野主計去ル廿八日令出立候

今度之大風雨ニ付、破損所等之儀、先御屆、去ル廿七日御用番阿部伊勢守殿へ別紙之通り、大道寺七九郎持參差出候。依之寫差越候。

拙者領分越前國、昨十八日未中刻、巽方大風吹起り、申刻前ニ至り西風ニ變り、益大風雨ニ相成、居城櫓門塀數ヶ所及大破、其餘侍屋敷を始、寺社町在之内潰家數多ニ而、怪我人等も有之趣ニ御座候。尤城廻り並木を始、立木共夥敷吹倒、大小橋々迄も及大破、古今未曾有之暴風ニ御座候。且又當作之儀ハ、無類之順氣ニ而、豐熟之運ニ候處、右樣之次第ニ付、田畑之損毛不容易樣子ニ相聞申候。委細之儀ハ、相知不申候得共、此段先御屆申上候。　以上

七月十九日　　松平越前守

以別紙申達候。 松平田鶴若様御病氣之所、御養生不被爲叶、辰上刻御逝去被遊候。 右ニ付御機嫌伺不及、普請鳴物御構無之旨被仰出之。
右ニ付御遠慮中ニ候得共、八朔御祝儀も有之候ニ付、今日御遠慮被爲解候。 明日御禮被爲請候旨被仰出候段、何も御沙汰書ニ有之候。

七月廿九日

高田作之丞

御帳付見習山崎倚助儀、不居至極之趣相聞候ニ付、御長屋閉へ入被置候間、御目付中談可被取扱候。

同　人

山崎倚助家内之者共、爲相愼指置、締り方之儀氣を付候樣、倚助親類共へ可被申渡候。

七月廿九日

中根新左衛門

御帳付見習山崎倚助儀、不居至極之趣相聞候ニ付、御長屋閉へ入置、急度吟味可被申付候。

右之通り可被申渡候

七月廿四日

阿部伊勢守殿御渡候御書付寫壹通相達候間、被得其意答之儀ハ酒井安房守方へ可被申聞候。

大目付

松平越前守殿
留守居

關東筋川々御普請之儀、堤切所、崩所等難捨置場所ハ格別、其外可成丈省略可有之事ニ候間、此度之御普請所へ籠り候場所之外ハ、假令於場所ニ願出候共、不取上筈ニ候條、決而願出間敷候。御普請所之儀ハ、掛り役人指圖次第、請書無差支、正路ニ御普請ニ可相仕立候。都而村請ニ而相仕立、外請負人等に相渡申間敷候。且御普請中、竹木其外御普請之諸色、無謂高直ニ致間敷候。

右之趣、御料ハ御代官、私領ハ領主、地頭方、村々へ不洩樣可被申渡候。

右之通り關東筋村々之内、領分知行有之面々へ可被相觸候。

七月

大目付に

右筆山崎の醜情

澁谷權左衛門罷出、用狀見せる。帳付見習山崎尙助、不屆至極之趣有之候ニ付、圍へ入被置候と申事也、定而右筆連中之事ニも候間、內狀ニても申越候哉と存候。極內右之譯承度と申之。權左衛門誠ニ嘆息至極と斗り申ニ付、再應承候所、內狀持出入披見。委細ハ略して、要用斗左ニ記す。

尙助數年來勝手向難澁之所、必至指迫り候ニ付、御右筆御帳都合二十九冊盜取り賣拂候趣、誠絶言語奉恐入候。實々而、右之譯合ニ御座候。別紙ニ有之候而、江戸表、内膳始ゟ申越候書付之。其別紙左ニ記す。

諸事留失候分

元祿十四巳年
同十五午年
寶永二酉年御部屋
同三戌年
同五子年
享保六丑年十二月廿一日ゟ
翌寅年八月十八日迄
○同八卯年御部屋
同十二未年
○同十四酉年
同十六亥年
○同二十卯年
寛保元酉年四月ゟ
○延享四卯年御部屋
同年
寛延四未年
寶曆二申年
同三酉年
同五亥年
同九卯年
明和四亥年四月廿九日ゟ
同五子年六月四日迄
安永二巳年四月二日ゟ
同三午年五月三日迄
天明八申年
文化四卯年
○同七午年
合類四冊　○内二冊有之一冊而二三寸程ニ裁切申候
〆二十九冊
○之印者出候分

同五五年

五ツ半時過寝る。

六月八日

八日初曇後或ハ晴或ハ雨

一今朝目覺六ツ半時、半右衛門罷出、綱目申上之。

今日消光院様御忌日ニ付、運正寺孝顯寺へ御代拜、澁谷權左衛門相勤之。歸り

白山玄成院ニ借金

如例達之。目付用有之。側用人兩人罷出申達ハヽ、白山玄成院、此度大講堂御

寄進ニ付、何卒於御家様、於上野御借金被下ハヽやう、夫を御渡し願上ハヽ。玄成院

拜借と申事ハ難叶ニ付、玄成院ニあらく、御家様ニる御借り被遊、玄成院へ御渡

し被遊ハヽ、玄成院方年々利金可差上、決て御家様ハ御迷惑ニハ相成不申様

心配可仕旨申之。

彌次郎罷出、孟子申上之。高畠甚五左衛門父子罷出、居合稽古相手宏本新助

五ツ半時過寝る。

六月九日

九日晴

今朝目覺六ツ半時、半右衛門罷出、綱目申上之。家老ト内狛帶刀笹治織居酒井

下屋敷不快　罷出、江戸表ゟト用状入一見、並觸頭波々伯部熊藏相伺ト日取ト儀ハ、

八月十日 御留川被下 飛脚出發 八月十一日 軍帳番割 献上の鍔形 水野主計

追る相伺候旨申聞之。市橋万右衛門罷出、柔術稽古（相手 蟹江善左衛門） 彌次郎罷出孟子申上之。五ッ半時過寢ル。

十日晴

今朝目覺六ッ半時。半右衛門罷出、綱目申上之。近々御留川被下候ニ付、人別入見。月中彌被仰付候ハヽ、又ハ御やめ被成候ハヽ、一ッ二ッニ付相伺之。是も先日ㇳ風災故之。此方申付候様申聞之。波々伯部熊藏御役替、彌十五日と相伺之。右ㇳ趣側用人相伺之。

彌次郎罷出、孟子申上之。今晩立通飛脚道中常振差立、右ニ付 尊老君へ献翰。

出淵傳之丞罷出、劔術稽古（相手 高久官大夫 竹澤五郎右衛門）

乘馬いさす。五ッ半時過寢ル。

十一日初晴後曇

今朝目覺六ッ半時、長谷川八十郎罷出、鉄炮於本丸矢場稽古、（相手 榎並左次衛門）

軍帳番割皆川多左衛門、水谷壹岐番割ㇳ儀、相伺之。

月番島田清左衛門罷出、來未年參覲之節、柳營へ献上ニ相成候鍔形入一見。

水野主計道中無恙今日九ッ半時到著、直ニ目見申付、例ㇳ通江戸表靜安之。

評定日

彌次郎罷出孟子申上之。　中村政右衛門罷出、鎗術稽古相手松尾傳藏

明日安波賀へ參詣ニ付、定道春日町參詣ニ候得共、勝見口へ參度、出城春日町、歸城勝見口ニ定ル。

今日評定日ニ付、中根靭負罷出る。

評定所

波々伯部　熊藏

大富左金吾儀、横山十郎兵衛稽古殍撓竹、兵庫村筋へ五宿泊り罷越代取申度旨、願之通り被仰付候。　其段左金吾へ可申聞旨、尤前後御目付共へ相届候樣是又可申聞旨、御家老中被申聞候。

皆川平右衛門

牧野鉄吾御番組今村重太郎妹儀、妻木敬齋悴元眞妻女ニ指遣度旨、願之通り被仰付候。　其段重太郎へ可申聞旨、御家老中被申聞候。

勝澤一順

奥御外科妻木敬齋悴元眞儀、妻女無之ニ付、今村重太郎妹緣組爲致度旨願之通り被仰付候。　其段敬齋へ可申聞旨、御家老中被申聞候。

西尾源太左衛門

新番組渡邊利左衛門儀、當年五拾七才罷成候。實子無之ニ付杉田五郎兵衛家來給人森佐右衛門と申者次男良助儀、當年拾九才罷成候。此者養子ニ仕、末々利左衛門養女と一所ニ爲仕度旨。右良助儀ハ、利左衛門甥ニる御座候ニ付、内證申合候。悴權七郎儀ハ、先達る病死仕候旨願書付口上書指出、其段御家老中へ相達候。

田邊五大夫

新番組高橋素平儀、蒲生浦專德寺由緒有之候處、無據用事御座候ニ付、五宿泊り罷越申度旨、願口上書指出、其段御家老中へ相達候。

〆

五ッ半時過寢ル。

八月十二日

十二日曇

今朝目覺七ッ半時二寸五歩。

六ッ半時ゟ供揃ニる安波賀へ參詣、歸城七ッ時。右安波賀へ參詣道筋、庭口ゟ……下馬門、鋏門酒井與三左衛門屋敷前通り操船渡舟、夫ゟ定道通り安波賀參詣。

城下ノ内松雲院江立寄。元と道通り、夫ゟ前波渡船、往還通り、河原口、勝見口通り長濱町、土橋門鳩ノ門夫ゟ下馬門歸城。

供奉之面々

觸頭
熊谷熊之助

使番供
石川彌五大夫

徒頭
青木與一右衞門

時宜役
上月八郎左衞門

大番
寺澤藏左衞門
三澤左助
中山半右衞門
黑澤源左衞門

下馬門前
伊東六郎兵衞

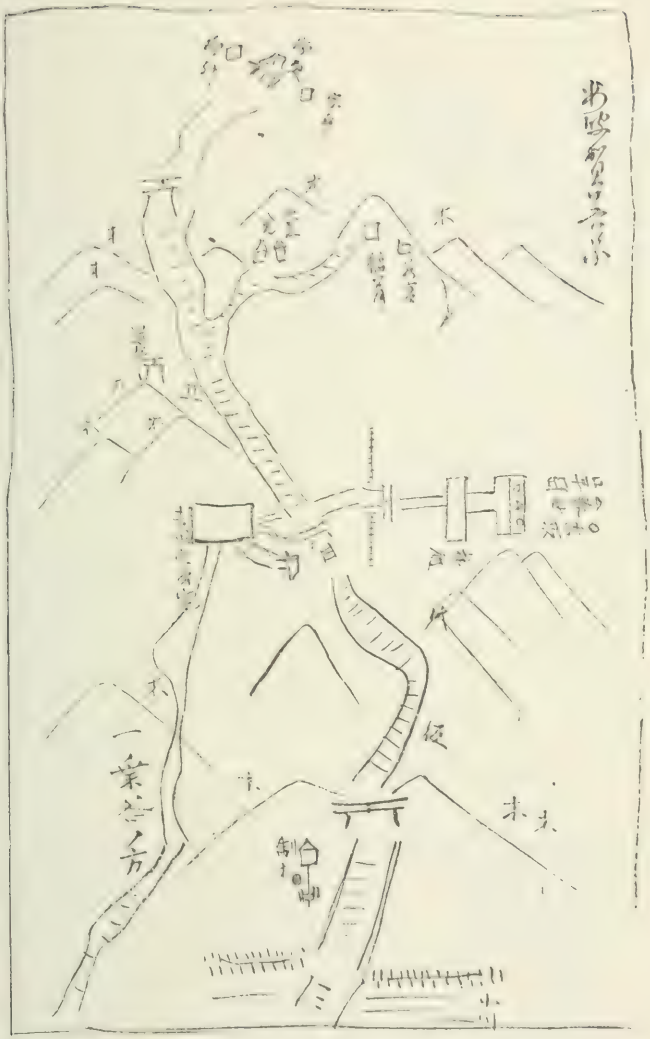
瀧殿

參詣之樣子左ニ記

春日町ゟ追ゝ參り候る東郷町通抜ケ、夫ゟ安波賀村一先ツ吉田運吉之宅へ參り、夫ゟ上下ニる春日へ參詣、瀧殿へも參詣ニる、遙拜所ニる遙拜いたし、相濟、元ノ運吉宅へ參り、晝飯を給。　重箱ノ内めし香の物斗ニる相濟。　運吉へ以秋田八郎兵衛申聞候ハ、遙拜所ハ何ニ候哉、向ひのあて社有之候を、こちらニて拜いたし候へハ遙拜ニ候得共、あてなし乎拜をいたし候へハ、空拜と申物ニて、此由承度候。　若も人々へも不被咄位の神秘ならハ、以書面申上候へとの申之。　八郎兵衛傳旨る運吉申候ハ、左樣ならハ可申上、御尤之御儀ニ奉存候。　御遙拜所ハ松雲院の方ニ向ひ、一乘谷之方ニ相成申候。

探源院樣御代御取立ニ相成申候。　則隆德院樣御代迄ハ、只今之松雲院へ御立寄ハ無之候。　隆德院御思召ニる、御立寄被爲在候。　夫ゟ御引續御座候。　其前迄ハ御立寄無之候間、右樣御遙拜ニ相成申候。　其御例ニる、只今迄左樣御仕來ニ候。　此段被仰上可被下候。　瀧殿之義ハ、乍恐淨光院樣と　朝倉家代ゝを祭り申候。　委細緣記ニ有之候得共、引つゝめ申上。　此段も被仰上可被下候。　右二ケ條以秋田八郎兵衛申上候。　夫ゟ松雲院へ立寄、歸路勝見日ノ道通り。

五ツ半時過寢ル。



八月十三日

十三日晴

今朝目覺六ッ半時、半右衛門罷出、綱目申上之。目付千本藤左衛門罷出、用有之。井原源兵衛如例軍書講釋有之。

御城下廻り

今日快晴ニ付、城下廻りいたす。

庭口方ゟ下馬門、鉄門本多四郎右衛門前横、角櫓下中根靱負前横、津田源之丞鉄炮場へ立寄、夫ゟ神明社内通抜ケ、神明裏門山本正伯前、江戸町通り清兵衛町、播磨屋小路、中油町通り、岡田喜八郎脇前、津田傳七鉄炮へ立寄、上油町通り加賀口、松本四ッ辻横町通り、津田友右衛門脇前、江戸町筋、清兵衛町御門澁谷權左衛門脇前加藤傳内脇前元泉水町、山田金五兵衛脇前、津田彌太六横前、夫ゟ三ノ丸北門ゟ切手門、中仕切元ノ庭口之。

五ッ半時過寢ル。

八月十四日

十四日曇

今朝目覺六ッ半時、半右衛門罷出、綱目申上之。

家老罷出用有之。水野主計用人ニ相成候伺。側用人罷出内々申聞候ハ、波々伯部熊藏先年妻縁いたし、則半井元冲妹ニ候處、色々の譯合も有之候て、離縁いたし申候。當時横井吉十郎妻ニ相成居候家ヲ、八左衛門女三人有之、八左衛門

の心持ニ而も、熊藏と二人の娘之内一人嫁サセさき存念、熊藏ニおき候ても左様相成候得者、家の都合ニ而相成、甚宜趣、内々其筋へ右之譯談候所、一體熊藏儀も相續の身分と八作申、八左衛門を養父ニ取り、八左衛門娘を兄弟ニ取り、則服忌有之通りま受申候公法ニ御座候。　左候得も、兄弟と嫁娶いさゝ候様ニ相成候故、甚六ヶ敷、何分此方の心を探見候様、家老共申聞候ニ付、兩人如斯申聞。彌次郎罷出、孟子申上之。　市橋方右衛門罷出、柔術稽古〈相手高松作右衛門 菅沼鎮五郎〉　五ツ半時過寢ル。

補　　　　　　　　　　　　　　　　　　　酒井彦六

於三ノ丸諸組之□中被仰付候間、同役一人つゝ御名代罷出候様被仰付候。

八月十五日

十五日曇

今朝日覺六ツ半時、

五ツ半時如例本丸へ移る。　次第事多ゆへ左ニ錄するもの之。

本丸御座之間端午之御內書頂戴相濟。　新米奉行西尾源太左衛門三方ニ而持出、退去、膳番罷出、白衣をいさし指上、此方載、少し謹食、終て長鮑指出す、奉行源太左衛門ニ遣し、相濟。　夫ゟ笹治織居役儀之御禮申上之、御式ニ相成申候。



干鯛表小姓持出、圖ㇾ通り置候得て、月番ㇾ用人島田清左衛門二ノ間右ㇾ方へ着座、用番狛帯刀左ㇾ方へ着座、其餘の家老て、□ㇾ所ニ居ル、二ノ間眞中へ笹治織居罷出、用人笹治織居御役儀ㇾ御禮と披露、家老取合有之、夫ゟ織居脱劔ニる前へ出て、長鮑を遣候節、目出度ィと申之、相濟。夫ゟ例ㇾ通り内藏助始家老當日祝儀有之。鉄炮へ移り、有賀内記城代役ㇾ禮申上、用人披露、長蚫ヲ遣ス、如最前、箱肴持出す表小姓役之同席宇都宮綱太郎、家督ㇾ禮申上、太刀目録を以、用人披露、長蚫遣ス、相濟元ノ御座ㇾ間へ參る。夫ゟ又ゝ鉄炮ㇾ間へ參り、左ㇾ通り申渡。

水野主計

其方儀用人奏者兼申付

鬮頭村上冲之助跡申付　　波々伯部　熊藏

右之直申渡、兩人共難有御請申上、家老取合有之、退去。

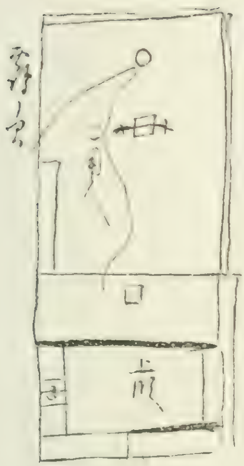
右相濟、元之御座之間へ參ル。又ゝ大廣之間へ參ル、例之通り一統之禮を受る

相濟、退去。又ゝ表へ移り刻時斗之間へ、秋田三五左衛門頭市村勘右衛門頭岡

田金左衛門、本多彌六、小島逸八、野村此右衛門用人罷出居、近々廻在と申之念を

入レと申之。側用人取合有之。是ニ三五左衛門斗御預所元〆役之。夫ゟ又

近々廻在と披露。立掛り大廣間へ參る。



飯田德次郎

井上三太郎

右家督ゝ禮申上、太刀目錄を以用人披露、長鮑直々遣ス。

同席

坂田乙五郎

山名小太郎

須崎鷺助

右家督ゝ禮申上、鳥目を以用人披露、長鮑直々遣ス。

同席

喜平次忰
野田万太郎 十五才

半三郎養子
高屋權太郎 廿七才

庄兵衛次男
中村他次郎 十八才

右初るゝ目見申付、鳥目を以用人披露、長鮑直々遣ス。

同席

係右衛門孫蓮四郎倅
雨森庄九郎
十五才

右初而之目見申付、鳥目を以用人披露、長炮直々遣ス。
何レも家老出席

右相濟元ノ御座之間へ參候刻、時斗之間山野十兵衛近々出立ニ付目見申付、用人披露、夫方入ル。又々大廣間へ出候刻、指物之間

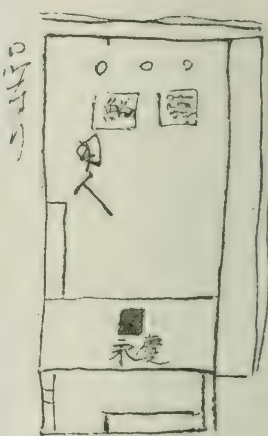
三國與兵衛
同　與之祐
同　與五郎

立掛り目見申付、
夫方大廣間へ移ル、

當代總代年寄共

如例年用人披露有之、八朝ニ毎年献上候得共、今年ハ八朝（朔）無之ニ付、今日ニ相成
申候

請繼し國の司の甲斐そなき、惠まぬ民よ惠まるゝ身ハ　敬宗公



相濟入候刻

立掛り目見申付、　三田村長門

相濟御座所へ相移ル。彌次郎孟子申上之。

出淵傳之丞罷出、劍術稽古、相手 澤田丈右衛門 榊原仁右衛門

島田淸左衛門

府中惣社鎭座千百餘年ニ相成候ニ付、今度大祭相勤申度、御由緒を以て、先々御振合之通り、御取扱被成下候樣相願候得共、格別之御時節故、御代參之儀て、御略被成、御初穗白銀壹枚御神納被成候。其段取扱候樣被仰付候。

右之趣於御用部屋申渡。五ッ半時過寢ル。

八月十六日

十六日　或ハ晴或ハ雨後晴

今朝日覺六ッ半時、銃炮稽古長谷川八十郎罷出候（相手加藤勇左衛門）。今日評定日ニ付、勒負へ出ル。彌次郎罷出孟子申上之。近習番介之儀ニ付、主税相伺候、委細不記候。中村政右衛門罷出、鎗術稽古いたす（相手中山太郎左衛門）。

評定所

評定所

齋藤數馬

牧野幹吾御番組荒井茂左衛門儀、別紙御書付を以被仰付候。何も退出後御目付共申談可取捌旨、右取捌相濟候上、茂左衛門家内之者一家共之内に引取、家屋敷指上候様、一家共之内に可申渡旨、家老中被申聞候。

荒井茂左衛門の士籍を剝る

御書付

荒井茂左衛門へ申渡覺

其方儀不屆至極之趣相聞候ニ付、侍御削被成、御國十三里四方追放被仰付候條、以上

八月十六日

西尾源太左衛門

御番組橋瀬喜利左衛門儀、實子無之ニ付、杉田五郎兵衛家來給人森佐右衛門と申者次男良助、養子いたし、末々養女と一所ニ爲致度旨、願之通り被仰付候。其段利左衛門へ可申聞旨、家老中被申聞候。

田邊五大夫

新番組高橋素平儀、蒲生浦專德寺由緒有之候處、無據用事有之ニ付、五宿泊り罷越申度旨、願之通り被仰付候。其段素平へ可申聞旨、尤前後御目付共へ相届候樣、是又可申聞旨、家老中被申聞候。

川地又兵衛
勝澤又兵衛

前波、元常一家ゝ内、望月八郎右衛門に別紙御書付を以被仰付候。何も退出後御目付申談可取扱旨、家老中被申聞候

別紙

御書付

前波元常一家ゝ内望月八郎右衛門へ申渡覺

前波元常養祖母儀、心得違之趣相聞候ニ付、急度爲相愼指置候樣被仰付候。右取扱其方へ被仰付候間、元常宅へ罷越申渡可被取扱候。

八月十六日

青木與一右衛門

御徒
久保村次左衛門

別紙

心得違ゝ趣相聞候ニ付、押込

右之通り可被申渡候。

樋口喜左衛門

松永矢次郎左衛門儀、別紙御書付を以被仰付候間、何も退出後御目付共申談可取扱、家老中被申聞候。

別紙

御書付

松永矢次郎左衛門へ申渡覺

其方次男三之助義、不屆至極之趣相聞候ニ付、倖御側被成、御國十三里四方追放被仰付候。且又其方儀も、家之締り方不參居候段相聞、不調法之事ニ候。依之遠慮被仰付候。急度相慎可罷在候。以上

八月十六日

勝澤一順

右醫師前渡元當儀、別紙御書付を以被仰付候。何も退出後御目付共申談可取扱旨、家老中被申聞候。

別紙

御書付

前渡元當へ申渡覺

其方儀兼々家内締り方不宜、其上心得違之趣相聞不調法之事ニ候。依之閉門被仰付候。且又其方妻儀も心得違之趣相聞候ニ付、爲相慎指置不申樣被仰付候。兩人共急度相慎可罷在候。以上

八月十六日

荒井茂左衛門等の罪状

八月十七日

八月十八

五ツ半時過寢ル。

荒井茂左衛門松永三之助罪状略左之通り

當四月頃、東光寺之小僧ニ打敷壹ツ借用いたし、三之助外へ質物ニ置い由。其後茂左衛門儀も、兼て必至難澁物ニ付、三之助へ何卒東光寺ニて何そよき物そ有之い得ハヽ、質ニても置可申哉、心當りも無之哉と申之。三之助申聞いそ、則本堂横佛書箱有之い間、あれそ如何シヤと申之、至極宜いと申て、月日忘レ、三ノ助夜分東光寺本堂横へ忍入持出、茂左衛門へ相渡、其外打敷四ツ、茂左衛門佛書入本箱米屋善四郎方へ質ニ置、打敷も御徒久保次郎左衛門方へ同斷にいたし、都合七拾匁斗ニ相成い由。東光寺ニても追々分りいニ付、茂左衛門三之助兩人共參り、平らニわび申い由。誤證文一册取られ、夫ニ而事濟ニい得共、賊ゆへ如斯申付之。

前波元常罪状

同斷養母並元常妻、昨年元常留守中密通之眞男も有之、其餘元常も酒を好ミ、刀杯を振廻しい様の義も有之故、如斯咎申付。

八月十七日晴

今朝日覺六ツ半時、

五ツ半時ゟ供揃ニ而本丸へ移り、長谷川八十郎弟子鉄炮見る。輪講不致。飯島四郎右衛門罷出、弓稽古相手馬術いさす。五ツ半時過寢る。

八月十八日曇雨

越智山大谷寺に御參詣

今朝日覺七ッ半時二寸五分。

六ッ時ゝ供揃ニ而、越知山麓大谷寺へ參詣。道筋定例ゝ通り。大森ニ而行歸共小休。歸り掛大森小休を立ほて一町程參ほへ之、城下ゟ使參り、嶋田清左衛門此方迄手紙差出ス。

廿二日晩立通飛脚、道中六日振ニて今日到着。右ゝ書面差出。歸り七ッ半時。

供奉ゝ面々

觸頭
熊谷熊之助

使番供
中村久藏

徒頭
青木與一右衛門

時打役
山本清右衛門

大番
長谷部作内

永田四郎兵衛

岡　八五郎

平尾新五兵衛

下馬門當番
今村五兵衛

江戸よりの略留

本願寺門跡吉崎下向の件

江戸表ゟ申來候略留左之通り

一去ル八日、寺社奉行久世出雲守ゟ留守居呼出ニ付、同介田邊周吉罷出候處、東本願寺門跡來未三月、越前國吉崎掛所へ下向之儀、於御家聞濟有之ニ候哉被相尋候處、周吉助役之儀ニ候得共、取調御答可申上旨相答候段相達候ニ付、其段木工へ申談候處、兼る承知之趣本願寺へ御答相濟有之事ニ候間、國表へ不及伺候ニ承知之趣相答置候旨、被申聞候ニ付、別紙之通り出雲守へ留守居共持參指出候。

東本願寺御門跡、來未年越前國吉崎浦掛所へ下向之儀、掛合等有之、國元指支無之聞濟ニ相成候哉御尋之趣奉畏候。右東本願寺ゟ掛合有之、聞濟ニ相成申候。御尋ニ付此段申上候。以上

八月十二日

松平越前守内
中村八大夫

一紀伊殿官位昇進被致候旨、別紙左之通り

従二位大納言　　紀尾中納(言)齊彊殿

八月三日

（大道寺七右衛門
（大道寺　七九郎

病身ニ付、内願之通り隠居被仰付、悴七九郎へ家督弐百石無相違被下置、是迄之通り御書院番組御閑番役見習其儘被仰付候。

中根新左衛門

大道寺七九郎儀、唯今申渡候通りニ候。依之是迄被下置候御合力銀拾五枚、御扶持方三人扶持、以後不被下候。其段七九郎へ可被申聞候。

袖裏　佐野内膳江

大道寺七右衛門

年来出精相勤候ニ付、銀五枚ツヽ年々被下置候。且又折々御機嫌伺可罷出候。

八月三日

（終）

政暇日記

自弘化三年丙午九月朔日
至

十五代目
越前守源慶永

我未 死去ゝ後付記

不破捷 子孫に遺す想

九月々番

公邊

老中　牧野備前守

西丸老中　松平和泉守

若年寄　本多越中守

西丸若年寄　松平玄番頭

寺社奉行　内藤紀伊守

御留守居　佐野日向守

町奉行　遠山左衛門尉

勘定奉行御勝手方　松平河内守

同斷公事方　久須美佐渡守

目付　石谷鍈之丞

目付　戸田能登守

越城

松平源太郎

恒岡安左衛門
澁谷権左衛門
相馬一九郎
富永新左衛門
林　八右衛門
北川市郎
波々伯部熊藏
渡邊源十郎
西尾源太左衛門
山田藤兵衛
淺井八百里
雨森儀右衛門
小栗助七
津田彌太六
松原権左衛門

荻野治部左衛門
宮比権六
岡田喜八郎
村上作右衛門
青木與一右衛門
笹治織居
秋田八郎兵衛

弘化三年九月朔日
山本源左衛門町廻りのため御馬拝借

九月朔日晴

今朝目覺六ッ半時、五ッ半時本丸へ移り、諸士の禮格禮ニ受ル、例之通り。

秋田八郎兵衛申達候ハ、町奉行山本源左衛門御役義ニ付、近々町廻りいたし、古挌之馬ニて廻り申候處、近來毎度之半減ニる、持馬御免被成候ニ付、馬無之、何卒御馬之内拜借被仰付被下置候様奉願候段、相伺候故、宜ク申之。万庚位可然哉。

彌次郎罷出、孟子申上之。　中村政右衛門罷出、鎗術稽古相手中山一郎左衛門　五ッ半時過寢ル。

九月二日

九月二日晴

今朝目覺六ツ半時、五ツ半時ゟ供揃ニ而本丸へ移り、飯島四郎左衛門、坂田助右衛門弟子弓一見いたす（飯島相濟候ハ刻限九ツ半時前、坂田相濟候ハ刻限七ツ半時過）、右ニ付文武延引。御代拜歸り、用人酒井彦六ニ逢フ。五ツ半時過寢ル。

九月三日

九月三日雨

今朝目覺六ツ半時、半右衛門罷出、綱目申上之。目付淺井八百里罷出、評定留並用狀見セル。其餘月次聞繕書見セル。

家老罷出用有之、用狀見セル。其餘家譜掛りゟ儀も相伺之。

不時飛脚到着

昨日不時飛脚到着ニて、則狛木工ゟ用狀參る。趣意之、中村八大夫儀、塚越藤助方へ（御勘定組頭）内々罷越候所、其節八大夫先達而於此表内調有之候ハ、御金藏御拜借御願、只今御出し被成候而も可宜哉と申入候所、藤助殿申候ハ、なるほと夫も御尤ニ候得共、御國表大風雨災變、先達而先御届ヶ御出し被成候得共、詳細の事ハ追而御届ゆへ、早速御調付次第御出し被成、夫も御家藩中町在抔の敗潰等ハ、於公邊之御取用ひ不被成、只々御本城御敗壞ハ御沙汰も相成候事ゆへ、御本城二ノ丸迄も委細ヲ御届ヶ被成、其上ニ右ゟ御金藏御拜借年延御願ひ被成候ハ

風水害に關し藩の御金拜借につき

ヽ於公邊御沙汰ニ可相成、當年ハ江都ゝ水災、京攝の災變等ニ御物入も有之其上蠻船ゝ義ニ付るも、不容易御物入ゝ事ニ候得ハ、御六ヶ敷年柄ニてハ有之候得共、何分右ゝ通り本城邊詳細ヌ御届ヶ後、御歎書出候ハヽ、御尤と奉存候段被申候由。八大夫以切紙申達候ニ付、左樣御本城ヲ始詳細ヌ出し候調ニ致置申候。御届振澁谷權左衛門へ申付、草稿折角只今致置候事ニ候段、三家老申之。

奈良權大夫歿

側用人罷出、奈良權大夫儀、今曉寅ノ上刻（實ハ昨夜ゝ由）死去、死後遲親類ゟ届有之。

彌次郎罷出孟子申上之。居合いさす（相手本多五郎右衛門）

側用人罷出、風災御届振草稿見セル。宜クと申之。今晩立通飛脚道中六日振指立、右ニ付、養性齋尊公へ献書。五ッ半時過寢ル。

九月四日

九月四日晴

今朝目覺六ッ半時、半右衛門罷出、綱目申上之。

側用人罷出申達候ハ、高屋半三郎儀、御廣敷御用達中野儀右衛門跡可被仰付哉、西村源左衛門儀、御廣敷添役藤間甚左衛門跡可被仰付哉の伺書、以側用人見セル、明日取扱ゝ由。

彌次郎罷出孟子申上之。市橋万右衛門罷出、柔術稽古（相手矢野市左衛門生田十左衛門之）五ッ

半時過寢ル。

御家譜御用掛り被仰付候　　島田清左衛門

有之趣於用部屋申渡　　吉川多左衛門

九月五日

九月五日曇

今朝目覺六ツ半時、文武延引。五ツ半時ゟ供揃ニる、吉田茂左衛門伊藤助十郎弟子弓見ル。歸り七ツ半時へ二寸前。乘馬いたす。

今日評定日ニ付八郎兵衛評定所へ罷出る。

評定所

評定所

私儀、御廣敷御用達中野儀右衛門跡被仰付、御留守番組へ被入候旨、家老中被申聞。　高屋半三郎

私儀、御廣敷添役藤間甚左衛門跡被仰付候旨家老中被申聞候。　西村源左衛門

御書院番組武田害内儀、鯖江西福寺由緒有之候處、無據用事御座候ニ付、一宿泊り罷越申度旨、願書付指出、其段家老中へ相達候。

外用　澁谷權左衛門

名代　酒井彥六

菅沼市左衛門

寺澤藤左衛門養家之妹儀、關平大夫悴稚（ワカ）三郎妻女ニ指遣申度、緣組内證申合候。右妹儀ハ、先年川地權内悴平藏妻女ニ指遣候處、不緣ニ付、双方和熟之上離緣仕引取置候旨、願口上書指出、其段御家老中へ相達候。

齊藤數馬

關平大夫悴稚（ワカ）三郎儀妻女無之ニ付、寺澤藤左衛門養家之妹妻女ニ爲仕度、緣組内證申合候旨、願書付指出、其段家老中へ相達候。

松平源太郎

御留守番組近藤次右衛門儀、間部下總守殿家中五十嵐佐次衛門与申者、由緒有之候處、無據用事有之候ニ付、五宿泊り罷越申度旨、願口上書指出、其段御家老中へ相達候。

仙石喜左衛門次男直吉儀、當年拾歳罷成候、養子ニ仕度旨申聞候ニ付、指遣申度、右助左衛門義ハ、喜左衛門甥ニ而御座候ニ付、内證申合候旨、願書付口上書指出候段、家老中へ相達候。

西尾源太左衛門

新番格渡邊利左衛門養子良助儀、當午拾九歳罷成候。御序之節初而之御目見被仰付被下置候様、願書付指出、其段御家老中へ相達候。

津田彌太六

菅沼平兵衛娘儀、河津佐大夫悴孫十郎後妻ニ差遣申度、縁組内證申合候旨、願書付指出候段、家老中へ相達候。

大久保太郎大夫

河津佐大夫悴孫十郎儀、妻女無之ニ付、菅沼平兵衛娘後妻ニ爲仕度旨、先妻儀ハ長谷川八十郎妹ニ有之候處、不縁ニ付双方和談ゝ上離縁仕差戻候旨、願書付口上書指出、其段家老中へ相達候。

〆

五ッ半時過寢ル

九月六日

九月六日晴

今朝目覺六ッ半時、半右衛門罷出、綱目申上之。彌次郎其外武術稽古延引。

澁谷權左衛門罷出、申達候ハ、村上三悦妹、平瀬長三郎妻女ニ指遣申度、縁組内證申合候ニ付、願内意相伺之。宜クと申之。

新屋敷筋城下廻り

八ッ半時頃新屋敷筋城下廻りいたす。歸城七ッ半時頃。

道書

腰口ゟ臺所脇木戸門、御座所門、下馬門稻葉敬次郎屋敷脇ゟ、川口門酒井外記屋

敷脇前、舟藏門下タ丁土橋門右江水野主計屋敷前、井原亟助屋敷前脇、多ヶ谷舍人屋敷前脇櫻木門ゟ、服部三郎兵衞屋敷前脇、坂部多會右衞門屋敷前脇、新屋敷通り右江、葛卷源三郎屋敷脇、日出門ゟ宗福寺前脇、野道通り芦田内匠下屋敷脇前、笹川庄八屋敷前右へ野道通り、平岡山女坂ゟ登、床机立有之、夫ゟ元ゝ道通り荒橋渡、志比口町通り左江、東御籏丁、夫ゟ御堀端通り、長谷川與平御門、牧野加左衞門屋敷前脇、横尾十郎兵衞屋敷前脇、餌刺丁通り、皆川平右衞門屋敷裏脇、御庭平八屋敷脇前觀音丁通り、人別御門栃屋縫之助屋敷脇前、三崎(サキ)門、切手門、二ノ丸木戸門ゟ元ノ道へ參ル。

下馬門當番
周防長兵衞

切手門當番
成瀨惣左衞門

右ゝ面々へ例式名斗申之

酒井外記

狛帶刀

笹治織居

右ㇾ面々へ、例ㇾ通り鷹ㇾ鴨を遣之。右筆部屋取扱之
五ッ半時過寝ル。

九月七日晴

今朝目覚六ッ半時、半右衛門罷出、綱目申上之。
側用人両人罷出申達候ハ、當年御坂被下候姓名書見セル。
灸治いたす。入浴いたす。文武延引。五ッ半時過寝ル。

九月八日晴

今朝目覚六ッ半時、五ッ半ㇾ供揃ニて　浚明院様忌月ニ付、慈本院御霊屋へ
参詣。
五ッ半時ㇾ供揃ニ而本丸へ移り、落合丈右衛門弓一見いたす。
淨光院様御忌日ニ付、運正寺孝顯寺両寺へ御代拜歸り雨森小十郎ニ逢フ。
彌次郎罷出、孟子申上之。高島甚五左衛門罷出、居合稽古相手高須幸八乗馬いたす、孫
八拜見いたす。本多内藏介罷出候ニ付、例ㇾ通り逢フ。五ッ半時過寝ル。

九月九日晴

今朝目覚六ッ時、

（頭注：九月七日／御坂を下さる／九月八日／九月九日）

江戸飛脚着

五ッ時本丸へ移り、佳節ニ付、家老をしめ諸士の禮を格禮ニ受る。無役留守番も同斷。無役留守番、平生ハ無之候得共、佳節斗ハ有之、一昨年ゟ始ル。

二日晩立飛脚、今日到着。江戸表静謐之。

彌次郎罷出孟子申上之。市橋万右衛門罷出、柔術稽古いたす、相手片山平七 安本新助

今日之飛脚江戸ゟ申越候書狀之内、書抜用人之書狀

附札
松平越前守殿

覺

一茶辨當　　一荷

代金百貳拾七兩壹分ト

銀九匁六分五厘

内金百拾四兩　但後藤包

右之通來月二日

御城中之口へ御指出之事

午八月　　御細工所

一有馬筑後守病氣之處、養生不相叶、去ル十二日巳ノ刻死去之由、八月廿六日

右跡目弟孝五郎養子願書今日御用番へ出候由申来ル。　八月廿七日

〆

今日之飛脚へ、逆井方以内書如斯申来ル。左之通り

○是より出候書付
上書へ留置候

折懸ケ

去ル閏五月廿二日、御下ケ金数願として、在所表親類之者福井表へ差出候而、御役人中と及御掛合候處、去巳ノ秋差上候使之者、粗忽之取斗方有之、故障ニ相成候ニ付、早速申越候次第も有之、且　當御上様御賢徳、兼て奉承知奉感伏居候得共、いまた未御目見ニも不仕候折柄、為　御機嫌窺、去ル六月六日出福仕候處、同十二日御目見被仰付、蒙　御懇之御意、難有仕合冥加至極奉存上候。然ル所逗留中、御行狀万端一々奉感伏候ニ付、別紙之通り奉献上度旨奉願上候處、御受納有無之儀は、追て御沙汰可有之之旨、御家老中ゟ御書付を以御返答有之、去ル七日為御暇乞御目見被仰付、蒙御懇之御意、重疊難有仕合奉存候。去ル九日福井表發足、同十三日歸京仕、御返答相待居申候。右之段達御聽、願

書御直覽も被成下候ニ相違無御座候事や、其ニ承知仕度、御直覽被成下候事
ニ御座候へも、難有大悦仕候間、何分御聞合之程、宜御取成奉願候。以上

七月　　　　　新宮涼庭

木村主計頭樣

右之通り涼庭直筆を以如斯申之。是井か愼獨へ以内書申參り候書狀、書拔
極御内々申上候。定て御存知殿ニも被爲在候半、京都之新宮涼庭と申者、其
御地へ參り度旨御目見被仰付候由。その外〳〵有ろさかり、右いさく主計
頭懇意のものニゐ、無據賴まれ申越候。上納金いさしし候由書付いよ〳〵、
御直々御覽も被遊候やと御家老三人の名前書付爲持越、うあヽゐ度由。
御覽も被遊候ハヽ、誠ニ以有あさきことと、右のいなや私か極内々伺候やう
申越候。下略　木村主計頭ハ是井之實兄ニ候。
右之段側用人へも爲見申候。五ツ半時過寢ル、

九月十日雨

今朝目覺七ツ半時過、六ツ半時二寸廻りの供揃ニゐ　西岸公御忌月ニ付、孝
顯寺へ參詣、歸り五ツ時三寸廻り。

供奉之面々

使番々　石川彌五大夫

大番頭々　菅沼市左衛門組

下馬門々番頭　横田作大夫

同門番書　福田八郎右衛門

觸頭　永見隼人

使番　村上作右衛門

徒頭　青木與一右衛門

時宜役
大番　富田四方之助

澁谷與五左衛門

數賀山彦右衛門

津田三作

荻野助太郎弟子岡田長右衛門指之目二流弓術見ル。文武延引。五ツ半時過寝ル。

九月十一日　九月十一日雨少風

今朝目覺六ツ半時、五ツ半時長谷川八十郎罷出、銕炮稽古有之相手彌次郎孟子いたす。中村政右衛門罷出、鎗術稽古相手松尾傳藏

評定日　評定日ニ付、八郎兵衛評定所へ出ル。八郎兵衛評定所ゟ罷歸、如斯申達ル。

覺

拙者悴故孫太郎妻儀、有馬日向守殿方へ用事有之ニ付、二宿泊り差遣申度願存候。

右之段御家老中迄宜御申達可被下候。以上

九月十日　本多内藏助

秋田八郎兵衛様

中根靱負様

家老ゟ相伺之取次之、宜クと側用人迄差圖いたす。

拙者與力名越禎藏儀、病氣罷在り候處、段々指重り快氣之程難斗候に付、去ル七日松波彌二郎弟小八郎病中養子ニ致度旨相願候。然る處、同日致病死候。依之右小八

是儀、病中養子申付、高家衆代官出席之節願之通申渡ス。此段ゟ同役中其外御用番へ可被
下候。　以上

九月六日

酒井外記

秋田八郎兵衛
中根十郎兵衛

御書院番森隆武彌太郎弟小八郎儀、當年三十歳ニ相成候。酒井外記方與力名跡願
通願申置子下置度旨候、篠和内藏申合候。右之通り被仰付被下置候様、願口上書差
出、其段朝家衆中へ細注候。

菅川新左衛門

九月十日ゟ嘗ニ可入置之段、今日御用人見せ候ニ付、今日之嘗ニ認候也。

評定所用留拔萃

評定所

小[illegible]右衛門忰跡目無相違被下置、大御番組へ被入候旨、御家老中ニ被申聞候。

松平源太郎兼相
中野弁吉

外御用
鹽谷權左衛門

名代
相馬一九郎

御書院番組武田喜内儀、鯖江西福寺由緒有之い處、無據用事有之いニ付、一宿泊り罷越度旨、願之通り被仰付い。　喜内へ可申聞旨、尤前後御目付共へ相屆い様、是又可申聞旨、家老中被申聞い。

菅沼市左衛門

私御番組寺澤藤左衛門養家之妹儀、關平大夫悴稚三郎妻女ニ指遣度旨、願之通り被仰付い。　其段藤左衛門へ可申聞旨、御家老中被申聞い。

田邊讓右衛門儀、相願いて、同姓周吉家屋敷先達ゐ之大風ニて吹潰いニ付、思召を以御手當被成下、早速家作等致度い處、兼て勝手向不如意罷在、不融通之時節柄ニゐ、他借等も難出來、難儀ニ付、相應之拜借被仰付被下置いやう、周吉江戸留守中ニ付、讓右衛門相願い。　依之別紙之通り御貸被成い。　其段兩人へ可申聞い。　御家老中被申聞い。

別紙

米拾貳俵　　田邊周吉

右之通り當暮被下置い知行物成米之内を以、上納ニて御貸被成い。

恒川安左衛門

私御番組湯淺藤兵衛、今川七左衛門、中村仝兵衛願書前文と同斷

別紙

米七俵　　湯淺藤兵衛

米四俵　今川七左衛門

米六俵　中村今兵衛

右之通り當暮前文と同斷

齋藤數馬

私御番組關平大夫悴雅三郎儀、妻女無之ニ付、寺澤藤左衛門養家之妹縁組為致度旨、願之通り被仰付候。其段平大夫へ可申聞旨、御家老中被申聞候。

松平源太郎

御持筒番組長崎右衛門儀、關宿下總守殿家中五十嵐佐左衛門と申者由緒有之候處、御番用有之ニ付、五日泊り罷越度旨、願之通り被仰付候。其段御家老中被申聞候。

牧野幹吾

仙石喜左衛門弐男直吉儀、有馬日向守殿家中田中助左衛門と申者養子ニ差遣度旨、願之通り被仰付候。其段御家老中被申聞候。

私組番組兩浅曽兵衛、水野乾次郎、松原外次郎、松山理左衛門大風ニ付家屋敷潰候義、同前と同斷

同紙

米拾四俵　國枝藤兵衞
米九俵　水野荒次郎
米同斷　松原外次郎
右之通り當暮前文と同斷
米七俵　松山理左衞門
右之通當暮被下置候御切米之内を以、上納ニて御貸被成候

菅沼平兵衞娘儀、河津佐大夫忰孫十郎後妻ニ指遣度旨、願之通り被仰付候。其段平兵衞へ可申聞旨、御家老中被申聞候。　津田彌太六

河津佐大夫忰孫十郎儀、妻女無之ニ付、菅沼平兵衞娘後妻ニ爲致度旨、願之通り被仰付候。其段佐大夫へ可申聞旨、御家老中被申聞候。　大久保太郎大夫

御書院番組中澤七兵衞忰銕之助儀、妻女無之ニ付、蓮川仁兵衞娘後妻ニ爲仕度、緣組内證申合候。先妻儀ハ、坂井安大夫娘ニ御座候處、不緣ニ付、双方和順之上先年離緣仕指戻候旨、願口上書差出、其段御家老中へ相達候所、再緣之事故、願之通り勝手次第取扱候樣可申聞旨、御家老中被申聞候。　皆川多左衞門

松平源太郎

御留守番組蓮川仁兵衛娘儀、中澤仁兵衛悴義之助後妻ニ差遣申度、縁組内諾申合候、右娘儀も、大久保太郎大夫養子權八妻女ニ指遣候處、不縁ニ付双方和順之上、先達而離縁仕引取置候旨、願口上書指出、其段御家老中へ相達候處、再縁之事故、願之通り勝手次第取扱候様可申聞旨、御家老中被申聞候。

富永新左衛門

無役御留守番組平瀬長三郎儀妻女無之ニ付、村上三悦妹妻女ニ仕度、縁組内談申合候旨、願書付指出、其段御家老中へ相達候。

辻同玄順

御匕醫師田代萬悌きい並養子長允義、痛所有之ニ付、加州山中江同道、三廻り入湯爲仕度旨、若相應不仕候ハヽ、右日數之内、同國山城粟津江も入湯爲仕度旨、願書付指出候段、

與頭衆村上三悦妹儀、平瀬長三郎妻女ニ指遣申度、縁組内諾申合候旨、願書指出、右等之趣御家老中へ相達候。

五ッ半時過寢ル。

九月十二日

九月十二日初曇後晴

今朝目覺六ッ半時、

五ッ半時ゟ供揃ニる探源院様御忌月ニ付、運正寺瑞源寺へ參詣、歸り四ッ時前。

供奉ゟ面々

使番ゟ 雨森作助
大番頭ゟ 恒岡安左衞門
下馬門々番 茂呂久左衞門
觸頭 永見隼人
使番 柳原惣三郎
徒頭 青木與一右衞門
時宜役 河津佐大夫
大番 坂田乙五郎
吉岡孫大夫

淺見忠兵衛
河合久左衛門

家老罷出、用狀並其餘伺有之。

目付淺井八百里罷出、用狀並評定留見セル。其餘種々咄す。弓いさす相手高村甚作

輪講不致。

覺

（西尾源太左衛門
（淺井八百里

荒井茂左衛門の屋敷地を御茶園地となす

荒井茂左衛門揚屋敷地、此度御茶園地ニ被仰付、申談取扱候樣、可被仰付候。

以上

右之通り於用部屋申渡候

五ッ半時過寢ル。

九月十三日

九月十三日雨

今朝目覺六ッ半時、

五ツ半時本丸へ移り、中村政右衛門弟子鎗術見る。相済候ハ八つ半時へ壹寸前
彌次郎罷出、孟子申上之。武術稽古延引。此方少々感冒致し候ニ付、加藤周益
葛根湯調上いさし給申候。五ツ半時過寢ル。

九月十四日

九月十四日晴

今朝目覺六ツ半時、半右衛門罷出、綱目申上之。

昨夜用人當番雨森小十郎罷出申達候ハ、今朝伊藤助十郎養母死去いさし候ニ付、本多彌六叔母之續ニ相成候ニ付、彌六廻在中ニ付、彌六忌御免被仰付哉之伺之、其通りと申之。

熊之助親
上月湖夕

思召を以、折々御機嫌伺可罷出、其節ニ中之口致往來候様被仰付候。

右之通り於用部屋用人月番まて申渡、用人湖夕召呼ひ申渡候所、湖夕不快ニ付、上月八郎左衛門罷出候由。

飛脚出發

今日晩立通飛脚、道中常振指立。右ニ付養性齋老君へ進呈書いさす。

彌次郎罷出、孟子申上之。飛脚柔術延引。

今日飛脚ニ付、多井へも書状さし出申候。先日新宮凉庭之請書もいさす。其

新宮のことニ付御書

手紙の抜書備忘ニ認。

一筆申入候。日々冷氣――前略――扨も、新宮涼庭と申者、當地へ罷出候儀ニ付、御申越の趣、承知いさし候。則其節ゟ手續共、側用人へ申付、爲書取申候。委細ハ別紙ニて御承知可被下候。（別紙しるへ側用人申根報負ニ申付）一體涼庭指出候書付之趣、奇特之儀故、右樣之取扱ニも及ひ候事ニ而、書付を見不申候而も、直々言葉抔あけ候事も無之筈ニ御さ候。夫ないよ〳〵一覽致候哉と疑ひ候て、主計頭との迄内々相賴候事も、へんな事ニて、涼庭之心持ツあり不申候。まあ御賴申候得も、此方へ通りもよろしき事そんし、色々の事を其もと殿へ御し、御申越之事ゆへ、委敷申入候得共、京都へヶ樣ニ有體ニ御申越ニ而も、何事是あり申候樣ニ相成候而も、そのもと殿ニも、御迷惑之御事、このかたニまきても、迷惑ニ御さ候へも、其許殿ゟ、京都へ之御返事ニハ、此度書付一覽の有無ハ、越前殿之宗風御かたき事ニ候上、當越前殿ニハ、へりして以內緣申入候樣之事も、殊の外嫌ひ被申候故、あさ〳〵私ゟ申入候儀も、迷惑いさし候なと、、申やうす御申越被下候ハヽ、此後の御爲ニもよろしかるへく、此あたまつきても、大きに〳〵宜御座候。一體涼庭も、もと金子用達申候故、役人共抔も涼

庭心實を承知いたし申候。此人もとも、大山しものと承申候。只今も、當人もよきもじの學問をいたすと申居候由。……後略。）

（頭註）別紙ハ其節之手續、幾日ニハ何、幾日ニハ何ゝと云様ゟ事故、不認申候。

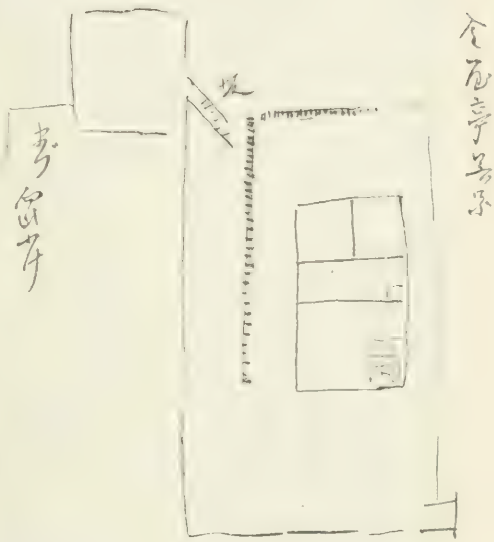
五ッ半時過寢る。

九月十五日　愛宕山筋城下廻り

九月十五日晴

今朝目覺六ッ半時、五ッ半時本丸へ移り、諸士之禮を受る一統之。彌次郎罷出、孟子可申上之所、城下廻りニ付延引。出淵傳之丞罷出、劍術稽古可致之所、城下廻りニ付延引。九ッ半時之供揃ニる、愛宕山筋へ城下廻りいたす。道書左之通り、

庭口ゟ御座所御門、下馬御門、稲葉敬次郎屋敷前脇川口御門、右へ松平庄兵衛屋敷へ立寄、夫ゟ繰舟渡船久津見三内屋敷脇前、永田四郎兵衛屋敷前脇、岩上梶大夫屋敷前ゟ毛屋町左江、貳拾三軒丁、神宮寺町通り右へ石坂横町、右へ經藏寺前ゟ松尾寺山へ登り、山通り明神堂迄參り、跡へ戻り、山通り金屋亭よこへ參り、



其間眺望宜所ニて床机立一（本立金屋ノ亭）夫ゟ金屋亭ゟ左へ石切道、小山谷村中へかゝり、瑞源寺前通り野道、立矢通り、夫ゟ久保丁、九十九橋、本町通り櫻ノ門本多筑後屋敷脇前、酒井與三左衛門横前鉄門、夫ゟ作事役所一覧、夫ゟ下馬門元ノ道通り。

歸城七ツ半時九寸程過。五ツ半時過寝ル。

九月十六日

九月十六日晴

今朝目覺六ッ半時、五ッ半時ゟ供揃ニる、本丸移り、出淵傳之丞弟子劔術一覽相濟八ッ半時頃 中村政右衛門罷出、鎗術稽古相手波々伯部八大夫 孫八引。

評定日ニ付、糾負評定所へ出ル、八郎兵衛可罷出之所、有譯後記之。

江戸飛脚着

八日晚立通飛脚、道中常振今日到着。江戸靜謐也。

江戸より の用狀

江戸表用人共ゟ書狀寫

一當月廿五日釋奠被仰出候ニ付、右前日万石以上名代以使者獻備有之候。諸家使者揃刻限之儀、廿四日五時、四品以上松平遠江守、拾万石以上使者參著、其以下ニ四時參著之事ニ候。尤學問所御座敷向御普請中ニ付、當四月之振合を以、御供所假講席ニ相成候間、此段とも相達候。且故障届並問合之義も有之候ハ、林大學頭方に申出候樣可被致候。

右之趣、被得其意、答之儀ハ深谷遠江守方へ可被申聞候。以上

九月八日

大目付

松平越前守殿

留守居

民部卿病気平愈

評定所

一御用人西村六左衛門方申来ニ趣意

民部卿様先頃中より御様躰之処、段々御快気ニ付、来ル九日御床揚御祝儀有之候由、

評定所

齋藤數馬

私組番組大谷審八家居重先達而之大風ニ而吹潰候ニ付、思召を以御手当被成下、家作ニ取掛り候処、右而已ニ而ハ手向兼候ニ付、相応之拝借相願候。依之、別紙之通り御貸被成下、其段審八へ可申聞旨、御家老中被申聞候。

別紙

□米九俵　　大谷審八

一、右之通り當暮被下置候細行物成米之内を以、上納ニ而御貸被成候

一、左右之通り當暮之印之

篠山右平太

私組番組松澤合平儀右同断

別紙

□八俵

一、被成候細行物成米之内を以上申候、此者切米ニ付

一、右切米之内を以テ有之其余前同断

無役御留守番組平瀬長三郎儀、妻女無之ニ付、村上三悦妹縁組致度旨願之通り被仰付、其段長三郎へ可申聞旨、御家老中被申聞候。

冨永新左衛門

新番組久保彌藤儀、御供勤被仰付候。其段彌藤へ可申渡旨

山田藤兵衛

山路辰五郎願松澤金平と同断。

別紙

□七俵

△前同断

山路辰五郎

田邊五大夫

新番組大橋金兵衛願右同断

別紙

□六俵

△前同断

大橋金兵衛

御匕醫師田代萬悌妻並養子長允儀、痛所有之ニ付、加州山中山代粟津之内ニる三廻り入湯為致度旨、願之通り被仰付候。其段萬悌へ可申聞旨、尤前後御目付共相届候様、是又可申聞旨御家老中被申聞候。

辻岡玄順

目醫師村上三悦妹儀、千瀬長三郎妻女ニ指遣申度旨、願之通り被仰付候。其段可申聞旨、御家老中被申聞候。

中根靱負

櫻田八郎兵衛養母儀、大野齋念与由緒有之候處、無據用事御座候ニ付、下在宿泊り指出申度旨、願書付指出、其段御家老中ヘ相達候。

松原權左衛門

津田彌太六娘儀、岩城嘉左衛門悴蕃太郎妻女ニ指遣申度、縁組内證申合候旨、願書付差出、其段御家老中ヘ相達候。

村上作右衛門

岩城嘉左衛門悴蕃太郎儀、妻女無御座候ニ付、津田彌太六娘妻女ニ為仕度、縁組内證申合候旨、願書付差出、其段御家老中ヘ相達候。

〆

九月十七日

九月十七日晴

今朝目覺六ッ半時、半右衛門罷出、前日申上之候後、御遺訓拜誦。

目付用有之、雨森儀右衛門。

隱居の御乘馬拜見

澁谷權左衞門罷出申達しハ、周防長兵衞養子平吉、中村久藏養子藤次郎、加藤佐七郎悴佐太郎野廻り御供頭、以口上書被達。宜ク与申之。

於本丸乘馬、隱居共ニ見セ、並菓子ヲ遣す。

万之丞父 大宮對山

彦六祖父 酒井良輔

作之丞父 高田波門

久次郎祖父 海福放舟

熊之助父 熊谷小兵衞

長助父 蜷川林左衞門

長太郎父 荻原長兵衞

七九郎父 山品八十郎

右ニ面々罷出る。
側用人申達し候ハ、御宮御別當慈本院、御泉水元御住所御庭石少々拜借致度段相願フ。近頃比丘庭を作り候由。五ッ半時過寢ル。

九月十八日

九月十八日曇

今朝目覺六ッ半時。
五ッ半時ニ供揃ニ而、本丸へ移り、市橋万右衛門弟子柔術見ル。高畠甚五左衛門罷出、居合稽古いたす。五ッ半時過寢ル。

九月十九日

九月十九日雨

今朝目覺六ッ半時、半右衛門不罷出、綱目獨誦す。
家老用有之、用狀見セる。其餘各等伺、尚助一件。市橋万右衛門罷出、柔術稽古相手菅沼鉄五郎　高松仙右衛門
五ッ半時寢ル。

九月廿日

九月廿日曇後晴

今朝目覺六ッ時、
五ッ時本丸へ移り、高畠甚五左衛門弟子居合、横山十郎兵衛弟子劍術見る。相

飛脚出發
一位樣に大安寺の松菰を献呈
九月廿一日
吉江筋へ放鷹

濟候ニ七ツ半時頃。今晩立通飛脚、道中常振差立。右ニ付、一位尊老翁君へ献進いたす。大安寺松菰献ス。五ツ半時過寢ル。

九月廿一日朝晴夕小雨

今朝目覺七ツ半時二寸五分廻り。

六ツ半時ゟ供揃ニて、吉江筋へ鷹野ニ參る。道筋左ゟ通り、庭口ゟ臺所脇木戸門、座所門、下馬門稻葉敬次郎前横川口門、郡役所前横操船渡船、吉田仙格前、伊藤助十郎前野道通り、木田大木戸ゟ七軒町、赤坂町、花堂村、江端村、下中荒井兩村、今市村、淺水村、三十八社村、下江尻村、鳥羽江尻町ゟ新道通り左細道通り鷹場へ入、字サナカキヨセ、同斷松葉、同斷菖蒲と申所ニて、一ツ、拙夯〔等〕、其餘鴨不居。森六大夫ニも脇鷹申付、一翼上ル相濟。杉本村西光〔寺〕村へ參ル、膳所。膳後西光寺ゟ元ゟ鷹場へ參候所、一ツも不居、拙夯無之。夫ゟ琵琶山へ登山、鳥羽村八幡（妙法寺持、鳥羽八丁之由ニて、村ハ岡野村）夫ゟ江尻村六郎兵衛方へ小休。夫ゟ元ゟ道通り、下荒井邊ニて雁三ツ斗も居候間、供筒へ申付、鉄炮爲放候處、獲物無之、其道小雨降出しニ付、簑相用ゆ。歸城及七ツ半時頃。供奉ゟ面々

鬮頭
本多五郎右衛門

大番
堤　七大夫

眞杉五大夫

松江三郎右衛門

岡　八五郎

小供
源左衛門悴
山本信太郎

三五左衛門悴
秋田孫太郎

作大夫悴
横田藤九郎

周藏悴
小宮山傳太郎

武右衛門養子
高坂源五郎

七兵衛悴
中澤鋹之助

十郎右衛門忰
辻　新太郎

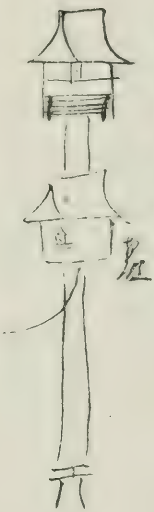
半右衛門忰
高野静之助

七兵衛忰
戸田彌太郎

當番
下馬門々番行
伊東六郎兵衛

同斷歸
大藤治兵衛

∝
鳥羽八丁之内岡野村八幡略圖



慶云
岡野村八幡宮之儀ハ乍憚我祖ゟ二代目

政暇日記　弘化三年九月

岡野八幡宮を拜せる

西岸君大坂の役ニ打立セ給ひし所を彫刻し、白馬ニ召させられ、御丈ヶ尊像四寸斗、都合御馬共ニ壹尺斗と覚ゆ。嗚呼拝禮しても往昔の御姿を思ひ出し、感涙ニ及ブ。嗚呼惜哉、後世人君岡野村八幡之事、ハ誰人も不知由、永く御亀末ニ不相成仕度事、よく／＼承知可被致事ニ候。右ニ付金二百疋被供。五ッ半時過寝ル。

九月廿二日

九月廿二日雨霰交り

今朝目覚六ッ半時、半右衛門罷出、綱目申上之。前田彦次郎、明石甚左衛門罷出、例之通り講談いたす。

加賀九郎右衛門罷出、評定留見セル。

中懇意の者に扶札を賜ふ

側用人中根靱負申達候ハ、中御懇意之者ニ候、以前　威徳院様御代抔ハ、大御懇意と一所ニ御能拝見被仰付候事も有之、只今ニ而ハ何とも御懇意の姿無之ニ付、御坂札以思召被下候而ハ如何と申ニ付、宜ク与申之。靱負まて申聞、八郎兵衛ハ、観悦山中御懇意故申兼候由。

飯島四郎右衛門罷出、弓術稽古いたす、マキハ一之相手堀江九郎右衛門　五ッ半時過寝ル。

評定留補遺

廿日評定留補遺是ゟ以下の評定留簡略ニ認、家老申渡印へ之通り

熊谷熊之助差加
村上太郎市

村上沖之助病中願之通り、養子被仰付、家督三百五拾石無相違被下置、定座番外席被
仰付候。△

中根靱負

秋田八郎兵衛養母義、大野誓念寺由緒有之候處、用事有之候ニ付、十五宿泊り指遣度
旨、願之通り被仰付候。 其段八郎兵衛へ可申聞旨、尤前後御日付共へ相届候様、△

外用
澁谷権左衛門
名代
水野主斗

別紙之通り席之儀可申渡旨候△

別紙

菅沼十左衛門次
村上太郎市

右之通可被申渡候

松原権左衛門

津田彌太六娘儀、岩城藤左衛門悴源太郎妻女ニ指遣度旨、願之通り被仰付候。 其段
彌太六へ可申聞候。△

土屋十郎右衛門

仙石方右衛門次男太郎市儀、村上沖之助病中養子ニ指遣申度旨、願之通り仰付候。其段方右衛門へ可申聞候。△

村上作右衛門

岩城藤左衛門悴源太郎儀、妻女無之ニ付、津田彌太六娘縁組為致度旨、願之通り被仰付候。其段藤左衛門へ可申聞候。△

齊藤數馬

服部三郎左衛門儀、妻女無之ニ付、三崎宗庵娘妻女ニ仕度、縁組内證申合候旨、願之通り被仰付候。其段三郎左衛門へ可申聞候。△

林八右衛門

森ケ谷舍人儀、岡部下總守殿家中奥村熊八と申者、舍人弟ニ候處、無據用事有之ニ付、五箇泊り罷越申度旨、願書付指出。

辻岡玄順

奥醫師三崎宗庵娘儀、服部三郎左衛門妻女ニ指遣申度、縁組内證申合候。右娘儀、先年宗庵悴宗仙妻女ニ候處、不縁ニ付、和順之上離縁致候旨。

九月廿三日晴

今朝目覺六ツ半時、

五ツ半時ゟ供揃ニて、本丸へ移り、鰐淵三郎兵衛弟子居合見ル。

今日家老三人相招、奔走いたしも節次第左ゟ通、七ツ時頃御座ゟ間眞中へ此方居、其席へ家老三人繼上下ニて罷出、今日ハ御拳ゟ鴨御相伴被仰付、難有仕合、御禮申上之。此方申候ハ、今日ハ天氣相も宜、拳ゟ鴨をと申之。是ゟ乘馬を見セ候故、肩絹とり候樣申ニ依、其鹽合ニて次へ下ル。

家老ニ達候節ゟ間取



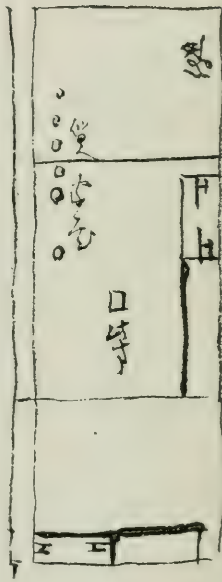
終て側用人二人並用人澁谷權左衛門罷出、禮をいふ。夫ゟ程合ニて、本丸馬場へ此方參ル、乘馬此方いたし候て、三人ニ見セル。馬名荒波鹿毛

夫ゟ馬方ニ此方の馬乘セ候て見セル、家老手馬も見ル、織居馬ハ、不快ゟ由ニて不差出、外記帶刀二人ゟ手馬差出ス。

馬割左之通り

荒波　國澤助左衛門
黒澤　關　平大夫
間ノ山　塚田與次内
芦澤　山田藤内
谷川　助左衛門悴　國澤岩太郎
白瀧　藤内同斷　山田辰彌
酒井外記手馬　伊藤利藤太
猶帯刀手馬　勝村三太左衛門
荒波　母衣　利藤太養子　伊藤定吉
間ノ山　平八悴　安西梅千之助
白瀧　平大夫悴　關稚三郎

母衣申付候所、外記帯刀へ此方好（外記黒澤 帯刀芦澤）乗馬一見いさす。夫ゟ母衣申付相濟御座所へ歸り、又々居間へ申呼候時ミ圖、左ミ通り、



吸物いさす。夫ゟ膳部さし出ス、一菜。家老三人ゟ側用人澁谷權左衛門迄遣ス。此方も献立同樣、此方膳申付、酒爲差出、盃を家老三人へ遣し、返盃申付。膳相濟ンる、腰ノ物等爲見候上、生菓子濃茶いさす。夫ゟ干菓子薄茶出す。相濟、家老上席ゟ禮を申候る退散。

献立左ミ通り

吸物　かもま／志めじさけ

平　かも、いも／にしき數、人参／水菜

飯
　さし物 人參葉 花

生菓子萩餅三ツ 奥仕立

干菓子 田壽手製之菓 節付

居間床 掛物二幅對山水可翁筆 先年下香村信衛門獻上 掛花菊

休息 掛物、一幅業翁殿筆明德惟馨

五ツ半時過寢ル。

九月廿四日　雨

今朝目覺六ツ半時、半右衛門罷出、綱目申上之。家老用有之、譯後ニ記す。彌次郎いたさす。

市橋右衛門罷出、槍術稽古いたさす 相手片山十□ 矢野市左衛門 明日吉野山登山之處、天氣相ニ付、延引。

中根靱負申候ハ、米町町人内藤彌兵衛所持之國俊之刀並手紙、佐々木小左衛門懇意ニ付爲見、又靱負へ爲見候間、御慰ニ御覽ニ可入候間、後刻主税方さし上可申段、此刀元ハ出處何方のあ、質物 御買物として品物を預り金子を借用ひ□候ハ、流し申候 之由。先方ハ小左

九月廿四日

讀書四丁

衛門ニも不申由、一見いたす。

今日家老罷出伺候事、此所ニ委細ニ記之

家老此方ニ申入候ハ、御札所高畠市郎右衛門申達候ハ、先達る御領分斗新札引替、他領之ハ其儘被指置候様、先達るは申上候得共、やはり他領のも御替へ被成候御方宜クと存候。譯ハ追々角違印銀札もめ候得は、自然と贋札も出來候様ニ相成候るは、却て他領へ御不義理合ニ相成候ニ付、別紙之通り新札ニ御引替へ、御尤と奉存候段、市郎右衛門相達候ニ付、此方ニも尚又存有之候哉、無之候哉と相伺之。

御札所目付ゟ指出候書付一通り

角違印銀札新札ニ引替候ニ付、本保初他領へ文通

然は其御領分（本保ヘハ御配下）通用之角違印銀札、此度新札ニ引替候間、來ル十月十五日ゟ十一月十日迄、朝五時ゟ昼九ツ時迄之内、福井札所へ引替ニ可罷出旨、御領分末々迄御申渡可被成候。尤十日以後罷出候共、引替不申候間、此段御承知被下度候。右爲可得御意如斯ニ御座候。以上

月日

但本保石川段右衛門方へ別段受込共ゟ書翰壹封差遣候事。

領分觸出ン

他領通用角違印銀札、當十月十五日ゟ十一月十日迄新札ニ引替候間、所持之者有之候ハヽ、右日限之内朝五ツ時ゟ九ツ時迄、福井御札所へ持參引替候樣可被申付候。十日以後致持參候古札ハ、引替不申候間、右之趣末々迄可被申付候。以上

月日　御札所

各中

廻る組支配有之面々え、右之趣可被申渡候。以上

右兩樣當九月廿六日觸出し可申事

同日店掛札

札之形

（一）角違印銀札當午十月十五日ヨリ十一月十日迄新札引替所

一新札引替所え、元役所ニ而一切取斗候事、左候得え御物入も薄ク相成申候。

但枝役所ニおいて小引替之儀、此度え被相止候事。

但新札之引替之趣法ハ、古例之通り名前ヲ留め候事、尤御領分他領共同斷之事。

一新札拵方之儀ハ、來ル十月七日頃ゟ取掛り申度候事。

但諸色御殘り物在之候故、御物入も薄ク相成候事。

一新銀札拵方者、御領分通行新銀札仕立之通りニいたし、裏判十二支之内馬(むま)羊(ひつじ)雞(にハとり)犬(いぬ)猪(い)鼠(ねずミ)

上ニ福井と在之判斗り朱肉ニいたし、歸厚之判代りㇳ、藍内ニて角違印之判壹ツ押し可申事。

一御札紙之儀者、先達る御殘り之分ニる御手合可申事。

大目八束四帖　但壹帖ニ付千枚ツヽ

　此紙數八万四千枚

中目七拾四束六帖　同斷ニ付千百枚ツヽ

　此紙數八拾貳万六百枚

小目貳拾貳束七帖　同斷ニ付千貳百枚ツヽ

　此紙數貳拾七万貳千四百枚

覺

卯十二月　公料他領惣引替高

一角達銀三千八百六拾四貫八百拾九匁
　内
　　卯十二月ゟ當午九月十九日迄世間ゟ兩替ニ差向ル分
　三千百三貫三百九匁貳四厘
一差引ゐ
　七百六拾壹貫五百九匁七分六厘
　　此金八千九百五拾八兩三歩貳朱余但兩替八拾五匁〆レハ
　又
　　此金壹万千七百拾五兩貳歩余但兩替六拾五匁〆レハ
　右揩レ合
　　貳千七百五拾六兩貳歩貳朱

〆
此方宜アレト及差圖。右ヽ書付、札所目付ゟ以家老入一見。郎日市郎右衛門へ
申渡。
五ツ半時過寢ル。

九月廿五日

九月廿五日晴

今朝目覺六ツ半時、半右衛門罷出、綱目申上之。

長谷川八十郎罷出、於本丸鉄炮稽古有之、相手榎並左次右衛門

評定日ニ付、八郎兵衛評定所へ出る。

彌次郎罷出孟子申上之。　出淵傳之丞罷出、劔術稽古いたす、相手高久官大夫竹澤五郎右衛門　五ツ半時過寢ル。

九月廿六日

九月廿六日雨

今朝目覺六ツ半時　五ツ半時之供揃ニ而、本丸へ移り、坂上彦八郎弟子劔術、慶增安右衛門指南鎗術一見。　歸館七ツ半時過。　文武延引。　淺井八百里罷出、評定留見セル。

秋田八郎兵衛中根靱負申達候ハ、御番割御書院林勘十郎、河合太郎大夫と割入可申之所、河合太郎大夫林勘十郎と割入、不念之趣ニ而、用割水谷壹岐、皆川多左衛門不念ニ而恐入、伺遠慮差出す。　差控被仰付候様伺、並波々伯部八右衛門同様伺差出す、是又同様指控被仰付。

澁谷權左衛門

御自分儀、皆川多左衛門差控中、二番之御書院番頭役御徒支配假被仰付候。
右用番於織居宅申渡
五ツ半時過寢ル。

九月廿七日

九月廿七日雨霰交り
今朝目覺六ツ半時、
五ツ半時之供揃ニ而蓮正寺　諦觀院様御靈前へ參詣

當番

使番　村上作右衛門
大番頭當番　菅沼市左衛門
下馬門々番　井原丞助

供奉之面々

觸頭　熊谷熊之助
使番　中村庄兵衛

徒頭 青木與一右衛門
時宜役 大久保太郎大夫
大番 國枝藤兵衛
大木又次郎
小栗源藏
酒井左源太

歸城四ッ時二寸五歩。
九ッ時ゟ、家老用有之、相濟八ッ半時過。
右ニ札所目付高畠市郎右衛門ゟ指出候書付入一覽、右之書付寫申付候得共、未不指出ニ付、跡ニ記之。
其餘小川次郎兵衛ゟ指出候清債(ザイ)書付右同斷

山本淸左衛門へ
白山 玄成院
大講堂御再建之儀相願候得共、御時節柄御取揚難被成、併御由緒も有之ニ付、昨年

御進物之内、御鋳壽御寄附被成候處、勸化之儀も相願候ニ付、依之來未年御家中並町在相對勸化御免被成候。

弓術四郎右衛門罷出、でキツテ斗いたす。相手服部三郎兵衛。五ツ半時過寢ル。

九月廿八日

九月廿八日雨雷交り

今朝日覺六ツ半時、半右衛門罷出絹目申上之。今日ハ亦家老用有之、昨日の殘清債書付申上之。高島甚五左衛門罷出、居合稽古相手安本新助五ツ半時過寢ル。

九月廿九日

九月廿九日快晴

今朝日覺六ツ半時、五ツ半時之供揃ニ而本丸へ移り、村田新八、山田彌三右衛門鎗術ヲ見。歸館七ツ半時前。文武延引。

評定所留

今日評定日ニ付、評定所へ秋田八郎兵衛罷出ル。

評定所用留

出扁無之
仙石 万右衛門

名代
淺井八百里

別紙之通り被仰付候。　左様相心得可被取計候。

別紙

四郡割普請所之儀、御趣意有之、近年被指留置候處、此度以前ニ被爲復候間、其段相心得可被取斗候。

但普請見分之儀ハ、舊格ニ不泥、其向々司役之面々御奉行に申談之上、場所之輕重厚ク遂吟味、仕様書相認、見積高精誠引縮候様、四郡組之者に可及指圖、尤村方無益之雑費等相省キ、普請嚴重入念相仕立可申事。

高間文四郎
本多彌六
岡田喜八郎

右同斷

別紙

西尾源太左衛門

右同斷

別紙

右同斷

中領郡幸岡田喜八郎貞幹支配下

山奥村嶋垣内
百足屋
利兵衛妻
伊和

銀貳拾目

右年齢四拾余ニ相成、舅ハ二拾八ヶ年以前ゟ病死候處、存命中孝養を盡し、姑ハ當年八拾余ニ而、九ヶ年前ゟ病身ニ相成、六ヶ年以前ゟ歩行不叶ニ候得共、不自由無之様看病いたし、夜分も度々機嫌を伺、何事ニ不寄言葉を折不申、格別孝養を盡し候趣、相聞候ニ付、爲褒美被下置候。

右之通可被申渡候

孝養者ニ褒賞ヲ下ス

菅沼市左衛門

高瀬幸八(妹)儀、關忠大夫養女ニ仕度旨申聞候ニ付、指遣申度、右忠大夫儀ハ、幸八妹聟ニ罷成候ニ付、内證申合候。　願口上書指出候。

笹治右平太

關忠大夫儀、高瀬幸八娘養女ニ仕度旨、右幸八娘儀ハ、忠大夫妻姪ニ而有之候ニ付、内

證申合候旨、願書付口上書指出候。

渡邊愿十郎

村上太郎市儀、今般家督無相違被下置候。依之相應之御奉公相勤申度旨、願口上書差出、其段御家老中へ申達候處、仲ヶ間申談並々通り相廻り相勤候樣被申聞候。

出福無之
仙石万右衛門

名代
淺井八百里

別紙之通り被仰付候。左樣相心得可取斗旨、

別紙

御札所御貸付被上納取立之儀、支配頭へ御任セニ相成候處、此度御趣法ニ付、以來御札所ニおゐて上納取立候樣被仰出候間、左樣可被相心得候。

山本源左衛門
高間文四郎
本多彌六
岡田喜八郎

右同斷

別紙同斷

西尾源太左衛門

別紙之通り可取斗旨支配頭へも夫々被申渡候。左様相心得、於御勘定所も宜取斗旨、

別紙
右同斷

右同斷

高畠市郎右衛門

別紙
同斷

九月晦日

九月晦日晴

今朝目覺六ツ半時、半右衛門罷出、綱目申上之。家老用有之、明日の役替表向相伺之。

彌次郎罷出孟子可申上所、延引。出淵傳之丞罷出、劔術稽古 相手 榊原仁左衛門 澤田丈左衛門

五ツ半時過寝ル。

（政暇日記終）

政暇日記

自弘化三年丙午十月朔日
至十二月十七日

十五代目
越前守源慶永［愼獨］

我等死去之後不破捨
此日記遺子孫者也

十月々番

公邊

老中　青山下野守

西丸老中　松平和泉守

若年寄　本庄安藝守

西丸若年寄　酒井右京亮

寺社奉行　脇坂淡路守

御留守居　石川美濃守

町奉行　鍋島内匠頭

勘定奉行御勝手方　石河土佐守

同斷公事方　牧野大和守

目付　三宅市右衛門

目付　戸川中務少輔

越城

中川主膳

菅沼市左衛門
雨森小十郎
酒井彦六
稲葉式部
毛受傳三郎
本多五郎右衛門
美濃部半七
岡田金左衛門
田邊五大夫
雨森儀右衛門
土屋十郎右衛門
波々伯部八大夫
代川村文平
高村藤兵衛
堀勘左衛門
代岩城藤左衛門

高江友右衛門
生駒五左衛門
高間文四郎
榊原惣三郎
青木與一右衛門
酒井外記
中根靭負

十月朔日晴

今朝目覺六ッ半時。

五ッ半時ゟ供揃ニて本丸へ移り、於御座之間例之通り家老禮ヲ受ケ、夫ゟ役替、夫ゟ大廣間へ移り、諸士人別例之通り受ル。

但家老御座之間相濟、鉄炮之間役替申付、再御座之間へ参、用部屋申渡、相濟、夫ゟ大廣間へ移り候事。

年寄候ニ付、隠居被仰付、忰小金吾へ家督無相違被下置、大御番組へ被入候。

波々伯部八大夫
同　小金吾

年寄候ニ付、隠居被仰付、忰小一郎へ家督無相違被下置、大御番組へ被入候。

今村五兵衛
同　小一郎

年寄候ニ付、隠居被仰付、忰甚十郎へ家督無相違被下置、大御番組へ被入候。

堀　勘左衛門
同　甚十郎

右之通り本丸へ移ル前於用部屋申渡

鉄炮之間

其方儀側物頭波々伯部八大夫跡申付　川村文平

其方儀普請奉行川村文平跡申付　上坂藤大夫

其方儀先物頭今村五兵衛跡申付　小栗次右衛門

其方儀先物頭堀勘左衛門跡申付　岩城藤左衛門

其方儀御預所郡奉行小栗次右衛門跡申付　加藤茂右衛門

其方儀先作事奉行加藤茂右衛門跡申付役料百五拾石遣ス　服部三郎兵衛

其方儀留守作事奉行服部三郎兵衛跡申付　鈴木仁大夫

其方儀使番役上坂藤大夫跡申付役料百石遣ス　淺見七十郎

其方儀使番役岩城藤左衛門跡申付役料百石遣ス　村田龍之進

右之通り此方直々申渡、家老酒井外記取合有之

末之番外御時宜役被仰付候、但席高屋伊喜右衛門次　皆川多左衛門指加　生駒彌五右衛門

近藤雄藏

御近習番頭取、御膳番、御書院二番之筆頭役村田龍之進跡被仰付御書院番組へ被入候

石原甚十郎

御小姓頭取近藤雄藏跡被仰付候、但席最前御小姓頭取相勤候節之席へ被入候。

森田傳右衛門

御鵜方生駒彌五右衛門跡被仰付、御膳番格被仰付候

三岡次郎大夫

御近習番頭取御膳番鈴木仁大夫跡被仰付候

野中重左衛門

奥御納戸役森田傳右衛門跡被仰付候

奥御納戸役三岡次郎大夫跡被仰付、御書院番組へ被入候　青木與一郎

御裏役野中重左衛門跡被仰付候　高田新七郎

御書物方高田新七郎跡被仰付候　横井吉十郎

御近習番横井吉十郎跡被仰付候、御書院番組被入候　林作助

御座所預り被仰付候　蟹江善右衛門

〆

札所元〆役に謁を賜ふ

御座所於長爐之間札所元〆役目見申付

札所元〆役罷出候名共

内田惣右衛門
不快　三國與之祐
井上七兵衛
多田善四郎
内田平右衛門
津田彦右衛門
内藤理兵衛
山口彦三郎
須ヶ原彦左衛門
藤田久四郎

小林清左衞門
八木次助
仕足屋
權兵衞
天王屋
平三郎
不快
米屋
十兵衞
茴屋
利兵衞
久保庄右衞門
不快
濱坂浦
甚右衞門
不快

右ㇵ者共、於長爐ㇵ間目見。用人御札所元〆共と披露。側用人中根靭負御札所御用、何も出精致しますと言上。此方申、追々出精一段ニ存ると申。札所目付高畠市郎右衞門、御目見被仰付、御意被成下、難有仕合と取合有之。

同日於家老部屋、家老元締共へ演說ㇵ大意

御札所御趣法ニ付、先年來格別丹精ㇵ御奉公致シ㕝、追ゝ御主法御見込通りニも相運ひ、此度新札引替も相濟候段、達　御聽候處、一段ㇵ儀ニ被思召候。

依之調達金殘り御決算之儀、馬喰町御貸附役所御拜借金を以、御返濟被成度處、行足り不申候ニ付、無據元金被下、御返濟ニ相成、利足之儀ハ、乍氣之毒當分御斷延ニ被仰出候。委細之儀ハ御札所目付ゟ可申聞候間、左樣相心得候樣、尚又此以後共、不相替一統厚申談、致出精吳候樣賴入候。

札所目付ノ説明

同日於役所、札所目付高畠市郎右衛門並札所奉行武田藤三郎、岡谷彌右衛門ゟ利解之大意

御家老中ゟ、今日御演說有之通り、一統格別之出精致し吳候故、追々御趣法御見込通りニも相運ひ、此度新札引替も首尾能相濟、拙者共おいても大慶不過之存候。依之調達殘り元利共御決算ニ可相成處、何も承知之通り之御運ひニ候故、甚乍氣之毒、元金被下御返濟ニ相成、利足之義ハ、御趣法復古之御見詰を以、追々御下ケに取斗可申候。且又、昨年來公金融通方御返濟之譯ニ付、別段調達相賴候分、並同年角印札御備金調達、或ハ當座調達之分共、何も格別ニ致出精吳候譯柄も有之ニ付、乍聊御義理合も御立被成度思召ニ付、利足定之通り壹割之算當を以、御下ケ可被成候。猶此以後何茂厚心配いたし吳候樣被仰出候。申迄ニハ無之候得共、角印札御備金茂末々御手薄ニ候得ハ、亦復

改る調達御頼被成候儀も可有之候間、面々其心得を以、厚心配頼入候。

別段演說

本文申聞候通り、可成丈ケ元利共ニ御返濟被成度思召ニハ候得共、不容易御趣法中ニ候故、必至之御取斗ニる、御有合之御備錢を以、右別段調達御決算之內へ指加へ可申旨被仰出候間、左樣相心得可申候。猶又御返濟割方之儀ハ、受込共々可申談候。

三國與兵衛
井上七兵衛
內藤理兵衛
山口彥三郎

紗綾一卷
羽二重一疋ツヽ
鴨一羽

右四人之者、昨年來格外ニ必至之御奉公致候ニ付、爲御內被下、御有合之御品並御鷹之鴨一羽ツヽ御添被成下候。

九月廿三日晩立通飛脚、道中常振今日到着。江戸靜謐也。五ツ半時過寢ル。

十月二日晴

今朝目覺六ツ半時。

一五ッ半時之供揃ニ而、久野猪兵衛指南、柔術一覧。
一文武延引。 五ッ半時過寝ル。

十月三日雨

一今朝目覺六ッ時。
五ッ時之供揃ニ而、荒川筋へ放鷹可罷越之處、天氣相ニ付延引。
秋田八郎兵衛ヲ内々召呼申付候ハ、中根靱負儀、側用人申付度、來年ハ是非其方へ江戸へ申付候存ニ候、左すれハ此表、見習一人と申てハ手薄ニ候間、右之通申付度、則七月九日俄ニ家老申呼候節見習と申付候時ハ、家老ハ江戸被仰付候時分ニハ、本役ニ被仰付御尤ニ奉存候段申ニ依、如斯申之。 右之段三人執政へ申聞可試候。 八郎兵衛又ゝ罷出、三人へ申達候處、至極尤之旨申ニより、早々評定可致段申候段、内々八郎兵衛申之。
一清債掛り之事、一昨年左膳へ御借財掛り被仰付、外記、内記、帯刀へ御量制掛り被仰付。 然ル處、左膳ハ退役被仰付候得共、只今御借財掛り無之候得共、帯刀ニ御借財掛り被仰付被下候やう外記内達之趣、内々於評定外記於別席咄候由、此旨ニ云。 此方申候ハ、ソレハ尤之事なれ共、家老之總官之役なれ者、一昨年之開

闕故、左膳ニ申付候得共、今年叉帯刀に申付候とて、ソレデ急度見詰ヵ立候とも存ラレヌ、右故三人同心して心配いたし候やう申之。八郎兵衛も尤と申之、外記へ早々申達候所、心服致候。

伊藤利藤太、國分次郎大夫儀、江戸口の者内田次兵衛咎申付候ニ付、恐入伺遠慮差出候處、不及其儀旨及差圖。昨日伺書差出、今日以側用人入一見。雨森小十郎、横井吉十郎席割入不念の趣有之ニ付、伺差出、不及其儀旨及差圖。矢島七郎右衛門、雨森小十郎同様伺差出、差扣罷在候やう及差圖。彌次郎罷出孟子申上之。高畠甚五左衛門罷出、居合稽古相手大橋金兵衛五ツ半時過寢ル。

十月四日

十月四日風雨寒し

今朝目覺六ツ半時。半右衛門不罷出、綱目獨誦。目付罷出、用状並張紙見セル。方々用調見セル。

張紙の値段

府中

米壹俵ニ付	六拾壹匁位
大豆壹俵ニ付	六拾匁位
小豆壹俵ニ付	五拾七匁位

三國

米壹俵ニ付　五拾九匁位
大豆壹俵ニ付　四拾九匁位
小豆壹俵ニ付　六拾壹匁位
[illegible]雨ニ付　貳拾俵半位

家老罷出用狀並其餘色々相伺之

灸治　灸治いさす。五ッ半時過寢ル。

十月五日　十月五日風霰或ハ雨或雪昨夜初而雪降ル寒冷

今朝目覺六ッ半時。

貝稽古　五ッ半時ニ供揃ニ而、本丸へ移り、荒川喜代太指南、鎗術一見並貝役之面々貝稽古之者共貝聽聞。

飛脚出立　評定日ニ付、輙負評定所へ可罷出之所、ふり替八郎兵衛出ル。
今日晩立通飛脚道中常振差立。右ニ付　一位樣、伊達遠州へ呈翰。五ッ半時過寢ル。

評定所　評定所

齋藤數馬

武澤長左衛門儀、病身ニ付、内達之趣も有之、御役御免被成候、其段長左衛門可申聞候。

其方儀番改役武澤長左衛門跡被仰付候

吉村源藏

私御番組高須幸八娘儀、關忠大夫養女ニ指遣度旨、願之通り被仰付候。其段幸八へ
可被申聞候。

菅沼市左衛門

私御番組關忠大夫儀、高須幸八娘養女ニ致度旨、願之通り被仰付候。其段忠大夫へ
可申聞候。

笹治右平太

菅沼市左衛門悴與一郎儀、痛所有之ニ付、湯治仕可然旨山本正伯指圖仕候。依之加
州山中へ三廻り入湯爲仕度、若相應不仕候ハヽ、右日數之內、同國粟津へも入湯爲仕
度旨願書付指出候。

齋藤數馬

五ツ半時過寢ル。

十月六日曇

今朝目覺六ツ半時。半右衛門罷出綱目申上之。土屋十郎右衛門罷出、評定留
見セル。

澁谷權左衞門罷出、神田□館御不慮之節、早速江戸表へ參り、供立ヲ始其餘色々相伺之。
彌次郎罷出、孟子申上之。　中村政右衞門罷出、鎗術稽古相手中山大左衞門　五ツ半時過寢ル。

十月七日

十月七日朝晴夕雨

今朝日覺六ツ半時。
今日大學會讀有之。　慶永講師。　知止而后有定ヨリ近道矣迄。
飯島四郎右衞門罷出、弓術いさす相手木内甚兵衞　五ツ半時過寢ル。

十月八日

十月八日曇雨

今朝日覺六ツ半時、半右衞門罷出、綱目申上之。　今日淨光院樣御忌月ニ付、御代拜歸澁谷權左衞門江逢フ。
彌次郎罷出、孟子申上之。　高島甚五左衞門罷出、居合稽古相手生田十左衞門
御用人罷出、他領札角違印新札見セル。　五ツ半時過寢ル。

十月九日

十月九日まづ晴

今朝日覺六ツ半時、半右衞門罷出、綱目申上之。　二日晩立通飛脚、道中常振今日

到著、江戸静謐也。彌次郎罷出孟子申上之。市橋萬右衛門罷出、柔術稽古相手片山平七、蟹江善右衛門五ツ半時過寝ル。

〆

九月廿三日晩立通飛脚、道中常振十月朔日到著。右之用状書写可申之所、此日多端打忘レ候ニ付、此ニ載ス事左之如し、

一當七月十八日大風雨之節破損所之儀、先達る先御届被指出候後、猶又被相糺候ハ悉皆御届書、別紙去ル十日御用番牧野備前守殿へ、八大夫持參指出候。右ニ付阿部伊勢守様へも、御勝手へ同人持參差出候段、江戸表ゟ用人共申遣ス。

暴風雨被害の詳細報告

御届写

拙者領分越前國當午七月十八日大風雨之段、先達る先ッ御届申置候後、猶又篤と相糺候處、領分之内ニるも、異同て有之候得共、就中足羽郡之儀て、風當強、居城内外之敗壊、並家中屋敷を始、町在之破損所左之通ニ御座候。　田畑損毛之儀て、追る御届申候。

一本城建物瓦並棟石等所々吹落大小之損所　数ケ所
一本丸三重櫓石葺之屋根吹落建物大破　一ケ所
一同所二重櫓石葺之屋根吹落建物傾大破　一ケ所
一同所多門石葺之屋根之内吹落　百拾九間餘
但其外所々大破

一同所渡矢倉石葺之屋根吹落建物大破　三ケ所
一同所添櫓當門大破　三ケ所
一同所番所大木折掛打摧　一ケ所
一同所番所大破　四ケ所
一同所塀吹倒　貳百八拾七間
一同所門吹倒　一ケ所
一同[illegible]大破　一ケ所
一三ノ丸
東照宮御宮並
御靈屋御屋根其外所々大破
一同所住居向屋根吹捲、戸障子ハ勿論、天井等迄吹放、或ハ大木等折掛、建物所々打摧、
其外極大破
一三重櫓石葺之屋根吹落建物傾大破　二ケ所
一二重櫓石葺之屋根吹落建物大破　三ケ所
一二重櫓板葺吹捲大破　一ケ所
一渡矢倉石葺屋根瓦屋根板屋根等吹落大破　拾一ケ所
一同添櫓當門大破　拾ケ所
一虎口門吹倒　三ケ所
一[illegible][illegible]大破　三拾三ケ所
一木戸門吹倒　二ケ所

一柵木吹倒	所々
一城廻り塀吹倒	千廿間餘
一同大破	二千五百拾三間
但所々大破之塀夥敷	
一番所大破	拾九ヶ所
一郭内長屋土藏等破損	數ヶ所
一二ノ丸厩破損	百間餘
一廓内所々建物大破	數ヶ所
一城廻り大木吹倒	六百五拾壹本
城下	
一家中屋敷潰家	五拾四軒
一同大破	千八拾二軒
一寺潰	七ヶ寺
一町家潰	二百二拾六軒
在方	
一寺潰	三ヶ寺
一社潰	三拾ヶ所
一潰家	千三百七拾壹軒
一土藏潰	二ヶ所
一破船	拾壹艘

一町在怪我人　　弐拾五人
　内
　男　　八人
　女　　拾七人
一同死人
　内
　男　　九人
　女　　九人
一斃牛馬無之
一右之外、扶持人但足軽、且町在等迄居宅大破、其外大小之橋々破損、家中町在山林等之立木吹折吹倒夥敷儀ニテ、相分不申候。
右之通ニ御座候。此段御届申候。以上
　九月十日

十月二日晩立飛脚、十月九日着之江戸表ゟ参候写、

去月廿四日御留守居堀川能登守方呼出ニ付、留守居介田邊周吉罷出候處、別紙書付ニ而被相渡候旨

　　　　　福井
　　　　　松平越前守殿
　　　　　　　留守居江

御鷹之鶴御禮ニ付、御儀中様ゟ御道具類來ル廿八日献上候様可申達旨、牧野備前守殿

被仰聞候。諸事先例之通り可被相心得候。尤　御本丸ニ而廿八日五時可謁之ニ而候。可被得其意候。

九月廿四日

御廣敷番々頭　江連小市右衛門
同添番　中村金次郎
　　　　齋藤小兵衛
同伊賀之者　喰代與三郎
　　　　　　嶋田半藏

一去月廿五日、釋奠ニ付、例之通り學問所へ御太刀馬代銀三枚、同廿四日御獻備有之、御使者物頭相勤候。

一十月二日、公方様四時御供揃ニて、吹上御庭へ被爲成、夫より田安尊館へ　御立寄被遊候。右ニ付獻上物御杉重、御支度田安へ相頼取斗獻上無滯相濟候。

一栗毛（年六歳 丈五寸五歩）出生仙臺

此度買上ケニ相成申候。東山の替りニ。馬掛り方名を付候様申ニ依て松嶋と申付。

大目付に

火之元不致麁末儀ニ、上下共辨へ居候事ニ候得共、當正月本郷丸山邊より出火之處、

大火ニ及び、武家町家共夥敷致類焼、諸人及難儀候。畢竟火之元麁末故之儀ニ付、右様之事ニ至候間、冬春之内ハ勿論、風烈候節ハ、別而諸々屋敷内外下々部屋々迄も、晝夜篤見廻、巨細ニ相改、精々厚相心得入念候様可被致候。

右之通り可被相觸候。

九月

十月十日

十月十日曇折々雨

今朝目覺六ツ半時、半右衛門罷出綱目申上之。家老罷出用状並江戸供之儀、且其外出納之儀申談。

雨森小十郎

公儀御靈屋向先達而之大風ニて御損所有之候處、御修復出來、此度御尊牌御遷座有之ニ付、爲御供養料白銀被供、其段取扱候様被仰付候。

右之通り用部屋ニおいて申渡

彌次郎罷出、孟子申上之。出淵傳之丞罷出、劒術稽古相手高久官大夫 竹澤五郎右衛門　五ツ半時過寢ル。

十月十一日

十月十一日まづ晴

今朝目覺六ツ半時。

五ツ半時長谷川八十郎罷出、空操稽古相手松尾傳藏

今日評定日ニ付、鞠負評定所へ罷出る。彌次郎罷出、孟子申上之。中村政右衛門罷出、鎗術稽古相手松尾傳藏

澁谷權左衛門昨日罷出申達候を、御内調之義ニ付旗之者今日出立、道中宿々調を申付段申聞之。

皆川多左衛門水谷壹岐罷出、表之者江戸詰相伺之。例之通り人拂ニる候。

評定留

齋藤數馬

菅沼市左衛門悴與一郎義、痛所有之ニ付、加州山中粟津之内ニる三廻り入湯爲致度旨、願之通被仰付候。其段市左衛門へ可被申聞候。尤前後目付共へ相屆候樣、是又可被申聞候。

山本源左衛門

別紙之通り可被申渡候

別紙

牛ノ堂
醫王寺

右假堂並其餘建物等、先達るの大風ニる大破ニ相成候ニ付、繕普請等致度候處、難及自力、依之材木被下置候樣相願候得共、御取場難被成、併御由緒も有之ニ付、格別

淵村傳吉の孝行を賞す

之趣を以、來春ニ至り町在相對勸化御免被成候

右之通り可被申渡候

中領之郡宰岡田喜八郎貞幹支配下

淵村

傳左衛門悴

傳吉

銀貳拾匁

右實躰成者ニ而、父ハ六拾才相成、兼而氣儘を申候得共、言葉を折不申、母ハ五拾才余ニ而、二十ヶ年以前盲目ニ相成候處、不自由無之樣諸事氣を付、其上農業等出精奇特孝心之趣相聞候ニ付、爲御褒美被下置候。

右之通り可被申渡候。

毛受傳三郎

千ヶ谷會人儀、關宿下總守家中奥村熊八並木内駒之助と申者由緒有之候處、無據用事有之候ニ付、近々罷越度旨申遣候、依之三宿逗留爲仕度旨願書付指出其段御家老中へ相達候處、願之通り逗留爲致候樣、尤前後御目付共へ相屆候樣、是又可被申聞候。

下山十郎左衛門

十月十二日

荒川筋に放鷹

堅達山にて高畠弟子の野試合

恒岡安左衛門御番組柳下久之丞儀、妻女無之ニ付、藤島西超勝寺塔頭大光寺娘後妻ニ仕度、縁組内證申合候旨、先妻儀ハ栗崎道竹妹ニ候處、不縁ニ付双方和順之上、先達而離縁仕差戻候旨、願口上書指出、其段御家老中へ相達候處、再縁之事故、願之通り勝手次第取扱候樣可申聞旨被申聞候。

但安左衛門可相達之處、不快ニ付私相達候。

五ツ半時過寢ル。

十月十二日晴夕雨

今朝目覺六ツ半時。

五ツ時ゟ供揃ニ而、荒川筋へ鷹野ニ參り、歸城及夜六ツ半時。

道書

庭口ゟ臺所脇木戸門、御座所門、下馬門杉田丘郎兵衛屋敷前脇添門長濱町通り、勝見門和田口ゟ往來通り、淵上村半左衛門方へ小休、夫ゟ和田中村脇神明村裏、曾万布村、荒木別所村、中河水村前膳所寮村勝縁寺へ入。 夫ゟ同村ゟ坂下村前、堅達村前、夫ゟ堅達山へ參り、高畠甚丘左衛門弟子居合ゟ野仕合申付、相濟、夫ゟ往來通り原目村中原目橋渡、夫ゟ志比往來追分茶屋前、松岡往來、丸山出茶屋前ゟ地藏丁門、松原濱之助屋敷脇、八軒丁笹川熊次郎屋敷前、三ノ丸

北門渡邊愿十郎屋敷脇前切手門ニ丸木戸門ゟ元ノ庭口へ入ル。

供奉ノ面々

御頭　永見隼人

大番　•加藤又右衛門

權太權大夫

本多猪太郎

高松彦藏

小供　源太左衛門悴　西尾十之丞

五左衛門養子　生駒彦太郎

彌作悴　劔持久太郎

十郎助養子　金子平次郎

清助悴　田川通介

幸八悴 高須進五郎
百右衛門悴 古石作之助
孫大夫悴養子 喜多嶋熊藏
幸左衛門養子 關恒三郎

齋藤文大夫雁を打つ

〆

右鷹野ニ罷越候得共、實ハ爲野支合ニて、鷹野ハ爲ニあらす。されとも銕炮ニる、雁三ツとれ申候。齋藤文大夫うち申

試合の人數と組合せ

今日於堅達山、野支合有之、其節ハ人數左ハ通り

竹內流高畠甚五左衛門弟子支合組合

加藤二九助
町田銅三郎

吉田捨六
金子外吉

織田仁九郎
高畠鎌之助

水谷乙吉
横田藤九郎

市橋環
織田鉄一

毛受彦一
畑中順之助

本多茂吉
水野数馬

中村鑛之助
堀川清助

市村乙助
岡田剛一郎

引入　井上丁六

打込
加藤常之助
榊原小十郎

今村重太郎
中野弁吉

米岡源太郎
菅沼外吉

天方彝之助

平本但見
下川三之助
江上音之助
岩城藤市
井上平六
高畠甚五左衛門　引入
尾高虎吉
中村錶之助　打込
根來助藏
美濃部金彌
相馬孫六
仙石藤之丞
津田彌三郎
青木雄藏
大谷半平
高須幸八
田邊榮太郎
高田孫十郎
市村乙助　引入
金子外吉

打込　松原外次郎
四人掛り　秋田城太郎
　　　　　野田万太郎
引入　津田彌三郎
　　　　　吉田捨六
打込　中野弁吉
四人掛り　米岡源太郎
　　　　　菅沼外吉
引入　織田仁九郎
打込　川端小作
　　　横田藤九郎

右何も姓名之通り罷出、相濟候折、甚五左衛門召呼、今日ハ大儀、何れも宜ク相見へ候段直ニ申聞之、相濟出立。五ッ半時過寢ル。

十月十三日

十月十三日晴

今朝目覺六ッ半時。

澁谷權左衛門に刀を賜ふ

五ッ半時之揃ニ而、鐵炮之間へ移り、如斯申付候

澁谷權左衛門

右罷出、例之通り夫へ二度有之、平伏之折

高野半右衛門儒者本役となる

十月十四日

其方儀出精相勤候ニ付刀を遣ス

と申聞、表小姓白鞘刀持權左衛門へ相渡、權左衛門戴、家老へ向ひ御禮申出、退去。

　白鞘肥前之國忠吉

威德院様御代鍋島侯ゟ御到來之由。

又々側用人之部屋へ權左衛門召呼、三所の物以存寄遣ス。　側用人相渡し

高野半右衛門
不快名代　廣部七兵衛

出精相勤候ニ付、御儒者本役被仰付、御書院番組へ被入、役中八石御増、都合八石壹人扶持御足充行被下候。

役儀其儘御書院番組へ被入候　薗田藤左衛門

右於用部屋外記申渡之

高島甚五左衛門罷出、居合稽古有之相手本多五郎右衛門五ツ半時過寢ル。

十月十四日晴

今朝目覺六ツ半時。

五ツ半時ゟ供揃ニ而、文照院樣御忌月ニ付、運正寺御靈前へ參詣、歸り四ツ時過、

供奉ゟ面々

用頭　波々伯部　熊藏

使番　林　忠兵衞

徒頭　青木與一右衞門

時宜役　生駒彌五右衞門

大番　大谷　半平

服部三郎左衞門

毛利　政右衞門

岩村　他三郎

家老用有之、譯後ニ記之。

今日晩立通飛脚道中常振差立、嚴君へ呈翰。　文武延引。

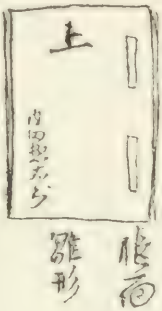
三國與兵衛に賞詞

内田惣右衛門の書付

今日家老罷出候節之次第左之通り

用番ニ付、外記申達候ハ、先達る風災之日、夜分御頼御調達ニる可被仰付候と申事ニ付、色々於御前御討論申上、御前思召通りも相伺、則三國與兵衛、内田惣右衛門へ今度之風災ニ付るも、色々下々難澁之趣も有之候得て、心配致候様申候。 共跡ヨ與兵衛不快與之助出る與之助へ申聞候ハ、親與兵衛の大功ニる、先達る御藏米之内御渡被成候御積之所、與兵衛申候ハ、先今秋風とる、又て飢饉と有之候へて被成方無之ニ付、先二百十日之風も相濟候ハヽ、御渡被成候やう申聞候ニ付、左様致候所、今度之風災ニる御間ニ合ひ、與兵衛功故、今度御都合も可宜哉と一統相悦候由、改る挨拶ニ及ひ候由ニる、與之助も殊之外難有仕合之由申之。 御次ニ市村勘右衛門奉行両人ニ申聞候ハ、是ニ就、両人共何そ存寄候ハヽ、御家老之方へ御直々申上候様ニと申聞候故、 日之晩帯刀宅へ惣右衛門罷越、（ ）之書付差出申候、餘り旨キ書付ニる候まヽ、御目付御奉行とへも相調候處、此度て白鬚抔て加へ不申由相答。 右故、惣右衛門を相用ひ候哉如何哉と申事、每度御奉行御目付へ相調候處、兎角執政可任賢慮と申ニ依る、私共之方ニ

而銘をきり出し不申候へハ不成、誠ニ心痛致居候段申之。右惣右衛門書付指出候左之通り



一御趣法御掛り可被仰付事

一江戸表御運送金、無遲滯御仕向可仕候事

一御國御入用之分、御指支無之樣、御仕向可仕候事

一御半減御指解、下地之通り可被仰付候事

一町在御冥加銀御取立方、御用捨可被仰付候事

一御渡御米之内、三國湊引違御藏之分ハ地拂ニ仕、遣作ヲ當ニ仕置可申事

附札

右三万俵地拂代銀凡千四百貫目、是を翌年六月中迄利足立ニ仕、預ヶ置候而、六月中御決算相立候時ハ、此利足も拾貫目斗り、其上右三万俵を、三國湊ニ而商ヒ米ニ仕候ハヽ、其御口錢も三拾貫目斗りも、都合百貫目ハ、年々除置候而、重而御吉事御入用之手當

ニ仕置申度候。

但是迄御渡米て、六月中御決算ニる、是御利足迄ハ無御座候處、右仕法を以、先ッ成丈け之御徳分て相見え候。

但引違御藏米之分、御收納年十一月ゟ翌年正月二月迄之地拂ニ仕候。此御米凡三万俵、就右、是を違作手當と申候事ハ、御積出し御米ニハ、百石ニ付金拾五兩つゝ運賃金御渡ニ相成候故、船手一統是を相好ミ居候。又地拂米ハ、當國之振合を以相拂候故、上方相場と算當仕候るも、百石ニ付五七兩位取らてて、運賃ニ相當り不申候故、都る地拂米之分ハ、春先壹番船乘出し候へ共、三千俵二千俵ハ積出し仕候るも、皆濟積出しと申事て、往古ゟ無之候。且五六月ニ至り、上方相場急ニ引立候る、自然積出しも多分ニ可相成様見請候時て、早速津留ニ可被仰付候。左様仕候るも、商人共難儀ハ無之候。如斯相場之鈎合を以、積出し出來不申と申事を見圖り候故、違作手當と心得居候、又其年ニ至る凶作見請候時て地拂ニも不仕御領國中米數見圖り之上掛引方御願可申上義も可有之候。

一明里御藏之分て、翌年之作體見定之上、秋積出しのさ可被仰付候事

一無御據御借財之分心配可仕候事

鈴木主税のこと

淺井八百里覺書

附札
此分町在一統格別難題ニ不相成樣御趣法方心配可仕ゟ事

右之通御當成之分、引請心配仕度ゟ。　以上

午七月

内田惣右衞門

右之通り

一御勝手向之儀ニ付、色々私共心配仕ゟ得共、中々手關ニ不及、何分當時御側ニ罷在ゟ鈴木主税を御放シ被遊ゟ樣、右ニ就るも、八百里事是迄御側ニも罷在諸事承知之事ニもゟへも、平生帶刀八百里と懇意ニ付、内々帶刀ゟ右之段承りゟ處、八百里儀ハ以書付内々帶刀迄差出ゟ。　書付入披見、書面左之通り

覺書草稿

悃意之覺

源太左衞門 姓西尾 本書ニ無之

今暫此儘ニ被差置、明後年江戸御普請を見込、當御役ニる今一度來秋詰可被

仰付哉

勘右衛門〔姓市村〕無之

一旦御咎相濟候上、來春ニ至り御役御免而、轉役ゟ可被仰付哉。

〔附札〕來春ニ至りと申候ハ、當年之所ハ御所務方之義宜と候故ニ御座候事

孫附札、手形之外ニ一條有之候へハ、免切相濟候上、御役御免、先物頭次席遠慮被被仰付候樣、但手形一件ニ付、一統御咎之節ニ候事

但此儀ハ同役共當時內評中ニ御座候間、其內月番ゟ何とか可相伺と奉存候事

平左衛門〔姓原〕同斷

來秋迄詰越可被仰付哉

金左衛門〔姓岡田〕同斷

一旦御咎相濟候上、當暮か來春當御役之儘御引立可被下哉

但御咎之儀ハ右勘右衛門と同樣、其內可相伺と奉存候事

茂右衛門〔姓加藤〕同斷

文四郎〔姓高間〕同斷

兩人ニ內勘右衛門跡可被仰付哉

□茂右衛門義ハ、十人並ゟ少し宜方、相應ニ氣象も有之、人付も宜御座候。前方大御番筆頭ニ時分抔、相番落合も至極宜、私も長々相番ニ而心易御座候。花ハ平左衛門ゟ少し顯ハれ候方に御座候。心根惡敷と申程ニ義無御座候。

○文四郎ハ御存しニ通りニ御座候。御用席抔へも出つけ居候故、今日ニ取て廻しハ至極宜御座候。乍去心根ニ處ハ少〻受合ろさき所御座候。たとへハ、下をせさてけ候ても、冥加金を上させ候へハ、夫か上ニ御爲と心得候樣ニ所有之哉ニ被相考、當時ニ思召とハ少し違ひ可申哉。

一右跡郡奉行被仰付候ハヽ、始終私共同役ニ可相成、御心當ニ者を御試ニ爲被仰付可然哉。皆川平右衛門ハ、物堅き生れ付健義成者ニ御座候。三岡助右衛門私近所ニ御座候得共、心易くハ無御座候。乍去隨分締りも宜樣ニ見受申候。長谷部甚平抔も宜候得共、是ハ江戶表ニ儀、殊ニ外功者ニ御座候。其上筋合も宜手も叶ひ候間、御留守居ニ方へ末々御見込御座候ハヽ可然哉。其外當勤若手ニ內ニ而ハ、高田孫十郎、波多野賴太郎抔ハ末々

御側向頭取としての鈴木主税

御間ニも合可申哉ニ相見得候。此等之儀を序故申上候。

附札茂右衛門義御奉行被仰付、其跡へ文四郎可被仰付哉郡奉行皆川平右衛門可然事

主税 姓鈴木 同断

御手元さへ御放さへ被遊候ハヽ、御勝手掛り被仰付、必定宜と奉存候。此者ハ先役中ゟ、町人共思ひ込も宜御座候得を、御用達共も氣受宜可有之と奉存候。且ハ此者出候ハヽ、御奉行抔も一ふし有之者へ被仰付候とも、程能相勤まり候様ニあひしらひ候半と奉存候。

但自然御奉行御拂底之節を、假ニ御奉行組御預ケ被成候るも可然哉

忠兵衛 姓前波 同断

主税御放し被遊候ハヽ、右跡可被仰付哉、當時御側へ出候者を、少ハ近來之御振合承知いたし居候者ニ無御座候半るハ、御間ニも合申間敷哉、

但右様ニハ申上候得共、御側向頭取之義を、御小姓御近習番都合三拾四五人之締り方、並大奥向取扱、江戸表ニるを御出入之衆之取扱も有之、右等之廉々ハ甚あひしらひ六ヶ敷ものニて、意味合も有之、治りまくきものニ御

半候。其上當時　御前體之儀も御婚禮ニ而も被爲濟候迄之所者、甚御大切之御儀と奉存候。たとへ表御役人手揃候とも、御側向締り方堅固ニ無御座候半而者、惣崩れ之基と奉存候。近年御手元切之所者、漸諸事御〆りも付候處、只今主税を御放し被遊候而者、御前御用辨之所者兎も角も御側一圓御〆り之所者、御受合難申上、乍去私共御役前ゟ取候而も、當時御勝手向之儀甚御大切之御時節と奉存候ニ付而者、主税事御勝手掛り被仰付候ハヽ、是亦必定御爲ニ可相成奉存候間、右兩樣輕重之所者兎角御賢慮ニ任セ奉り候。

一來年之所は未た半減中ニも御座候得者、先勘右衛門御入替位之處ニ而惣右衛門も程能被召仕、何卒いたし候而來年一抔之處御持こらへ被成、來々年御歸城之上主税其外御勘定所向改而御締り付も可然哉

但、右樣來年之御留守御持こらへ被成候御決評ニ候ハヽ、御家中始之御手當、且ハ難澁之中と者乍申、文武等之御引立方等夫々有之、何分人氣極陰ニ落入不申樣ニ御世話御座候樣仕度候事

附右樣相成候ニ付而者、私極内存口上ニ而申上候通りニ御座候事

附札　君上不被成御座候ニ付るそ、御締り方不參届ものニ候間、書面之通り來年之所御持こらへ、來々申年御着城被爲在候上、改る急度御締り被仰出候樣、右ニ付るそ、夫迄之處と申内含ニて、雨森儀右衞門御勝手掛り指加り候樣被仰付、月番之儀そ御免被成候樣

〆

右そ極密之御懇尋ニ御座候故、愚意之趣無覆藏申上候。尤同役へも内談不仕儀ニ御座候得そ、同役抔そ如何可存哉難斗、何分了簡一杯之處申上候。日上ニる申上候へそ、間違も可有之哉ニ付、覺書草稿之儘奉入　貴覽候。御披見濟候ハヽ、御火中奉願候。　頓首

午十月

此方熟覽いさし申入候を、君上不被成御座候ニ付るハ、御締り方不參届と申事、會得致兼候。譯をたとひ世上如何相成り候とも、此方ニ居れそ締りゝ出來、此方カ江戸へ參れそ締りゟ不參届と申樣の一言そ、宰臣の申候事とも不被存、留守ヲ安心いさしゝる預候家老の事なれそ、其家老ゟ綱紀ゟ弛候るそ第一安心不致、何分共方共ニ任せ候事なれそ、來年留守とても綱紀のさゆまさるやうニ可致、此一言難信覺候段申しゝへそ、何も畏服之段申聞之。

十月十五日
諸士の禮を受ける
明年江戸伺品の面々

其餘色々政談有之。五ッ半時過寢ル。

十月十五日

一今朝目覺六ッ半時。

五ッ半時ゟ供揃ニ而本丸へ移り、諸士ゟ禮一統受ル例之通り、

秋田八郎兵衛
澁谷權左衛門
雨森小十郎
水谷壹岐
鈴木主稅
千本藤左衛門
岩上佐大夫
武曾權大夫
淺見七十郎
川瀨次郎右衛門
野村拾大夫
溝口鄕右衛門
勝木十藏
林勘十郎

河合太郎大夫
横井吉十郎
井上彌一郎
坂井又三郎
八木八十八
川村乙三郎
松波彌次郎
高野半右衛門
根來左大夫
永井與五左衛門
大河原助右衛門
大谷半平
東郷庄助
山崎七郎右衛門
小栗源藏
出淵傳之丞
今立五郎大夫
河合久左衛門
高松彦藏
寺澤藤左衛門

數賀山彦右衞門
滿井十大夫
原田小十郎
山本彦助
飯島四郎右衞門
蘭田藤左衞門
高屋半三郎
伊藤利藤太
井上勘左衞門
辻岡玄順
加藤周谷
（元中持参黑中松村御屋敷勤）馬淵玄龍
槙並亭齋
（見習）夏木徹齋
石原甚十郎
日比彦之丞
藥山彦助
海福猪兵衞
笹川熊次郎
上月熊之助

大井會輔次郎
波多野頼太郎
萩原長太郎
堀　連之助
彦坂又五郎
表小姓
西村小平次

小役人格

料理方
村井知兵衛

料理方
野村駒吉

小屋頭
福島喜兵衛

同
吉田𢪸左衛門

供筆頭
鈴木庄八

同
岡佐五右衛門
吉江仁左衛門
赤尾金平
古市傳太郎

織田新左衛門
柴田忠藏
吉田星助
黒木左之助
山形又藏
見送帳付 小林彌十郎
右筆部屋坊主 早見嵩甫
同 岩佐友時

右ハ面々來未年江戸供詰申付

〆侍分六拾壹人
　代　拾七人
〆　八(七)拾八人

被召出、奥御鍼醫師被仰付、御扶持方三人扶持被下置候

玄澤養子 榎並孝齋

榎並玄澤

追々老年ニ罷成りニ付、江戸詰御用捨被成下候段、側用人申達候

城下廻り

今日城下廻りいたす

道書

庭口ゟ臺所脇木戸門、御座所門杉田五郎兵衛屋敷前脇漆門、土橋門、城ト橋加賀九郎右衛門屋敷前通り、井上彌大夫屋敷前脇小道具町、芦田内匠屋敷へ立寄。夫ゟ舟藏御門、酒井外記屋敷前、笹治織居屋敷前脇櫻ノ門、片町通り左へ長者町、上寺町、下寺町右ニ下西山町、醫王寺休。夫ゟ上西山丁通り、板屋町柳門、本多内藏助屋敷脇前鉄門、下馬門ゟ元ノ道通り庭口へ入ル。

蘆田内匠に立寄らる

一芦田内匠方へ立寄、内匠上下ニる罷出、跡ニ養父圖書同斷罷出る。奥座敷迄罷越、其餘重器等色々　拜覽、委細重器書付別記ニ有之。

五ツ半時過寝ル。

十月十六日

十月十六日晴

今朝目覺六ツ半時。長谷川八十郎罷出鉄炮稽古。今日ゟ御座所矢場ニ於て致 相手小栗次右衛門

今日評定日ニ付、靱負評定所ニ罷出る。

評定所

彌次郎孟子可致之處、用多ニ付延引。乗馬いさす。

評定所

本多五郎右衛門

渡々伯當無義同姓八左衛門儀、不調法之儀有之、先年蟄居被仰付候處、先達而病気相煩致難儀ニ付、御告御免被成下候様無義相願候。依之其家門一家無御免被成候。其段無義へ可申渡候。

岡田金左衛門

市村助右衛門儀、近来頭痛御座候處、月代仕候節ニ障り難儀仕候。依之爲養生惣髪罷在度旨願書付指出候。

五ツ半時過寝ル。

十月十七日

十月十七日曇後晴

今朝日覺六ツ半時、半右衛門不快不罷出、綱目獨誦。

仙石万右衛門

御役御免被成候

但是迄被下置候御足七人扶持、以後不被下候事

右家老共於用部屋申渡

金津奉行仙石万右衛門跡申付　津田彌太六

旗奉行津田彌太六跡申付　太田三郎兵衛

右銕炮之間ニおゐて、此方直々申渡。月番家老外記取合有之

仙石万右衛門是迄罷居候御役屋敷へ　津田彌太六

津田彌太六家屋敷へ　波々伯部熊藏

波々伯部熊藏家屋敷へ　仙石万右衛門

右之通り家老外記於用部屋申渡ス

當未年酒井外記を此表へ相殘候義ニ付、先達而ゟの譯合色々有之此所ニ具ニ記之者也。

當月十一日評定所別席ニおいて、狛帯刀より中根靱負へ内々申聞候趣荒増

苦衷ヲ狛帶刀ニ訴ふ

左之通り

帶刀儀此間酒井外記方へ罷越候處、外記申聞候者、當今之御時態を熟慮致候處、昨年來木工初舊同役共と種々談合致置候儀も有之處、當夏御歸國之上急度思召立被爲在談置候儀共、惣而水上之泡と相成、先達而同役初之御黜陟等、誠未曾有之事共ニ而、杓子定規を相守り候心得ニ而者、實以不堪驚嘆事共故、已ニ其側を退役と決心いたし、八郎兵衛迄申聞候儀も有之候處、雖有思召も相伺候而、先ツ其形ニ致置候。　其以來段々思召通りも致承知、其上近頃者別而御懇命之御儀共ニ而、諸事御隔ナき御容子、誠是迄不承及御親敷御儀共ニ御座候故、自ら難有相勤候心底と罷成候而、扨相考候へ者、先達而之御役替等も、如何様かく無御座候半而者、舊弊御一洗之御折柄も無之、乍恐御明斷之程初而目ヵ覺奉感服候而、最早二ノ足を踏候心底ハ無之候。　就夫先日來御前へ罷出候度毎ニ、御勝手向之儀ニ付重キ御意共も有之ニ付、乍不及精々御相談申事候處、何分不容易儀ニ而、明年之御留守甚御大事と存候事ニ而、特と貴様ニハ、拙者儀者御歸國以來之儀も致承知居候事故、舊習ニ染候木工罷歸候而申談候よりも、諸事御都合も可宜と被申聞候事故、ソレモソウカト存候得

共、猶又熟考致候處、乍残念私情ニひかれ、打ハまり勤兼候意味合有之、此處を開分ヶ給候。 其子細ハ前ニも申通り、木工始舊同僚種々申談置候事も有之候處、惣て畫餅と相成、當時の有様示談とハ雲泥の相違ニて、左膳内記等ハ已ニ唯今の爲體、木工ハ在番、拙者一人取残されニ相成、其節ハ難澁至極の事と存候得共、追々思召通りを會得致候上ハ、最早上へ對し彼是と可申上筋ハ無之、一途忠勤を相勵ミ申度心底勿論ニ候得共、木工始舊同僚へ對し候ても反覆の形故、彼人達も定て表裏兩舌の勤方の様ニも思ひ可被申、又世上ニおゐても、非中の拙者僥倖を不顧、執權顔ニ罷在候義を如何斗誹謗可致哉と、小事ながらも夫等の處を考候へハ、片身狭く相成、中々確乎として御留守中押張相勤候心地も不致候間、何卒外記御引立被下候思召候ハヽ、來年の處御供被仰付被下置候様の心願ニて、左候へハ江戸表の儀ハ、一人の事故、同役ニ對し候事も無之、御前へも毎々罷出思召通りも猶更深く相伺、且ハ御教諭ニも相預り、大造ニ申セハ一ト學問致候て、愈舊面目を相改、來々年御供ニて罷歸候へハ、汚名も何となく相磷き、又胸中も一新致候て、夫ゟ不顧前後只管精勤致度と存詰候。 此儘ニて時非を悟りながらも、兎角前後左右の私情ニかまけ、

憤激之難合も無之候間、何分此處を汲察いさし呉、來年之處御供ヌ罷越候様取斗相賴申候。木工罷歸候ハヽ、云々之懸念も有之趣候得共、此儀ハ左まてハの事も有之間敷候。元來木工之氣質として、事をさゝえし候様なる事ハ決而不致候間、御歸國以來之御時態を帶刀篤と相心得、織居申談持堪らへ候ハヽ、夫を打破我意を振ひ候程之儀恐らく出來申間敷と被存候。且又時勢之變易を不平となし、内願等致候様之事候ハヽ、夫ハ其時之事、如何様とも所置可有之、敢て恐るゝに不足と被存候。自然左様の心底ニ候へハ、其者を詰越被仰付候迚、御役ニ相立候譯も有之間敷と被存候間、何分公私共ニ深く汲察いさし、宜取斗呉候様相賴候間、兩人申談御前體之儀も可然申上呉候様申聞候。

同十日酒井外記方内用右筆野村四郎左衞門を以、側用人秋田八郎兵衞へ申聞候ハ、御屋形退出掛外記内宅へ罷越候様ニと申ニ付、八郎兵衞共通り外記宅へ罷越候處、外記八郎兵衞へ左之通り申聞候趣、翌十一日此方へ相咄申候。

本文狛帶刀方中根靱負へ申聞候と同様之趣、加之極内々申聞候ハ、兼而帶刀身分之儀ニ就而ハ、左膳内記始御目付抔、申合置候事も有之候處、左膳初退役

と相成、彼是外記ニおいても其儘相勤ゐさき次第ニ付、則極内願も申上候處
上ニも思召も難有、其上同役御人少ニゐ、何ニ角ニと可申上御時體ニゐも無之、
其内一體ニ御樣子も、乍恐感伏仕、當時私ニ意味合そ無之、万事無隔意、帶刀へ
も申談候事ニ候へ共、右一件に就るも左膳始退役ニ御目付抔、如何存居可申
哉と心底ハよゐらす、旁明年江戸表へ御供被仰付被下候ハヽ、右ニ人々抔へ
も一年逢不申、聊心持も替り候樣ニも存候儘、何分明年御供ニ被召連被下候
樣願ハ敷、此段ハ餘人江咄も出來兼、貴樣限り極密相含置呉候樣、且右等ニ心
得貴樣ニハ如何致候哉ニ旨申聞候ニ付、いか樣其邊ニ意味合ハ可有之候へ
共、夫ハ私と申もの、　上ニ御都合ニより候てそ、御模樣次第ニ被心得可然、何
分內話ニ趣そ得と相考、同役へも內々可申聞旨相答候由。

〆

右ニ付帶刀一人召呼申聞候そ、外記先達ゐ申達ニ趣承り、於此方尤ニ儀と存候。
乍去別ニ以書付申聞候故、左樣相心得候樣申聞。

政暇日記　終

松平春嶽全集第三巻索引

ア

カ・ガ

ス

チ

ミ

ロ

ワ

松平春嶽全集第三巻　終

昭和十七年十月二十五日印刷
昭和十七年十月三十一日發行

非賣品

東京市澁谷區千駄ヶ谷一ノ五六二
松平侯爵家內
發行者　松平春嶽全集編纂刊行會
代表者
會長　岡田啓介

東京市淀橋區柏木四ノ八七一
編輯者　蘆田伊人

東京市神田區美土代町一六
印刷者　平松連太郎
（東東三五）

東京市神田區美土代町一六
印刷所　株式會社　三秀舍

出文協承認　あ310075號
800部

不許複製

東京市澁谷區千駄ヶ谷一ノ五六二
松平侯爵家內
發行所　松平春嶽全集編纂刊行會

